



中山修一著作集29 : 余滴を集めて――石牟礼道子研究

中山, 修一

(Issue Date)

2026-03-15

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504915>



中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

はじめに——著作集 29 の公開に際して

私は、一九一三（平成二五）年三月をもって神戸大学を定年退職し、それまで春夏の休暇を楽しむためにつくっていた小さな山の家に移り住み、晩年の執筆活動に入りました。在職中の私の研究は、日英デザインの近現代史に関するもので、とりわけ一九世紀英国のデザイナーのウィリアム・モリスと二〇世紀日本の陶工の富本憲吉に焦点をあてて研究していました。しかし、終の棲家を求めて阿蘇南郷谷に移住するに当たり、私の脳裏に蘇ったのは、従来からの研究に加えて、この肥後国に関連する偉人たちについても積極的に関心を寄せ、その人生や人となりに寄り添ってみたいというものでした。

私が生まれ育った生地は、ここ火の国熊本です。ゆかりの人として、詩人で女性史学者の高群逸枝、俳人の中村汀女、そして、作家で環境保護活動家でもあった石牟礼道子がいます。そこでまず書いたのが、著作集 14『外輪山春雷秋月』に所収しています「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛」でした。しかし、そこで私は大きな衝撃を受けることになりました。といいますのも、既往研究を調べるなかであって、逸枝にとっては夫であり、道子にとっては自身の「最後の人」である橋本憲三が、小説家や女性史研究者たちに不当にも悪者扱いされ、いわれなき罵詈雑言が並べ立てられている幾つもの現場に遭遇したからです。なぜこうも、証拠も根拠も示すことなく、しかも、いまに残る一次資料さえも全く無視してまで、かかる人たちは、存命中からさらに続く死後であって、憲三の人格を否定し名誉を傷つけなければならないのか、このとき、素朴な疑問とふつつつとした怒りとが、私の体内を駆け巡りました。

このときまでに私は、富本憲吉の妻の富本一枝を研究する人たちの著した書のなかにあって、真実を曲げてあらぬ罪を憲吉に覆い被せている事例を読み知っていましたので、今回がはじめての体験というわけではありませんでしたが、それでも、実証を重視する学術の世界であって、女性が男性を差別し蔑視する行為の許しがたい一部事例を改めてここに見出し、憲三とその周囲の人たちの無念さを無念さとして自身の胸にしっかりと抱いたのです。

憲三を敵視する姿勢は、間接的ではありますが、その妻たる逸枝のみならず、その崇敬者たる道子さえも苦界に陥れることを意味します。そこで、いまや黄泉の客となり人びとの関心から幾分遠ざかっているとはいうものの、疑いもなく生前の憲三、逸枝、道子の三者の人生が強靱なきずなで結ばれていたことを前作の執筆から知っていた私は、その様相を「三つの巴」に見立て、その実際の姿を伝記として表わしてみようと意を決しました。この作品は、人権侵害や名誉棄損に強く抗う私の気持ちが、まさしく自身の背中を押すことによって産み落とされたもので、いうなれば、死者たちへの鎮魂の書というのが、私の位置づけでした。しかし、私は、女性史や文学史の専門家ではありません。実情は、憤懣が余って素人の手慰みに書かれた駄作であり、したがって、いまなお、非力と蛮勇のそしりは免れないことを十分承知しています。それでも擱筆した原稿は、著作集 18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』として公開しました。

この間私は、義憤の発露として、伝記書法論を書きました。著作集 9『デザイン史学再構築の現場』の第六部「伝記書法を問う——ウィリアム・モリス、富本一枝、高群逸枝を事例

として」や著作集 11『研究余録——富本一枝の人間像』の第三編「伝記書法私論——批判と偏見を越えて」、さらには著作集 22『残思思考——わがデザイン史論（上）』の第四部「『三つの巴』私論集」などがそれに相当します。収められているいずれの論も、恣意や偏見を排した、実証主義と科学主義を重んじる立場から書かれています。そしてまた、ジェンダー平等の観点に立ち、一方の性が他の一方の性を理由なく強権的に抑圧したり嫌悪したりする行為を憎む視点から考察されています。

いま私は、著作集 14『外輪山春雷秋月』の「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞥の女たちとの友愛」と著作集 18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』から得られた内容をさらに磨き上げ、各人個別の伝記を書いてみようという思いに立ち至りました。集団史から漏れてしまった一片一箇の数々の事実を蘇生させ、個別史のなかに適切に再配置したいという衝動があったからです。その一方で、幾つかの巻に分散されていた、伝記執筆にかかわる自身が考える要諦を、一箇所にまとめてみたいという衝動もまた、新たに生まれてきました。それというのも、私見によれば、家族史であれ個人史であれ、伝記の誕生と、伝記記述の論理とは、切っても切り離せない関係にあり、そこで、これまでに私が継起的に論じてきた伝記書法にかかわる原理論を一巻に集成することにより、私の一貫した考えの全体像が再構築されてゆくものと判断したからです。

このように、いずれの巻も、旧稿にその起源をもちます。各巻のタイトルに「余滴を集めて」を冠したのも、ここに由来します。その意味で、この名辞のもとにこれから公開する、著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』、著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』、著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』、および著作集 30『余滴を集めて——伝記書法研究』は、すでに完結している「中山修一著作集」（全二六巻）の屋根の上にさらに余分な屋を架すものになります。それでもこの四巻は、紛れもなく、自身の「余滴一考」であり、同時に、自身への「余滴一献」となって、残された自身の時空を飾ります。

それとは別に、退職後この地に隠遁していなければ、私は、高群逸枝にも、橋本憲三にも、そして石牟礼道子にも、巡り合うことはなかったと思います。この四部作をもって、「中山修一著作集」の「最終編」とみなし、自分が火の国をこよなく愛した肥後人であったことの、そしてまた、阿蘇南郷谷に隠れて晩年を生きた研究者であったことの、そのあかししたいと思います。これもまた、屋上屋を架すゆえんです。ご理解いただければ幸いです。

なお、著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』の巻末に、著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』と著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』をあわせた、三巻に共通する「写真集」を置きました。画像は文字以上に雄弁です。古い資料からの複製ですので画質は必ずしも鮮明ではありませんが、当時の臨場感が伝わってきます。必要に応じてお楽しみください。

さてここに、著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』を開示します。この巻は、「石牟礼道子小伝——『最後の人』との契りから道行きまで」の全一編によって構成されています。これにより、いかにして道子は、「森の家」に駆け込み、逸枝と憲三に自身の後半生を誓い、最晩年に、「最後の人」たる憲三と、新作能「沖宮」において道行きを成就したのかが明らかにされます。道子の生涯を構成する一端が、これまでに書き著わしました愚作を超えて、さらに稠密に造形されることを願いたいと思います。

著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
はじめに——著作集 29 の公開に際して

二〇二六年三月一五日

肥後「火の国」に生まれ阿蘇南郷谷にいまや隠棲するさすらい人、わが名は
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上合宿生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との統合により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザイン史の歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft* (Berg Publishers, Oxford) が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年、鹿島美術財団出版援助図書）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝

——「最後の人」との契りから道行きまで

2026 年 4 月

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

目次	二
まえがき	四
第一部 吐血した魂の一条の光明との出会い	
第一章 石牟礼道子の「魂が吐血した状態」の前半生	八
第二章 『女性の歴史』との遭遇と高群逸枝への追慕	一五
第二部 橋本憲三の住む「森の家」へ駆け込む	
第三章 一度目の滞在で逸枝と憲三に後半生を誓う	一九
第四章 憲三と道子が水俣へ一時帰省する	二八
第五章 二度目の滞在で憲三と「寂滅」を確かめ合う	三一
第三部 「最後の人」の執筆と水俣病闘争への参加	
第六章 『高群逸枝雑誌』の創刊と「最後の人」の連載	四三
第七章 『苦海浄土』の上梓から水俣病闘争へ	四九
第四部 最晩年の憲三に浴びせられる悪意と悪口の数々	
第八章 秋山清の『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』	六〇
第九章 瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」	六六
第一〇章 戸田房子の「献身」	七三
第五部 橋本静子とともに最期の憲三に寄り添う	
第一一章 憲三の苦悩を共有する	八〇
第一二章 憲三の臨終を看取る	九三
第六部 遺された静子と道子の苦界浄土	
第一三章 生前の逸枝の「恋愛事件」を暴露する私家版本の登場	一〇七
第一四章 もろさわようこの「高群逸枝」とそれへの静子と道子の反論	一一五
第一五章 道子の瀬戸内小説への反論文「本能としての詩・そのエロス」	一二七
第七部 道子の「癒し難い心の病」と魂の蘇生	
第一六章 「癒し難い心の病」で山梨の病院に臥す	一三八
第一七章 蘇生のために川の源流を求めて山を歩く	一四六

第八部 再び苦界に落とされる静子と道子

- 第一八章 二冊の逸枝の校訂本の発刊と著作権者としての静子の立場 一五七
第一九章 栗原弘の「逸枝著作の改竄説」とそれへの道子の反論 一七一
第二〇章 栗原葉子の『伴侶』における「共犯者」としての憲三描写 一八三

第九部 最期の道子の「最後の人」との道行き

- 第二一章 桜吹雪のなか静子が世を去る 一九三
第二二章 死者を柱に道子が「沖宮」を書く 一九六

あとがき 二一七

再録追記 石牟礼道子の「沖宮」における四郎とあやのモデルについて 二二二

付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子 一～三一

凡例

- 一. 本文中『 』は書名、雑誌名、新聞名を示し、「 」は論文や詩、記事等の表題を表わしている。また、強調すべき固有の事象についても「 」が用いられている。
一. 本文中《 》は作品名を示し、〈 〉は建物の名称を表わしている。
一. 本文中の【 】は図版の参照番号を指し示している。
一. 引用文および引用語句内の〔 〕は本著作集の著者による補足である。

まえがき

一九六六（昭和四一）年六月二九日、一五時一分、国鉄水俣駅のホーム。その時が来ました。石牟礼道子は、こういいます。「いよいよ東京行き霧島に乗る。厳粛な気持ち。はじめて夜汽車に乗ることになった。瀬戸内海見えず。関門トンネルに気づかない。憲三氏といひ話しこんでしまったので」¹。

同道の「憲三氏」という男性は、女性史学者としてその名を残す高群逸枝の夫です。二年前にすでに妻を亡くしていました。車中ふたりは、どのようなことを話題にしたのでしょうか。想像するしかほかに手立てはありません。逸枝のこと、「森の家」のこと、全集刊行のこと、水俣病のこと、さらには、連載中の「海と空のあいだに」のこと、そして、ふたりの今後のこと——。翌日の午後東京駅に着くまでのおよそ二五時間、ふたりの会話が途切れることはなかったでしょう。実にこうして、六九歳の憲三と三九歳の道子の一昼夜にわたる、生まれ変わりへ向けての厳粛なる道行きが、進んでいったのでした。

道子は、憲三について、こう吐露します。

ほとんど宿命的にかかえこんでしまった故郷水俣の出来事についても、同郷のよしみで直感的に把握していられた。その上突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動をも、たぶん理解されていたのだっただろう。静と動との極点を、わたしはゆきつもとどりつせねばならなかった²。

水俣病との対峙、そして逸枝と憲三への恭順、このふたつが、道子の内面を駆け巡っていました。まさしくこの時期に形成された両要素が動力となって、こののちの道子の生涯を先導することになるのです。道子は、それについて、以下のように分析しています。

水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事であった。二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る。人間いかに生きるべきかというテーマを、二つのできごとと呼びかけていた³。

ここに引用した文は、そののちの道子の生涯を規定する極めて重要な言説であるように思われます。といいますのも、人間のいのちと暮らしについての無自覚な生後体験から、民衆へ寄せる私的かつ詩的な独自のまなざしへの昇華、——そしてその、まさしく着床された土着的魂に導かれて描かれる普遍的な人類族母の史的再生。これが、その後の石牟礼文学を通底する「人間いかに生きるべきかというテーマ」の原像ではないかと考えるからです。

逸枝が亡くなるまで憲三と一緒に暮らした「森の家」。憲三の導きにより道子はこの「森の家」に滞在します。

七月三日のノートに、道子は、こう書きました。

今夜更に高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った。それは橋本静子氏に対する手紙の形で（つまり、静子氏を立会人として）あらわした。午前三時これを書き上

げる⁴。

ここに道子は、自身の後半生を、逸枝と憲三に契ったのでした。立会人の静子は、水俣に住む憲三の妹です。道子の「最後の人」は、かくして書き始められます。

たぶんこのような一文を草せねばならぬ日が確実におとづれるのを予感しながら、あの「森の家」の一室で、ノートを表題を「最後の人」と名づけたのだった。「最後の人としたのですか。なるほど、うん。よい題だなあ」⁵。

このとき憲三は、道子にとっての「最後の人」が自分であることを十分に理解していたことでしょう。そして憲三は、道子にこういいました。「その、僕が生きている間に、書きあげて、読ませて下さると、ありがたいのですがね」⁶。

「最後の人」は、憲三が主宰する『高群逸枝雑誌』の初号（一九六八年一〇月）から連載されますが、憲三の死去に伴い、この雑誌も廃刊となり、「最後の人」もそれをもって終了します。しかし、「最後の人」は、すぐにも単行本になることはありませんでした。それが、『最後の人 詩人高群逸枝』という書名のもとに世に出たのは、二〇一二（平成二四）年一〇月のことです。最初の雑誌掲載から四四年が経過し、道子はこのとき、八五歳になっていました。

『最後の人 詩人高群逸枝』の発刊の二箇月前、版元である藤原書店の藤原良雄が、道子にインタビューしたときのことです。藤原が、憲三について、道子に問います。

石牟礼 はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

石牟礼 こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

石牟礼 はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした⁷。

ここにあって道子は、自分にとっての「最後の人」が、書名にある「詩人高群逸枝」の夫である「橋本憲三」だったことを公言するのでした。

ちょうどそのとき、道子は、新作能「沖宮」を書いていました。内容は、少女のあやが、霊界の天草四郎に守られて、天草灘の海底に沈む〈沖宮〉へ向かう道行きです。道子は、自分の思いをあやに託し、四郎を憲三に見立て、道行きの先には、大妣君である逸枝が住んでいることを想定していたものと思料します。こうして、事実上の絶筆となる「沖宮」は完成し、道子のいう「水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事であった」、その仕事を巡る一大叙事詩がここに幕を下ろしたのでした。

憲三に導かれての道子の、水俣から逸枝の霊が住む東京の「森の家」への現実世界における道行き、いまやそれが自叙伝的能作品へと昇華し、浜辺から見送る人びとの涙を背に受け、雨乞いの人身御供となって小舟に乗ったあやの、族母の大妣君である逸枝をはじめとする

憲三の姉妹たちが待つ〈沖宮〉へ向けての道行きとなり、かくして読経の響き渡るなか、あやは、途中同道の四郎との夢にまで恋願った心中を果たすことになるのです。

ここに私が書き記す「石牟礼道子小伝——『最後の人』との契りから道行きまで」は、その物語詩の全体的概略が、自身の多弁や駄弁を可能な限り排し、残されている動かしがたい一次資料に根拠（エヴィデンス）を求めることにより、再構成されたものです。それでは、第一部「吐血した魂の一条の光明との出会い」の第一章「石牟礼道子の『魂が吐血した状態』の前半生」から書き始めることにします。

注

- （1）石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、246頁。
- （2）石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第14号、1977年冬季号、12頁。
- （3）『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、287頁。
- （4）前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、247頁。
- （5）前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、8頁。
- （6）同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、10頁。
- （7）前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、453-454頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第一部

吐血した魂の一条の光明との出会い

第一章 石牟礼道子の「魂が吐血した状態」の前半生

石牟礼道子（旧姓吉田）は、一九二七（昭和二）年三月一日、白石亀太郎を父とし、吉田ハルノを母として、亀太郎が当時建設事業に携わっていた熊本県天草郡宮野河内において出生しました。それから数箇月後、一家は、八代海（不知火海）を挟む対岸の水俣町に帰ってゆきました。亀太郎は吉田家の婿養子でした。ハルノの両親が松太郎とモカで、道子が物心ついたときのモカは、すでに精神に異常をきたしていました。石工である松太郎には、「おかねさん」と呼ばれる妾があり、そのことが主な誘因となって発症したようです。道子は、母のハルノよりも、祖母のモカの膝に抱かれて育ちます。

彼女は、私をひざの上ののせて頭をさすりながら、しわぶくようなやさしい声で、
どまぐれまんじゅにや泥かけろ
松太郎どんな地獄ばん（ばい）
おかねがまんじゅにや墓たてろ
どこさねいたても地獄ばん
こっちも地獄
そっちも地獄
と呟いていました¹。

続けて道子は、さらに自分の家の複雑さについて、こう語ります。

おさな心にも祖母のうたの意は心にしみてわかりましたし、松太郎とはわたしの祖父、おかねさんは祖父の権妻だと近所の小母さん達が教えますし、松太郎と祖母の間にわたしの母と（母）の妹、松太郎とおかねさんの間に母の異母妹、弟とがいてこのような家のムコになった父とがみんな同居しているありさまはちょっとした人間図絵でした²。

道子のはのちの文においては、「おかね」ではなく、「おきや」という呼び名に置き換えて使っているのですが、その「おきやさま」について触れた箇所がありますので、以下に引用します。

祖父とその妾おきやさまとの間に生まれたみすずと兼人の二人だが、まるでこの世に來たことを申しわけないとでも思っているかのような生前であった。わたしの両親は、いわば胎ちがいの妹と弟とを何くれとなく気にかけて面倒をみていた。本妻が狂女であったことに気を兼ねていたのだろうか、この二人はそれとなくへり下っている様子があって、それがいじらしかったのかもしれない³。

このころ吉田家は、石屋として水俣の栄町通りに居を構えていました。『石牟礼道子全集』別巻に所収されている「わたしの栄町通り」（石牟礼道子自筆絵地図）によると、この通り

には、風呂屋、髪結い、豆腐屋、飲食店、米屋、仕立て屋、遊郭、染物屋、鍛冶屋などが並んでいました。橋本憲三の姉の藤野と妹の静子が経営する商店も、この通りにあり、道子の家とは目と鼻の近さでした。「橋本家は食品をまかなう卸問屋で、お酒や炭俵、米麦、砂糖などを扱っておられた。小さい時には、お使いで黒砂糖などを買いに行っていたものだ」⁴と、道子は振り返ります。

藤野と静子が最初に店を開くのは、一九三三（昭和八）年の秋、水俣町古賀町においてでした。店は繁盛し、その後栄町に移ります。したがって、栄町通りで静子と道子が顔をあわせるようになったのは、静子が二三歳、道子が六歳のころのことだったのではないかと思います。そのころ高群逸枝は、夫の橋本憲三の助けを受けて、東京の「森の家」で女性史研究の緒につきます。そのようなわけで、まだこのときの道子にあっては、藤野と静子が、高群逸枝の義理の姉妹であることなど、知る由もありませんでした。

道子の祖母のモカは、「おもかさま」と呼ばれ、父の亀太郎がとくにそうであったように、周りから大事にされていました。しかし、道子が回想するところによると、「どういう気持ちで徘徊するのかわかりかねるが、おもかさまは時々、人さまの家の前に立って、ひとり言をいう癖があった」⁵。ひょっとしたら、橋本商店の前に立って、何やらぶつぶつと口走る「おもかさま」の姿があったかもしれません。そうした「おもかさま」を引き取りにゆくのは、亀太郎やハルノだけではなく、幼い道子に課せられた大事な仕事でもありました。「氣狂いのばばしゃまのお守りは、私がやっていたのです。ばばしゃまは私のお守りをして给我いました。……ばばしゃまは雪のふる晩はとくに外に出たがり、疲れはてた母たちが寝ると、私はばばしゃまを探しに出ます」⁶。道子はまた、こうも書きます。「私も栄町の表通りを、裏返しにした着物を着て、裸足でよその家の前に立って、何か呟いている祖母を連れ帰しに行ったことがたびたびあった」⁷。

栄町には、「末広」という遊郭がありました。遊女たちは「おもかさま」をやさしく扱っていました。あるとき、「末広」でひとつの事件が起きました。以下は、道子の回想です。

末広はじまって以来の器量よしのぼん太さんが殺されたというので、起きぬけに飛んでゆくと、半畳位血のしみこんだ畳が、夕方になると首白粉を塗って彼女が腰かけていた番台に、立てかけてありました。……

番台に並んでいる淫売のひとつたちは、並はずれてみんなやさしく陽気そうで、私も大きくなったら淫売になってやろうと思っていました⁸。

道子にとって栄町での生活は、そう長くは続きませんでした。八歳ころのときでした、祖父の松太郎が事業に失敗したことにより家が傾き、「差し押さえ」という苦難に遭遇したのです。そこで家族は、水俣川の河口にある当時「とんとん村」と呼ばれていた集落へと住まいを移します。粗末な小屋のような家でした。渚に出て魚介類や海藻といった海の幸に親しむことはできたものの、近くには火葬場や伝染病を扱う病院もあり、ここは、住むには決していい環境ではありませんでした。

道子の父の亀太郎は、精神を病み目が不自由な義理の母親である「おもかさま」には、とても愛情を示す人でしたし、そののちに道子が結婚したおりに、自力で家を建て与えてもいます。道子は、こう回顧します。父親は、「水俣川が氾濫するたびに集めておいた流木や、

この町で一番先に乳牛を飼っていた人からゆずられたという材木を持ってきて、掘っ立て小屋まがいの新居を手作りで建ててくれたりした」⁹。

しかし亀太郎は、家族からは恐れられる一面ももっていました。

父は酒乱な上、泣き上戸でしたが、栗飯と茶碗が飛び散って、母が裸足で外に飛び出たあと、こわれた火鉢に「ちよく」という焼酎瓶を据え、「ミッチン、^{われや}汝、このお父ちゃんにつきあうか」といって、冷たい盃をぶるぶるこぼしながらつきつける。私は……好かん、と思いながら、フーンと鼻で返事して、その盃を何べんも受けました。夜市で見たこわい「地獄、極楽」の中のやせた「餓鬼」たちが青い舌をたらんと出している、それを思い出し、父に似ていると思ったのです¹⁰。

精神錯乱の母に酒乱の夫——道子の母親のハルノは、「大変な苦勞をしながら、没落した家を天性の明るさで支えてきた」¹¹と、道子は語ります。後年のことになりますが、亡くなる一週間くらい前、道子がそれに触れると、ハルノは、悲痛な表情になり、こう答えました。

なんの苦勞じゃろか。あたいが十歳時分の頃じゃった、おもか様があのようにならいましたのは¹²。

そしてしばらく無言が続き、そのあとハルノは、こうつなぎました。

子供の頃は遊びにも行かず、泣き狂うて^{さまよ}彷徨うおっ母さまの手を取りながら、あたいの方が親にならんばと思ひよった。^{はた}機織りの名人と言われよったがなあ¹³。

道子は、このようにいいます。「こういう家庭の中で育った私にも、狂気の血が伝わっているに違いない」¹⁴。

一九四五（昭和二〇）年八月、日本は終戦を迎えます。そのとき一八歳の道子は、小学校の代用教員をしていました。そして二年後、結婚話が持ち込まれます。そのときのことを、次のように道子は、述懐します。「結婚はまとまった。……家にいると弟たちの邪魔になりはすまいか、また口減らしをしなければ、という思いもあり、弟の友人というのが何よりありがたくて、ゆく気になった。……いまひとつ思ったのは、吉田姓であるよりも石牟礼姓を名乗った方が、ペンネームのようで面白い。……父は並々ならず石を尊敬していたから、石牟礼弘という弟の友人と式を挙げることになった」¹⁵。嫁入りに際して、父親の亀太郎は、道子にこう言い渡しました。「おなごは三界に家なし、というたもんぞ。いったん嫁にいったならば、二度とわが家に戻ってくると思うな」¹⁶。これを聞いた道子は、「わたしは強い衝撃を受けた」¹⁷とも、「わたしは大混乱に陥った」¹⁸とも、書いています。「おなごは三界に家なし」を、「子ども時代には親に従い、嫁いだあとの生活では夫に従い、夫を看取り年老いたのちは成人した子に従う」という意味に解すれば、女には安住の地はどこにもなく、現世は地獄、死したのちにやっと極楽にたどり着くことになります。このとき、女の生涯とは何なのかと、道子が疑問と怒りを感じたとしても、無理のないことでした。

そうしたこともあって、道子にとって結婚は、決して胸躍る出来事ではありませんでした。

このように道子は述べています。

いわば私ははじめから妻というものになる気持ちはなく、その相手方を主人というものにする気もなかったようです。多分私は、かの女性ホルモン欠乏症愛情疾患の第二期的病状を呈していたのだと思うのです。愛情って何よと、私はうわごとをいいつづけました¹⁹。

それでは道子は、弘のことをどう呼んでいたのでしょうか。「十二年間一緒に暮らしている男の人のことをほかの人に、私はちかごろうちの先生は、というようです。ためらいためらい、そういつてみるのです。その前はあの子のお父さんがとか、万やむを得ない場合はごくまれには「あの、シュジンが」といってしまいますが、いった直後、顔から火の出る思いがいたします」²⁰。道子の夫の弘は学校の教師をしており、結婚翌年の一九四八（昭和二三）年に、長男の道生を道子は出産していました。「うちの先生」と呼ぶ自身の夫について、道子は、このようにも描写します。亀太郎が娘夫婦のために新居として小屋をつくるとき、弘も手伝っていたようです。

……若い父親は流木などを拾い集めて、三人の小屋をたて、もともと貧乏な私はその小屋を……ひそかに気に入ってもいたのです。でも小屋の中の生活はそういう訳にはゆきません。自分の目ざしているモラルと、彼の目ざしているモラルがなかなか接近しません。両方のモラルが接近しないというより、私は自分のモラルを満たしてくれない相手を憎みはじめていました²¹。

この時期、道子の苦悩は深刻でした。「田舎の嫁の一人としての疑問から始まって、代用教員を体験したり、化粧品や靴下を売ったり……そういうことをしながら思っていたことは、自分が今の世に合わないということだった。近代とは何か、という大テーマがわたしの中に根付きつつあった」²²。

一九五二（昭和二七）年、熊本市で蒲池正紀が主宰する歌誌『南風』の会員になります。次の一首は、そのころ投稿した道子の作品です。

狂えばかの祖母のごとく縁先より
けり落とさるるならんかわれも

この自作について道子は、このように解説します。

この祖母が青竹をもって全身をふるわせて叫びだす時、祖父はおどり出して行って祖母をけり落とすのです。祖母は如何にも悲痛に、チクショウになれ、チクショウになれえとしぼるようにいうのです。私はそれで、人間が一番呪われた状態になるのは、チクショウというものになるのだとおそろしく思ったものです²³。

別の箇所では道子は、この作品について、次のようにもいっています。「これは私の二十代

はじめのころの一連の作品で、この一連をちいさな短歌同人誌に出したとき、同人達はなんだかぎょっとして、批評の対象外の作品と思ったらしく沈黙した」²⁴。そして、こう続けます。「日常的風詠が出されているサロン風の場所に、このような歌を持ちこんだのは……ゆき場がなくて……魂が吐血した状態だったにちがいない」²⁵。さらに言葉が展開します。「この祖母も祖母の怨恨の元凶であった祖父の臨終もわたしが看取り、暫くするとこんどは弟が、精神病院から帰ってすぐに、汽車にひかれて死んだ。私の家系には狂死が多いのである」²⁶。亀太郎とハルノの夫婦は、道子を長女として、そのあとに三人の息子とひとりの娘を設けますが、このとき鉄道事故でいのちを落としたのは、道子にとってはひとつ違いの弟の**はじめ**でした。一には、三歳に満たない幼子がいました。そのときその童女は、「霜の立ちこめる枕木の間をかがみかがみ……文字どおり紅葉の掌に、死んだばかりの父の足の**おゆび**を拾いあげ、ちいさなエプロンのポケットに大切そうにおさめた」²⁷。痛ましい弟の自死は、水俣湾の周辺の漁村で多くのネコ（猫）が死に、原因が不明のまま中枢神経疾患の患者が散見されるようになる年からおよそ五年が立った一九五八（昭和三三）年の晩秋のことでした。道子は書きます。

……おなじく前後して自殺したふたりの友人たちや、わが家系につらなってくるものたちの、かなしい微笑が浮かんでは通る。

後年、凄惨きわまる図絵がくりひろげられる水俣病事件史の中をゆくことになった。その経過の中で窮死した父を含めて、このものたちの微笑に、わたしは導かれていた。その生と死とをふたたび生き直しながら、自分の中に狂気の持続があることを、むしろ救いにも感じていた²⁸。

一方で、水俣病の事件が社会に認知されるようになるなかで「窮死した父」の胸の内を、その娘は、次のように、なぞってみせます。

彼は自分の足がふるえる時ふと汽車にひかれて死んだ息子の、千切れた足を思い浮かべる。忘れかけていた娘のことを想い出す。親不孝者どもめ。彼は娘は嫁にやってからアカがかってきて、奇病のことなんかを書いているらしい長女のことを思う。親はどげん世間のせまかか。……呉れた娘に、白石亀太郎は、野垂れ死しても、世話にはならんぞ。会社に弓ひいたりなんのして²⁹。

引用文中の「アカがかってきて」というのは、道子の日本共産党への接近を意味するのでしょう。入党は一九五九（昭和三四）年です。しかし、翌年には離党します。「奇病」は水俣病を指し、「会社」は、水俣病の原因企業とされる、新日本窒素肥料株式会社を示します。

弟の死は、道子にとって大きな衝撃だったにちがいません。しかし、自身もこれまでに、未遂に終わりはしましたが、一度ならずもその経験がありました。三度目は、結婚直後のことでした。『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』の著者の米本浩二は、「八八歳の道子に三度の自殺未遂について聞いた」³⁰。それに対する返答は、次のようなものでした。

死にたかった。虚無的な気持ちが小さい頃からありました。なぜ死にたいか。ひとつに

は、この世が嫌いでね。今も嫌いですけど。よく我慢して生きてきたなと思う。悲しい。苦しい。それを背負ってゆくのが人間だと思う。嫌でたまらないから、ものを書かずにいられないのでしょうか³¹。

すでに引用で示していますように、「自分が今の世に合わない」という思いが、道子の心の底にうごめいていました。自殺への誘惑も、そのことにおそらく起因していたのでしょう。しかし、まだ生きている。それでは何を力としてこれから先、生きてゆけばよいのか——道子はそう自問したにちがいありません。そしてその問いは、「ものを書かずにいられない」という、強い衝動を道子にもたらしたものと思われます。かくして道子は、自分の悲しみや苦しみを全身から吐き捨てるかのように、他方でその気持ちを、他者の同じ状況に柔らかに重ね合わせるかのように、ものを書く作業に入ってゆくのでした。いわば、「我慢して生きる」ことの代償行為としての文筆活動が、ここにはじまるのです。しかし、死の誘いから生の延伸へとうまく接合させるには、どうしても必要なものがありました。それは、「生まれ変わり」あるいは「生き直し」にとって必要不可欠な、生存能力の再獲得のための祭儀としての装置でした。道子にとってのその祭祀舞台は、どこからもたらされ、どのようなかたちをとりながら構築されていったのでしょうか。これから述べるように、見る限り、高群逸枝との衝撃的なこの時期の出会いと、「森の家」での橋本憲三とのおよそ五箇月に及ぶ生活とが、まさしくそれに相当するものであったのではないかと、理解することができるのです。

それではまず、高群逸枝との石牟礼道子の衝撃的な出会いの場面を、次の第二章「『女性の歴史』との遭遇と高群逸枝への追慕」において描写したいと思います。

注

(1) 石牟礼道子「高群逸枝との対話のために(2) まだ覚書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 5、1968年3月、5頁。

(2) 同「高群逸枝との対話のために(2) まだ覚書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 5、同頁。

なお、その後この文が所収される、石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』(葦書房、1974年、216頁)においても、また石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』(藤原書店、2012年、432-433頁)においても、松太郎の権妻つまり妾の名は、「おかね」ではなく「おきや」に置き換えられています。

(3) 『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、藤原書店、2006年、592頁。

(4) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、297頁。

(5) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、59頁。

(6) 石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』葦書房、1974年、51頁。

(7) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、305頁。

(8) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、68-69頁。

(9) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、211-212頁。

(10) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、71頁。

- (11) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、304 頁。
- (12) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、同頁。
- (13) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、304-305 頁。
- (14) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、305 頁。
- (15) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、208-209 頁。
- (16) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、210 頁。
- (17) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、同頁。
- (18) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、同頁。
- (19) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、54 頁。
- (20) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、47 頁。
- (21) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、55-56 頁。
- (22) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、259 頁。
- (23) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、63 頁。
- (24) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、255 頁。
- (25) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、同頁。
- (26) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、同頁。
- (27) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、256 頁。
- (28) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、257 頁。
- (29) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、82 頁。
- (30) 米本浩二『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』新潮社、2017 年、68 頁。
- (31) 同『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』、同頁。

第二章 『女性の歴史』との遭遇と高群逸枝への追慕

水俣病の出現と拡大、『サークル村』の創刊と参加、弟の死、日本共産党への入党と離党——これが、おおまかな一九五〇年代後半における道子の足取りです。労働者をつなぐ「表現」の場として、炭坑のある筑豊の地で谷川雁や上野英信、それに森崎和江らによって創刊された文芸雑誌が『サークル村』でした。谷川雁も同じ水俣の出身でした。この雑誌の創刊は、一九五八（昭和二三）年九月で、その二箇月後の十一月に弟を鉄道事故で亡くします。道子は、自分が置かれているこのころの状況について、こう書きます。

サークル村に参加することと、入党することは、いまだ書かれざる近代思想史がどうであれ、私にとっては突然湧いてきた美学でした。いえ、すべて混沌の内部にいつもいて引き裂け、つぎなる混沌を生み出す民衆のひとりとして私はそこにいました¹。

道子はさらに、こうも書いています。

私はサークル村に入っててちょっと書いたり、谷川雁さんがやっておられた大正行動隊に行ってみたりしていました。短歌をやめかかっていたので、別な表現を獲得したかったのです。そのころ、自分を言い表せるものが何にもないと思って、いろいろ悩んでいました。結婚とは何ぞやとか。そして表現とは何かと²。

そこで、道子の足は、図書館へ向かうようになりました。水俣には、^{きすい}淇水文庫と呼ばれる、徳富蘇峰が寄贈した図書館がありました。館長の中野普は、本や文献といったものにまるで知識がなかった一家庭婦人に、噛んで含めるように、一から十までを教示しました。最初は郷土史についての古い文献に関心をもつ道子でしたが、しばしば通ってくる道子に対して館長は、特殊資料室の書物を自由に閲覧できるように便宜を図りました。ここに、まさしくひとつの大きな出来事が待ち受けていたのです。道子は、そのときの衝撃を、このように文字にしています。少し長くなりますが、省略することなく、書き写します。

それまでの家庭生活にくらべてあまりに世界がちがうのに圧倒され、特殊資料室の大書架に誘われてたたずむうちに、ふと夕日の射している一隅の、古びた、さして厚味^{ママ}のない本の背表紙を見たのである。「女性の歴史・上巻・高群逸枝」とある。われながら説明のつかぬ不可思議な経験というよりほかないが、夏の黄昏のこの大書架の一隅の、背表紙の文字をひと目見ただけで、書物の内容については何の予備知識もないのに、その書物がそのとき光輪を帯びたように感じられた。つよい電流のようなものが身内をつらぬいたのを覚えている。そのため、しばらくその書物を手にとることがためらわれた。ややあって、なにかに操られるような気持ちでそれを手にとるとかすかな埃が立った³。

時は「夏の黄昏」といいます。高群逸枝が亡くなるのが一九六四（昭和三九）年の六月で

す。であれば、このときの『女性の歴史』（上巻）との出会いは、逸枝が亡くなる前年の、つまりは一九六三（昭和三八）年の夏の出来事ということになります。「ハットして読みふけりましたが、興奮しましてね。かねてから私が思っていることに全部答えてある。それですぐ高群逸枝さんに手紙を書きました。そしたら逸枝さんは一カ月くらいして亡くなりました」⁴。

道子が逸枝に宛てて手紙を書いたのが、逸枝が亡くなる一箇月ほど前であるとしますと、一九六四（昭和三九）年の四月か五月ころになり、道子は三七歳になっていました。逸枝が、「森の家」に入居し、女性史研究に着手するのも、三七歳のときでした。ふたりの女性の再出発の時期が、偶然でしょうが、重なります。道子の文に、このようなものがあります。

一九六三年^{マツ}冬、私は三十七歳でした。

ようやくひとつの象徴化を遂げ終えようとしていました。

象徴化、というのは、——なんと、わたしこそはひとつの混沌体である——という重たい認識に達したのです。いまや私を産みおとした“世界”は痕跡そのものであり、かかる幽愁をみごもっている私のおなかこそは地球の深遠というべきでした⁵。

この一文を、地球の起源に由来する、いまだ混沌体として現存する自分を含めての人間、とりわけ性を司る族母、そして混沌世界を描く文筆家——このことへの道子の自覚の第一歩として読むことも可能かもしれません。逸枝宛ての道子の手紙は、それを象徴するものであったはずなのですが、残念ながら、残されていないようです。後年、本人は、このような内容のものであったと回想します。「ともかく私のふだん思っていること、一番悩んでいること、一番つらいことに、逸枝さんのこの本は全部答えてくださっています、感謝しましたとか……まだお尋ねしたいことがいろいろあるとか、こんな本を読んだのは生まれてはじめて、と書いたと思います」⁶。道子が記憶するところによれば、憲三は「逸枝と二人で、あなたの話を、ちょこちょこしておりました」⁷という。これは、このとき出された手紙のことだったかもしれませんが、『詩と眞實』（通巻第百六十四号）に掲載された道子の「石の花」のことだったかもしれません。「石の花」は、「テレビ劇のための試作」という副題がつけられていて、筑豊のボタ山に生きる人たちを扱ったものです。発行日は、一九六二（昭和三七）年一二月二五日です。「石の花」について、道子は、このように書いています。「同じ時期、この夫妻は、ある同人雑誌にはじめて書いて『石の花』と題してのせた、まるでなっていない戯曲のつमोरのものを読んで話題にしていられたということだった。その雑誌はわたしがお送りしたものではなく、たぶんその雑誌の発行者が同郷の先人に敬意を表して、森の家に定期的に送っていたものだった」⁸。

以下の文を読むと、図書館での偶然の邂逅が、いかに強い心的衝撃を道子にもたらしたかがわかります。

そのような出遭いが、水俣病問題とほぼ同じ時期におとづれて、わたしは、自分自身で名状しがたい何ものかに、突然変異を遂げつつあるのではないかという予感がしてこの頃内心異様な戦慄に襲われ続けていたのである。必然の時期が訪れたのだと言えなくもないのだった⁹。

高群逸枝の書物に遭遇したことは、決して単なる偶然ではなく、道子の生きづらさを感じる深刻な苦悩が引き寄せた結果だったのかもしれませんが。であれば、確かに道子にとって、生まれ変わって生き直すための、このときが「必然の時期」だったということになるでしょう。それ以降、異様な戦慄を覚えながら道子は、自身が名状しがたい何か別物に大きく変貌するにちがいないという予感を抱き続け、煩悶の時を過ごすのでした。

注

- (1) 石牟礼道子「高群逸枝との対話のために（1）まだ覚え書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 3、1967年9月、2頁。
- (2) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、436-437頁。
- (3) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第14号、1977年冬季号、12頁。
- (4) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、439頁。
- (5) 前掲「高群逸枝との対話のために（1）まだ覚え書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 3、1頁。
- (6) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、440頁。
- (7) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、439頁。
- (8) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、13頁。
- (9) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、同頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第二部

橋本憲三の住む「森の家」へ駆け込む

第三章 一度目の滞在で逸枝と憲三に後半生を誓う

逸枝の死去ののち、東京の「森の家」では、『火の国の女の日記』の後半部分が憲三の手によって書き進められていました。一九六五（昭和四〇）年六月の逸枝の一周忌にあわせて、この自伝が刊行されると、迎えに来た静子と英雄の夫妻に付き添われて憲三は、遺骨をもって水俣に一時帰省します。そして、すぐにも東京にもどるや今度は、『高群逸枝全集』（全一〇巻）の編集に全力を注ぐのでした。第一回の配本は第四巻の『女性の歴史一』で、一九六六（昭和四一）年二月に刊行されました。およそこの二年間、静子は、二箇月に一度、二週間くらいの滞在予定で「森の家」に行き、憲三の編集作業の手伝いに当たります。

その間道子は、しばしば憲三に宛てて手紙を書き、自身の苦悩と逸枝への追慕の念を伝えたものと思われます。それについての、わずかな証拠が残っています。『火の国の女の日記』を執筆した時期、憲三は道子に手紙を書いています。「——もう二カ月も、誰とも、ひとことも対話しない日々が続いています。ただ姿なき彼女と——」¹。前後が省略されています。ここに何が書かれてあったのか、興味をもたれるところです。もし、そうした手紙類が現存するならば、この時期の憲三と道子の関係は、いっきに明確になるのですが——。

加えて想像するに、水俣にあって道子は、静子を訪ね、自分が宿す苦境の実際を同じく告白したにちがいありません。さらにそれを受けて、「森の家」で静子と憲三が、道子のことを話題に取り上げていた可能性も決して否定することはできないでしょう。現在のところ、逸枝の死去（一九六四年六月）から三回忌（一九六六年六月）までの二年間の憲三、静子、道子をつなぐ交流の軌跡は、一次資料（エヴィデンス）にあってどうしても十全に確認することができない、全くの空白部分となっています。しかしながら、この期間が三者にとって、濃密な関係構築の時期となっていたことは、その後に続く出来事から判断して明らかなように推量されます。

さて一方の道子は、逸枝が亡くなると、さっそく筆を執り、「高群逸枝さんを追慕する」という追悼文を七月三日の『熊本日日新聞』（六面）に寄稿します。以下は、その一節です。

高群逸枝氏が、その女性史の中で、まれな密度とリリシズムをこめて、ほかに使いうもないことばで「日本の村」と書き、「火の国」と書き、「百姓女」と書き、「女が動くときは山が動く」と書いたとき、彼女みずからが、古代母系社会からよみがえりつづけている妣（ひ）であるに違いない。（注＝妣は母）

道子は、『女性の歴史』以外の高群逸枝の著作について、「ほかの作品は『森の家』に行ってから徐々に読ませていただいたんです」²と、述懐しています。しかし、この一著からの知識と感動のみをもってして新聞に追悼文を書き寄せるに至ったとは到底考えにくく、実際その文面を読む限りにおいても、洪水文庫で『女性の歴史』（上巻）を手にして以来、逸枝への関心は持続し、「高群逸枝さんを追慕する」を執筆するまでの約一年間、道子は、『女性の歴史』以外にも、入手可能な限りの逸枝の書物に目を通していたのではないかと推察されます。分量もあり、学術的な内容をもつ難解な部分もあります。道子にとって、自分の再生を賭した必死の読書だったにちがいありません。しかしその結果、このときまでに、

すでに道子の内面には、逸枝をもって自分の妣／母とみなす慕情の念が、醸成されようとしていたのです。換言すればそれは、逸枝を妣／母として、いま一度生まれ変わりたいという強い願望の発露だったにほかなりません。道子の暗部に、ほのかな希望の閃光が射した瞬間でした。

続く一九六五（昭和四〇）年六月、逸枝の一周忌にあわせて『火の国の女の日記』が出版されると、道子はそれを読み、逸枝にとって憲三という夫の存在がどのようなものであったのか、その真の姿にはじめて接し、強い感銘を受けたものと思われます。しかしそれに先立って、実際には道子は、「全集に組まれる前の『火の国の女の日記』の初稿ゲラ刷を読んでいる」³のです。これは、明らかに憲三が、道子の求めに応じて「森の家」から送ったものであると思われます。こうした交流を背景に、すでにこの時期、憲三に会ってみたいという情感が道子に湧き上がっていたとしても、それはそれとして、決して不自然なことではなかったのではないのでしょうか。

他方で、渡辺京二が『熊本風土記』を創刊すると、道子は、「海と空のあいだに」の連載を開始します。第一回が創刊号（一九六五年十一月）に、そして第五回が通巻七号（一九六六年六月号）に掲載され、最終的には第八回（通巻第一一号、一九六六年十一月号）まで続きます。これが、『苦海浄土 わが水俣病』（講談社、一九六九年）のおおかたの部分構成する、事実上の元原稿となるものでした。

明らかにこの時期、道子は、死に傾く自身を生へと蘇らせる術をひたすら逸枝の著作に見出そうとしていました。憲三との手紙のやり取りもしていました。そしてまた、原因不明の奇病が体を麻痺させ、それによりいのちを落とす人間の悲惨な姿に、血筋として自分が宿しているかもしれない狂死の発現を折り重ねるかのようにして、これまた必死になって、この病気と向き合っていたのです。

そうしたふたりを取り巻く状況のなかにあって、いよいよ憲三と道子が巡り会う日が訪れました。憲三の「共用日記」には、次のような記述が残されています。時は、一九六六（昭和四一）年の五月と六月です。逸枝の三回忌（二周年）にあわせて、憲三が水俣に帰ってきたときのことでした。それは、道子の「海と空のあいだに」の第五回が『熊本風土記』に掲載された時期でもありました。

五月一六日 静子と石牟礼さん訪問。

六月七日 二周年。……石牟礼さんお花。／ささやかな法事。読経。

六月八日 午後石牟礼さん。世田谷にいきたいといわれる。ごいっしょしていいとはなす。

六月二九日 15じ11分きりしまで出発、一週二週で帰水の予定。石牟礼さん同道。帰りはべつべつか⁴。

五月一六日に、憲三と静子が石牟礼宅を訪れると、今度は、六月七日の逸枝の三回忌に、道子が花をもって憲三と静子を訪ね、翌八日に再び訪問して、「森の家」に行きたい旨を伝えます。それから三週間後の六月二九日、ふたりはそろって、西鹿児島発東京行きの急行「霧島」の一等車に国鉄水俣駅から乗り込むのです。この一箇月半のあいだ、三者でどのような会話が取り交わされたのか、そして、どのような取り決めがなされたのか、それを明らかに

するための証拠となる一次資料は残されていません。その後に起こる出来事から推量するしかないのです。

それにしても、子どももある既婚女性が単身、遠路東京まで行って、妻を二年前に亡くした寡夫である男性と一週間ないしは二週間を過ごすに当たっては、それなりの覚悟と目的があったものと思われます。その一方で、初見に近い人妻に東京へ連れて行ってほしいと懇請された場合、思慮ある男性であれば、二つ返事でその申し出に同意するとはにわかに信じがたく、それであればそれは、わずか一箇月半という短時間のうちにまとめられた計画ではなく、この約二年間の三者の交流のなかにあつて熟慮が重ねられた結果の成案であり、この三回忌にあわせて、実際に三人が顔をあわせて気持ちを確かめ合い、そのうえで、外部の人間からすれば無分別にも見えそうなこの計画が三者のあいだで共有されるに至った——この場合は、そう考えるのが妥当ではないかと、思量されます。

五月一六日に、憲三は静子と一緒に道子の家に行きました。憲三にとって道子に会うのは、これがはじめてだったのではないかと思います。しかし、すでに紹介していますように、静子の方は、栄町にいたころの子ども時分の道子を知っていました。道子は、こうも書き記しています。

橋本憲三氏の妹の静子さんという人をわたしは幼い頃から知っていた。というのも、水俣川の河口へうつる前に住んでいた栄町に、憲三氏の姉妹のお店がわたしの家の四、五軒先にあったのだ。食品の卸問屋をしておられた⁵。

道子はまた、次のように、静子のことを書いています。「静子さんは、わたしがどういう育ち方をしたか十分にご存知でいらしたにちがいない。祖母が街中をさまよっていた姿などもしょっちゅうごらんになっていただろう」⁶。それだけではなく、精神病院を出るや鉄道事故で死亡した道子の弟のことや、道子自身の自殺未遂のことも、静子は知っていたにちがいません。しかし、静子は、そうしたことを理由に道子を避けるようなことは決してなく、むしろ温かく包み込むような、理解ある態度で接しました。次は、道子による静子についての人物評です。「妹の静子さんは、たいそうのびやかな見かけの美女で、頭脳明晰な人だった。時々お手紙を頂いたけれども、切れ味のある名文である」⁷。

六月八日の午後、道子は憲三に、「森の家」がある「世田谷にいきたい」と懇願します。しかし、その理由や目的については何も書かれてありません。この間の状況から判断すれば、おおよそ道子は、次のようなことを憲三と静子に伝えたのではないのでしょうか。「尊敬する逸枝先生を慕いながら、再び自分は逸枝先生を妣として『森の家』で生まれ変わり、これからの後半生を憲三先生の後添いとなって、逸枝先生とともに過ごしてゆきたい、静子さんを立会人として——」。そのように推測する理由のひとつには、道子が「森の家」で書いた日記の冒頭に、次のような文字が並んでいるからです。

わたしは 彼女を
なんと たたえてよいか
ことばを選びすぐっているが
気に入った言葉が見つからないのに 罪悪感さえ感じる

……

わたしは彼女をみごもり
彼女はわたしをみごもり
つまりわたしは 母系の森の中の 産室にいるようなものだ⁸。

別の箇所で道子は、こうも書いています。

私には帰ってゆくべきところがありませんでした。帰らねばならない。どこへ、発祥へ。はるか私のなかへ。もういちどそこで産まねばならない。私自身を。それが私の出発でした⁹。

こうした文面を読むにつけ、産室としての「森の家」で、敬愛する妣なる逸枝の子宮に一度帰着し、そこから再び自分が生まれ落ちる——そのことへの道子の避けがたい衝動を、そこから感じ取ることができます。自分の出自、育った家庭環境、そしていまの結婚生活、そのすべてを産湯に洗い流し、別のもうひとりの「石牟礼道子」としてこの世に再誕生、つまりは再生を成し遂げる——何にもましてそのことを、道子は無心に願望していたのでした。

上京する前日の六月二八日、道子は、最後の行動に出ます。「橋本家へあいさつに行った。『うちのセンセイ』をつれていったのはひとまず進行したといえる」¹⁰。道子は夫の弘に、今回の東京行きをどう説明したかはわかりません。おそらくは本心を隠し、弘をあまり傷つけないように、水俣病の調査のためとか、それに類するもっともらしい理由をつけて説得したものと考えられます。

六月二九日、一五時一分、水俣駅のホーム。その時が来ました。「いよいよ東京行き霧島に乗る。厳粛な気持ち。はじめて夜汽車に乗ることになった。瀬戸内海見えず。関門トンネルに気づかない。憲三氏とつい話しこんでしまったので」¹¹。ふたりは、どのようなことを話題にしたのでしょうか。想像するしかほかに手立てはありません。逸枝のこと、「森の家」のこと、全集刊行のこと、水俣病のこと、さらには、連載中の「海と空のあいだに」のこと、そして、ふたりの今後のこと——。翌日の午後東京駅に着くまでのおよそ二五時間、ふたりの会話が途切れることはなかったでしょう。実にこうして、六九歳の憲三と三九歳の道子の一昼夜にわたる、生まれ変わりへ向けての厳粛なる道行きが、進んでいったのでした。道子は、憲三について、こう吐露します。

ほとんど宿命的にかかえこんでしまった故郷水俣の出来事についても、同郷のよしみで直感的に把握していられた。その上突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動をも、たぶん理解されていたのだっただろう。静と動との極点を、わたしはゆきつもどりつせねばならなかった¹²。

水俣病との対峙、そして逸枝と憲三への恭順、このふたつが、道子の内面を駆け巡っていました。まさしくこの時期に形成された両要素が動力となって、こののちの道子の生涯を先導することになるのです。道子は、それについて、以下のように分析しています。

水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事であった。二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る。人間いかに生きるべきかというテーマを、二つのできごとと呼びかけていた¹³。

ここに引用した文は、そののちの道子の生涯を規定する極めて重要な言説であるように思われます。といいますのも、人間のいのちと暮らしについての無自覚な生後体験から、民衆へ寄せる私的かつ詩的な独自のまなざしへの昇華、——そしてその、まさしく着床された土着的魂に導かれて描かれる普遍的な人類族母の史的再生。これが、その後の石牟礼文学を通底する「人間いかに生きるべきかというテーマ」の原像ではないかと考えるからです。

「産室」となる「森の家」でのふたりの生活がはじまりました。七月三日の日記に、「昨夜、というより今晚（一時）憲三氏（以下 K 氏と書く）より、ノートの御許し出る」¹⁴とあります。これは、尊敬してやまない憲三と逸枝を主人公とする伝記執筆のためのノートを意味します。この伝記は、水俣へ帰郷後、まず「最後の人」と題されて『高群逸枝雑誌』に連載され、そして最終的に、道子が八五歳のときに、『最後の人 詩人高群逸枝』として書籍化されます。それを思うと、まさしく道子の生涯は、これよりのち、「最後の人」とともに歩んでゆくことになるのでした。

同じく七月三日のノート（東京日記あるいは森の家日記）には、こう書かれています。

今夜更に高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った。それは橋本静子氏に対する手紙の形で（つまり、静子氏を立会人として）あらわした。午前三時これを書き上げる¹⁵。

その手紙は、次のように書き出されます。

深い感謝の気持でこの手紙を書きます。このたびの上京について、私自身にとっては破天荒なことであり、はためにはずいぶんづかづかとしたお願いを、みなさまによっておききとだけ下さいましたことに、貴女さまの御配慮が全面的に動いて下さいましたことを、その経緯の積み重ねがありましたことを、私は肝にめいじているつもりでございます¹⁶。

「高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った」という語句や「静子氏を立会人として」手紙を執筆していることから推測しますと、このとき道子は、女としての自身が寄って立とうとする立場を明確に「誓った」のではないかと思量されます。この手紙には、世俗的な「後添い」や「後妻」といった言葉はいっさい使われていませんが、配慮の「経緯の積み重ねがありました」という字句に目を向けますと、およそこの二年間にあって、しばしば道子は静子に会っては、そのことにかかわって暗に意思表示をしていたのではないかという推断の道が開きます。こうした「積み重ね」が、すでに引用で示しています、「突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動」となって、ここに顕在化したものと思われるのです。

「森の家」に入って一週間が立ちました。七月六日の道子の日記に、「桑原史成さんと渋谷で会う。……東大都市工学衛生工学研究室宇井純さんを訪ねる。留守」¹⁷との記述があ

ります。桑原は、フリーの写真家で、そのとき二九歳でした。三四歳の宇井は、下水道を専門とする研究者で、東大の助手をしていました。ふたりは、ともに水俣病に関心をもつ旧知の仲で、水俣へも足を運んでいました。道子は、三人で会って水俣病に関して意見を交換したかったものと思われます。さらに、桑原には、頼みたいことがありました。「逸枝先生の写真集のこと道子話す。喜んで撮りたいとのこと」¹⁸。しかしこの日は、何か事情があってふたりに反目が生じ、道子は「森の家」を飛び出してきていたようです。続いて日記には、こう記されています。「やっぱり世田谷に帰りたくなった。小雨。十一時十分帰宅、九八〇円取られた。残念。先生の部屋ドンドン叩く。締め出されていた。大騒動して窓から侵入。ニクラシ。おとなり徳永夫妻起き出し御協力、先生オヤスミ。起きない」¹⁹。

次の日(七月七日)の日記。「九時きっかりに桑原さんみえる。六時彼と渋谷で落ち合い、東大技術史研究会。沛然たる雨、本郷三丁目ウイジュンサン……十一時帰宅。締め出しなし」²⁰。

それから二日後の七月九日、道子は憲三に連れられて、平塚らいてう宅を訪問しました。以下は、そのときの道子の印象です。

らいてう氏はやはり飛びぬけた女性。うしろ姿に優雅さの衰えぬ人である。「ベトナムが、ああいうことになりまして」という御挨拶。水の流れの中に水があるように、すいと自分の使命感を前に押し出す、するとみんなも流れていくという風である²¹。

憲三はらいてうに、道子をどう紹介したのでしょうか。興味がもたれるところですが、残念ながら調べる限り、資料には残されていないようです。

翌七月一〇日——「先生おやすみ。桑原さん来る。書斎にて彼に説明。桑原さん撮影大車輪(九時半頃から)。まず化粧部屋から、階段、避暑室、階下、書斎。庭で先生。ボヤーンとお写りになったらよろしいと思いますと進言。彼を囲んで昼食の用意。お寿司、カキフライ、きゅうり、ビールなど。揚げとしいたけのおつゆ。先生楽しそう。桑原さんの笑う目が美しいとおっしゃる」²²。そのあと、「明日、帰水の予定。ならば滞京予定を終了したものとして、二階で休息。深く熱い充足感」²³。「深く熱い充足感」とは何でしょう。想像にゆだねるほかない意味深長な言い回しです。

その日の夕方、詩人の渋谷定輔がやって来ました。逸枝の『東京は熱病にかゝつてゐる』は、一九二五(大正一四)年十一月に萬生閣から上梓され、渋谷の『野良に叫ぶ』も同じ版元から翌年の七月に出版されています。萬生閣は実際上の平凡社で、両書ともに、発行者である下中彌三郎が、巻頭に「推薦文」を書いています。当時憲三は、下中を創業者とする平凡社に編集者として勤務していましたので、おそらく『野良に叫ぶ』の出版をきっかけに、下中の紹介により渋谷と知り合ったのではないかと思います。

道子は、桜通りに出て、「ウィスキー小瓶、ビール小一本、鶏もつ、桃などを買う。いよいよ祝祭気分」²⁴。こうして祝宴がはじまりました。「渋谷さんのプレゼント、開けてみようということでリボンをとる。美しい寒暖計。思わず歓声を上げる。うれしかった」²⁵。寒暖計は、寒い日も暖かい日も、動じることなく常にひとつの場所を占めます。そこから、このプレゼントの意味を読み解くならば、ほぼ間違いなく寒暖計は、「婚約祝」あるいは「結婚祝」としての贈り物だったものと思われます。祝いの膳も佳境に入ります。「逸枝評憲三

評、渋谷氏から熱っぽく出ると、やはり実体に迫っている感じがしてくる」²⁶。では、「実体に迫っている感じ」とは、何を意味しているのでしょうか。いまや憲三の後添いとして逸枝とともにここに生きていることの真の実際感といったものでしょうか。渋谷は八時ころ家を出ました。続けて道子は、こう書きます。「厳粛なる夜。聖なる夜であるとも——」²⁷。この一語から、この日が、憲三と道子が体を重ねて結ばれた最初の夜だったことが連想されます。

神秘に包まれた聖夜が明け、帰郷する七月一日の朝が来ました。以下も、道子の日記からの引用です。

六時目覚め。

木立の中の深い霧。

私の感情も霧の中に包まれてしまう。しかしそれは激烈で沈潜の極にあるものだ。

沐浴。

今朝の私は非常に美しい、貴女は聖女だ、鏡を見よと先生おっしゃる。悲母観音の顔になったと見とれる²⁸。

「九時半、逸枝先生にお別れつげる。彼女は私の内部に帰る。切ない。玄関を出る」²⁹。こうして道子は「産室」を出たのでした。

それよりおよそ三箇月半後の一〇月三〇日の道子の日記に、「おなじ女をわけあえば兄弟分になるという後代の俗」³⁰という文字が書き込まれています。この遺俗を念頭に置いて道子の場合を考えれば、「おなじ男をわけあえば姉妹分になる」ということになります。おそらくこうして道子は、この「産室」において逸枝の「妹」として生まれ変わったのかもしれませんが。他方で、すでに引用しています「わたしは彼女をみごもり／彼女はわたしをみごもり／つまりわたしは／母系の森の中の／産室にいるようなものだ」という道子の文から推量すれば、あるいは、「森の家」の「産室」で逸枝が道子をみごもるという神秘的な觀念の幽玄世界に、道子は日々浸っていたのかもしれませんが。「森の家」を発つに当たって、上のように道子は「彼女は私の内部に帰る」と書いています。これこそが、ここにおいて道子が逸枝をみごもり、逸枝が晩年を過ごす地として望んでいた暖かい火の国に持ち帰り、再生なった道子の新たな生き方のなかで、これよりのち生涯にわたって「作品」というかたちをとって産み落としてゆくという、秘められた道子の強固な意思表示として受け止めることができる箇所であるにちがいません。といいますのも、憲三に語った逸枝の晩年の言辞が、こう残されているからです。

日記一卷（「火の国の女の日記」）と追加研究一卷とができ上がったら「過去の紙くず」は一切焼いてしまって、また新しい出発をしましょう。あたたかいところへ行って、そこで私は「女性の歴史」で書けなかった未来像を叙事詩のかたちで書くでしょう。たぶん私の最後の詩篇となるでしょう³¹。

換言するならば、この逸枝の言辞を読んでいたにちがいない道子の、「彼女は私の内部に帰る」という語句は、逸枝の詩学と学問の全き後継者としての、あるいは、揺るぎない再生

産者としての、道子の宣誓の言葉だった可能性さえあるのです。

こうして、道子の「突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動」は終わりました。改めて、六月二九日から七月一日までの約二週間は、六九歳の憲三と三九歳の道子にとって何を意味するものだったのでしょうか。この短い同棲期間は、道子にとっては「生命の復活」を意味し、ふたりにとっては「後半生を契る祝言」を含意するものであったにちがいありません。それを実証するにふさわしい、道子の言葉が残されています。

世俗的なさまざまな意味で私の一生は、逸枝先生に御会いする（全集の前の『女性の歴史』）直前にすべて終わりました。そして、逸枝先生との出遭いによって私はのっぴきならぬ後半生へと復活させられたといえましょう³²。

このときこの森は、さながら生命誕生の小宇宙と化していたのです。おそらく、立会人である静子に、つまりは事実上の産婆役であるその人に、その神聖なる一連の出来事を報告するためだったのでしょう、この日兩人は「森の家」をあとにして、原郷の水俣へと帰ってゆくのでした。

注

- (1) 石牟礼道子「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、9頁。
- (2) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、444頁。
- (3) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第14号、1977年冬季号、11頁。
- (4) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、153頁。
- (5) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、274-275頁。
- (6) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、275頁。
- (7) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、同頁。
- (8) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、244-245頁。
- (9) 石牟礼道子「高群逸枝との対話のために(1) まだ覚え書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 3、1967年9月、1頁。
- (10) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、246頁。
- (11) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (12) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、12頁。
- (13) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、287頁。
- (14) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、247頁。
- (15) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (16) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (17) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、258頁。
- (18) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、258-259頁。
- (19) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、259頁。

- (20) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (21) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、261 頁。
- (22) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、264 頁。
- (23) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、265 頁。
- (24) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (25) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (26) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (27) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (28) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (29) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、266 頁。
- (30) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、297 頁。
- (31) 高群逸枝『高群逸枝全集』第七巻／評論集・恋愛創生、理論社、1967 年（第 1 刷）、372 頁。
- (32) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、248 頁。

第四章 憲三と道子が水俣へ一時帰省する

道子は、「七月十二日、熊本平野に入ってはれ。壮大な空。炎のような風」¹、そして「九月二十五日夕、ふたたび世田谷森の家着」²と書いていますが、そのあいだの動静については、何ひとつ記述がありません。一方の憲三の「共用日記」には、九月一五日「出発」³、九月二五日「石牟礼さんくれ方ごろに見える」⁴とあるのみです。つまり、別々に上京したことはわかりますが、七月一二日に憲三と道子が到着してから九月一五日に憲三が出立するまでのあいだ、水俣でふたりが、どのような暮らしをしていたのかが全く空白になっているのです。ほかに、そのことを実証するに足る資料（エヴィデンス）も見当たりません。そこで、次のように想像してみたいと思います。この間、事の経緯からして道子は、夫の弘に離婚を申し出たのではないのでしょうか。しかし、それが受け入れられず、また、息子の道生の反対にも直面し、道子は完全に居場所を失い、途方に暮れる日々を送っていたものと推測してみます。おそらく、そうした道子の置かれている状態を見かねたのでしょう、憲三と静子が、道子の家を訪ねてきました。その家は、「実家のとなりにあった、にわとり小屋を、かろうじて人間が住めるように父がしてくれた掘っ立て小屋」⁵でした。以下は、このときの来訪について、道子本人が記述するところです。

その後憲三先生が再度私のところに見えたのは昭和四十一年秋で、家族の理解をとりつけてご一緒することになった⁶。

また別の箇所では、道子はこのような描写も試みています。

その橋本憲三氏と、妹の静子さんが突然我が家にやってこられたのは、秋晴れの美しい日であった。東京の「森の家」、つまりは逸枝さんの研究所の跡を見ておいてくれな
いかとのことだった。

突然お見えになられ、いきなりそうおっしゃられて、私は仰天した⁷。

上のふたつの引用文を合成しますと、おおよそ次のようになります。「約四箇月前の五月一六日の最初の来訪から数えて二度目に当たる、一九六六（昭和四一）年の美しい秋晴れのある日、突然、橋本憲三氏と妹の静子さんがわが家にいらっしゃって、妻の逸枝さんと長年暮らされた東京の森の家をこれから解体するので、その様子を見ておいてほしい旨のことを申し出られた。私は仰天したが、家族の理解をとりつけて、同道することにした」。もしこの推断が正しいとしますと、ここにはふたつの考慮に入れるべき問題点が介在することになります。ひとつは、「私は仰天した」という語句についてであり、もうひとつは、「家族の理解をとりつけて」という文言に関するものです。そこで、以下に、少し検討しておきたいと思います。

「私は仰天した」という語句には、大事なことが抜け落ちています。実際には、「私はあまりにもうれしくて仰天した」というのが、真実に近いのではないかと推量されます。とい

私事を書かせて頂けば、処女作「苦海浄土」のかなりの部分は東京世田谷の朽ち果ててゆく森の家で、お励ましにうながされて書き進められた。当時そこしか、わたしの身を置く場所ではなかった。逸枝の霊に導かれている気持であった。チッソ東京本社座りこみの心の諸準備も森の家でなされた。はじめていうことである⁸。

このなかの、「当時そこしか、わたしの身を置く場所ではなかった」という一語に注目すれば、道子にとって、いかにこのときの憲三の申し出が自分の意を満たすものであったかがわかります。まさに渡りに船、天の慈雨だったのです。

次に、道子は、本当に「家族の理解をとりつけて」出京したのか、という点です。息子の道生が後年書いたものに、「母のことそして父のこと」と題された回想文がありますが、次は、そのなかの一節です。

惜しみなく愛情を注いでくれた幼い日々が過ぎ、私が高校を卒業しこれから進学と言う頃に母は家を出た。目の前で起きている現実を凝視して激しく突き動かされる想いを、言葉に託して伝えたい。次々に寄せ来る感情のたぎりを文章で書き記しておきたい。集中して書ける場所をと言い出した。その衝動と決意は父も私も到底とめられることではなかった⁹。

最後の、「集中して書ける場所をと言い出した。その衝動と決意は父も私も到底とめられることではなかった」という語句に目を向けますと、必ずしも円満に「家族の理解をとりつけて」東京行きが実行されたのではなく、どちらかといえば、家族の思いを一方的に断ち切って家を出た構図が浮き上がって見えてきます。憲三と道子の上京の日がずれるのは、せめてもの家族への配慮だったのかもしれません。

こうしていよいよ、憲三は九月一五日に、道子は遅れて九月二四日に水俣を立て、再び「森の家」へと向かうのでした。

注

- (1) 石牟礼道子「最後の人 1 序章 森の家日記(一)」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、31頁。
- (2) 石牟礼道子「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、4頁。
- (3) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、154頁。
- (4) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (5) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、464頁。
- (6) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、463頁。
- (7) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、271-272頁。
- (8) 石牟礼道子「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、94頁。

著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで
第二部 橋本憲三の住む「森の家」へ駆け込む
第四章 憲三と道子が水俣へ一時帰省する

(9) 石牟礼道生「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第 73 号、2018 年 5 月、36 頁。

第五章 二度目の滞在で憲三と「寂滅」を確かめ合う

「森の家」へ帰ると憲三は、再び『高群逸枝全集』（全一〇巻）の編集作業にとりかかります。奥付から判断しますと、配本は、以下のように進んでいました。憲三の「森の家」帰着は、九月一六日ですので、おそらくはこのときまでに、第一巻の「母系制の研究」と第九巻の「小説／随筆／日記」の印刷原稿はすでに出版社に渡されており、したがって残る作業は、第六巻「日本婚姻史／恋愛論」と第七巻「評論集・恋愛創生」の原稿の整理と「解題／編者」の執筆だったものと考えられます。

- 第四巻 女性の歴史一 一九六六年二月
- 第五巻 女性の歴史二 一九六六年三月
- 第一〇巻 火の国の女の日記 一九六六年三月か（ただし、奥付は一九六五年六月）
- 第二巻 招婿婚の研究一 一九六六年五月
- 第三巻 招婿婚の研究二 一九六六年六月
- 第八巻 全詩集・日月の上に 一九六六年七月
- 第一巻 母系制の研究 一九六六年九月
- 第九巻 小説／随筆／日記 一九六六年一〇月
- 第六巻 日本婚姻史／恋愛論 一九六七年一月
- 第七巻 評論集・恋愛創生 一九六七年二月

それではこれより、憲三の編集作業の様子を、道子の文から拾い出してみます。九月二五日に、道子が「森の家」に帰った日、「K氏は全集最終巻の編纂を抱えたまま風邪をひいて、二階書斎のベッドで仰臥のまま、その仕事を続行中である」¹。そのことから判断すると、第六巻の「日本婚姻史／恋愛論」については、すでにこのときまでに原稿の整理が終わっていたものと考えられます。それから一週間過ぎた一〇月三日の夕方、全集最終巻の第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」の下書きができ上がりました。憲三は道子に、それを読むようにと、手渡します。

しばらく手が出ない。さしのぞくことは越権ではないか。再度の仰せによって読ませていただく。短文であるが、その言葉の深さ（彼女への愛）格調（その心）の高さに胸うたる。どっとかなしくなる。おさびしそうな先生。曇りの空をみる。秋色の庭。時間とは何であるか²。

さらに、この引用文は、次のように続いてゆきます。

夜、先生ニンニク食べられて下書きお清書。御苦心の様子。わたしは『美想曲』を読み進む。切々と時間が進む。端正な姿で書いていらっしゃる先生。左の目に左手をあてて。左の目は失明している方の目である³。

憲三は、自らの不注意により、誤って小さいころ失明していました。道子の目もまた、このころすでに視力の低下がはじまっていた。「このときたまたま私の左眼の視力が、非常に衰えてしまっているのを〔憲三〕氏に発見されるということがあったりした」⁴のでした。

翌日の一〇月四日、道子は、「静子さんに解題を書かれていること報告の手紙書く」⁵と、六日に、最終配本予定の第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」が整い、ついにここに全集編集のすべての作業が完了したのです。「比類ない愛の書完成。廃屋、老残、というお言葉がある。むべなるかなと思い、言葉なし。果実酒を黙って献じる。そして彼女の霊前には二粒の栗」⁶。ちょうどそのころ、第九巻の「小説／随筆／日記」が公刊され、一〇月一日に理論社の編集者が献本五冊を持参。「K氏はそのとき最終回（第七巻）原稿——編者のことばだけをのこして——を渡されたのであった」⁷。

それから二日後の一〇月一三日、今度は道子の「空と海のあいだに」の第八回原稿が完成しました。すでに述べていますように、「空と海のあいだに」は、『熊本風土記』の連載文でした。一九六五年十一月の創刊号に第一回が、最初に憲三と静子が道子の家を訪ねた一九六六（昭和四一）年五月一六日からおよそ二週間後に刊行された六月号（通巻第七号）に第五回が掲載され、その以降、七月号（通巻第八号）に第六回が、八月号（通巻第九号）に第七回が続いていました。今回書き上げた第八回は、「海底の神々 その二」の副題をもち、一九六六年一月号（通巻第一号）のためのもので、結果的に、この第八回が連載最後の文となりました。その後、八回にわたる「空と海のあいだに」と、その他の原稿が組み合わせられて、一九六九（昭和四四）年に講談社より『苦海浄土 わが水俣病』となって、世に問われることになるのです。

「空と海のあいだに」の第八回原稿ができたころについて、道子は、こう書き留めています。

……森の家の一室をあたえられて、わたしは『苦海浄土』の“海石”の一節を執筆中であり、出来上がったものを読んでいただき、その後批評をうかがって、世田谷桜四丁目の郵便局から、「熊本風土記」の編集者に送っていたのである⁸。

『苦海浄土』の“海石”は、『苦海浄土』第四章「天の魚」の第二節に相当する「海石」に対応します。

また、別の箇所では、このときのことを、次のような表現を使って、回想します。

そのとき私は「苦海浄土」の第一稿（原題「空と海のあいだに」）を渡辺京二氏の『熊本風土記』に連載していて、その原稿も「椿の海の記」の半分くらいは憲三先生がまず目を通され、森の家から送ったことが忘れられない⁹。

『椿の海の記』は、一九七六（昭和五一）年の十一月に朝日新聞社から発刊されます。憲三が亡くなって半年後のことであり、この本を憲三が手にすることはありませんでした。

他方、この時期について、道子は、このような回顧もしています。

……あの「森の家」の一室で、ノートの標題を「最後の人」と名付けたのだった。

「最後の人としたのですか。なるほど、うん。よい題だな」……

顔を拭いたタオルを首に巻きつけたまま……橋本憲三氏は、自分で立てた朝のコーヒを啜られる。……十月も末のある朝だった¹⁰。

そして憲三は、道子にこういいました。「その、僕が生きている間に、書きあげて、読ませて下さると、ありがたいのですがね」¹¹。憲三は、道子にとっての「最後の人」が自分自身であることを承知していたものと考えられます。

しかし道子は、返事に窮し、内心こう思いました。

この夫妻に関して、これまでわたしが知っていることといえば、昭和二十九年に講談社から出されていた『女性の歴史』上巻……と、全集に組まれる前の『火の国の女の日記』の初稿ゲラ刷を読んでいるだけである。気の遠くなるような勉強が前途に待っている。この師のご存命中にはとても間に合うまい……¹²。

道子は、「森の家」を処分して水俣に帰った憲三を助けて『高群逸枝雑誌』の創刊に加わり、その雑誌に「最後の人」を連載します。しかし、それが単行本としてまとめられ、世に出るのは、「森の家」滞在から四六年が経過した二〇一二（平成二四）年のことでした。「この師のご存命中にはとても間に合うまい」という予感が的中したともいえますし、この間、最後まで「最後の人」に一心不乱に寄り添ったともいえるかもしれません。

九月二五日に道子が「森の家」に帰ってから、ほぼ一箇月が立とうとしていました。水俣に残してきた夫と息子は、道子のことを心配していたでしょうし、道子も、ふたりのことが気になっていたにちがいありません。道子の日記から、以下に、拾い上げてみます。まず、息子の道生に関連して——。

一〇月三十一日「帰途ふいに胸騒ぎする。道生にか弘にか、先生にか何かありはせぬか。何もないように祈って帰る」

一一月一日「道生に逢いたいこと切なり」

一一月八日「道子、下のバアチャン、道生に手紙」

一一月一三日「道生から速達、成長した手紙」

一一月一五日「道生へ手紙、よく考えて書く。婚約したという。道生十八歳。昔なら二十歳か。大学卒業したら結婚するという。いやはやしかし、びっくりした。彼の純情をほめて激励の手紙」

一一月一六日「道生にどうしても逢いたいし。泣けてくる」

一一月一七日「道生の手紙また読む」

一一月一八日「道生どうしているかしら」

一一月二十日「道生に逢いたいし、東京に受験に来るのかしら」¹³

断片的な記述ではありますが、それでも、息子に寄せる母親の切々たる思いが伝わってきます。他方、夫の弘に関しては、記載の量が少なく、次の三点です。

一〇月二五日「石牟礼からお金」

一〇月二八日「道子午前中、弘に手紙」

一一月六日「弘より手紙、ガックリ」¹⁴

これだけからは、道子の夫への気持ちは十分に伝わってきませんが、弘が生活費を送金していることから判断しますと、弘は道子を見捨てているわけではないことがわかりますし、受け取った手紙の内容に道子が「ガックリ」と失望しているところから推量しますと、離婚話に弘の態度が否定的だったという状況があったのかもしれませんが。

道生の文のなかに、家についてと両親について記述した箇所がありますので、ここで紹介します。家については、「祖父の白石亀太郎が主になって造ってくれた家で雨が降ればあちらこちらで漏れてくる暮らしだったが絶えず人が集まる楽しい暮らしだった。小学校の頃まで溺愛されて育ったことを鮮明に覚えている」¹⁵と、述べています。両親については、こう書いています。

母は父の求める妻としては早くにその役目を放棄していた。母と父との思いの違い。両親のそれぞれの葛藤は物心ついたころから目の当たりにしていた。静かで優しい父は黙認するしかなかった。

ものを思うと取り憑かれたように書き始める母。何を言おうと通じない。囲碁や釣りや庭いじりを好み知人や親戚の面倒や相談にのり人柄の良い学校の先生だった普通で穏やかな父だった。そんな母に距離を置きながらも資金的援助を怠ってはいなかった¹⁶。

弘は教師として小学校に勤務し、道生は大学受験を控えた高校三年生でした。道子が「森の家」に滞在していたとき、ふたりは水俣でどのような暮らしをしていたのか、調べる限りでは資料に残されておらず、再現することはできませんが、憲三の体調が優れなかったこともあり、「森の家」での炊事洗濯などの家事全般は、ほとんど道子が担っていたようです。それは、書き残されている日記から明らかで、たとえば、一〇月一三日の日記には、こうした一文を見ることができます。

今朝は牛乳にしましょう。そうしましょう。そして、二度食^{じき}でよい。僕はあまり食べたくありません。あなた風邪はなおりましたか。なおったの。そりゃよかったなあ——

そこで私は、とんとんと二階をおりて、非常に簡単で十分に栄養的な二度食^{じき}のための食事をつくりにゆくのである¹⁷。

読む限り、おそらくどこにでもありそうな夫婦の朝の会話です。献立は、次のようなものでした。

朝食、味噌汁（豚肉、カボチャ、油揚げ、葱、ラーメンスープ入り）、先生 牛乳、麦飯、ウニ、白菜漬け、フクミ（先生名付ける）昆布、梅干。先生、牛乳。夜、バター卵

とじ（人参、葱）、麦飯、牛乳、蜜柑二個ずつ、ウニ、昆布¹⁸。

憲三が、最終配本予定の第七巻「評論集・恋愛創生」の原稿の整理を終え、それを理論社の編集者の藤井良に渡し、一方道子が、第八回の「空と海のあいだに」を脱稿し、それを『熊本風土記』の編集者の渡辺京二に郵送すると、いよいよ、「森の家」解体へ向けての本格的な作業がはじまりました。まずは、本の整理です。一〇月一七日、三社のなかで事前に二〇〇万円の最高値をつけていた古賀書店が来訪し、打ち合わせ。さっそくその日から、ふたりは本の整理に取りかかりました。執筆の際に逸枝が参考にした膨大な量の書籍が「森の家」の本棚を埋め尽くしていました。道子は、このように書いています。

私は世田谷の森の家の内観の威容を感動を持って思い起こすが、そこは見たこともない一大書庫で、水俣の洪水文庫より更に充実した内容のように私にはおもわれた。……正規の書斎、（応接間）、茶の間はいうにおよばず、湯殿の横の小部屋といわず、化粧部屋といわず、二階書斎（寝室を兼ねる）も張り出しのおどり場も、壁面という壁面はすべて天井までとどく書誌類でことごとく埋まり、書架のしつらえ方の機能的、合理的であることはおどろくべきもので、すべて憲三氏の設計になる手づくり（カンナは大工さんがかけた）であった。……書物はここでは生き物であり、世俗を断ったこの夫婦の対話者としてそこに居並んでいた¹⁹。

それでは、どのような書物が「そこに居並んでいた」のでしょうか。道子は、実に克明に記録していました。長くなりますが、貴重な逸枝の蔵書リストですので、以下に再録します。

古事記伝二巻、古事類苑、古事記大成、国史大系（五十三巻）史料大成（四十二巻）群書類従（二十二巻）故実叢書（三十二巻）日本文学大系（二十三巻）大日本古文書（一卷）大日本古記録、後二条師通記（上・下）世界史（ソビエト科学アカデミー版十巻）親族法（穂積重遠）図説日本文化史体系（九巻）日本庶民生活史（三巻）日本歴史大辞典（二十巻）大百科事典（二十七巻）日本文化史体系（四巻）日本風俗史講座（二十六巻）未開家族の論理と心理（マリノウスキー）御湯殿の上の日記（十巻）六国史（十一巻）国文学講座（十巻）モルガン古代社会（上・下）ミクロネシア民族誌、支那古代社会研究、支那古代経済思想及制度、小右記（小野宮実資）権記（藤原行成）春記（藤原資房）中右記（藤原宗忠）玉葉（藤原兼実）明月記（藤原定家）兵範記（平信範）言継卿記（山科言継）神話伝説体系（十一巻）古琉球、琉球神道記、日本古代共同体の研究、社会思想全集（二十四巻）古典劇体系（十巻）寺領荘園の研究、南方民族の婚姻、新日本歴史講座（五十冊）歴史学研究、日本農業史、大鏡活援、紫式部日記正解、支那原始社会形態、日本上代における社会組織の研究（大田亮）支那の家族制、朝鮮の姓史と同族部落、日本婚姻史論、日本荘園史概説、三宅博士古希祝賀記念論文集（柳田国男、簗入考収録）キュウリー夫人伝、ゴッホ伝、国学院雑誌……²⁰。

逸枝の一大蔵書を前にして、道子は、これまでいかに無学であったかに気づくとともに、

これからの無限の勉学をあと押しするかのような、大いなる力をそこから感じ取ります。

いまの中学校程度の学力も持たなかった私にはこれらはまったく想像もつかぬ未知の世界だった。

……私が生まれてこの方、おそすぎる覚醒がおとずれた三十七歳までの無学の時間をすっぱり、この夫妻は系統的な勉強に当て続けていたのだという実感が、取り囲まれている大書架から伝わって来た。……私は、絶望感よりも、この一大書庫に、無限の天地のようなものが広がってゆくを感じた。……死ぬまで勉強というものをしてよいのだというような啓示と、この天地へのいいようもない慕わしさを感じたのである²¹。

おそらく、勉学心にかかわるこの無限の感覚が、「森の家」滞在の最大の成果であり、この後の道子の作家としての原動力となるものであったにちがいません。別の箇所で道子は、以下のように語っています。

勉強しよう！ とひとつのせんりつに貫かれながらわたくしはおもう。勉強というものを、晴れてやったことのなかったわたくしにとって、森は、うつつにみる必然である。わたくしは、きっと、はためには突然変異を起し、世紀の大脱走を企て、まぼろしの森に逃げこんだのにちがいない。

いや、森が宿したのがまぼろしであるのかもしれぬのである。この関係性こそ不思議なことであった。余命いくばくもない森が宿している関係性のたまごに対して、わたくしはふかい興味をもつ²²。

「私を宿したのが幻の森」なのか「森を宿したのが幻の私」なのか、道子は反問しながら、深く煩悶します。しかしそのとき、その旋律は、「勉強しよう！」という深い戦慄となって、道子の心を射抜いたようです。こうして明らかに、道子と森は相互に受胎し、森の聖霊を宿して道子は再生なり、他方で、道子の老残を胚胎した森は死滅の運命をたどるのでした。このことを、さらに別の言葉に置き換えるならば、こうして道子は逸枝の死霊の相続人として復活を遂げ、その一方で、蘇った道子がこれから歩みゆくことになる新たな聖地への道行き同伴者としての役割を必然的に担って、憲三もまた、森の死とともに、生まれ変わったということになるでしょう。したがって、道子が「高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った」という語句は、「後妻」とか「後添い」とかいう現し世の俗言を超えたところに見出される、三つの巴が美しく組み合わせられた合体模様を象徴する聖なる予言として受け止めることができるにちがいません。その意味で、まさに「森の家」は、それを生み出すにふさわしい産所であり霊地だったのです。道子を選んだ巡礼の地「森の家」を出て再び還俗するに当たって、道子は、「寂滅(□□)の言葉はゆうべたしかめあった」²³とも書いています。□□にいかなる文字が隠されているのか、それは、憲三と道子のふたりだけが知ることであり、当然ながら、誰にもわかりません。しかしながら、逸枝自身、自著の『變愛論』のなかで、確かに「寂滅」という語を使っていました。参考のために、以下に、その用例を引用します。

くりかえしいえば、變愛は合體（もしくは自己解消）を理想とするものであり、これにたいして生殖は分裂（もしくは自己保存）を意味するものである。これはアミーバの昔から不變の原則なのである。

では、この兩者の關係は、究極なにを指向するかといえ、……それは人類の無限の増殖よりは、人類の完全な合體——無性化、そして人類の寂滅（もしくはさらに他の新生命への發展）なのであろう²⁴。

もし、憲三と道子が、この逸枝の「寂滅」にかかわる言説を前提として、道子が東京を發つ前日の十一月二三日の「ゆうべたしかめあった」のであれば、「生殖」を超えて、「新生命への發展」を確認し合ったことになるのではないのでしょうか。こうして憲三と道子のふたりは、最終的に逸枝の予言に従って、新たな生命体としてここに蘇ったのでした。

そう考えますと、「寂滅（□□）の言葉はゆうべたしかめあった」のなかの□□に隠された文字は、おそらく、「再生」ないしは「蘇生」、あるいは「新生」か「復活」の二文字になるものと思料されます。

「森の家」に滞在中の道子の書くもののなかに、「われわれの森はと云えばそれらの中にそびえ立ち、その夕闇の一瞬を司る」²⁵という表現があります。また、別の箇所では、自身の外出からの帰りを「二時、わが家へ。化粧部屋で着替え」²⁶と表現しています。もし、道子と憲三が明白な他人同士であれば、決して「われわれの森」とか、「わが家」とかいった表現は使わず、それぞれにおいて、事実にして「憲三氏の森はと云えば……」、そして、「二時、憲三氏の家へ。……」という言葉遣いに、止めるのではないのでしょうか。「われわれの」という所有格の表現は、これ以外にも散見されます。

また、憲三と自分を主語として書くに当たって道子は、数箇所で「わたくしたちは」という表現を使っています。たとえば、「秋から冬に入ってゆく空の重さを心に抱いて、わたくしたちは馬事公苑へゆく」²⁷という箇所が、その例に相当します。単なる一介の滞在者であるならば、「憲三氏と私は」と書くのが通例でしょう。「わたくしたちは」と書く以上は、ふたりがすでに極めて親密な関係になっていたことを例証します。

それでは以下に、「ゆうべたしかめあった」翌日の道子の離京までの足取りを、短くまとめてみます。

本の整理にふたりは一週間を費やしました。一〇月二四日、庭に出て憲三は、不要となった雑誌や新聞などを焼きました。一方書籍類は、引き取りにきた古賀書店のトラックに運び込まれました。道子は、そのときの様子を、このように描写します。

昼間の森の中の火と煙と先生の後姿一生忘れがたし。本を積んだトラックが角をまがって行ったとき先生見たら、先生は古賀さんの後姿にていねいにおじぎをされていた。道子門にかけこみ、泪湧く。大型トラック一ぱいの本。競りに出されるとか。

先生、貴女がいて下さって助かりました、とおっしゃる。握手。おいたわしい²⁸。

本の送り出しは、憲三にとっては、俗世を断って森に生きる孤高の学者だった妻逸枝と、その著述を長年編集者として献身的に支えてきた夫である自分とに、別れを告げる瞬間でした。一方、道子にとっては、新たな生を得て復活した文筆家としてこれから立つうえでの

勇気と展望とを、逸枝と憲三から確実に相続する一瞬でもありました。このとき、憲三は、見送る愛蔵書に深々と頭を下げ、道子の目からは涙がこぼれ落ち、それからふたりはしっかりと手を握りしめて、互いに互いの存在を重ね合わせるのです。

分身としての蔵書と別れたあと、次に憲三は、「森の家」そのものと別れなければなりません。以前から世田谷区役所とのあいだで、「森の家」は解体し、公園へと造成することで話が進められていました。十一月一四日、譲渡仮契約書に調印する日が来ました。午後二時ころ、「世田谷区役所公園課長、用地課長、公園課員、桜町会長、杉本哲次（軽部家分家、杉本造園株式会社の社長）」²⁹が訪ねてきました。

時々、例の先生の高い笑い声、こんな声の時はあまり正常ではない。失調症のようにきこえる。

いよいよ定まりましたよ、道子さん、印鑑をつかねばなりません。そう言ってタンスの上の紙箱から印鑑を出された。四時頃人々帰り、下りてゆくと、ああ、もういよいよこの家もなくなります。一二月一五日に引きあげですよ。……（彼女の遺影に向かって）……（うん、）いっしょにかえろうね³⁰。

同じくこの日、憲三と道子は、水俣に建造する予定の逸枝の墓廟について語り合いました。ヒントになったのは、先日ふたりで訪れていた馬事公苑で見かけた記念碑でした。以下は、そのときの憲三と道子の会話です。

「三メートルは大きいかな。物々しいかな。しかし小さければ中途半端なものになる。」

「……石積みは三メートル四方になっても自然の山に入ればそれほど大きくもないと思います。この立方体を石の壁と考えて屋根をおいた形を考えると、つまり石の小屋、お二人と憲平ちゃんの永久のお住いの小屋と考えると、決して大きくありません。

「そうですね！ いやそれはすばらしい。石の小屋と考えると実にいいな、そうきました。」³¹

「憲平ちゃん」とは、死産で世に出てきた憲三と逸枝の息子のことです。道子は、この墓廟について、晩年に執筆した自伝のなかで、以下のように触れています。

ちょうど高群逸枝さんのご夫君、橋本憲三先生が、水俣のご姉妹の所に帰っておられ、お墓というか、記念碑のことを考え中であつたので、わたしは、かの祖父の愛弟子さんのことを話した。こうして今、逸枝さんの面影の刻み込まれた石碑が、水俣市役所のすぐ上に遺されている。憲三先生に申しつかつて、在京の彫刻家、朝倉響子氏に、「目立たなくともよいが、後世に残るような」特別の墓碑のデザインをお願いしに往った。快く引き受けて下さって、石工の吉田一二三さんに頼み、現在の形の石碑がある³²。

本を売却し、土地と屋敷を譲渡し、墓碑についての案もほぼ確定し、いよいよ水俣へ帰還する日が近づいてきました。十一月一六日のことでした、熱心に新聞を読んでいた憲三が、

「突然、道子さんがかわいそうだとおっしゃる。時々先生の顔はキリストのようにみえる時がある。人間は全部カワイソウですね、と申し上げる」³³。

二日後の一八日から、道子の「森の家」を離れる準備がはじまりました。二三日、離京前日。「道子獅子奮迅の働き、おそうじ。彼女の書斎、便所、階段、茶の間。それから下着洗濯。……形見のお写真いただく。裏にはなむけの毛筆の（前代未聞とのこと）お言葉。胸せまる。明朝、お見送り辞退申し上げます。特別晚餐、食前酒、散らし寿司（マグロ、シイタケ、金糸卵、人参、生姜）お吸物（春菊、卵、チリメンジャコ）」³⁴。

そして、当日の二四日を迎えました。

先生御玄関からお見送り、（その前お茶を——おしまいのお茶——立てて下さる、八時）ていねいにおじぎをする。落葉の道を歩き出す。玄関をしめる音。立ち止まる、二階に上がっていらっしゃる音、やがて窓にお顔が出る。……振り返る。神秘的な青い空。
……

音のない時間がどっと私のめぐりを流れ出す。さよなら、森の家よ。寂滅（□□）の言葉はゆうべたしかめあった。先生さようなら。角を曲がる。……八重洲口へ。……霧島乗りこみ、十二時³⁵。

帰水後、道子が「橋本静子さんをたずねる」³⁶のは、十一月三〇日のことでした。この間の出来事を静子に報告したものとされます。「静子さんの全身に漂う詩情。彼女の目美し」³⁷。そして翌日、道子は「憲三氏に手紙書き。速達で出す」³⁸のでした。

堀場清子の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』に断片的に記載されている憲三の「共用日記」に目を向けると、その後の足取りは、おおよそ次のようになります。

一二月二日、引っ越し作業の手伝いのため、静子、水俣を出発。翌日の「11時—12時のあいだに静子来」。次の日の「早朝から荷まとめの作業に従事」、七日に「通運から荷物の下見に加藤雄宏さん」が来て、打ち合わせ。翌八日、「荷積みを加藤さんにたのみおき、2時50分この家を捨てる。はやぶさ（特急）に乗る」。一夜が明け、「瀬戸内海が見えてきたころ」に食堂車へ行き、そこで朝食、そして「14時53分水俣着」³⁹。かくして一九六六（昭和四一）年一二月九日、六九歳の憲三は、すべての作業を終え、肥後火の国の南西部に位置する水俣の地に帰還したのでした。

思い起こすと、最初に逸枝が出京したのは一九二〇（大正九）年で、その後、その地で逸枝と憲三の結婚生活がはじまります。二年前にすでに逸枝は亡くなり、ふたりで生活をともにした思い出の「森の家」も、いまや憲三の手で閉じられました。一方で、憲三が編纂した『高群逸枝全集』（全一〇巻）の配本が続いています。憲三は、実の姉妹が住む家に寄寓します。この土地には、ひと足先に帰郷した道子もいます。こうしたなかであって、憲三の新しい生活の幕が開くのでした。

注

（1）石牟礼道子「最後の人 2 序章 森の家日記（二）」『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、5頁。

- (2) 同「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、9頁。
- (3) 同「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、同頁。
- (4) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会(編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第15号、1977年春季号、55頁。
- (5) 前掲「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、9頁。
- (6) 同「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、10頁。
- (7) 石牟礼道子「最後の人 3 序章 森の家日記(三)」『高群逸枝雑誌』第3号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年4月1日、27頁。
- (8) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会(編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第14号、1977年冬季号、12頁。
- (9) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、463頁。
- (10) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、8頁。
- (11) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、10頁。
- (12) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、11頁。
- (13) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、298、301、307、312、317、318、320、321、322頁。
- (14) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、290、294、305頁。
- (15) 石牟礼道子「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第73号、2018年5月、35頁。
- (16) 同「母のことそして父のこと」『魂うつれ』、36頁。
- (17) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、283頁。
- (18) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (19) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」、53-54頁。
- (20) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」、54頁。
- (21) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」、54-55頁。
- (22) 石牟礼道子「最後の人 第八回 序章 森の家日記8」『高群逸枝雑誌』第14号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1972年1月1日、35頁。
- (23) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、327頁。
- (24) 高群逸枝『變愛論』沙羅書房、1948年、9頁。
- (25) 前掲「最後の人 2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、5頁。
- (26) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、271頁。
- (27) 石牟礼道子「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」『高群逸枝雑誌』第18号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1973年1月1日、24頁。
- (28) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、290頁。
- (29) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、313頁。
- (30) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (31) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、315頁。
- (32) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、12-13頁。
- (33) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、318頁。
- (34) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、325-326頁。

著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで
第二部 橋本憲三の住む「森の家」へ駆け込む
第五章 二度目の滞在で憲三と「寂滅」を確かめ合う

- (35) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、327 頁。
- (36) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、328 頁。
- (37) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (28) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、329 頁。
- (39) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009 年、155 頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第三部

「最後の人」の執筆と水俣病闘争への参加

第六章 『高群逸枝雑誌』の創刊と「最後の人」の連載

一九六六（昭和四一）年の十一月二四日、ひと足先に道子は、「森の家」をあとにして水俣に帰りました。しかし、そこでの生活が懐かしく思い出され、憲三に手紙を書きます。以下はその一節です。日付は一二月二〇日。「森の家」の処分がすべて終わり、すでに憲三も水俣に帰っていました。

お話がしたいと思います。お話に飢えています。……わたくしはよく逃げ出していました。トンコたちのように。

おもえばまるでわたくしはあの鶏たちとよく似ていました。……結構お二人にいたわられて、愛されさえして、（実際それは本当でしたから）うつくしくしあわせに暮らせていただきました。まるで窓から飛びこむように、彼女の書斎にもお茶の間にも寝室にさえ飛び込んでいたのですから¹。

この文にみられる「愛されさえして」「寝室にさえ飛び込んでいた」といった字句に注目するならば、道子は単なるひとりの食客として過ごしたのではなく、この言葉は、明らかに「森の家」での同居中、憲三と道子のあいだに性的関係があったことを示唆します。そしてまた、この手紙文が、「寂滅（□□）の言葉はゆうべたしかめあった」という文言に隠された具体的な事実内容を示しているのかもしれません。

水俣に帰ると、年が明けた一九六七（昭和四二）年の一月、『高群逸枝全集』の第六巻「日本婚姻史／恋愛論」が出版され、翌二月、最終配本となる第七巻の「評論集・恋愛創生」が世に出ます。この「評論集・恋愛創生」の巻末にあります「解題／編者」において、憲三は、こう書きました。

あとにして思えば、死の当日、彼女はおそらく眼前の死の自覚なくて、はしなくも後事を私に託する発言をした。彼女を失っていまは廃屋と化した二階の一室、彼女が三十余年前に机上ただ一冊「古事記伝」を置き、「女性史学事始」をなしたその一室に、私はひとり老残を横たえて、未完のままのこされた彼女の自伝「火の国の女の日記」の整理にしたがい、その刊行について理論社社長小宮山量平氏の然諾および前述のように全集発行の申し入れを受けるにいたる。かくて「火の国の女の日記」は一九六五年六月に刊行、その書をも含む「高群逸枝全集」は一九六六年二月第一回刊行、同六七年二月最終回刊行をみる。彼女に負う私の義務もここに終わるのである²。

この文を含む「解題／編者」の末尾には、「遺影のもとで一九六七年一月一日橋本憲三しるす」とあります。この日、おそらく憲三の胸は、万感の思いで満たされていたにちがいません。

この「解題／編者」を書き終わると、憲三の関心は、逸枝の墓廟の建立に向かいます。逸枝の生地は、現在の宇城市松橋町で、そこには弟の清人が住んでいました。また、憲三自身も、水俣市の出身ではなく、必ずしも、なじみの土地というわけではありませんでした。そ

こで憲三は、墓をどこに建てるか、少し迷ったようです。

建墓の場所について、第一に私の頭に浮かんできたのは、弘川の彼女の両親の墓側だった。……高群家の当主清人氏にこのことをつけてその意向をただしたところ、たぶん自分を最後として弘川には後継者がなくなるだろうし、またここはあまりに遠い。……むしろ帰住の地をすすめたいということだった。けっきょく、水俣になったのだった。

正直に言えば、私は水俣をついのすみかとは考えていないらしい。心はいつも世田谷の森の家から彼女が死んだ病院のあの一七号室にはせている。……ただ、骨だけは故山に埋めねばならない。故山は東京よりも彼女が愛したから。

墓所はぜひ私の居室からながめられるところをとのぞんだ。幸いにこののぞみはきかれて……秋葉山の小丘に九九坪の土地を恵まれた。

……眼下段々畑のつきるところに市役所と図書館と第一小学校が麓と川の間に別天地をなし、全市街とそれを囲む山々と、海と、天草島を一望におさめる。もちろん私の小さな家もみられる。私の家から歩いて一五分の地点³。

墓廟の形状は、「幅および奥行き各三・八メートル、高さ二・三メートル」⁴の石積みで、製作は、大塚石材に発注されていました。一月二〇日の「共用日記」には、「大塚さん——昨々日から山口に石を注文に出かけ今朝帰ってきたと。雪のため、山元では三月ははじめごろ出荷のみこみと、……明後日から墓所の整地はじめを依頼」⁵と、あります。そして、五月二二日、墓廟は完成し、逸枝の霊骨を入れる段取りが整いました。

タぐれ時、お骨を骨座にいれる。その他に、全集と愛用の万年筆。憲平の土。愛鶏たちのお骨。白ばら。静子と二人で。故人も安心しなはったろう。自分の家に入って。と病床の姉がいう⁶。

こうして六月七日の逸枝没後三年目の命日を前にして、無事納骨が終わりました。

墓廟の正面左手には、彫刻家の朝倉響子に依頼した、「高さ八五センチ、幅七〇センチ」⁷の逸枝の等身大胸像のレリーフがはめ込まれることになっていました。完成したレリーフが到着したのは、翌年（一九六八年）の八月一日でした。次は八月九日の「共用日記」からの引用です。「6時起床。静子をたのみレリーフを山下まで運ぶ。8時まえ上山、献花。大塚さんすでにあり、レリーフも上げあり。8時仕事はじめ」⁸。続く翌日、「8時上山、献花と昼べんとう。午後3時施工終了。下山」⁹。そして、次の一日に、「午前清掃。ひとりで除幕式」¹⁰を執り行ないました。こうして旧盆に間に合ったことに、憲三はきっと安堵したことでしょう。

全集の完結、墓廟の建造に続く、三番目の憲三の大きな仕事は、『高群逸枝雑誌』の刊行でした。憲三は、この季刊誌に、逸枝に関する若手研究者の最新の成果や新たに発掘された関連資料などを掲載することにより、日本における女性史学の樹立者である妻の業績を顕彰しようと考えたのです。一九六八（昭和四三）年九月三日の「共用日記」には、「Mさん 10時ごろ。高群雑誌の原稿『最後の人1』持参」¹¹と記されています。「Mさん」が道子であることは、いうまでもありません。道子は、こう書きます。

そのお仕事は氏の晩年の日々の、せめてもの慰めであった。『高群逸枝雑誌』はそのような意図を秘めて出され始めた。同人は先生と弟子の私のふたりであった¹²。

そしてまた、道子は憲三を、このように見ていました。

彼女は神だ、とおっしゃる橋本憲三という人の生涯。（憲三氏を）いまだ書かれざる男性論としてみる場合、この人の懺悔僧あるいは布教者、いや彼女への帰依ぶりは徹底している。逸枝の下僕という言葉がいちばんぴたりする。いまだ描かれざる宗教画が私の中に組立てられる。彼女は神だ、といい、まさに神を仰ぎみている男性の顔は苦悶の極でもあり、神に近い¹³。

一〇月一日、『高群逸枝雑誌』の第一号が発刊されました。この号の誌面は、橋本憲三「『火の国の女の日記』の後」、高群逸枝「《拾遺》額田王」、石牟礼道子「最後の人1 序章 森の家日記（一）」、加えて「たより」欄から構成されました。「たより」には、四箇月前の六月七日の逸枝の命日に平塚らいてうから届いていた電文も転載されています。「本日、逸枝さんの五回忌をおむかえして、ご冥福のますますゆたかならんことを心からお祈りいたします。合掌」¹⁴。らいてうと逸枝夫妻との変わらぬ友情を、ここからも読み取ることができます。

他紙に先駆け、地元の『熊本日日新聞』が、一九六八（昭和四三）年一〇月四日、『高群逸枝雑誌』が創刊されたことを伝えました。とりわけ道子の「最後の人」に、関心が向けられています。以下は、「高群逸枝雑誌の創刊」（八面）という見出し語をもつ囲み記事のなかの一節です。

「最後の人」は長編評伝の第一回。「序章 森の家日記（一）」で、一九六六年夏、逸枝なきあと東京・世田谷の森の家が取りこわされる前に一度見ておきたいと上京した石牟礼氏が、残務整理もすませていよいよ、憲三氏とともに森の家をあとにするところから始まる。憲三氏は「瞑目したまま軽く呟くように、『逸っぺごろ、また水俣にゆきますよ』と熊本なまりでそういわれた」——それは逸枝自身が帰省のために森を出た昭和十五年八月の朝へと連想をさそい、さらに連想はさかのぼって招婿婚の研究当時の逸枝の日常へと連なったりする。逸枝の日記、憲三氏の談話ノートなどを随所に混じえながら、ある時は伝記風に、ある時は日記風に、書き進めていく。逸枝と著者との自由な対話といった趣のすべり出しである。

そして続けて、以下のように、今後の成果に期待を寄せるのでした。

雑誌は季刊の建て前をとり、研究論文、エッセー、評伝、創作など表現形式は自由、同人以外の寄稿も歓迎する。特定の学者一個人の研究を目的とする雑誌が、しかも地方で定期的に発行されるという例はきわめてまれであるが、この雑誌が息長く刊行され、成果をあげていくことを期待したい。

この創刊号の裏表紙の見返しには、『高群逸枝全集』を推薦する「高群全集に思う」と題された道子の文が掲載されています。そのなかで、憲三に言及した箇所を、次に引用します。

このような大事業をなして彼女が現世に得たものは名声にあらず富にあらず地位にあらずむしろその逆のものであったが、この事業の生涯の協力者であった夫憲三の至純の愛ひとつを抱きえた事は涙あふるる思いがする¹⁵。

こうして『高群逸枝雑誌』は、高群女性史学にとっての継続的な砦となることを目指して、水俣という小さな地方都市から産声を上げました。

年が明けて一九六九（昭和四四）年一月一日、『高群逸枝雑誌』の第二号が発行されました。この号には、道子の「最後の人 2 序章 森の家日記（二）」と並んで、息子の石牟礼道生の「母への手紙」も掲載されました。大学生になっていた道生が、この時期、母親をどのように見ていたのか、その一端が、この文の末尾の詩片に現われていますので、その箇所を引用します。

なにもかも
あなたがしっているところのものは
すべて超越して
そんなことをさりげなく話すあなた
そしてときには
まだなんにも知らない
幼い少女の澄みきった心のように
でも恥じらいながら知ろうとして
またためらう娘のように¹⁶。

続く一九六九（昭和四四）年四月一日発刊の『高群逸枝雑誌』第三号の「たより」の欄には、らいてうからの手紙が掲載されています。前年の一二月三〇日に書かれたその手紙には、このようなことが記されていました。

いよいよ年も暮れようとしております、心ならずもご無沙汰申し上げましたが、あなた様のお心づくしで高群逸枝研究の雑誌が出ますことを心からうれしくおよろこびいたします。……

お立派なお墓が出来上がりましたことを知りうれしくおもいます。

この夏頃でしたが、やっとの思いで、お住いの跡——桜児童遊園を訪れました。……あの告別式の日の森のお家の印象はどこにも見出せません。

……お二方さまのお住いの跡であることも、あのコウカンな女性史をおかきになったところであることも何一つの表示もないのを、また近所の人たちも全く何も知らないのをついへんさびしく感じました¹⁷。

おそらくこのとき、「高群逸枝記念碑」のようなものをこの公園に建立する思いが、らいてうの頭をよぎったようです。しかし、「その後私の健康がすぐれない日のみ多く病院のご厄介になったりしておりまして心ならずも年末を迎えてしまいました。この冬を何とか無事に乗り越えまして、春とともに元気を出したく念じております」¹⁸。そして、この手紙は、「お妹さまにも、今ちょっとお名前が浮びませんが御地の高群さん研究家のあのご婦人にもよろしくお伝え下さいませ」¹⁹という言葉でもって結ばれています。「お妹さま」が静子で、「あのご婦人」が道子であることは、明らかなです。少なくとも逸枝の「森の家」での葬儀の際に、静子とらいてうは顔をあわせていますし、道子は、「森の家」滞在中に憲三に連れられて、らいてう宅を訪れています。

らいてうの体調がすぐれないなかにあっても、「高群逸枝記念碑」の建立の準備は進められてゆき、逸枝の没後五周年に当たる一九六九（昭和四四）年六月七日に、「高群逸枝記念碑」の除幕式が挙行されました。式典では、建碑世話人として一五名の名前が読み上げられました。そのなかには、平塚らいてうや渋谷定輔に加えて、熊本出身の俳人である中村汀女の名前もありました。健康がすぐれず上京できなかった憲三に代わって、渋谷が遺族の挨拶文を読み上げました。碑の表には、逸枝自筆の詩章が刻印され、裏には、渋谷が原案を起草した、次のような由来記がはめ込まれています。

高群逸枝住居跡の碑

歴史学者詩人高群逸枝は深く武蔵野の森を愛し出世作「日月の上に」は一九二〇年この森の中で書かれました。そして一九三一年研究所を設け定住し女性史の研究に献身して先駆的な不滅の業績をうちたて。一九六四年六月七日ここに偉大な生涯を終えられました。

一九六九年春²⁰

この除幕式については、「高群逸枝さんの記念碑 東京の旧居跡に完成」という見出しで、六月九日の『熊日』（三面）において取り上げられました。以下は、その一節です。

碑は「萬成」といわれる明るい茶色の自然石で、表面に「時のかそけさ春ゆくときの
そのとき [時] の時のか [ひ] そけさ花ちるときのその時の」と高群さんの詩が刻まれている。橋本さんは病身のため除幕式に出席できず、手紙を送って「ありし日のかたみをとどめられることは故人の光栄はもとより、唯一人の家族である私にとっても感激です」と喜びの言葉を送ってきた。

こうして、逸枝と憲三が自宅兼仕事場として住まい、そしてまた、憲三の引導により、産所となって道子が蘇生した「森の家」——世田谷区に売却後、こうして子どもたちが遊ぶ公園になり、いまや、その片隅に建造された晴れの「記念碑」に、本人たちのみが知る幾多の物語と情感とが密かに刻まれることになったのでした。

- (1) 石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』葦書房、1974年、219頁。
- (2) 『高群逸枝全集』第七巻／評論集・恋愛創生、理論社、1971年（第3刷）、374頁。
- (3) 橋本憲三「『火の国の女の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、5頁。
- (4) 同「『火の国の女の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、7頁。
- (5) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、156頁。
- (6) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (7) 前掲「『火の国の女の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、7頁。
- (8) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、159頁。
- (9) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (10) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (11) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (12) 石牟礼道子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、101頁。
- (13) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、317頁。
- (14) 「たより」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、32頁。
- (15) 石牟礼道子「高群全集に思う」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、裏表紙見返し（ノンブルなし）。
- (16) 石牟礼道子「母への手紙」『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、23頁。
- (17) 「たより」『高群逸枝雑誌』第3号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年4月1日、28頁。
- (18) 同「たより」『高群逸枝雑誌』第3号、同頁。
- (19) 同「たより」『高群逸枝雑誌』第3号、同頁。
- (20) 渋谷定輔「高群逸枝記念碑除幕式の経過」『高群逸枝雑誌』第5号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年10月1日、6頁。

第七章 『苦海浄土』の上梓から水俣病闘争へ

「高群逸枝記念碑」の除幕式からさかのぼる半年前の一九六九（昭和四四）年一月二八日、道子の出世作となる『苦海浄土 わが水俣病』が講談社から刊行されました。道子は、その「あとがき」に、こう書きました。

ここにして、補償交渉のゼロ地点にとじこめられ、市民たちの形なき迫害と無視のなかで、死につつある患者たちの吐く言葉となるのである。

「銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう。……上から順々に、四十二人死んでももらおう。奥さんがたにも飲んでもらおう。胎児性の生まれるように。そのあと順々に六十九人、水俣病になってもらおう。あと百人ぐらい潜在患者になってもらおう。それでよか」

もはやそれは、死霊であり、生霊たちの言葉というべきである¹。

死をもって死をあがなうことを望む、この「死霊であり、生霊たちの言葉」は、膠着状態にあった水俣病患者の補償問題を巡る、まさしく宣戦布告となるものでした。四月、水俣病患者家庭互助会は一任派と訴訟派に分裂します。一任派とは、厚生省（現在の厚生労働省）が誘導する、第三者機関による裁定に「白紙委任」をもって身をゆだねようとする人たちを指します。しかしこれでは、原因企業であるチッソ株式会社（一九六五年に新日本窒素肥料株式会社からチッソ株式会社に社名変更）の責任を白日のもとに晒すことはできません。一方、訴訟派は、法廷の場において責任の所在を明確にしたうえで、前例なり法的規範なりのなかにあって賠償を勝ち取ろうとしました。六月、水俣病患者および家族のうちの一一二人は、チッソ株式会社を相手取り、損害賠償請求訴訟を熊本地方裁判所に起こします。いわゆる「第一次訴訟」と呼ばれるものです。

そうしたなか、熊本日日新聞社は、『苦海浄土 わが水俣病』に対して熊日文学賞を道子に授与します。しかし道子は、これを辞退します。一二月一四日の『熊日』の一五面を開くと、「『水俣病』にかかわること 熊日文学賞の辞退について」という見出しの道子の寄稿文が目に入ります。読んで、辞退についての具体的な理由は何も書かれてありません。「水俣病市民会議員」という所属名のもと、書き手としてのいまの心境が幾分詩的に綴られているのみです。以下は、この文の末尾の一節です。

ものを書くなどということは、本来処世の道とは外れ、度しがたい世界にかかわることだと、私にはおもえる。まして、余生を生きている命でもって水俣病にかかわり、ひとたびは死んだ祖たちやはらからたちを生む、産親にならねばなどと、こいねがうなどとは。

なんと、夜とも昼とも、おどろおどろして定めがたい心象風景の中をのみ、さすらっていることであろう。

つつしんで熊日文学賞をご辞退申上げるゆえんである。

本人が書くように、道子は、「余生を生きている命」のなかにありました。これは、「森の家」で蘇生した、わずかながらのいのちの鼓動にほかなりません。いつ潰え去るかわかりません。逆に、もはや一刻も早く潰えたいという思いもないわけではありません。そのなかにあって道子は、「ひとたびは死んだ祖たちやはらからたちを生む、産親にならねばなどと、こいねがう」のでした。

「森の家」で自らの魂が復活するとき、そのときの「産親」が高群逸枝、その人でした。そうであるならば、逸枝の代わりとなって今度は自分が、物言わぬままに死んでいった水俣病患者たちの、貶められ、卑しめられ、辱められた魂を蘇生させる「産親」にならねばならぬ——、こう道子は、しかとこころに誓うのでした。死霊の魂救済へと向かう強固な原理的精神が、ここにありました。これが、これよりのち大きく開花する石牟礼文学の基底をなす主旋律です。文学賞という華やかな俗世とは無縁の苦界にあって、道子はこのとき、やっとの思いでかすかな息をしていたのでした。

年が変わり、一九七〇（昭和四五）年が訪れました。一月二〇日の憲三の日記に、こう記されています。「Mさん、妙子さん（妹）、久木野日当野ゆき。居室の前の県道（旧国道）から窓べに立っている私をみて自動車をおりてあいさつ。きょうから山の家びらきとのこと」²。この日道子は、訪問者を謝絶して一日一〇時間、執筆に専心した逸枝の「森の家」に倣うかのように、白浜町（通称日当猿郷）にある自宅の書斎を出て、「山の家」に設けた仕事場へ移ったようです。憲三は次の日、この「山の家」を訪ねました。

私は翌朝家の前からバスに乗って久木野に向かい、竹下橋下車、近道をとって急坂を登っていった。……その戸をたたいた。たたきながら「しまった」と独語した。自分はいま明らかに不時の闖入者だ。これは世田谷の森の生活の鉄則を忘却した行為だ。私は深く恥じた³。

新しく設けられたこの「山の家」の仕事場で書かれた可能性もある、「亡命」と題された短文を、道子は『熊日』に寄稿します。次は、四月二九日の六面に掲載されたその文の書き出しの部分です。

故あって、この春は逃亡行の春だった。

合間に「水俣病に対する企業の責任——チッソの不法行為」というむずかしい論文を、学者さんたちと共同執筆するための研究会や、「水俣病を告発する会」の例会や、「高群逸枝雑誌」の二人会議に出没していたから、シッポを出して歩く狸のようなものである。

『熊日』に「亡命」が掲載された翌月の五月二〇日、道子は、憲三に手紙を書きます。緊迫した様子が、そこには綴られていました。このときの道子の心情がよく表われています。長くなりますが、断片的に以下に、引用します。

体力も気力も限界にきています。……毎晩徹夜で人の相手をしたり手紙をかいたり。水俣病がひとつの極点にきているので、もう私も、自分では手のつけられないモノに化

身してしまって……母がねむらない私をオロオロしてみにきます。……

急速に歯車がまわり出し、すべての小状況、大状況に対して、無限の違和感を重くひきずっていますが（人間関係、）、自分の感懐を点検するゆとりはいま皆無です。……

無名の人々の魂魄に立ちあうには、自分も一無名者にならねばならぬとだけおもいます。私にいま出来るのは皆さんの雑用だけです。……

ご遺言状のことで（裁判のきめ手）、また、東京基地をつくるため仲間と出京します。二十五日ごろ「補償処理委員会」の結論が出されるでしょう。

……どうかおねがいですから、逸枝雑誌は、村上さんと河野さんのお原稿でお出し下さるようおねがいたします。（この度は、）東京に行ったら、どのようになるか判断つきかね、期限のお約束、安易にできませんのです。あるいは、告発の会の巻きぞえでタイホ、などありえますのです。……

……森の家のまぼろしをみながら、出発いたします。……⁴

この手紙を書き終えた道子は、前年に渡辺京二が呼びかけて熊本市内に発足していた「水俣病を告発する会」のメンバーや水俣病の患者らとともに、厚生省の補償処理委員会の会場へ乗り込むために、逮捕されることを覚悟のうえで、東京に向かいました。道子は、その「処理」の様子を、こう書きます。

昭和四五年五月末〈水俣病補償処理委員会〉（座長・千種達夫）は、厚生省に患者代表とチッソ首脳を呼び、死者最高四百万円（実質は三百万前後）で、公式に認定されている患者たちの大半を、文字どおり、〈処理〉し去った⁵。

道子の上京により、創刊号（一九六八年一〇月）に第一回を掲載して以来、休むことなく連載されてきていた「最後の人」が、第七号（一九七〇年四月）掲載の第七回を最後に途切れます。第八号（一九七〇年七月）は、村上信彦の「高群逸枝と柳田国男 5」と河野信子の「現代の喪失『女性の歴史』覚書 2」で構成され、加えて、道子の穴を埋めるかのように、憲三の「題未定——わが終末記」の第一回が登場するのです。

東京から帰ると、ただちに道子は、憲三を訪ねたものと思われます。七月五日の憲三の「共用日記」には、次のようなことが書き込まれています。

10時—12時 Mさんと話す。非常な仕合せであった。高群雑誌についてある了解。朝から原稿書き（さびしい風の日です）⁶。

「仕合せであった」理由も、「ある了解」についても、不明です。しかしこのとき、憲三の体調がさらに衰えを見せ、自死さえ考えていたことは確かですので、そのことと、何か関係があったのかもしれませんが。憲三は、道子が訪れる数日前に発刊された『高群逸枝雑誌』第八号に掲載された「題未定——わが終末記」のなかで、このようなことを書いています。「私は昨年の三月から感冒のため臥床がちとなり、そのうちかぜはとれたが全身の神経炎らしい極度の不快感を覚え、その日の天候によって心身の乱調が顕著に知覚されるようになった」⁷。そして、こうも告白するのです。

私はできるだけ長生きしたいと希望しているのではないのだ。売薬を利用したり病院にいったりするの、当面の“肉体的苦痛” からのがれたいためである。じつをいえば私はいつも死を欲しているのである。それもはっきりいえば自然死ではなくて自死なのだ。私一個にのこされた仕事があるから、つまり「まだ生きている」のだ⁸。

一方、らいてうの体調も芳しくなく、このような内容の手紙が、憲三のもとに届きました。「……まだ自伝もなかなか書き上がりませんが、老齢のため手術は出来ないものらしく、気長に治療をする覚悟をしております。〈渋谷区千駄ヶ谷 代々木病院より〉」⁹。それに対して憲三は、一二月一二日に、「平塚さんにおみまい状（代々木病院三階病棟）」¹⁰を書いています。そして、年が明けた一九七一（昭和四六）年五月二四日、らいてうはその人生に幕を閉じます。次は、二日後の二六日の「共用日記」からの引用です。

平塚らいてうさん逝去。24日午後10時36分。本日の朝日新聞で妹よりつたえられ驚く。故人の霊前に報告とともに霊位をまつり白いバラを捧げ冥福を祈る。／弔電のあと、弔文を敦史明生〔曙生〕さんあてに書き、香奠をおくる。山上¹¹。

続く、五月三〇日の「共用日記」には、「らいてうさん葬送の日。遙拝」¹²の文字が記されています。

思い起こせば、一九二六（大正一五）年の四月のある日、らいてうからの伝言を受け取って感動した逸枝は、近刊の『恋愛創生』を添えて、らいてうに一通の書簡を送りました。以下は、その一部です。

長い間今日を期待しておりました。あなたからのご伝言を承ることは私にとっては当然なことでございます。私はあなたを母胎として生まれてきたものでございまして、私ほどあなたのために、激昂したり、泣いたりしたものがございましょうか¹³。

逸枝はここに、「私はあなたを母胎として生まれてきたもの」と、はっきりと述べています。つまり、逸枝が自覚する自身の母親が、らいてう、その人なのです。娘の逸枝が世を去り、いまここに、母／妣であるらいてうも、隠れるのです。のちに道子が自覚する自身の妣君が逸枝であることを考えれば、三代にわたる妣の系譜に遺されたのは、もはや道子独りということになります。

この間、一九七〇（昭和四五）年四月一日刊行の『高群逸枝雑誌』第七号に掲載された「最後の人 第七回 序章 森の家日記7」を最後に、道子の「最後の人」の執筆が止まりました。次は、一九七一（昭和四六）年一〇月二七日の憲三の「共用日記」からの引用です。

午後 M さんみえる。一昨日東京から帰ったと。信州そばにゆく。／『苦海浄土』第二部のこと。／自叙伝のこと。その他。／高群評伝のために、これから定期的に私の聞書をテープにとること。談話——ニュース多岐にわたる。十五日までに高群雑誌原稿を書く¹⁴。

「十五日までに高群雑誌原稿を書く」というのは、翌年（一九七二年）一月一日発刊予定の『高群逸枝雑誌』第一四号に掲載する「最後の人 第八回 序章 森の家日記8」の原稿を「一二月一五日までに」書くという意味でしょう。これは、「最後の人」の執筆再開を意味します。しかし、「最後の人 第八回 序章 森の家日記8」を書き上げるや、再び、執筆が止まります。続く「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」が『高群逸枝雑誌』に登場するのは、一九七三（昭和四八）年一月一日刊行の第一八号です。この間道子は、再び水俣病闘争に身を投じることになるのです。

二度にわたる「最後の人」の休載と、道子にとっての水俣病闘争は、完全に時期的に重なります。一九六九年一月の『苦海浄土 わが水俣病』の刊行から一九七〇年五月の「補償処理委員会」の粉砕を目指しての上京までを第一幕としますと、第二幕は、新認定患者の川本輝夫らがチッソとの自主交渉闘争を開始する、この年（一九七一年）の一〇月から、水俣病裁判にかかわって熊本地裁で判決が下される一九七三（昭和四八）年三月までということになります。

人口約五万人の水俣で、およそその一割以上がチッソの従業員であったり関係者であったりする、いわゆる企業城下町にあって、事を荒立てることなく、政府の指示調停案を受け入れようとする一任派の存在もありました。その一方で、加害企業の責任を問い、被害者の救済と補償を、司法の判断にゆだねて希望をつなごうとする訴訟派の人たちもいました。しかし、また別のグループの動きもありました。すでに亡くなった人たちや、いま生きて死者のごとき存在にある人たちは、自分の口で自分の苦しみや悲しみを訴えることはできません。もとより法廷はこうした吐血した魂魄の表現の場ではなく、たとえ裁判において勝訴したとしても、この無念さは、誰の胸に伝わることもなく、血と地に埋もれて残ることになります。そのころを代弁して、責任企業であるチッソの経営者に直接訴えかけ、誠意ある謝罪と補償を引き出そうとする活動家やそれを支援する義人はいないのか——。さらには、死者の霊を慰めるために文を書く文学者や、映画や写真でもってそれを表現する映像作家はいないのか——。加えて、この病は、単に一企業の犯罪的行為がもたらした結果というだけに止まらず、日本の近代化の過程に忌まわしくも宿る、生産至上主義や利益至上主義の副産物でもあり、それを問おうとする批評家や学者はいないのか——。水俣病の病理は深く、こうした設問に対しての納得ゆく解答がない限り、この事件に幕を引くことはできない——。一方の裁判闘争に期待を寄せながらも、他方で、こうした独自の考えのもとに、ある種衝動的に、そして衝撃的に立ち上がったのが、自主交渉闘争に参加した患者や文化人たちであり、そして、多くのその支援者たちでした。道子の姿も、この集団のなかにありました。

一九七一（昭和四六）年一〇月六日、熊本県は、川本輝夫ら一六名を水俣病患者に認定します。一二月一日、「いよいよ新認定患者（以後川本派、ないし、自主交渉派とよばれる）グループ一八世帯、チッソ水俣工場正門前（鹿児島本線水俣駅前）座り込み」¹⁵。しかし、当事者能力のない工場を相手では真の交渉とはなりえず、一二月六日、自主交渉派は、東京の丸の内にあるチッソ本社前に陣取りました。それより二日後の八日、社長との会談が実現します。直接社長に自分たちの要求を認めさせようとする自主交渉派と、政府の中央公害審議会の指示に従おうとする会社側とのあいだには、大きな立場の開きがありました。以下は、川本輝夫と社長が交わした、そのときの会話の一部です。

川本 ……わしゃ今日は、血書書こうとおもうて、カミソリもって来た。

社長 （息をひくようなかすかな声） え？

川本 血書を書く、血書を。要求書の血書を。

社長 ！……

川本 あんたはそして、わしの小指を切んなっせ、ほら。

社長 ……

川本 その返答はわしが……あんた、社長の指もわしが切る、いっしょに。

社長 いや、それはごかんべんを¹⁶。

日はとっくに暮れていました。十数時間に及ぶ話し合いも、患者側の要求は受け入れられず、社長は担架で運ばれる結末となりました。以降、年越しの座り込みが続きます。道子はそれを、こう描写します。

遠くところに昏れる雪景色をふり払い、わたくしは起きて、ふたたび路上に寝ているものたちの姿をまじまじとみる。

「こうなればもう、東京乞食じゃなあ」

なぜそのようにいうとき、こうもはればれと互いの顔がまぶしいのか。

……よろばいいでてここに辿りきたったものたちと、これに相寄り殉ずる無名者たちの集団。……そのような景色の上に照る一九七一年大晦日から一九七二年への、まだ明けやらぬ元旦東都の月。

丸の内東京ビル、チッソ本社前。……あまねく全身をうち晒してその底にねむるものたちが、こころの中の渚に打ちあがり、ひくひくと地の霊のごときものに化身しようとして、元旦の満月とまみえていた¹⁷。

こうして川本派による自主交渉闘争は、次の一九七二（昭和四七）年へと持ち越されてゆきました。そうしたなか、道子の視力低下は、限界にまで達していたようです。この年の六月二二日の「共用日記」には、「石牟礼さんから手術直前のたより。15日。あと2年生きるために手術と（順天堂病院眼科）」¹⁸と、書かれてあります。道子の祖母の「おもかさま」も失明していました。道子も、そうなる不安を抱き、手術に臨んだものと思われます。おそらく手術はうまくゆき、何とかそれ以上の進行を食い止めることができたにちがいありません。それから四箇月の月日が流れ、今度は水俣病の闘いにとっての、大きな朗報がもたらされました。一〇月一五日の『熊日』の朝刊は、一面トップで、こう伝えたのでした。

四大公害訴訟をしめくくる水俣病裁判は十四日結審、来年三月に予定されている判決を待つばかりとなった。公害の恐ろしさと悲惨さを法廷で思い切り訴え、チッソへの恨みをぶっつけた原告の患者家族、全国の支援団体の人たちは「これからが公害追放の真の闘いだ」と決意を新たにしている。患者たちは近く東京のチッソ本社に出向き、「即刻、原告の要求に応ぜよ」と迫る一方、水俣病裁判の報告キャラバンやチッ

ソ糾弾の署名運動を全国的に展開する。判決での完全勝訴を目ざすのはもちろん、公害の原点だった“ミナマタ”を、公害絶滅の原点にしようという決意も高まった。

この日の紙面の九面に目を移しますと、道子の寄稿文「魚に曳かれて」が掲載されています。そのなかで道子は、末尾の一節を、このように締めくくりました。

窓の外に秋がかなしくて頭の芯がうずいた。ずうっと前に、この夫婦とこんな話をした。

「なして、水俣の茂道あたりにおいでなりました？」

「わしゃ熊本近辺の人間で料理屋しょったけん、水俣の魚がおいしゅうして、水俣の魚に曳かれて、魚食いにな」

爺さまがそういうと、婆さまがにこにこつとさしうつむき、ちいさな声でこう言ったのだ。

「なんの、わたしが昔、あんまりよかおなごだったけん、わたしにひかれて来なはったとばい」

次の年（一九七三年）の三月、熊本地裁で水俣病訴訟（第一次訴訟）に判決が下り、原告が勝訴します。その後、訴訟派と自主交渉派は合流し「水俣病東京交渉団」を結成すると、東京本社でチッソとの交渉を開始し、七月、「補償協定書」に調印するに至り、この時期激化した水俣病闘争が、事実上の終焉を迎えました。こうして、道子にとっての水俣病闘争第二幕も、ここにその幕を降ろすのでした。次の一節は、道子の「まだ灯らぬ闇の中から」から引いたものです。

水俣病裁判の判決が出たあとの訴訟派と、それを待機していたチッソ本社内の自主交渉派が合同して行った東京チッソ本社での交渉が、最後のつめにはいったときからわたしは帰郷し、ほとんど外に出なくなった。

高群逸枝さんの故事にならい、積極的な意思で外部を遮断し、残された仕事を仕上げるためでもある。予定の仕事と残りの命をくらべると、人いちばいスローモーションの私は、世間との義理もおつきあいもひたすらごじたいして、だれにも逢わずにとじこもってしまっても、仕事を残したまんま、死んでしまうことになる¹⁹。

このときの道子は、おそらく、「世間との義理もおつきあいもひたすらごじたいして」執筆に専念した結果でしょうか、実に多産な仕事ぶりを発揮します。闘争資金の捻出のために企画された、道子を編著者とする『水俣病闘争 わが死民』（現代評論社、一九七二年四月）に続いてこの時期、闘争にかかわる初出原稿を集成した『流民の都』（大和書房、一九七三年三月）、『苦海浄土』の第三部となる『天の魚』（筑摩書房、一九七四年一〇月）、さらに加えて、自身の過酷な出自と育ちを語った論集である『潮の日録 石牟礼道子初期散文』（葦書房、一九七四年一二月）を上梓するのです。

またこのとき、道子は、雑誌の刊行にも乗り出します。一九七三（昭和四八）年の秋、水俣病闘争の同志であった松浦豊俊と渡辺京二とともに編集兼発行人となって季刊誌『暗

河』を創刊するのです。この号の「編集後記」に、このような道子の言葉があります。

＊このような異常世界が、日常と化してしまつては、わたくしたちがついこのあいだまで、たしかに持っていた筈の、あの当たり前の「日常」というものの原型はもう、見る事が出来なくなるのかもしれない。……お月さまの光の下、山野の吐く息づかいのような雑誌になれば、と思っています²⁰。

また、渡辺京二は、こう書き記します。

創刊号の執筆者は石牟礼・赤崎・石本の三氏が水俣市、三原氏が福岡市に在住する以外はみな熊本市の住人である。……私は七年前に「熊本風土記」という雑誌を出して十二号にして休刊にいたらしめた前科者である。……ただ私は、「風土記」の中心的な書き手であった石牟礼・松浦・上村の各兄弟の力作が「暗河」創刊号の誌面の中心となっていることに、やや心なぐさめられる思いがする²¹。

かくして道子は、水俣病訴訟の判決言い渡しを境として、一九七三（昭和四八）年以降、新たな文筆活動の道へと入ってゆくのでした。

それでは、この時期の道子の暮らしと仕事のありようは、どのようなものだったのでしょうか。道子は、このように書いています。

いま自分の家と、秘密の仕事場の間を往き来するばかり、活字だけでわずかにこの世への片道通信を発しているわたしのことを、家のものたちは、半ばあわれがり、

「おるげのもぐら殿」

とか、「もぐら女」などという。じっさい、おてんとうさまに当たると、光やかな風がまぶしすぎて、水晶体のないまなこがくらみ、心臓がいかれてしまい、掘り出されたオケラのようなあんばいである²²。

それでは、仕事の方は、どうでしょうか。

もっとくだいていえば、この世に不幸福感を持っている魂の歴史を自分のものにして、自分もそのなかにいま生きている意味を、納得したい、というのが、そろそろ、ものを書き出した十代の頃からの気持ちだった²³。

この初心が、一九七三（昭和四八）年に、一気に開花してゆきます。この年、「椿の海の記」の第一回を『文芸展望』の創刊号に、そして「西南役伝説」の第一回を『暗河』の創刊号に発表し、連載がはじまるのです。両作品ともに、「この世に不幸福感を持っている魂の歴史」を叙述するもので、前者は自分自身の、後者は下層の人びとの魂を扱っていました。そしてこのとき、もうひとつ、道子の胸を占めている、強い思いがありました。

水俣病問題にかかわっていて、おくれた主要なテーマはいまひとつあり、それは、

わが国だけでなく、世界のなかでも今までかえりみられなかった「女性の歴史」をはじめて書いた詩人高群逸枝の評伝を書きたいことである。……

彼女へのわたしの関心は、その業績にふれるには、あまりに無学、晩学で、これから勉強しなければならないけれど、水俣病にかかわっているうち、最初の予定にはなかった左眼の失明や、残りの視力もおぼつかないので、それには触れられそうもない。それより彼女の仕事に一貫しているこの世への愛や、その裏にある深い孤独や、詩人の魂ともいべきものに、近づきたいと思っている。とはいえ、私の視力は時間の問題なので……本当は書ける日があるのかどうかおぼつかない^{2 4}。

「本当は書ける日があるのかどうかおぼつかない」と語る道子でしたが、「この世への愛や、その裏にある深い孤独や、詩人の魂ともいべきものに、近づきたい」という思いが、道子の背中を強く押したのでしょうか、途絶えていた「最後の人」の執筆再開がここにはじまります。一九七三（昭和四八）年一月一日刊行の『高群逸枝雑誌』の第一八号に「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」が登場し、ちょうど一年後の第二二号に「最後の人 第十回 第一章 残像1」が掲載されると、それ以降、「『恋愛論』解説 高群逸枝のまなざし」を掲載した第三〇号を除いて、憲三が亡くなる年（一九七六年）に発刊される第三一号の「最後の人 第十八回 第四章 川霧1」まで、休むことなく連載は続いてゆくことになるのです。事実上、これで『高群逸枝雑誌』は廃刊となります。

この間道子は、自身の「最後の人」である憲三の苦悩に寄り添っていました。その情景については、次の第四部「最晩年の憲三に浴びせられる悪意と悪口の数々」を構成する三つの章のなかで描いてみることにします。

注

- (1) 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』講談社、1969年、289頁。
- (2) 橋本憲三「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、22頁。
- (3) 同「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、23頁。
- (4) 石牟礼道子からの手紙文。『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、13頁。
- (5) 石牟礼道子『天の魚』筑摩書房、1974年、205頁。
- (6) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、165-166頁。
- (7) 前掲「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、21頁。
- (8) 同「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、24頁。
- (9) 「たより」『高群逸枝雑誌』第11号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1971年4月1日、30頁。
- (10) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、167頁。
- (11) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、170頁。
- (12) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (13) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1971年（第3刷）、233

頁。

(14) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、171 頁。

(15) 前掲『天の魚』、219-220 頁。

(16) 同『天の魚』、169-170 頁。

(17) 同『天の魚』、6-7 頁。

(18) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、175 頁。

(19) 『石牟礼道子全集・不知火』第六卷／常世の樹・あやはべるの島へほか、藤原書店、2006 年、539 頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『西日本新聞』（1974 年 4 月 6 日）に掲載された「まだ灯らぬ闇の中から」のようですが、その日の紙面にはその形跡を確認することができませんでした。

(20) 『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、創刊号、1973 年秋季号、167 頁。

(21) 同『暗河』創刊号、168 頁。

(22) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』第六卷／常世の樹・あやはべるの島へほか、540 頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『西日本新聞』（1974 年 4 月 6 日）に掲載された「まだ灯らぬ闇の中から」のようですが、その日の紙面にはその形跡を確認することができませんでした。

(23) 同『石牟礼道子全集・不知火』第六卷／常世の樹・あやはべるの島へほか、497 頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『九重華』（1973 年 9 月 11 日）に掲載された「未完なる叙事詩を書くこと」のようですが、この雑誌の存在を確認することができませんでした。

(24) 同『石牟礼道子全集・不知火』第六卷／常世の樹・あやはべるの島へほか、497-498 頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『九重華』（1973 年 9 月 11 日）に掲載された「未完なる叙事詩を書くこと」のようですが、この雑誌の存在を確認することができませんでした。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第四部

最晩年の憲三に浴びせられる悪意と悪口の数々

第八章 秋山清の『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』

道子が水俣病闘争から離れ、「最後の人」の執筆に邁進していたころ、一方の憲三は、その間、どのような生活を送っていたのでしょうか。妹の静子は、こう回想しています。

憲三は東京の仕事の後片付けをすませ、水俣の姉妹のところへ引き越して来ましたが、窮鳥を待ち構えた姉フジノの懐へは入らず、自分の家を売却した金の一部で姉の屋敷内に二階建を造り、一階と二階半分を姉の店の倉庫に貸し、家賃と自分の食事代を相殺させてけじめをつけました¹。

このように、おそらく「森の家」の本や屋敷を処分した代金は、水俣で憲三が住む二階建での家の建設と、逸枝の墓廟の造営と、加えて『高群逸枝雑誌』の刊行の費用に使われたものと思われます。外国旅行はおろか国内旅行さえも楽しむわけではなく、かといって美酒や美食に打ち興じるわけでもなく、極めてつましい生活ぶりだったようです。この二階半分の居室で憲三は、ときには道子を加えて『高群逸枝雑誌』の編集作業を行ない、窓から見える、秋葉山の中腹に建立した妻の墓碑に手をあわせては、日々、ありし日の逸枝の面影にころを寄せていたにちがいありません。

建物の外回りの階段や、母屋と建物のあいだに茂る庭木については、道子がこう語ります。

東京の森の家とくらべたら、寝るだけの部屋の、卒然たるリアリズムなんですよ。地上からこの二階に通じる露台というか、階段が建物の外にあります。……森の家の樹木群には及ぶべくもありませんが、あの森の樹々のたたずまいをいたく恋いしたっている静子が、それを再現すべく願望して、心をくだいていて、松や梅や槇の間に、もちの木、いすの木、百日紅、楓、寒椿、八つ手、ゆすらうめ、南天、すすき、すずらん、バラ、彼岸花などが育っています²。

あわせて、この時期の憲三の執筆と健康の状態についても見てみたいと思います。道子の「最後の人」の連載再開とあたかも入れ替わるかのように、これまで『高群逸枝雑誌』に連載されてきた憲三の「題未定——わが終末記」は、一九七二（昭和四七）年七月一日刊行の第一六号に掲載された第九回をもって休載となります。連載開始の時期から比べて、さらに体力や気力が衰えてきたようです。その号の巻末の「編集室メモ」に、そのことがよく現われています。

私は前号の終末記の原稿をベッドの上で書いているとき鼻から血を出した。はじめ気分が悪くなり、次の瞬間、「ふいに思考がふっ切られ、目が見えなくなり、頭の中にモヤのようなものが立ちこめ、鼻から赤い血がぽたぽたと紙の上に落ちてきた」のである。……こういった中で、15号はかなりの編集ミスをおかした。発送は他の援助にあずかった。現在は小康状態³。

それから一年が立った一九七三（昭和四八）年八月三日の「共用日記」には、「突然、尿の排出がわるくなり、下腹部張る。午後5時ころ上田病院に静子とゆく。前立腺肥大にて手術（入院を要す）」⁴との記述があります。八月七日「市立病院にゆく。（上田病院の紹介をもって）。静子と」⁵。続く八月一三日「市立病院に入院。精密検査はじまる」⁶。半月後の八月二八日、「十時すぎ一時退院で帰室。21号編集にかかり、早速第一便原稿を下田印刷に送る。夜になり、あとのもの全部おわり、投函する」⁷。

こうした、悪化する体調と逆比例して、憲三が「森の家」を離れ、帰郷した水俣の地で『高群逸枝雑誌』を発刊すると、美しい花に引き寄せられるチョウのように、多くのたよりが舞い込み、一方で、大学の学生や教員たちがしばしば訪ねてくるようになりました。しかし、必ずしも、歓迎されるべき訪問者たちばかりではありませんでした。この手術を挟んで、その前年から亡くなるまでの約四年間、憲三は、身体的のみならず、精神的にも大きな困苦を抱えてゆきます。主としてそれは、この時期の外部からの高群逸枝巡礼者たちによってもたらされました。

連載最後となる「題未定——わが終末記 第九回」が掲載された『高群逸枝雑誌』（第一六号）の発行から四箇月が立った、一九七二（昭和四七）年十一月一日、詩人の秋山清が、自宅を訪ねてきました。このことにつきましては、次の年（一九七三年）の六月に思想の科学社から上梓される、秋山の『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』に詳しく、そこからの引用をもって、構成したいと思います。

「橋本さんはいますか」

「どなたですか、身体がわるくてあまり人と会わんようにしているのだが——」

と機嫌のよくなさそうな返事の後で、彼は部屋の中の寝台から起き上がる気配だった。私が名をいって紹介状を差し出すと、彼の気むずかしい顔もいくらか和らぐかに見えた⁸。

憲三は、以前秋山が『日本読書新聞』に書いていた自叙伝「小組のへそ」を読んでおり、そのことや渋谷定輔の『農民哀史』のことなどが話題になり、いよいよ本題に入ります。秋山は「『高群逸枝全集』から何故に、アナキズムの立場から書いた多くの論説が脱落させられたか、それを敢えてしたのは、本人の意思か、本屋の要求か、橋本憲三自身の意向によるものか」⁹を、遠慮することなく憲三に問いました。それに対して憲三は、概略このように答えました。「あれらを書いた時期、まだ彼女は未熟だった。本人も自分のその頃書いたものをそのように見ていたらしく思う。それらしいことが『火の国の女の日記』にも書かれてあったと思う。要するにそれから以降の研究が主ですから」¹⁰。この返事は、「現在高群逸枝に集まっている強い注目の中には、あの頃の論説を重く見ているところからのもの」¹¹に起因しているものもあるのではないかと確信する秋山を必ずしも満足させるものではなく、さらに秋山の質問が続きます。「『婦人戦線』の諸論文、『女人芸術』誌上のマルキシズムとの文学論争、さらにはそれ以前の、たとえば『婦人公論』誌上で山川菊栄ととり交わした恋愛論争などを、単行本として刊行するか、全集の別冊としてでも出すことはどうか。私はそれをすすめますよ」¹²。この提案に対して憲三の反応はこうでした。「いや、私は肥後モッコスですから、一度きめたことは——」¹³。「何が肥

後モッコスだ！」——出そうになった言葉を自身で引き取りました。秋山の真意は、「昭和三、四、五、六年ごろ、アナキズムを抛りどころとして展開した高群逸枝の論争、主張、啓蒙などの活動が、未熟な時期であった、という主観的な判断から、その人の生涯の業績の中でオミットされていいものか、ということ」¹⁴でした。帰り際、憲三は秋山に、『高群逸枝雑誌』に何か寄稿するように示唆したようです。それを受けて、翌年（一九七三年）の二月一七日、秋山は、憲三に宛てた手紙という形式をとり、採否は一任するとし、たうえで、「全集の編集にたいする私の不審や疑問について、率直に問いただす文章を送った」¹⁵のでした。長文です。一言に要約するとその内容は、「全集」と称しながら、なにゆえに、とりわけ逸枝自身が編集者として責任をもつ『婦人戦線』に書いたアナキズムを抛り所とした彼女の論文が、未熟な時期に書かれたものであったという理由から削除されたのか、その正当性を全集の編集者である憲三に直接問い、それら一連の論考のもつ歴史的重要性を指摘するものでした。さっそく憲三は、二月二一日にその返信をしたためます。

お原稿一読しました。結論から申しまして、これは取捨をおまかせくださった寛大なお心にあまえてご指示どおり急ぎ返送させていただきたいと思います。

原稿には私と見解を異にするところがあまりに多く、私が責任者となっている雑誌に掲載することでお説を私が認めたと誤解されることをさけたいのです。ご了承をお願いします¹⁶。

それでは、この返信のなかで憲三が書いている「私と見解」とは、どのようなものだったのでしょうか。さかのぼること七年前の一九六六（昭和四一）年、「森の家」で全集の編集と校正に精を出していたとき、同居していた道子に、憲三はこう自身の考えを開陳しています。

全集とは何でしょうね。全集をどう規定するか。選集という形もあるでしょう。ある基準でいえば、彼女の全集はこの二倍でも足りないくらいです。全集を出す意味について僕は彼女と対話するのです。

つまり彼女のみていた真理、この真理でもって、彼女は孤絶したこの家の外の世界に貢献したといえはいえる。それに到達するまでの、彼女にいわせれば紙クズ。彼女によって否定されたものを全集にとりあげることは、彼女をはずかしめ、僕もはずかしめを受ける。これは僕の法治主義です¹⁷。

憲三の立場に立てば、女性史学という学問の存在にかかわる啓示に先導されて、つまりは、すべからく人類が到達しなければならないひとつの大きな真理に導かれて、自身の大衆運動の戦線に幕を閉じ、いっさいの来客を断って「森の家」の書斎に独り恒久に蟄居した、まさしくそのときこそが、高群逸枝が学者として蘇生復活する瞬間であり、それ以前に彼女の身边にみられたものは、そのために必要とされた、いわば産湯の残り湯であり、使用済みの布切れであり、これを全集に所収することは、清が濁によって、つまりは、清書された玉稿が書き散らされただけの紙クズによって混濁させられることを意味し、それ

を認めれば、「彼女をはずかしめ、僕もはずかしめを受ける」ということになるのでしょう。これが、編集者としての高群逸枝の業績についての評価であり、全集編集の方針となるものでした。しかし、そうした思いは、アナキズムに関する論考が全集から欠落していることに不満を示す、アナキストの詩人である秋山には理解してもらえず、その手紙から四箇月後の六月、秋山の『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』が世に出るのでした。それをおそらく手にしたであろう憲三が、そのとき、いかなる心的状況に立ち入ったのかは、裏づける資料もなく、想像するしかありません。

そこで、少し想像の翼を広げてみます。憲三が「高群逸枝全集」を編集するに当たって、アナキズムに関する逸枝の論考を削除した理由については、思うに、以下のようなことが背後に存在していたからに相違ありません。

一九二九（昭和四）年の年末、逸枝ははじめて年賀状を印刷します。そこには、婦人論、恋愛論、女性史の三部作からなる「研究著述の計画」が書かれてありました。しかし、逸枝は、こう書きます。

だが運命はなお私には酷だった。それを投函した直後の十二月三十日に前から話のあった解放社からの『婦人戦線』発刊のことが決定したという通知があり、私の新コースに大きな番狂わせがもたらされることになってしまったのだった¹⁸。

つまり、逸枝にとって『婦人戦線』を創刊し、その主宰者となってアナキズムに関する論考を執筆することは、「大きな番狂わせ」だったのです。無産婦人芸術連盟を結成し、その機関誌である『婦人戦線』の刊行は、すべて憲三の意向によるものでした。それに対して、その後憲三は、逸枝に「女性史研究をすすめておきながら、いっぽう偶然のことで『婦人戦線』を持ち込んで、こんな手違いになったこと」¹⁹をあやまっています。

『婦人戦線』は、逸枝にとっては「番狂わせ」、憲三にとっては「手違い」であり、したがって、そこに掲載された論考を「高群逸枝全集」に収録することは、憲三の立場からすれば論外ということだったにちがいません。

もうひとつ、アナキズムに関する文を、憲三が「高群逸枝全集」から外さなければならなかった理由が考えられます。それは、晩年にあつて逸枝自身、アナキズムから離れ、マルクス主義に傾倒していたという事実の存在です。

以下は、逸枝の『女性の歴史』（下巻、大日本雄辯會講談社、一九五八年）のなかにみられる文です。

アナキズムの欠点は、必然論でなく、発展説ではないこと、したがって婦人解放史に学的根拠を与えないことであるとおもう。またそれは同時に実践への弱点でもあるといえる²⁰。

アナキズムの欠点にかかわるこうした認識に、逸枝がいつ到達したのかは正確にはわかりませんが、明らかにこれは、逸枝にとってのアナキズムからの撤退を意味します。

他方で逸枝は、マルクス主義にかかわって、このような理解に達していました。次は、一九六〇（昭和三五）年の日記に記されている一節からの引用です。

寸感メモ。女性史については、あらゆる学問—社会・民族・歴史等が冷淡であるなかに、ただ一つ、マルクス主義史学のみが、これに関心を示していることを知ったとき、はじめてマルクス主義に無知であり反感さえもっていた私は、あらためてこれに敬意を感じはじめた²¹。

以上の二点が、「高群逸枝全集」を編集するに際して、憲三が、戦前の逸枝のアナーキズムに関する論考を組み入れなかった主な理由であると思われます。

それだけではなく、戦前戦中に逸枝が書いた国体主義に基づく歴史書もすべて、全集に収録されることはありませんでした。晩年憲三は、こう述べています。

全集の編纂は厳密な手続きと根気のいる仕事だった。第一資料あつめ。第二選択、第三排列、第四原本整理。これらの作業には程度の差こそあれ欠漏・不合理・不自然等がつきまとして編者をくるしめるものがある。全集ということばにもこだわりがないとはいえない。たとえば、世に網羅主義の全集はあってもおそらく網羅しつくした全集はあり得ないだろう。選集ということばもあるが、これも現実には代表作の意味よりはむしろ便宜主義を語っていると思う。私は主著主義をとることで自分を納得させた²²。

他方、生前の逸枝は、憲三にこう語っています。

日記一卷と追加研究一卷とができ上ったら「過去の紙くず」は一切焼いてしまって、また新しい出発をしましょう²³。

逸枝の全集を編むに当たって憲三は、「過去の紙くず」はすべて焼き捨て、「主著主義をとることで自分を納得させた」のでした。焼き捨てた「過去の紙くず」には、皇国史観に基づいて書かれた幾つもの評論文も歴史書も含まれます。これこそが、戦前にあって自分たちを規定していた旧い世界と戦後に新たに生まれた進歩的な世界——戦争を挟んで全く異なるこのふたつ世界のなかにあって生き抜かざるを得なかった者だけが経験する、一種不条理な宿命だったのかもしれない。憲三のつらさは、ここにあったものと思われます。

それでは、道子は、憲三と秋山の意見の違いについて、そばにいて、どう受け止めたのでしょうか。残されている資料に、それを立証しうるものはありません。しかし若い日、道子は共産党に入党しては、すぐにも離党しています。そして道子は、「社会運動はロマンチズムではいけないと思う。また、各人にはそれぞれ長所がある。その長所をもって貢献すべきだと思う」²⁴という、逸枝に語った憲三の言葉を、自分の文のなかで引用し、紹介しています。これらの傍証から推測しますと、逸枝がアナーキズムから撤退したことも、憲三が、逸枝のアナーキズムに関する論考を全集に収録しなかったことも、おそらく自分なりに理解できていたものと承知します。

- (1) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、16頁。
- (2) 石牟礼道子「最後の人 第十二回 第一章 残像3」『高群逸枝雑誌』第24号、1974年7月1日、27頁。
- (3) 「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』第16号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1972年7月1日、30頁。
- (4) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、181頁。
- (5) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (6) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (7) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (8) 秋山清『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』思想の科学社、1973年、8-9頁。
- (9) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、9頁。
- (10) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。
- (11) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。
- (12) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、10頁。
- (13) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。
- (14) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、11頁。
- (15) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、156頁。
- (16) 同『自由おんな論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。
- (17) 石牟礼道子「最後の人 第六回 序章 森の家日記6」『高群逸枝雑誌』第6号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年1月1日、27-28頁。
- (18) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年(第4刷)、233頁。
- (19) 同『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、237頁。
- (20) 高群逸枝『女性の歴史』下巻、大日本雄辯會講談社、1958年、287頁。
- (21) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1971年(第3刷)、462頁。
- (22) 橋本憲三「『火の国の女の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、11頁。
- (23) 橋本憲三「三つの言葉 ＊後記にかえて」『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年(第4刷)、483頁。なお、この引用文の字句は、高群逸枝『高群逸枝全集』第七巻／評論集・恋愛創生(理論社、1967年)の372頁に見出すこともできます。
- (24) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会(編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第14号、1977年冬季号、15頁。

第九章 瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」

秋山清に続いて、水俣に住む憲三を訪ねてきたのは、作家の瀬戸内晴美でした。憲三の「共用日記」によりますと、一九七三（昭和四八）年の二月一日、「午後八時三十分—10時50分、瀬戸内さん、村上彩子さん（筑摩書房）とみえる。石牟礼さん同道」¹。翌二日、「午前一一時、瀬戸内さん村上さん、Mさん。瀬戸内さんお墓まいりしてくださったと。紅梅白梅がさいていたと。室にいらず、そのまま水俣駅へ（庭で静子あう）」²。瀬戸内は、そのときはじめて会った憲三の印象にかかわって、このように書いています。

水俣の静子さんのお宅の片隅の倉庫の二階に独り棲いをしていられた憲三氏は、想像していたより若々しく、写真で見るよりスマートで、どこことなく粋でハイカラな老人であった。

物静かだが愛想がよく、どんな不躰な質問にも積極的に答えてくれた。

……私が望むなら、どこまでも私の取材に協力しようという姿勢を見せて下さった³。

この一文に続けて瀬戸内は、「私はまだ逸枝の伝記を書くまでの準備は出来ていないし、憲三氏と逸枝の愛のかたちを知りたかったので、憲三氏の好意にあふれた申し出にも、すぐに飛びついていかなかった」⁴と、書きます。もしそうであれば、瀬戸内の水俣訪問の目的は、一体何だったのでしょうか。このとき筑摩書房の村上彩子が同伴していることや、その五箇月後に「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」が筑摩書房発刊の文芸雑誌である『文芸展望』に登場することから推し量れば、やはりこのときの訪問は、逸枝と憲三の伝記を書くに当たっての事前の了解をとるためだったのではないかと思います。実際のところ、ちょうどこのとき、季刊誌となる『文芸展望』の創刊が迫っていました。四月の創刊号には、道子の「椿の海の記」の第一回が掲載されて、連載がはじまります。そして、次の七月刊行の第二号に、瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載され、これまた連載が進んでゆくのです。このようにして、これからしばらくのあいだ、道子の「椿の海の記」と瀬戸内の「日月ふたり」のふたつの作品が、『文芸展望』を舞台にして共演することになるのです。

続く「日月ふたり（第二回）——高群逸枝・橋本憲三——」は、一〇月発売の第三号にその姿を現わし、第四号は休載となりました。問題が起こったのは、年が変わった一九七四（昭和四九）年の三月のことでした。「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載された、四月に発売予定の第五号の見本誌が、筑摩書房の村上彩子から事前に送られてきたとき、それを見るや、ついに憲三の堪忍袋の緒が切れてしまったのです。一九七四（昭和四九）年の憲三の「共用日記」には、このように書かれてあります。

三月二六日「文芸展望5、村上彩子さんからとどく（筑摩書房）。瀬戸内氏『日月ふたり』3、掲載」。

三月二八日「瀬戸内氏にはじめて手紙をかく」⁵。

「日月ふたり」の第三回を読んだ憲三は、このときはじめて瀬戸内に手紙を書きました。前年夏の手術以降も、相変わらず憲三の体調はすぐれなかったようです。おそらくこの時期、ベッドに臥すことが多い日々を送っていたにちがいありません。「この写しはあなたに参考にしていただこうと、氣息えんえんながら起きて書いたものです。雑誌にいつかのせる気になるかも知れないとの潜在意識もあつたらしくて」⁶と書き添えて、憲三は、この手紙のコピーを道子に託します。疑うことなくこれは、憲三から道子に手渡された遺言書に近いものでした。実際この手紙は、『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）において公開されます。『高群逸枝雑誌』は、憲三の死去に伴い第三一号をもって自動的に事実上の廃刊となっていたのですが、この『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）は、万やむを得ず、没後四年が立った一九八〇（昭和五五）年一二月に発刊され、「もろさわよう子様へ」と「瀬戸内晴美氏への手紙」と題されたふたつの手紙文を含むことになります。

「もろさわよう子様へ」は、静子を書いたもので、全体としてその文は、もろさわようこが執筆した「高群逸枝」（集英社刊の『近代日本の女性史2』に所収）に対して幾多の誤認を指摘する内容となっています。一方の「瀬戸内晴美氏への手紙」は、上で述べましたように、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」にかかわる誤謬が憲三本人の手によって詳細に指摘されたもので、生前道子が憲三から預かっていた瀬戸内宛ての手紙の写しです。まさに『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）は、無念の思いでもって橋本静子と石牟礼道子が編著者となって公刊した、逸枝と憲三の名誉を毀損するこれまでに発表された文章に対しての遺族側からの反論ないしは抗議の場となっていたのです。

それではまず、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」には、どのようなことが書かれてあったのかを見てみたいと思います。憲三の瀬戸内宛ての反駁の手紙は、手紙としては実に長大なもので、そのなかで、「……というのはちがいます」「……混同ではないでしょうか」「……といったおぼえはありません」「……のことは私はしりません」「……全く考えられないことです」などといった表現を使って、幾つもの誤謬を指摘するのですが、そのうちの最大の核心部分は、『婦人戦線』のころの同人であった松本正枝（本名は延島治）が、逸枝の恋人が自分の夫の延島英一であったことを、聞き手の瀬戸内晴美に語る、次の場面でした。

逸枝の印象を訊くと、
「そうですねえ」

と、ちょっと遠い所を見る目つきをして、
「とにかく変わった人でしたから」

といい、口辺に微笑とも苦笑ともとれる笑いを浮かべながら、
「あの人はアナーキストでしたからね……恋愛もアナーキーに実践なさいましたよ」
という。

「ということは、橋本さんの他に恋人がいたということでしょうか」

「ええ、アナーキーな恋ですから」

「その頃の恋の相手の方を御存じでいらっしゃいますか」

正枝さんは、小さな肩をちょっと落とすようにして、ふっと座を立つと部屋を出て

いった。玄関のつきあたりにあった炊事場でお湯をわかしてきた薬かんをさげてほどなく部屋にもどってきた人は、白い柔和な表情で、またふっと軽く微笑して坐りながらさりりといってのけた。

「存じておりますとも」

さっきの話のつづきのつもりらしい。

「うちの主人でしたから」⁷

逸枝を中心とする無産婦人芸術連盟が結成されたのは、一九三〇（昭和五）年の一月でした。構成員は、伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ子、高群逸枝、野副ますぐり、野村考子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鏑田貞子の一四名。そして、続く三月に、この結社の機関誌となる『婦人戦線』が創刊され、それは、翌年（一九三一年）六月刊行の第二巻第六号まで続きます。この間、松本正枝もこの雑誌に論考を寄稿しますが、瀬戸内に宛てた手紙のなかで憲三は、「松本さんの『婦人戦線』論文はほとんど（あるいは全部）延島さんの代筆。たぶん住井すゑさんをご存知でしょう」⁸と書いていますので、松本正枝はこの雑誌の活動にほとんど加わっておらず、実質的には、夫の延島英一が関与していたことになります。これが、『婦人戦線』を巡るおおかたの環境でした。そして四〇年以上が経過したこの時期に至って、松本正枝は、逸枝と自分の夫の延島がその当時恋人関係にあったことを瀬戸内に暴露したのです。

それでは次に、それに対して憲三は、手紙のなかで、どう反論したのでしょうか、それを見てみたいと思います。「あの人はアナーキストでしたからね……恋愛もアナーキーに実践なさいましたよ」という語句については、「事实は全く正反対。恋愛論においても。実践において」⁹と主張し、「ということは、橋本さんの他に恋人がいたということでしょうか」という発語については、「現在の私、次号を読まない私には、『恋人』の語は適当とは思われません。強いて考えれば、表層的擬恋の状況とでもいうものではないかと思われるのです」¹⁰と、切り返します。逸枝と延島は、『婦人戦線』を通して、ともにアナーキストとして思想的に共感しあう間柄でした。瀬戸内の問いかけに、松本はそれを「アナーキーな恋」と表現し、一方の憲三は、「表層的擬恋の状況」という言葉で表わします。

さてそれでは、本当のところ、逸枝と英一の関係はどのようなものだったのでしょうか。それを解き明かす証拠となる一次資料、たとえば、双方の当時の日記や書簡類が残されていないようですので、断定することはできません。それにしてもなぜ、どのような事情があつて松本正枝という女性は、真偽は別として、かくも簡単に自分の夫の過去の品行を他人に打ち明けたのでしょうか。他方、それにしてもなぜ、どのような判断があつて瀬戸内晴美という作家は、必ずしも真実とは限らない正枝の発話をそのまま信じて、自分の文にやすやすと取り入れたのでしょうか。疑問が残ります。

しかしながら、瀬戸内自身は、正枝をこう評価していますので、以下に引用します。

正枝さんの話し方は決して逸枝さんと夫との情事を非難しているふうではなく、過去の事実として語っているという感じを受けたし、高群逸枝という天才女人の多面的な性格の説明にはなっても、逸枝の人格の瑕瑾として感じるような話し方ではなかった。

ユーモラスで皮肉なことを、全く飄々とした顔でいってのけるのは、この人の天性のものか、晩年身につけたものかわからなかったが、私には好感が持てた¹¹。

瀬戸内は、はっきりと、ここで「情事」という言葉を使って、逸枝と延島の間を断定しています。明らかに瀬戸内は、事前に憲三に確かめることも、何か別の資料に当たることなく、ひたすら正枝の語りに好感を寄せているのです。つまり、伝記執筆に必要とされる、事象にかかわるクロス・チェックがなされていないのです。一方、憲三にとって、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」は、自分の認識とは程遠い記述が至る所で散見される内容となっており、憲三はこの文を、ペンが剣に変貌した一種の凶器として、心身が震える思いで受け止めたのではないかと推量されます。事実、瀬戸内に宛てたこの手紙のなかで憲三は、「このところ、雪が舞ったり、冷雨にみまわれたり、不注意で血圧が一四〇～八〇の正常からいっぺんに一八五～九六に上昇、気分がわるく、体力気力……がおとろえ、頭がふらふらしているけれども、とにかくベッドで（仰向けになって）」¹²書いていることを告白するのです。

その後「日月ふたり」は、第四回が、一〇月発刊の『文芸展望』第七号に掲載され、翌年（一九七五年）一月の第八号に掲載された最終回をもって、この連載は終了するのでした。この時点で終了することになった経緯について、瀬戸内はこう明かします。

「日月ふたり」を書きはじめると、憲三氏はたいそう喜ばれ、毎月懇切な批評や、誤りの訂正をして下さった。こまごましたお手紙で私にはすべて有難かった。

しかし、話が逸枝と延島英一の恋愛のことに進むと、俄然神経質になられて異常なほどしつこく、延島未亡人の正枝さんが、逸枝の手紙を秘蔵しているのではないかと行って来られた。

それまで私に示されていたのとは全くちがう憲三氏があらわれた。私は憲三氏のショックが意外でもあり、意外でもないような気がして、複雑な想いにとらわれた。正枝さんから私はそういうものは見せられていないといっても、信じてもらえないようであった。……

私は正直いって、憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、「日月ふたり」を書きつづける意欲を失っていった¹³。

前述していましたように、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」を掲載した、四月発売予定の『文芸展望』第五号が筑摩書房の村上彩子から憲三のもとに送られてくるのは一九七四（昭和四九）年三月二六日のことで、憲三が瀬戸内にはじめて手紙を書くのは、その二日後の二八日でした。したがって、「『日月ふたり』を書きはじめると、憲三氏はたいそう喜ばれ、毎月懇切な批評や、誤りの訂正をして下さった。こまごましたお手紙で私にはすべて有難かった」といったような事実は、おそらくなかったものと考えられます。次に瀬戸内は、「延島未亡人の正枝さんから、逸枝の手紙を秘蔵しているのではないかと行って来られた」と書いていますが、確かにこのときの手紙で、憲三はこのことについて、こう触れています。「次号で私の知らないことで、たとえば彼女の手紙などで私にとって最悪なことを知らされるような事態になろうとも、私の信念はかわ

らず、かくれてみえないところにあり、私は災禍、受難ととるだろうと思います」¹⁴。しかしながら、「俄然神経質になられて異常なほどしつこく」という瀬戸内の表現には、それ以降も数回にわたって憲三からの問い合わせが続いたことを連想させるものがありますが、その後に続く手紙類は現存していないようですので、確認することはできません。したがって、この手紙が最初で最後だった可能性もあります。

では、本当に瀬戸内は、「憲三氏の次第にヒステリックになる迫及をもてあまし気味になり、『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」のでしょうか。この点をここで吟味しなければなりません。といいますのも、本人がそう語っている以上、そのことはそのとおりであるにちがいないと思われませんが、それだけが理由となつて「『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」わけではないのではないかと考えられる余地が、他方で残されているからです。

瀬戸内晴美と筑摩書房の村上彩子が、はじめて憲三を水俣に訪ねたとき、道子も立ち会っています。おそらくそのとき、憲三がつくる『高群逸枝雑誌』のことが話題になり、道子も、この雑誌に逸枝と憲三の評伝である「最後の人」を連載していることを話したにちがいません。それから一年が過ぎた一九七四（昭和四九）年の四月に、瀬戸内の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が『文芸展望』に登場するのですが、ちょうど同じ月に、「最後の人 第十一回 第一章 残照2」も世に出るのです。道子の「最後の人」の連載が順調に進んでいることに、このとき瀬戸内は気づいたにちがいません。ふたりは、まさしく競合するテーマで執筆しています。瀬戸内の連載回数は、いまだ三回で、道子のそれは、すでに一回を数えます。扱っている資料は、松本正枝などからの聞き取りもありますが、主に瀬戸内が利用しているのは、逸枝と憲三が著わした『火の国の女の日記』です。一方の道子は、「森の家」での憲三との同居生活の実際から「最後の人」を書き起こすという、極めて有利な立場にありました。

それとは別に、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」から五箇月後の九月、鹿野政直と堀場清子の夫婦が憲三を訪ねてきました。鹿野は、日本近代史を専門とする早稲田大学の教授で、堀場は女性史家です。ともにふたりは、逸枝の生き方と業績に共鳴していました。翌一〇月に「日月ふたり（第四回）——高群逸枝・橋本憲三——」が出た二箇月後の一二月から、いよいよ憲三と堀場清子のあいだで、郵便を介した一問一答形式による「おたずね通信」がはじまります。憲三の一二月三十一日の「共用日記」には、「堀場さんの『おたずね第一信』41項を書きあげる」¹⁵とあります。

除夜が明け一九七五（昭和五〇）年の幕が上がりました。一月四日「午後一時すぎ鹿野堀場夫妻みえる。6時ごろ天水荘へ帰泊」¹⁶、一月五日「午前九時すぎ夫婦みえる。ナボレオンで昼食のごちそうになる。明日午後五時の汽車にて帰郷とのこと。そのとき立ち寄られるとのこと。それまで資料をお借りになる。資料をおもちになって夫妻天水荘へ」¹⁷。一月六日「午後5時すぎ夫婦みえる。おわかれ」¹⁸、一月一〇日「私の誕生日。78歳。……石牟礼さんみえる。誕生日祝いの赤飯と折をもらう」¹⁹。「日月ふたり（最終回）——高群逸枝・橋本憲三——」が『文芸展望』（第八号）に掲載されたのは、それから五日後の一月一五日のことでした。文末には、「（了）」の文字が記されていました。

憲三が瀬戸内に宛てて送った手紙のなかには、「固有名詞——地名人名などの誤植は校正者にはわからないと思われるものがありますから、『日月ふたり』完結後に、正誤表を

つくってみて、差し上げようと思っています」²⁰という記述がありました。仮にこのまま連載を続け、今後そうした「正誤表」が『高群逸枝雑誌』などにおいて発表されることになれば、瀬戸内の立場はどうなるのでしょうか。ましてや、固有名詞だけに止まらず、内容についての「正誤表」も公開されるならば、瀬戸内の文の信憑性や信頼性が厳しく問われることになりかねません。あるいはまた、同じくこの先、道子の「最後の人」や堀場の「おたずね通信」が書籍化されるようなことになれば、どうでしょう。もしそうしたことが現実のものとなれば、自分の書く「日月ふたり」は、その実証性と論証性において明らかに劣り、そのことによって作家としての名声に傷がつく可能性に、瀬戸内は思いを巡らせたかもしれません。そうであったとすれば、そのことが、主たる要因であったかどうかは別にして、「『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」まさしく別の大きな要因ということになります。

さらには、それとは全く異なる要因があった可能性も指摘することができます。すでに引用した文から明らかなように、瀬戸内は、「憲三氏と逸枝の愛のかたちを知りたかった」と書いています。もしそれだけが執筆の目的であったとするならば、五回の連載をとおして、一九二五（大正一一）年の九月、逸枝が置き手紙を残して、当時自宅に寄宿していた憲三の友人男性と家を出た「事件」と、『婦人戦線』時代の逸枝と延島英一との恋愛を巡る「事件」とを書き終えたいま、もはや瀬戸内の関心は完全に燃焼してしまい、その後続く、逸枝の女性史学の完成へ向けての物語まで書く意欲は最初からなく、五回目のここがちょうど連載の「（了）」にふさわしい時期だったのかもしれません。瀬戸内がこう書いているところが印象的です。「堀場さんが熱心に憲三氏に取材しているという噂が聞こえてきた。私は内心ほっとした。そして憲三氏が堀場さんの方へ向いてくれ、私を釈放してくれたら有難いとさえ思った」²¹。

以上のように見てゆきますと、「憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」という言葉には、少なからず疑問符がつくことになります。

注

- (1) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、178頁。
- (2) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (3) 瀬戸内晴美『人なつかしき』筑摩書房、1983年、68頁。
- (4) 同『人なつかしき』、69頁。
- (5) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、184頁。
- (6) 橋本憲三「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、52頁。
- (7) 瀬戸内晴美「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」『文芸展望』第5号、1974年4月号、424頁。
- (8) 前掲「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、59頁。
- (9) 同「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、54頁。
- (10) 同「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、同頁。

- (11) 前掲『人なつかしき』、69-70 頁。
- (12) 前掲「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、56 頁。
- (13) 前掲『人なつかしき』、69-70 頁。
- (14) 前掲「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、56 頁。
- (15) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、188 頁。
- (16) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (17) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (18) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、189 頁。
- (19) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (20) 前掲「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、58-59 頁。
- (21) 前掲『人なつかしき』、70 頁。

第一〇章 戸田房子の「献身」

「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」を読んで、誤りを指摘するため
に瀬戸内に手紙を書いた一九七四（昭和四九）年の三月以降の憲三は、心身ともにさらに
悪化が進み、一進一退の状態にありました。それから半年後に憲三を訪問した堀場清子
は、そのときの様子を、こう描写します。

朝日評伝選『高群逸枝』の取材のために、鹿野政直と私とが、はじめて橋本氏を訪
ねた昭和四十九年九月、氏は「事件」の衝撃の渦中にあった。それ以外のことを聞こ
うとする私達の質問に対し、氏の答えはいつもその点にたちもどって、少なからず困
惑させられた。逸枝との愛の一体化と、女性史の大成とに生涯をかけ、女性一般の未
来のために多大の貢献をされた氏の、最晩年での傷つけられ方が、いたましかった¹。

堀場は、訪問当日の憲三の様子について、「『事件』の衝撃の渦中にあった。……最晩
年での傷つけられ方が、いたましかった」と、表現しています。しかし、その「いたまし
さ」は、「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」によってのみもたらされていたとい
うわけではありませんでした。もうひとつの憲三にとっての「いたましさ」が、鹿野と堀
場の水俣訪問二箇月前に、すでにもたらされていたのです。それは、『文学界』に掲載
された戸田房子の「献身」と題された小説で、逸枝の臨終の際に起こったある「事件」が
主題化されていました。ここでもまた、憲三の認識とは大きく異なる描写が至る所で闊歩
していたのです。その物語は、こうしてはじまります。

昭和三十九年晩春の朝のことである。二人の男が彼女の寝室に入って行き、ベッド
の中の綿のはみ出た蒲団と色褪せて毛のすり切れた毛布にくるまっている鷹子を、そ
っと担架に移した。……門の前に待機していた白い救急車に鷹子を運び入れた。

鷹子の夫の楠昌之は、萎えた開襟シャツとズボンで担架のあとから歩いていた。彼
は七十歳にはまだ間のある年齢であったが、老年に特有の黄ばんだ艶のない顔をし
て、額と鼻のわきに彫り込んだような皺をつくっていた。……

彼のあとから、かなりおくれで、坂本滋子が両手に紙バッグと風呂敷包みをさげ
て、急ぎ足で救急車の方へ近づいて来た²。

〔本城〕鷹子が高群逸枝で、楠昌之が橋本憲三、坂本滋子が、市川房枝の側近のひとり
の女性、おそらくは画家の高良真木であることは明白で、医師の竹内茂代が発案し参議院
議員の市川の紹介で入院が決まった国立東京第二病院に、一九六四（昭和三九）年五月一
二日の朝九時過ぎ、逸枝が搬送されるところを描いている場面であることは、その事情を
知る者にとっては、これもまた、容易に判断がつくことでした。そして、この物語には、
市川房枝と竹内茂代が、脇田さつきと山下照代という仮名で登場しますし、石崎せつ子と
いう婦人が、おそらくは平塚らいてうのことでしょう。

この小説では、全編にわたって、楠昌之つまり橋本憲三は、妻の気持ちを理解しない、横暴で利己主義に凝り固まった、腹黒い風采の上がない男として描かれています。逸枝が息を引き取ったあとの霊安室での様子についての描写にも、その一例を見ることができます。それは、次のような会話で構成されています。

「実は脇田先生にお願いがあるのですが、お聞きいただけないでしょうか？」

「どういうことでしょうか？」

「新聞に妻の死亡広告を出したいのですが、先生にお名前を出していただきたいのです。いかがでしょうか？」……

「新聞広告をするとすれば、二、三十万は覚悟しなければなりませんよ」

「金はいくらかかってもかまいません」

「失礼なことを伺うようですが、ご用意があるのですか？」

「沢山ではありませんが、銀行預金が四百万ございます。亡き妻のために出来る限りのことをしたいと思います」

女たちはあっという間でいっせいに楠昌之に視線を集中した。四百万円！ いったいどこから得たお金なのだろう。鷹子の悲惨な生活を見かねて授けつづけてきた女たちは、自分たちにすら縁遠い巨額な金を昌之が持っていたと知って茫然となった

3。

続けて脇田さつきは、こういうのでした。

「私はね、楠さん、そんなにお金をお持ちでいながら、皆さんから金銭的な援助を平気で受けていらしたあなたのお気持ちがわかりません。私は、あなたがたお二人をいままで貧乏だとばかり思っていました。そのように事を運んできました。いま考えますと、貧乏でなかったあなたがたに対して大変失礼なことであったと思います。お詫びいたします。——死亡広告のことは、私の素志と相容れない点がありますので、私の名前を出すのは遠慮いたします。どうかあしからず」⁴。

「献身」が『文学界』に発表されたのは、一九七四（昭和四九）年の七月でした。ちょうどそのとき、村上信彦から、一〇月一日刊行予定の『高群逸枝雑誌』第二五号のための「私のなかの高群逸枝8」の原稿が送られてきました。そのなかで村上は、「最近出たモデル小説」⁵という用語を使って、その小説に触れていました。驚いた憲三は、「最近出たモデル小説」の詳細を問い合わせます。すぐにも返信がありました。八月三十一日に書かれた村上からの返事は、以下のようなものでした。

ある雑誌のモデル小説というのは、「文学界」7月号の戸田房子の「献身」です。一読して、市川房枝たちの側からの考えだということが分かります。高群さん入院前後をめぐるあなたと一部の女たちとの対立をえがいたもので、私はあなたから事情を聞いていたのですぐ見当がついたのです。私としては、よむことをおすすすめすべきかやめることをすすめるべきか判断がつきません。たゞ、よんだら不快を感じただけで

しょう⁶。

そのあと憲三は、この小説を入手し、取り急ぎ読んだでしょう。もっとも、憲三の読後感には、調べる限り、資料には残されていないようです。しかし、「不快」どころか、実際には、突然背後から鈍器のようなもので頭を殴られたような、激しい衝撃を憲三は感じたにちがいありません。というのも、現に実在する人物が、小説という虚構空間に連れ込まれ、あることないこと、おもしろおかしく、罵倒され中傷されている場面に出くわしたとき、それに怒りを覚えない人はいないと思われるからです。「小説」である限り、そこに描かれている内容に、著者は責任をもつ必要はないかもしれませんが、名誉を棄損された「モデル」は、いかばかりの傷を負うことでしょうか。それにしても、「小説」という隠れ蓑をうまく使って、一〇年前の出来事がなぜいまになって蒸し返されなければならないのでしょうか。発表された時期を考えますと、瀬戸内春美の「日月ふたり」に誘発されたとも考えられます。

逸枝の臨終を主題にした「献身」は、憲三にとりまして、細部の事実関係には承服しがたい箇所が多々含まれていたにしましても、出来事自体は実際にあったことですので、憲三をそう驚かすものではなかったかもしれません。しかし、実際の出来事に事寄せて、個人を攻撃する態度には、憲三は、許しがたく耐えがたいものを感じ取ったにちがいありません。それは、次のような、霊安室での楠昌之と脇田さつきの、死亡広告と金銭を巡る会話をそばで聞いていた坂本滋子の心情を描写した箇所によく表われています。

坂本滋子は昌之から金話を聞いた瞬間から、打ちのめされた気持ちになっていた。……

昌之の行為はずるくきたない。どこまで男らしくない男であろうと、滋子は彼を心の底から軽蔑した。そういう男と半世紀近くも一緒に暮してきた鷹子のことを思うと、だまされつづけた鷹子が可哀想でならない。なぜ昌之との共同生活を解消しなかったのかと、いまさら言ってみても仕方がないが……日常生活をとりしきってくれる便利な男として目をつぶっていた間に、すっかり昌之にしてやられたではないか⁷。

しかしここで、高良真木がモデルではないかと思われる坂本滋子や著者の戸田房子を責めることはできません。男性を清算して女性を新生させようとする思考は、もとをたせば、逸枝が創案したともいえるからです。逸枝が主導した無産婦人芸術連盟の標語であった「強権主義否定」「男性清算」「女性新生」を想起すれば十分でしょう。しかしながら、上で引用した、坂本滋子の心情を戸田房子が描いた表現部分、つまり、「だまされつづけた鷹子が」「日常生活をとりしきってくれる便利な男として目をつぶっていた間に、すっかり昌之にしてやられたではないか」の箇所は、明らかに事実とは異なっています。

戸田房子の記述内容が、いかに事実を無視した蒙昧なものであるかを示す一次資料（エヴィデンス）を、以下に五点、引用します。

憲三の仕事からの帰宅を待つ逸枝は、自分が家出をしたとき旅館で渡された憲三からの手紙を読み返していました。そしてそこに、書き込みをします。おそらくこれが、これよりのち死が訪れるまでの、逸枝の憲三に対する偽らざる思いであると考えられます。

大正十四年十二月十日夜。まだお帰りになりません。今夜もこのお手紙を出して見ました。もう何処にも行きません。あなたに仕えようが足りないとき、私はこのお手紙を出して見るのです。

私とあなたとがこの地上から去って後またぶんこのお手紙は残りましょう。私は王様のお姫さまよりなお幸福です。夢と血と愛をえて、天国に行くことができるのですもの。

あなたも私も地上では貧乏な夫婦でございます。人はみな誤解しています。けれども何一つ私をいまはあなたから裂くものはない上に、私はよろこんであなたとならば死を迎えましょう。私ほどの生の執着をもった女でも、この不可思議な事実を心のなかに確かめうるとは、まあ何て不思議でしょう。愛がはるかに死よりも強いことを今私は知り、この上なく喜んでいます。いつでも もう 死ねますから。このさき幾年生きるでしょう。なるだけおじいさんとおばあさんになるまで生きましょうね。私はまだ仕えかたが足りませぬ。心ゆくまでつくしてからなら、何の思い残すこともない⁸。

ここで注目していいのは、「何一つ私をいまはあなたから裂くものはない」や「愛がはるかに死よりも強いことを今私は知り、この上なく喜んでいます」という逸枝の文言でしょう。

次に二点目として、「森の家」での生活をどう感じていたのかを、逸枝が告白した文がありますので、紹介します。

夫が勤めをやめてからは、毎日たのしく、みちたりてくらしした。森の中のあらゆる事件も、異変も、二人でみてきた。私のあらゆる仕事のこと、手紙、何もかもが、すべて二人によって処理された。飽きることのない毎日だったといえる⁹。

以下に紹介する三点目が、逸枝が考えていた、自分たちの収入についての見解であり、四点目が、自身が書く著述物に関しての見解です。資産は「徹底的に共有」、著述物は、憲三との「合作」——これが、逸枝が認識するところでした。

私は、夫の扶養ということ、可能不可能とは全く別にして、生来的に問題にしたことがない。それと同時に、結婚後の同居生活では、近代個人主義とは別に—それは非難しないが—徹底的に共同だった。夫はなんの介意なしに私のえた印税を処理した。夫の収入に対する私の態度も同じだった¹⁰。

主人のすゝめで、いまの仕事をはじめた時から、私は一身上の娯楽も名利心もすてゝしまい、戸外一步も出ないで暮しています。主人は私にあらゆることを教え、指導し、また日本にない「女性史」を二人で一生かゝって書き上げようとしているのです。だからこの仕事は、名前は私ですが、主人と私の合作です¹¹。

最後に五点目として、以下の文を紹介します。ふたりが会って四五周年になる一九六二（昭和三七）年の七夕前夜に、逸枝と憲三が誓い合った言葉です。逸枝が亡くなる二年前の

誓いです。

われらは貧しかったが
二人手をたずさえて
世の風波にたえ
運命の試れんにも克ち
ここまで歩いてきた
これから命が終わる日まで
またたぶん同様だろうことを誓う
そしてその日がきたら
最後の一人が死ぬときこの書を墓場にともない
すべてを土に帰そう¹²

ふたりの不離の愛を示す幾多の証拠のなかにあって、わずかこの五つの例文を読むだけでも、「だまされつづけた鷹子が」「日常生活をとりしきってくれる便利な男として目をつぶっていた間に、すっかり昌之にしてやられたではないか」という記述が、いかに真実から乖離し、逸枝と憲三の人権を侵害し、ふたりの名誉を毀損しているかがわかります。まさしく犯罪を構成しかねない描写ではないかと思料されます。

それにしても、事実を曲げてまで、男にだまされた女の哀れさという虚構をつくり上げ、その上に立って女性を擁護し男性を断罪するところに、潜在的に定型化されたこの時代の女性の固定的視点がにじみ出ているようにも感じ取れます。果たしてこれが、どうあろうとも男性を悪の化身として措定し、それを標的に闘おうとする、同時代の女性解放運動家たちにとっての日常活動の常套手段というものであったのでしょうか。あるいは、それとの関連が深い女性史やモデル小説（あるいは伝記小説）と呼ばれるものにおける当時の際立つ記述手法のひとつだったのでしょうか。

本人たちには自覚はなかったものと思われませんが、結果として「献身」は、市川房枝とその周辺の女性たち自ら、自分たちが、いかに息をするかのようにならねばならぬ女であることを、また、一〇年が立っていようともいかに執拗に男を追い回す女であることを、さらに加えて、秘められた不満と執念とがあればいかに遠慮も会釈もなくそれを文にして世に公表する女であることを、いとも簡単に表出してしまったのでした。

注

- (1) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝 下』朝日新聞社、1981年、183頁。
- (2) 戸田房子「献身」『文学界』文藝春秋、1974年7月号、80-81頁。
- (3) 同「献身」『文学界』、114-115頁。
- (4) 同「献身」『文学界』、115-116頁。
- (5) 村上信彦「私のなかの高群逸枝8」『高群逸枝雑誌』第25号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1974年10月1日、21頁。
- (6) 橋本憲三「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、

著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで
第四部 最晩年の憲三に浴びせられる悪意と悪口の数々
第一〇章 戸田房子の「献身」

責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、25頁。

(7) 前掲「献身」『文学界』、116-117頁。

(8) 橋本憲三「手紙と書き入れ」『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、21頁。

(9) 『高群逸枝全集』第九卷／小説／随筆／日記、理論社、1971年（第3刷）、429頁。

(10) 同『高群逸枝全集』第九卷／小説／随筆／日記、515頁。

(11) 前掲『わが高群逸枝 下』、311頁。

(12) 『高群逸枝全集』第一〇卷／火の国の女の日記、理論社、1970年（第4刷）、449頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第五部

橋本静子とともに最期の憲三に寄り添う

第一章 憲三の苦悩を共有する

瀬戸内晴美の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載された『文芸展望』（第五号）が発売されたのは、一九七四（昭和四九）年四月でした。そのなかに、次の一節があります。松本正枝（本名は延島治）の視線から描かれています。

駅からわが家の方への一本道を歩いていくと、向うから逸枝が歩いてくる。今日もきれいに化粧して、袂の長い派手な着物を着た逸枝は、少女がするように、長い袂を両手で持ってひらひら蝶々のように両脇で躍らせながら、浮きたつような足どりでステップをふんでくるのだった。人の目も全く眼中にないように、その姿は何か抑えきれぬ喜びをそういうそぶりであらわしているとはしか見えなかった。

よほど嬉しいことがあるにちがいない、まるで子供のような人だ。ずっとそんな逸枝の姿を見つめながら正枝が近づいて声をかけると、逸枝は雷に遭ったように硬直して路上に突っ立ってしまった。大きな目をうつろに見開き、息もとまったように正枝をみつめてあえいでいる。

「どうなさったの、うちへいらっしゃったんじゃないかったの、延島はいませんでしたかしら」

その道はわが家への一本道なので、正枝はこう問いかえした。逸枝はようやく夢からさめたように、

「あなた、まだ会社じゃなかったの、どうなすったの」

と訊いた。詰問するような調子に、正枝はふたたび驚かされた。逸枝はそんな正枝の横をすりぬけると、挨拶もせず駅の方へ走り去っていった。

家に帰ると英一が同じように愕いた表情で迎えた¹。

「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」を著わした道子はそのなかで、上の文を引用すると、それに続けてこう書きました。

逸枝亡きあとに書かれたこの作品を読まれて憲三氏の苦悩は深刻だった。長い袖を両手に抱え、蝶のようにひらひらゆくような逸枝をかつて見た覚えがないといわれるのである。……正枝氏はそのような逸枝を、ご自分の夫君と愛を交わした姿と受け取られ、瀬戸内氏も、憲三との一体的夫婦の伝説がやぶれ逸枝に恋人がいたとされているのだが、わたしはそこに立ち入る気はない。逸枝は憲三氏の眼に触れるように延島氏からの求愛の手紙を常にそれとなく机辺に置いており、その間の事情と処理については、憲三氏自身の手記が残されている。（『高群逸枝雑誌』終刊号）²

「逸枝亡きあとに書かれたこの作品を読まれて憲三氏の苦悩は深刻だった」と、道子は書きます。注目すべき点であろうかと思われます。そして道子は、最後にこの文をこのように結ぶのでした。

蝶のように浮き立つ足どりの逸枝はじつは詩の刻の人なので、健全な日常にいきなり出逢ってたちすくむ姿の背後には、彼女の詩篇のすべてが放電するように広がってゆくのをわたしは見る³。

この結語に、道子は何を含意させようとしたのでしょうか。おそらく道子は、逸枝のその姿に、表題のとおり「本能としての詩・そのエロス」を見ているのでしょう。

詩人の情感は、文字や文のうえだけでなく、舞や踊りにみられるように、身体のもったおやかさにも現われるものであり、そうした非日常な身体表現を見誤って、「愛を交わした姿」であるとか「恋人がいた」といった世俗用語に置き換えてしまうことに内在する虚しさ——道子は、そのようなことを暗に示そうとしたのではなかろうかと、私は思料します。

もっとも、瀬戸内は、この場面を「駅からわが家の方への一本道を歩いていくと、向うから逸枝が歩いてくる」と描写していますが、実際に正枝が瀬戸内に語ったのは、そうではなかったのではないかと思います。といいますのも、実際のところ正枝は、「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」において、その場面を、次のように書いているからです。

ある日私は会社から帰る線路際の道を歩いて行くと先へ蝶のように両手で長い袂をヒラヒラさせながら足取りも軽く女の人が行くので、人道車道の区別のない道でめずらしい人だと思いながら段々近づいたら何と高群さんだったのです。門外不出と宣言している人なので驚き後ろから声をかけると、高群さんはびっくりした様子で立上がり忽ち厳しい表情であら松本さんいつも今頃お帰りですか？……ええいつも今頃と返事をしながらどちらへ？ 「これから延島さんにお問い合わせがあつてお宅へ伺うところ」…
…⁴。

おそらく正枝は、数年前に取材に来た瀬戸内に、このようなことを語ったであろうと思われます。しかし瀬戸内は、それを逆転させて、「何か抑えきれぬ喜び」を表わしながら英一の家から帰る途中の場面に作り替え、正枝の留守中に、あたかも英一と「情事」があったかのように書き表わすのです。なぜ取材時に聞き取った証言内容を尊重しないのでしょうか。しかし、もしこれが、瀬戸内の小説執筆の手法であるとすれば、そこには、尊ぶべき人権も名誉も、何もないことを意味します。もっとも、取材時に聞き取ったであろうと思われる内容も、必ずしも真実であるという保証はどこにもありませんが——。

一九七三（昭和四八）年二月一日の憲三の「共用日記」（妻の逸枝が亡くなってからは事実上憲三単独の日記）に、瀬戸内の訪問が、こう記されています。

午後八時三十分—10時50分、瀬戸内さん、村上彩子さん（筑摩書房）とみえる。石牟礼さん同道⁵。

翌二月二日の日記には、次のような文字が並びます。

午前一一時、瀬戸内さん村上さん、Mさん。瀬戸内さんお墓まいりしてくださったと。

紅梅白梅がさいていたと。室にいらず、そのまま水俣駅へ（庭で静子あう）⁶。

「Mさん」とは、石牟礼道子のことでしょう。このとき憲三は、庭に二階建ての建物を建て、一階を、藤野と静子が経営していた、食品や日用雑貨を扱う橋本商店の倉庫に貸し、二階を、自室と『高群逸枝雑誌』の編集室にあてていました。このとき筑摩書房の村上彩子が同伴していることや、その五箇月後に「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」が筑摩書房発刊の文芸雑誌である『文芸展望』に登場することから推し量れば、このときの訪問は、逸枝と憲三の伝記を書くに当たっての事前の了解をとるためだったのではないかと思われるます。

瀬戸内は、『文芸展望』に「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」を連載するに先立って、松本正枝と思われる女性に会って取材をしています。そのことが見て取れるのは、瀬戸内が、自著の『談談談』のなかで政治家の小沢遼子と中山千夏を相手に語る場面においてです。その箇所を、以下に引用します。

瀬戸内 ……だから私は男性で、内助の夫の系列というのを書こうと思って、岡本かな子と一平、高群逸枝と橋本憲三がいいと思って水俣へ行って見たの。ところがだんだんいろんなことがことがわかってきてね。仲がいいかと思っていたら、その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって。

中山 普通との反対みたいね⁷。

瀬戸内が水俣の憲三宅を訪ねたとき、本当に憲三は、このようなことを瀬戸内に話したのでしょうか。上の引用で示していますように、「共用日記」によれば、憲三が瀬戸内に会ったのは、一九七三（昭和四八）年の二月一日のことで、このときがはじめてです。しかも、面談したのは、午後の八時三〇分から一〇時五〇分までの二時間と二〇分です。「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」といった内容のことを、憲三が初対面の瀬戸内に二時間余の短い会話のなかにあって語ったとは、にわかに信じることはできません。

続けて瀬戸内は、小沢と中山に対して、こんなことも話題にします。

瀬戸内 ……きのう私が訪ねて行ったおばあちゃまのところできいてみたの。「婦人戦線が潰れたところがよくわからないんですけど、逸枝さんはよく聞いてみると、男を作って、しょっちゅう逃げ出していたそうですが、ほんとうですか？」「ええ、ほんとうですとも。われわれの時代のアナキストは恋愛に対してもアナーキーで、逸枝さんはそれを実行なさいました。人の亭主でもなんでもおかまいございませんの」「だれか逸枝さんの相手で覚えている方ございせんか？」「はあ、ございますとも」そのおばあさんはそれからちょっと出ていってお茶を入れて、「うちの人です」（笑い）。

小沢・中山 へえー（笑い）⁸。

瀬戸内は、「きのう私が訪ねて行ったおばあちゃまのところできいてみたの」といっていますが、この「おばあちゃま」というのは、たぶん松本正枝のことでしょう。そして、瀬戸内は、小沢遼子と中山千夏を相手にしたこの対談について、「本書のための語り下ろし 昭和四十八年五月十日赤坂にて」⁹と書いています。それであれば、「おばあちゃま」を訪ねたのは、前日の五月九日で、水俣訪問から約三箇月後のことになります。そこから類推しますと、「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」と語ったのは、橋本憲三本人ではなく、松本正枝だった可能性が派生します。もしそれが真実であったとするならば、瀬戸内は、小沢遼子と中山千夏のみならず、多くの読者に対して、憲三にかかわっての虚偽の印象を植え付けたことになります。

瀬戸内の『談談談』が世に出たのは、一九七四（昭和四九）年二月です。憲三がこの本を手にしたのは、それから半年後のことでした。といいますのも、八月七日と翌八日の憲三の「共用日記」に、次のような文字が書き込まれているからです。

八月七日「石牟礼氏に電話。夕方みえる。みやげものもらう。お茶も。10時に辞去。

辺境五と瀬戸内氏の談談談をもらう。睡眠薬服しすぐ就寝」。

八月八日「けさ、談談談を散見したら、一項目、さんたんたる事実無根の記事あり。……」¹⁰。

こうして憲三は、瀬戸内の『談談談』に事実無根の記述を見出すのでした。昨日人から聞いた醜聞を、真偽を確かめることもなく、さもおもしろそうに他人にいいふらし、さらにそのうえに、それを自慢げに文字に書く、瀬戸内晴美という作家に対して、憲三は、強い不信感を抱いたにちがいありません。

上に引用した『談談談』のなかからの二箇所は、逸枝と憲三の名誉にかかわって公然と事実を指示して毀損するものであるといわざるを得ません。この場合、指示された事実の内容に関して、その真偽が問われることはありません。つまり、書かれている文の内容が、真実であろうと虚偽であろうと、逸枝と憲三の名誉感情や自尊感情が公然と著しく毀損されていれば、刑法が定める名誉棄損罪が成立する可能性を排除することはできないのです。何ゆえに瀬戸内は、憲三にいわせれば「さんたんたる事実無根の記事」をかくも平然と書くのでしょうか。憲三は、いうまでもなく存命中の人物です。憲三の苦しみはいかほどだったのでしょうか。

『談談談』を憲三に手渡したのは道子です。静子は、瀬戸内の来水のと看庭で会っています。そこから推測すれば、ふたりとも『談談談』を目にしたことでしょう。憔悴しきった憲三をみちかで見っていた静子も道子も、なぜ瀬戸内はこのようなことを書かねばならなかったのか、その真意を測りかねるとともに、その残忍さに、こころを痛めたものと推量します。他方で、「逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくる」——そうした逸枝と憲三の姿が、間違いなく世間の読者のなかにあって、当事者の思いを踏み越えて浸透していったものと思われまふ。

以上、瀬戸内晴美が書いた、伝記小説「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三—

一」と人物談義である『談談談』とに関連して、道子や静子を含む、直接の当事者である憲三の胸の内を構成してみました。

それでは次に、戸田房子のモデル小説である「献身」を巡っての、その三人の思いを描写してみたいと思います。しかし、「献身」に対する直接の反応は残されていないようです。そこで、この小説の主題となっている逸枝の臨終に際しての、市川房枝とそのグループの実際の言動に対する、憲三、道子、そして静子の反応について構成してみたいと思います。

まず、逸枝が息を引き取るまでの移りゆく場面を再現してみます。以下に用いる「共用日記」からの引用文は、どれもすべて『高群逸枝全集』第一〇巻の第六部「翼うばわれし天使・一九六三年（六九歳）——一九六四年（七〇歳）」からの抜粋です。煩雑さを避けるために注番号と引用頁の明示は割愛します。時は、一九六四（昭和三九）年の五月、逸枝が亡くなるおおよそ一箇月前のことです。「K」が憲三であることは、いうまでもありません。

「K、五月十日の夜明けとともに五時三十分 K 医師の来診をもとめて友人たちにも電話。十時三十五分竹内博士。その結果、病院入りを納得させられる」。

五月一日「二時市川〔房枝〕さんらみえる。竹内〔茂代〕さんの選択、市川さんの厚生省を通じての配慮で、国立東京第二病院に決定。K、市川さんらと病院に出かけ、帰家四時三〇分、逸枝は〔市川〕みさをさんにつきそわれて今朝よりぐっとよくなっている。奇跡とよろこぶ」。しかし、「逸枝は、共同室ときくといやがり、ぜひ個室にしてほしいという」。

五月二日「九時十分救急車で出発。特別室ながら二人室に入る」。

憲三は、個室でないことが気になっていました。加えて、この病院が「完全看護制」で、自分が付添人として逸枝のそばにすることができないことを知ったときは、「彼女の不運の姿が目に見え、椅子にかかったまま失神した」のでした。これまで、「森の家」では他人の訪問を断わり、長いあいだ、夫婦ふたりだけの水入らずの暮らしをしてきた憲三にとっては、予想だにしない、不測の事態に遭遇したのでした。一方、何年も家から一步も出ることなく書斎の机に向かっていた逸枝にとっては、救急車というまでもなく、病院も病室も、全くなじみのない異質の空間だったにちがいありません。それでも、付添婦だけは、何とか病院側から提供されることになりました。入院初日のこの日は、時間が来ると握手を交わし、夜のことを付添婦によく頼んで、やむなく病院をあとにしました。

五月三日「逸枝は眠れなかったろう。さびしかったろう。いまごろ熱心に待っていることだろう。しばらく待っていてください。まだふらつく頭をかかえて口上書をまとめる。八時四十五分できる。これから飛んでいく。……口上書（個室あっせん依頼）を面会室で友人たちに手渡してたのむ」。

「個室については入院前日の病院あいさつの帰途、K が病人の要求をきくまでもなく逸早く市川さんにそのあっせんを依頼した。病院費用については自宅ですでに用意がある旨を通じてあった。そして、あらためて入院翌日文書でもって依頼するとともに、K 自身も庶務課長、婦長、主治医に頼んだ。……幸い可及的早く南側の明るい静かなもつともよい場所の一人室に移ることができてうれしかった」。

「主治医は病名ないし病状について K がたずねても、はっきりしたことは何もあかしてくれなかったが、K は百科事典の『腹水』の項目からあれこれとたどっていつて、重大な覚悟を要することを察知し、できうるかぎり現在の患者をまず安静させ、体力を維持して、療養を長期にみちびくことを考え、あまり友人たちの面会が多くて、しかも病人が自分を殺し

てげんきよく応対につとめて疲れるので、主治医に話して『面会謝絶——主治医』の標札を病室の入口に掲示してもらった。むろん主治医の方でもそれを必要としたのだろう。

「重大な覚悟を要することを察知」した憲三と、市川房枝の関係者たちは、そのことを、憲三の妹で、水俣に住む橋本静子に連絡しました。以下は、静子の文からの引用です。

前に、姉と私ども夫婦の水俣の居宅にお越しにいただいている浜田糸衛様、高良真木様のお知らせと、兄憲三のお知らせも届き、姉逸枝の急病を知りました。夫と私は羽田に着き、旧知の高良様のご運転のお車のご供与をいただきました。

同乗のかたから、「普通の人ではすぐに入院することができないのを、市川先生の国会議員の肩書きで入院することが出来た」とうけたまわりました¹¹。

しかし、その車が向かったのは、逸枝が入院している国立東京第二病院ではなく、市川の執務室のある婦選会館でした。当然ながら、静子は、落ち着きませんでした。「世事に才覚のない兄憲三に、入院ごとのお手助けを感謝申し上げましたが、早く病体をみきわめて、なんとしてでも早急に全快させねばと気負っていて、兄夫婦に早く会いたいと念願してばかりいました」¹²。病院に連れていってもらえたのは、やっとその後のことでした。面会を終え、その足で、「森の家」にたどり着きます。

兄と夫と私とで食事もしないで善後策を話し合い、早急に態勢をととのえました。姉フジノが当座用にと持たせて寄越した百萬円を兄に渡し、「いつでも、いくらでも、要るだけ送るから言ってよこせ」との伝言も伝えました¹³。

六月七日「病院の廊下で〔日曜日のため昼間自宅に帰ろうとしていた〕付添いさんにあい、午前八時入室。逸枝の寝顔のあまり美しさに、さめるまで立ったままみとれていた。また呼吸のやすらかさ。彼女は神だ」。

「十時、主治医みえる。そんなに食べられないなら、注射するかも知れないと告知される。昼食には病院の流動食はたべたくないといい、牛乳とアイスクリームを、二人でわけあって食べた。……私は立ったり、椅子にかけたりして、一日彼女と接近して看護した。胸から頸部にかけて鈍痛。ときどき後頭部と額の鈍痛」。

この日の夕刻、逸枝と憲三が交わした最後の会話の場面を、以下に再現します。

私「私はあなたによって救われてここまでできました。無にひとしい私をよく愛してくれました。感謝します」。

彼女「われわれはほんとうにしあわせでしたね」。

私「われわれはほんとうにしあわせでした」。力を入れてこたえ、さらに顔を近づけて私が「……」というと、彼女ははっきりうなずいて、「そうです」といった。

彼女は心からそれをゆるし、そしてよろこんでいるのだった。いまこそわれわれは一心になったのだ。

七時十分に付添いさんが帰室したのちも九時までいたが、いよいよかえりのあいさつのとき、逸枝はかたく私の手をにぎり、「あしたはきつときてください」とつよいこ

とばでいった。

これまでにない異様なショックを受けた。しかし、とどまることがゆるされない。…
…私は、祈り祈り帰家。

——病院からのれんらくで十一時にかけつけた。そのとき、もう彼女の偉大な魂は一生の尊い使命を終え、永遠のねむりにはいていた。

そのあと逸枝の遺体は霊安室に運ばれ、そこへ、平塚らいてうや市川房枝、そして志垣寛らが駆けつけます。志垣の妻が、熊本県師範学校女子部で逸枝と同級であり、志垣自身は、かつて憲三を平凡社に入社の斡旋をしたことがあり、今回の告別式に当たっては葬儀委員長を務めます。以下は、のちに志垣が書く、そのときの霊安室の様子です。

六月七日、国立第二病院の死亡者室に横たえられた亡き人の枕頭には、従来長い間彼女のためにあらゆる協力と奉仕をいとわなかつた数々の名流婦人があつた。彼女たちに囲まれたたゞ一人の故人の骨肉者は夫憲三君一人であつた。橋本夫妻がいかに貧乏であつたかは、彼女たちがよく知つていた。だからこそ彼女たちは年々逸枝さんの研究費を扶け、治療費を扶け、そして今は死後の葬式まで心配していた。

しかし橋本君にしてみれば、せめて葬儀位は亭主たる自分の手で、自分の心ゆくまゝにとり行いたいと念願した。そのかげには憲三君をこの上なくいたわしく感じていた憲三君の妹さん（水俣在）があつた。妹さんは逸枝さんの臨終には居合せなかつたが、亡くなる数日前に訪ねて、治療費として百万円をおいて行つた。橋本君は今こそその金で逸枝を自分の思う通りに葬りたいと思つていた。

名流婦人たちは、橋本君の意中を察せず葬式万端、自分たちの手でとり行ふべくすでに枕頭には葬儀やが呼ばれていた。初め橋本君は彼女たちからのがれたくて、葬儀は熊本でとり行ふといつて彼女たちをおどろかせた。しかしせめて「告別式」だけはとのたつての要望から、橋本君も折れて、葬儀やが招かれたわけだ。その席上、橋本君は最高葬儀を注文し、彼女たちの眼の前で即金を渡した。これには流石名流婦人たちがびつくりしてしまつた。貧乏をうりものにする似而非ものであると怒つた。橋本さんがあんなお金持ちとは夢さえ思わなかつた。そんなにお金があるなら、先刻さしあげた「見舞金」は返してほしいといった名流婦人もあつた。もちろんその金は返した。わたくしが現われたのはそれらの事件のあとであつた。

名流婦人たちは死亡広告に名を連ねる事を拒み、葬式にも列せず、僅かに平塚雷鳥、守屋東、伊福部敬子、住井すえ等々の数女史にすぎなかつた。

故人は原始女性は太陽であつたという平塚女史の言葉を実証すべく一生の研究を続けた。しかし女性解放は男性を奴隷化することとはいわなかつた。男も認め、女も認むることが故人の心ではなかつたろうか¹⁴。

ここでは、この言説のなかの「葬儀は熊本でとり行ふといつて彼女たちをおどろかせた」と「名流婦人たちは死亡広告に名を連ねる事を拒み」、「先刻さしあげた『見舞金』は返してほしいといった名流婦人もあつた」、「葬式にも列せず」の三点について整理し、事実関係を明らかにしたいと思います。

一点目——「葬儀は熊本でとり行うといつて彼女たちをおどろかせた」と「名流婦人たちは死亡広告に名を連ねる事を拒み」を巡っての事実関係について。

六月八日および九日にかけて、主要な新聞紙上において、高群逸枝の死亡記事が掲載されました。地元紙の『熊日』も九日の朝刊九面で報じました。記事に加えられた逸枝の写真は、黒の野線で囲まれていました。次の引用は、その記事からの抜き書きです。「高群逸枝さん（本名橋本イツエ、女性史研究家、評論家）は東京・目黒の国立第二病院入院中、七日午後十時四十五分ガン性腹膜炎のため死去、七十歳。……十日午前十時から自宅で密葬。本葬は熊本で行なう予定。日時その他未定」。ここにはっきりと「本葬は熊本で行なう予定」と書かれています。これが喪主である憲三の意向でした。そしてまた、これは逸枝の希望でもあったと思われます。といいますのも、生前逸枝は、憲三の実家に帰省し、橋本家の空華塔（納骨堂）に参拝したおりの気持ちをこう書いているからです。「塔の中にはすでに子一人、孫一人の骨壺が納まっていた。私たちの憲平ちゃんも骨はないが祭ってある。……いずれ私の骨もこの墓にはいることであろう」¹⁵。

しかしながら、本葬を熊本で行なうことについては、何かの事情により変更せざるを得なかったようです。志垣が書くように、名流婦人たちからの「せめて『告別式』だけはとのたつての要望から、橋本君も折れて」しまったのかもしれませんが。二日後に出される死亡広告がそのことを物語ります。『熊日』においては、死亡広告は一日朝刊四面に掲載されました。「夫 橋本憲三 親戚代表 橋本英雄 高群晃 友人代表 家永三郎 志垣寛」の連名によるもので、「告別式」を、熊本ではなく、自宅、つまりは「森の家」で行なうことが、以下のように告知されたのでした。

高群逸枝（橋本イツエ）こと六月七日午後十時四十五分永眠いたしました 茲に生前のご厚誼を深謝しご通知いたします 追て来る六月一五日午後三時より五時まで自宅にて仏式により告別式を相営みます

友人代表を務めたのは、東京教育大学文学部の日本史の教授の家永三郎と、同郷熊本県出身で教育評論家の志垣寛のふたりでした。平塚らいてうの名も、市川房枝の名も、ここにはありません。戸田の小説「献身」のなかのこの場面に、市川房枝をモデルにしたと思われる人物が、「死亡広告のことは、私の素志と相容れない点がありますので、私の名前を出すのは遠慮いたします。どうかあしからず」¹⁶と、憲三に告げる一節がありますので、市川本人が拒んだものと考えられます。らいてうには、断わる意思はなく、市川の思いとの対立を避けようとして、一步身を引いたのではないかと思料されます。といいますのも、市川と違ってらいてうは、翌日の逸枝のひつぎの「森の家」帰還に立ち会っており、告別式にも参列していることがそれを例証しますし、それにもまして、何よりも、憲三との変わらぬ友愛が、その後の最期まで継続するからです。一方、憲三と市川の関係は、これで断絶します。

こうした死亡広告は、かつて逸枝の母親の登代子が亡くなったときも、夫の勝太郎によって出されており、憲三はそれをしっかりと踏襲したといえます。逸枝は、そのことについて、こう書いています。「母が死んだとき父は九州日日と九州の両新聞に家族連名の死亡広告を出して、有縁の人たちに知らせることを忘れなかったが、またこれは母への最後の父の敬意でもあったろう」¹⁷。戦後、『九州日日新聞』と『九州新聞』が合併して『熊本日日新聞』

が生まれます。この引用文の一節は、五年前に『熊日』に連載された「今昔の歌」のなかにおいて逸枝が披露したものです。したがって、逸枝の、この死亡広告を見て、親子二代にわたる死亡時対応の継承にかかわって何か深い思いに駆られた『熊日』購読者も、少なからずいたにちがいありません。要するに死亡広告は、高群家の先例に従うものであったのです。

二点目——「先刻さしあげた『見舞金』は返してほしいといった名流婦人もあつた」を巡っての事実関係について。

逸枝が入院した際、憲三が病院側に要求した「個室と面会謝絶」が原因となって、市川とその周囲の人たちに不快感を生じさせたようです。憲三は、このように書きます。

個室と面会謝絶の件は、思いがけなく、一部にまさつをおこした。Kは、生命の尊厳と、ひたすら彼女の心にしがった。それを知った逸枝は「私たちは自分たちのこれまでの流儀を押し通しましょう」といった。

「でもそれは感謝とか友情とかの問題とはべつですね」

「そうですとも」¹⁸

市川房枝は、戦前の『母系制の研究』発刊のころから今日まで、親身になって逸枝を支えてきた後援者のひとりでした。おそらく市川は、逸枝に最良の医療を施すために、善意をもって参議院議員という立場から厚生省に働きかけ、国立東京第二病院への入院の斡旋をしたのでしょう。そして、時間の許す限り病室を訪れ、手を握りしめながら、思い出を語り、感謝の言葉をお互い交わし合って、最後の日を迎えたかったものと想像されます。市川を取り巻くほかの女性たちも、おそらくこれと同じ心情だったにちがいありません。そうした、市川とそのグループの女性たちの思いからすれば、「個室と面会謝絶の件」は、個室にかくまい、他者の面会を拒絶しようとするかのような、憲三の卑劣な性格が投影された、後援者に対する陰険な行為と映っていたのでしょう。その延長として、霊安室での憲三と市川の確執はあったものと推量されます。

しかし一方で、夫である憲三には、妻に対する固有の別の感情がありました。つまりそれは、残り少ない時間にあって多くの後援者たちが見舞いに押しかけ、それに無理をして応対する状況が続けば、妻の心身の衰弱は一気に進行するにちがいないという懸念でした。もっとも、そもそも三十余年ものあいだ「森の家」に引きこもり、来客を断ち、机を友に生活してきた逸枝でしたので、個室と面会謝絶を強く望んだのは、むしろ逸枝の方だったのかもしれない。

さらに、完全看護という医療制度も、常にこの間、憲三を脅かしていたものと考えられます。のちに憲三は、道子にこう語ることになるのです。

完全看護制などということがわかっていれば、入院などさせなかったのです。ここで、彼女が求め続けていた森の家でのいとなみを終わることができたのに、僕がうかつにも気付かなかったから、彼女のいとなみを断ってしまった……¹⁹。

完全看護制を敷くこの病院は、憲三にとって、決められた短い時間以外はもはや自分が入り込むことができない、いままでに経験のなかった、ふたりを分かつ異界でしかありません

でした。あくまでも憲三は、ふたりして長く暮らしてきた自宅で、逸枝をしっかりと胸に抱き、最後の別れの言葉を交わしたかったのではないかと思います。実際にそれができなかったことは、まさしく「慙愧の極み」として、その後終生憲三を苦しめ、そうした後悔の弁が、上記引用のごとく、みぢかな道子へ向けられたのではないかと推察されます。

しかし、市川房枝たちと憲三のあいだに生じた不信感は、個室と面会謝絶の問題だけに止まりませんでした。それは、金銭に関する問題でした。以下に、それにかかわる、憲三の妹の静子が兄の口述を筆記した市川房枝に宛てた手紙の写しが公開されていますので、長くなりますが、ここに全文紹介します。

拝啓

故高群逸枝こと、国立東京第二病院入院につきましてはご高配をたまわりましてまことにありがとうございました。そのせつ、金参万円也と記入されたご封筒を手わたされ、お見舞い金と思いがいをいたしました。

そのとき療養費についておたずねになり、当座用にはとりあえず五〇万、その他充分の用意があることをお答えいたしました。

死亡いたしまして霊安室での通夜の席において、みなさまの前であの金は返して欲しい旨を申し入れられ恐縮いたしました。

葬儀を完了いたしまして、せいりにとりかかりましたので本日書留郵便をもってご返金申し上げます。お受け取り下さい。故人は参万円のことについてはなにも知りませんでした。旧来からの御厚情、深くお礼申し上げます。

昭和三十九年六月十七日 橋本憲三

市川房枝様²⁰

この手紙が公開されているのは、「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」と題された文においてですが、さらにそのなかで、筆者である憲三は、市川からの金は「入院前日の五月一日に自宅で受け取った……貳万円返金すべきところをあやまって参万円にしてしまった」²¹と、書き加えています。

それでは、市川が憲三に渡した金が「お見舞金」でなかったとすれば、市川は何の目的で、貳万円を差し出したのでしょうか。自分の知る無一文に近い憲三を哀れみ、今後支払いに窮するにちがいない入院費用の一部に充ててもらうことが念頭に置かれていたものと考えられます。しかし憲三が、それなりの資金を用意していることを知るや、それまでしばしば折に触れては金品を援助してきていたことも含め、自分の厚意が無にされたと思ひ込み、返金を求める行為に走ったのでしょうか。

憲三の胸には、その行為はどう映ったのでしょうか。喪主はあくまでも自分であり、葬儀は遺族の考えを踏まえて行なわれるものであり、たとえ有力な後援者であろうとも、市川は、そうした個人の領域に強引に割り込んではいないか、さらには、返金要求にしても、言い出すのが本当にそれにふさわしい場所であったのか、そうしたことを思うにつけ、何か怒りに近い虚しい感情が湧き出てきたものと思量されます。

また、静子の胸の内はどうだったのでしょうか。入院の知らせを受けて空路羽田に着いた静子と夫の英雄を乗せた高良真木が運転する車がまず向かった先は、逸枝と憲三が待つ病院で

はなく、市川の執務室でした。そして、同乗者からは、「市川先生の国会議員の肩書きで入院することが出来た」ことを聞かされました。静子は、死を争うこの時期にあつて、お礼を強要するかのような権力者の狡猾さの一面に触れ、いたたまれない感覚を味わったものと思います。のちに静子は、このようなことを書いています。

らいてう様は私どもへお会葬くださり、過分の御香料をお恵みいただき……その後らいてう様から変わらぬ御交誼をたまわりましたことと思ひ合せますと、政治家と文学者の違いを思わずにはおれません²²。

市川の執務室に向かう車中で交わされた会話のことや、霊安室での市川の口から見舞金の返還が要求されたことについて、のちに道子は、憲三から詳細に聞かされたものと思われる。

道子は、「森の家」に滞在していたおりに、「最後の人」のために取材ノートをつけていました。以下は、一九六六（昭和四一）年十一月一七日からの抜粋です。

午後三時半これを書いている。今日はとても暗いですねと先生電気をつけて下さる。一時まで、彼女死去直前直後の、市川房枝、平塚らいてう、竹内茂代、高良真木、浜田糸衛女史らの話をきく。諸関係の中での人間の孤独、彼女の孤独。異次元の世界。限界状況に至ればさけられない種々相について考え道子少し目まい。入院前後のこと、面会謝絶の事。二万円を返してほしいと通夜の席で言われた事、葬儀屋のこと、三万円返した事、解剖の話、私の面目は丸つぶれになりましたという発言（市川）、個室のこと、療養費のこと²³。

この文のあとに続いて、上で紹介した、静子が憲三の言を口述筆記した市川宛の手紙文が、登場します。この手紙文を自分の取材ノートに書き写すとき、道子は、「少し目まい」を感じながら、かつて憲三と静子が体感したものとほぼ同じ気持ちを追体感したのではないかと思います。

他方、市川房枝の随想集『だいこんの花』（新宿書房、一九七九年）においても、市川房枝の養女である市川ミサオの回想記『市川房枝おもいで話』（NHK 出版、一九九二年）においても、逸枝の臨終にかかわるこの一件については、いっさい触れられていません。市川が逸枝の重要な後援者のひとりであったことは、多くの婦人運動に当時加わっていた人たちは承知していたものと思われる。そうであれば、その責任のうえからも、市川は、逸枝臨終に際してのこの「事件」と、その結果生じた憲三との「断絶」とについて、一見明らかに姑息な手法にしか見えかねない、戸田の書く「献身」の公開などに頼らず、自ら進んで口を開いて、自分にとっての「真実」を白日の下に堂々と語る必要があったのではないかと、私は愚考します。

私の見るところによれば、「献身」が世に出たとき、筆舌を超える表現しがたい鈍い波動が憲三を襲ったにちがいありません。戸田房子という作家は、逸枝の入院や臨終に立ち会った形跡はありませんので、浜田糸衛や高良真木のような人に取材したか、あるいはそうした人が、戸田を使って書かせたのではないかと、憲三は即座に直感したのではないのでしょうか。

最後に、三点目——「葬式にも列せず」を巡っての事実関係について。

すでに示しています志垣の文からの引用にみられるように、逸枝の告別式に参加したのは、「僅かに平塚雷鳥、守屋東、伊福部敬子、住井すえ等々の数女史にすぎなかった」ようです。それでは、それ以外の、生前逸枝との親交があった女性たちは、どのような行動をとったのでしょうか。

逸枝が亡くなっておよそ一箇月半が経過した六月二二日に、婦選会館で高群逸枝を追悼する会が催されました。『婦人展望』は、その様子を、短くこのように伝えています。

去る六月七日死去した女性史研究家高群逸枝の追悼会が六月二十二日午後二時～五時婦選会館においてひらかれ、次の諸氏が出席、故人をしのんだ。市川房枝、鏑田貞子、浜田糸衛、稲津もと、高良真木、中島和子、近藤真柄、児玉勝子、武石まさ子、市川ミサオ、両沢葉子²⁴。

しかし、この追悼会は、逸枝をしのぶ場というよりは、憲三への悪口を並び立てる場と化したのではないかと想像されます。

生前逸枝は、こう書いていました。人が人に贈与することの危険性についての逸枝の認識が開陳されている箇所です。

……もっと甚だしい場合では、たとえば他から進んでなされた贈与などでも、多くの場合、それが通俗的な取引的観念もしくは恩惠的観念を結果的に形成し、両者間に、ともすれば、怨疾とか心おごりとかが、かもしだされる危険を伴うおそれがあるからである²⁵。

この逸枝の言説は、市川による自分への支援を念頭において書かれたものではおそらくないでしょうが、霊安室での市川と憲三の確執を先取りしているように読むこともできそうです。

逸枝の臨終の際の市川と憲三の反目を、市川の立場から書いた小説が、戸田房子の「献身」でした。世に出たのは、一九七四（昭和四九）年の七月です。それに加えて、それに先立って発表されていた小説「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」と交友録『談談談』の、この瀬戸内晴美の二作が、関係者のあいだで話題になっていたものと思われます。その渦中であって、いわれのない罵詈雑言と誹謗中傷を受けて最晩年を過ごす憲三がいました。その一方で、それを横で見えて悲しみに耐える静子と道子がいました。憲三の思いに立てば、どれもすべてが「事実無根」——人の口に戸は立てられず、憲三にとって、不当にも容赦なく襲いかかる外界からの痛みと不安は、もはや死をもってして逃れるしか、ほかに手立てはなかったかもしれません。このころの憲三の口に上るのは、「私はいつも死を欲しているのである。それもはっきりいえば自然死ではなくて自死なのだ」²⁶という言葉でした。その時々、静子も道子も耳にしていたにちがいありません。

- (1) 瀬戸内晴美「日月ふたり (第三回) ——高群逸枝・橋本憲三——」『文芸展望』第5号、1974年4月号、427頁。
- (2) 石牟礼道子「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』思想の科学社発行、1982年1月号(通巻349号)、44頁。
- (3) 同「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』、同頁。
- (4) 松本正枝「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』私家版(国立国会図書館デジタルコレクション)、1976年9月、30頁。
- (5) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、178頁。
- (6) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (7) 瀬戸内晴美『談談談』大和書房、1974年、㊶㊶頁。
- (8) 同『談談談』、同頁。
- (9) 同『談談談』、㊶㊴頁。
- (10) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、186頁。
- (11) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、4頁。
- (12) 同「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、5頁。
- (13) 同「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、同頁。
- (14) 志垣寛「高群さんと橋本君」『日本談義』日本談義社、1964年8月、57-58頁。
- (15) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年(第4刷)、293頁。
- (16) 戸田房子「献身」『文学界』文藝春秋、1974年7月号、115-116頁。
- (17) 高群逸枝『今昔の歌』講談社、1959年、236頁。
- (18) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、476頁。
- (19) 石牟礼道子「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」『高群逸枝雑誌』第18号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1973年1月1日、27頁。
- (20) 橋本憲三「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、36-37頁。
- (21) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、36頁。
- (22) 前掲「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、11頁。
- (23) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、318頁。
- (24) 月刊『婦人展望』、1964年7月号、3頁。
- (25) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966年、496-497頁。
- (26) 橋本憲三「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、24頁。

第一章 憲三の臨終を看取る

瀬戸内晴美の『談談談』を憲三が読んだのは、一九七四（昭和四九）年八月でした。そのおよそ一箇月前に、戸田房子の「献身」が掲載された『文學界』（七月号）が発売されます。この小説の内容は、逸枝の入院と臨終を扱うものでした。前章の「憲三の苦悩を共有する」で紹介しましたように、これもまた、憲三を奈落の底に陥れるものでした。おそらく憲三は、真実を無視して虚偽の世界を悠然と跋扈する女たちの姿を見て、恐怖さえ感じたかもしれません。

それでは、これに対して憲三は、どう向き合ったのでしょうか。それを見るためには、一九六四（昭和三九）年六月七日に逸枝が死去した直後の、周囲の人間の動きへとさかのぼらなければなりません。逸枝を慕う村上信彦のそのときの体験は、こうでした。

取るものもとらずあえず、国立東京第二病院に駆けつけ、霊安室に直行した。室の中央の台の上に遺体が安置され、顔に白布をかけてある。一方に一段高い畳敷の小さな部屋があって、先客が集まっている。平塚らいてう、市川房枝、浜田糸衛、高良真木、熊本から来られた友人の五人である。……だが私は興奮していた。「なぜもっと前に知らせてくれなかったのです」と廊下で橋本氏に食ってかかり、こんなことになるなら面会謝絶を無視して押し入ってでもいま一度会っておきたかった。面会謝絶を忠実に守ったばかりに唯一無二の機会を逸してしまった。おれはばかだった……。無念と怒りが渦巻いて、私は強く詰め寄った。さだめし血相を変えていたにそういない¹。

このとき村上は、憲三から、東京では密葬のみとし、その後本葬儀を熊本で執り行なう予定であることを聞かされ、この日が事実上の最後の別れとなりました。しかしその後、周囲の意見に押されて、自宅の「森の家」で葬儀が行なわれることになり、案内状が送られてきたものの、村上は出席しませんでした。葬儀も終わった、六月一八日に村上は、らいてう宅を訪ねます。この日の話題は、主に逸枝のことでした。村上は、こう書いています。

いろいろ話しているうちに、らいてうが高群さんをどのように評価していたかも分かり、この二人の女性の関わりを興味ふかく感じた。そのとき私は十日前の霊安室でのはしたない振舞を詫びたのであるが、私がまず詫びねばならなかったのは橋本氏だったと分かる日が、やがてやって来るのである²。

村上が霊安室で顔をあわせた「熊本から来られた友人」というのは、当時鎌倉に住んでいた熊本出身の志垣寛だったかもしれません。志垣は、逸枝と憲三の古くからの友人で、逸枝の葬送の儀に際しては葬儀委員長を務めました。次の引用は、七月七日に橋本静子宛てに出された志垣の私信にある末尾からの一節です。

平塚さんのきもいりで、近く例の女子連と会見することになっています。私が近く雑誌に逸枝さんのことを書くというのが評判になって、向うから会見を申込んでまし

た。よく説明して納得させようと思っています³。

ここでいう「例の女子連」とは、逸枝の入院等で立ち回った、市川房枝の取り巻きの浜田糸衛や高良真木たちを指すものと思われます。次も、同じく志垣から静子に宛てて書かれた七月一二日のはがきの一部です。「市川女史一派の人々数人とあい、くどくど不平談をきゝました。要するに橋本君が金持ちだった事が不満の種でした」⁴。

当時志垣が書こうとしていた文は、「高群さんと橋本君」と題されて、『日本談義』の八月号（一六五号）誌上の「高群逸枝女史追悼特集」に掲載されました。内容の一部は、前章の「憲三の苦悩を共有する」においてすでに引用していますので、ここでは割愛します。一方、この特集に憲三が寄稿したのは、「終焉記」という題の文でした。内容的には、逸枝の最期の入院に至るまでの経緯について、時系列に沿ってその様子が記述されています。さらに、その雑誌が刊行された直後に、今度は「高群追悼特集に添えて」という一文を起草します。擱筆日は、八月一五日です。この文を書かねばならなかった理由について、憲三は、こう記しています。

『日本談義』（165号）高群追悼特集のなかにみえる一グループと私とのことについて、グループの方では早く志垣氏に申し込んでらいてう家で会見、一方的な談話発表が行われたそうであるが、私はまだ誰にも深くは語っていない。私からみればすでに誤謬だらけとっていい風説が伝えられており、『談義』によっても誤伝をうみそうな危惧があり、この際私からの「真実」を明らかにすることは私のつとめの一つではないかと考えられてきた⁵。

この文は、A（市川房枝）、B（浜田糸衛）、C（高良真木）、D（初見の人）、E（市川みさを）と明記したうえで、「終焉記」のなかの論争点となるにちがいない重要な箇所を一つひとつ取り上げ、それについてより具体的に捕捉し釈明したもので、かなりの長文となっています。末尾の一節を、以下に引用します。

A（市川）は私が当然にも病人の身柄一切に責任を負って個室をとったり、葬儀を正したり、死亡広告を出したりしようとすることを迷惑がっているという実感を私に与え、しばしばあなた（私）はそれでよいだろうが、自分の面目は丸つぶれだという意味のことをいわれるのだが、私はそのつどけげんに思い、考えても見るが氷解できなかった。一つの実例をいえば、私は霊安室で主治医からの解剖希望をことわった。故人は肌身を人目にさらすことを極端にきらっていたから私はそれを尊重したのである。するとA（市川）はあなたはそれでよいだろうが病院にたいして自分の面目は丸つぶれだといったものである。……

私はいま妻の霊前にぬかずいて一切のことがらをかなしく反芻し、彼女の声を聞こうとしている⁶。

市川房枝は、希代の女性史学者である高群逸枝の戦前からの後援者のひとりでした。そのため、逸枝の最期の入院に際して市川は、参議院議員という立場から、「清貧の学者」とし

て、つまりは「施療患者」に準じる者として逸枝を受け入れられないか国立東京第二病院と掛け合っていたようです。また、葬儀に要するおおかたの費用についても、自身が負担する心づもりができていたかもしれません。その前提として、市川とその取り巻きには、逸枝と憲三は乞食同然の「貧民」であるというひとつの思い込みが、疑うことなく、長年意識下で形成されていたのです。ところが憲三の口から、入院や葬儀にかかわる多額の資金が用意されていることを聞かされたのです。かくして、彼女たちがもつ暗黙の「貧民」像が崩れ落ちてしまいました。ここに、市川グループと憲三との反目の原因があったといえます。市川にしてみれば、自身が中心となってこれまで逸枝支援を要請してきた友人たちに対して、そしてまた、自身が仲介の労をとった病院に対して、「自分の面目は丸つぶれ」ということになるのかもしれません。一方の憲三は、自分の妻は、決して市川の飼い犬などではなく、であれば、なぜ自分の自由意思で妻の死に向き合うことができないのかという疑念に、裏を返せば、なぜ妻の死が他人の手によって私物化されなければならないのかという疑念に、そのときさいなまれたものと推量されます。そもそも、憲三が用意していた現金のほとんどは、入院に際して憲三の姉の藤野が、上京する静子にもたせた百万円だったものと思われます。

憲三は、「高群追悼特集に添えて」を書き上げると、この一文を、『日本談義』と一緒に、らいてうに送りました。すると、このような返事が返ってきました。

また本日は追悼号の「日本談義」ならびに委しい解説御送り頂き、早速ルンベを使って、少しずつ拝読しております。今迄一方的にのみきかされてはありましたが、私なりの解釈、受けとり方はしてありましたが、あなた様から直接いろいろかがいまして更に深く考えさせられ、遺憾に存じます点も少くありません。私もこんなに弱り込まず、今少し気力が出ましたら高群さんについて、ほんとに書きたいとおもいます。「火の国の女の日記」命あるうちに拝見したいものです⁷。

それから一〇年の歳月が流れた一九七四（昭和四九）年の七月、戸田房子の「献身」が突如として『文學界』に出現したのです。一〇年前のらいてう宅が「例の女子連」による「不平談」の場と化したように、今回の「献身」も、さながら彼女たちの怨念の吹き溜まりとなっていました。そこで憲三は、少しでも自身と妻に科せられた、いわれなき汚名を晴らすために、過去に『日本談義』に書いていた「終焉記」のコピーに、未発表のまま手もとに残しておいた「高群逸枝特集に添えて」のコピーを添付し、「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」という題をつけて、みぢかな人に配布したのでした。いまとなつては、どれだけ多くの人が過去のこの出来事を覚えていたか、そこまではわかりません。また、このふたつの文が、どれだけ汚名解消に役立ったか、それも知ることはできません。しかしながら、当時の憲三にしてみれば、一〇年もの時が経過したいまになって、再び受難に遭遇することになった妻の名誉を救い出し、その夫たる自分自身を慰謝する方法は、これ以外に残されていなかったのではないのでしょうか。かくして、「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」が、憲三にとっての最後の抗弁となりました。

橋本憲三の主治医は、近所で内科医院を営む女医の佐藤千里でした。佐藤の母の坂崎カオルは、幼き日、高群逸枝と机を並べた仲でした。佐藤は、熊本市内に住む八〇歳になる母親に聞いた話として、次のようなことを書き留めています。

逸枝さんと私は、久具尋常小學校で机を並べた仲ですたい。正確には私が逸枝さんより一年下級生でしたが、その頃の久具尋常小學校は寄田校とよばれ、一年と二年が一教室、三年と四年が一教室という小さな學校でしたけん。やっぱり机を並べとったわけですなあ。……

この小學校の校長が、高群勝太郎氏で、逸枝さんのお父さんに当たる小柄な人でした。……

それから別れ別れに何年か経ちまして。そして、その頃秀才の男女が進学するといわれた師範學校に逸枝さんも私も入學しました。

……そして一昨年機会があった水俣にある逸枝さんの墓参りをする事ができました。小高い山の山腹にある逸枝さんの墓は、夫君の書齋の窓から朝夕眺められ、ほんとうに逸枝さんらしいよい墓でした。……逸枝さんも生きとられたらもう数え八十一歳にならるつとです⁸。

今度は佐藤自身も、逸枝の墓参りをしました。一九七五（昭和五〇）年一〇月刊行の『高群逸枝雑誌』第二九号に、そのときの様子が記されています。墓前に立つ佐藤は、改めて逸枝と憲三の二人の出会いについて考えこんでしまったのでした。

男と女がひかれ合うということ、これは究極的には最も単純で原始的ともいえる反応ではなかろうかと思うのですが……高群逸枝の観音様のように可愛い口許や鼻に見とれていますと、あれだけの研究を科學的に積み上げていった天才のもう一つの面、つまり相手に何も要求しないのにしかも身も心もぴったりと夫憲三に寄り添ってしか生きられなかった一人の女性の匂やかさが伝わってくるのでした。……

森の小動物に還った逸枝は今後も夫憲三の着物の懷で小さな寝息をたてているのではないのでしょうか⁹。

逸枝が放つ香気に包まれながら、一方で佐藤は、再び二匹の森の小動物となって生きられる日が、そう遠くない時期に訪れるかもしれないことを報告したかもしれません。佐藤が、憲三の死期が迫っていることを最初に告げたのは、憲三の実の妹の橋本静子ではなく、石牟礼道子でした。

すでに第三章「一度目の滞在で逸枝と憲三に後半生を誓う」において詳述していますように、「森の家」において道子は、静子を立会人として、自身の後半生を逸枝と憲三に誓っていました。おそらく佐藤は、そのことを静子から内々に聞き及んでいたものと思われます。道子は、このように書いています。

最後の逸枝雑誌、三十一号の編集が終ってしばらくした頃、主治医の佐藤千里氏から、私は、もうあまりお互いの持ち時間がないことを具体的に知らされていた。つらいことだったが実妹の静子さんにその状態を理解してもらわねばならなかった。静子さんは東欧旅行を計画されていたが、それを中止された¹⁰。

医師はその倫理において、人の生死を安易に他人に口外することはありません。それでは、なぜ佐藤は、肉親である静子に先立って、他人であるはずの道子にまず一番に伝えたのでしょうか。それは佐藤が、戸籍上はどうであれ、また、たとえ同居はしていなくとも、道子が実質上の憲三の内縁の妻であることを、これまでの付き合いを通して、すでに知っていたからにはほかなりません。「もうあまりお互いの持ち時間がない」という表現に、そのことが十全に凝縮しているように感じられます。

編集作業が終わると、『高群逸枝雑誌』の第三一号が、予定どおり、一九七六（昭和五一）年四月一日に発刊されました。憲三にとってのおそらく最後になるであろう文が、この号の「編集室メモ」に残されました。以下はその文の一部です。

- ・私は大晦日に寝込んでしまい、一年の最後の食卓にもつけず、元日にも、10日の誕生日（79歳）にも起き上がれず、そのまま今日にいたっている。……雑誌31はこうしたなかで、かろうじて編集のみはできた。発送のことは運を天にまかせるしかない。
- ・主治医は佐藤千里先生。いつか“愛鶏日記”に取材した小説を書いて下さると。お医者さまには恵まれている¹¹。

佐藤から「もうあまりお互いの持ち時間がないことを具体的に知らされていた」道子でした。憲三の方は、遺言書という公的形式により、通夜や告別式のあり方について、そして自身の遺産の処分の仕方について、さらには逸枝の著作権の継承の方策について、実妹である静子に伝える一方で、同じくその具体的内容について、自分たちの後半生を約していた道子にも口頭で明かし、自分の意思を遺そうとしました。このころ憲三は、道子にこう告げています。

遺言を静子にしたのですよ、元気なうちにしておいた方がよいのでね。もしや重態になっても誰にも知らせてはならない。旧友たちにも、身内にも。ましてジャーナリズムなどには。葬式などはいっさいしないこと、あなたも香典などもって来てはいけません。これは守って下さい。遺物などどこかに寄贈することも考えられるが、押しつけになるから一切を土に返すこと。それらいっさいを静子に託しました。あれは実行力がありますからね。……¹²。

最後の「……」に、道子に対する重要な遺志内容が、隠されている可能性があります。もはやそれは、想像するしかありません。憲三の体に痛みが走ります。「神経痛に似た痛みが襲ってくるのです。こいつがねえ、ゲリラみたいな奴で、どこを襲ってくるやら予想がつかないんです。もう追撃できないんですよ自分では。佐藤さんは本当に助かる。痛みについて、あの人は探求心があるから」¹³。その佐藤は、「一日に二度くらい招ばれるようになっていた。彼女は逸枝雑誌の会員であり、往診ついでに雑誌の発送を手伝ってくださったりする。痛み止めが使用されているらしかった」¹⁴。

「もしや重態になっても誰にも知らせてはならない」というのが憲三の意向でした。しかし道子は、悩みながらも、「静子さんには内密で、朝日評伝選に高群逸枝を執筆予定

の、鹿野政直、堀場清子夫妻に緊急事態がせまっていることを連絡した」¹⁵のでした。道子は、こう記します。「五月十八日、昨夜鹿野夫人二十時二十三分『有明』でおみえ。間にあってよかった。今朝の御面会より結果であればよいがと思い、時間をずらしてゆく。十一時お見舞い。……五月二二日……朝十時半ごろ、鹿野政直先生もおみえ、間に合われた。ご夫婦で橋本邸へ。おともする。静子さん枕元にいらして先生おめざめ。ちょうど痛みが去っていて、ご夫妻にごあいさつがおできになる」¹⁶。

そのとき憲三は、ベッドのなかから、こう語りかけました。それは、妻逸枝への最後のメッセージとなるものでした。

「放蕩無類のぼくを（そこでちょっと苦笑して）いや、放蕩はしませんでした、よくここまでにして下さいました」

かたわらから静子さんが、「それはあの、鹿野先生におっしゃったのですか」とたしかめられた。

「いいえ、彼女にいったのです」¹⁷

こうした会話もありました。その部分を、鹿野と堀場は、のちに「朝日評伝選一五」として上梓した『高群逸枝』の「あとがき」のなかで、公開しています。

橋本憲三氏の死にようは、はればれとして、うつくしかった。亡くなる前日の午ごすこし前、私達は氏と長い握手をしてお別れした。死に臨んだ人とはとても思えない、力強い握力が心に残った。その時、こんなやりとりがあった。

「なにもかもおみせしました。『路地裏日記』も、『共用日記』もおみせした。三分の二がたは、ぶちまけた」。

「まあ！まだ三分の一も、とっていらっしゃるんですの？」

一座の笑い声がひびく中で、氏はいわれた。

「人には誰しも、他人にみせられない恥部があります。……必死の防衛だ」¹⁸。

他方、そのころ、憲三は道子に対して、こう語りかけています。

秋晴れのよい日でしたね。あなたの古典的なあのお家にお伺いしたのは。かつてないことでしたが。ちょうど一〇年です。あれから。彼女が出発した頃にうりふたつでしたよ、本棚もなんにもない、しかし、本が二、三冊あって。うっかりすると世間にいられない孤独な姿で……¹⁹。

明らかにこのときの憲三の脳裏には、一〇年前の一九六六（昭和四一）年の美しい秋晴れの日の出来事が映し出されています。第四章「憲三と道子の水俣への一時帰省」において言及していますように、これが、静子を同伴させての二度目の石牟礼邸訪問でした。この日憲三は、東京の「森の家」をこれから解体するので、その様子を見ておいてほしい旨のことを申し出たのでした。しかしこれは、居場所を失っていた道子を救い出すための方便でもありました。九月、それぞれにふたりは水俣を出て、「森の家」へと向かいます。

二度にわたる憲三と道子の「森の家」での共同生活は、静子の深い配慮のもとに実現しました。まさしく静子は、洞察力にあふれる縁結びの神女の役を担っているのです。逸枝没後の憲三、道子、静子の三人が共有する秘め事は、おそらくは女医の佐藤を除けば、誰も知ることはなかったものと思われます。臨終に際して憲三は、「うっかりすると世間にいれられない孤独な姿で……」といった言葉で道子を形容していますが、続く「……」に相当する部分の文言を知るのは、道子しかいません。このときふたりは、この間の自分たちにとっての愛と孤独の実相について、問わず語らず、まさしく恥じらいながら、手を重ねるかのようにして、触れて確かめあったにちがいません。

それでは憲三が鹿野政直と堀場清子に最後に語った「人には誰しも、他人にみせられない恥部があります」の意味は、一体何だったのでしょうか。想像するにそれは、恥ずかしくて人には簡単に話せない、あるいは、話しても容易に理解してもらえない、自分と道子とのあいだに生成した、傷を負った生身の人間の深淵なる再生にかかわる、あまりにも美しいがゆえに秘すべき男女の物語だったのではないかと思料します。他方、憲三が使った「必死の防衛」という言葉は、誰からの詮索も受けず、いわれなき罵声も耳に入れることもなく、ひたすら、悲しくも人が秘めるにふさわしい美しいままの物語の姿で、次の世で待つ逸枝のところへもってゆきたいという願いが表出された響きであるかのように、私には伝わってきます。この推論が正しければ、憲三がそれまでに鹿野と堀場に語っていた三分の二の部分とは、おそらくそのとおり、逸枝についての話であり、残る三分の一は、言わずもがな、道子との人間愛が生み出した内密物語の部分であったということになるのではないのでしょうか。鹿野夫妻と憲三との会話を横で聞いていた静子と道子のふたりは、そのことを十分に理解していたものと推量されます。

鹿野と堀場が、部屋を出て、帰路につくと、いよいよその時が迫りました。

「寒椿が」

「はい……」

それは最後のおことばだった。静子さん上がっていらっしゃる。

佐藤先生がおみえ。朝日出版局（評伝選の係）の宇佐美さんご到着、五時頃。白菊を持って濡れておいでになる。それで雨が降っているんだと思う。もう、お話がおいでにならない。

七時頃うすぐらくなり、先生の呼吸、ハーッ、ハーッと深く長くなる。

静子さんこの十日間ほとんどお睡りにならない。……

佐藤さん、午後からほとんどつきっきり、いよいよフェルバピタール打たねばならぬようになったようですとおっしゃる。お悩みのご様子。

先生のお姉さんの藤野さんが、若主人におんぶされておいでになる。そしておんぶされたまま肩越しに、よく透る声で、

「憲さあん、憲さあん！姉さんが面会に来たばあい。もう、もの言わんとなあ」

とおっしゃる。そのお声の愛情、哀切かぎりなく、先生の寝息と交互に、

「おお、思うたより、やせちゃおらんなあ。憲さあん、うつくしゅうしとるな」

静子さんも佐藤さんも髪ふりみだしている、たぶん私も。徹夜²⁰。

道子の述懐は、続きます。

五月二十三日、先生こん睡さめやらず。深い呼吸続く。十二時頃ちょっと帰宅、ある予感持ちながら。追っかけるように佐藤さんから電話で、五十分でした。ダメでしたと²¹。

ここで死去の電話を入れたということは、これもまた、道子が実際上の喪主であることを佐藤は承知していたことを例証します。

こうして女三人による懸命なる手厚い看取りのもと、憲三は帰らぬ人となりました。最期の兄の姿に接しながら、静子は道子に、かくのごとくに心情を吐露します。

涙も出ないんですよ。この心の底の方にある悲しみは、病気ではないでしょうか。正常なんではないですか、涙も出ないんですよ。なんという人でしょうねえ、この兄は。こんなにうつくしくなっている人は²²

次は、佐藤の回想です。「やっと逸枝のもとに旅立った憲三の両手を組み合わせてやりながら、手の甲に私が無残につけた注射のあとが目にとまったとき、それまで張りつめていた肩の力が、一時にどっと抜けていくのをどうしようもなかった」²³。

そして、道子の回想も、ここに残しておきます。

一人の妻に「有頂天になって暮らした」橋本憲三は、死の直前まで、はためにも匂うように若々しく典雅で、その謙虚さと深い人柄は接したものの心を打たずにはいなかった²⁴。

憲三、享年七九歳。遺された静子は、六四歳、道子は、四九歳でした。その後のみんなの行動について、後年静子が、次のように語っています。

兄憲三の末期は、妹の私が看取りましたが、私は遺族を代表して服装をととのえて、五社の新聞社のインタビューを受けました。インタビューには、最後を看取っていただきました佐藤千里様（主治医、「詩と真実」同人）、逸枝のことを調べてくださっていた石牟礼道子様、朝日新聞東京本社宇佐美承様のお介添えをいただきました。……兄の遺言書の第一條に「葬式ごとは一切しないこと」とあり、前記の御三方と親族が集まりまして、おくりのまつりごとをしました。兄の居室に柩を据え、兄夫婦の写真と献花を飾り、以前に「西日本新聞」でとられている兄夫婦のテープの声を聞きました。……ビールを開けての会食となりました²⁵。

一九七六（昭和五一）年五月二四日、『熊本日日新聞』の一五面は、以下のとおり、憲三の死を一報しました。

橋本憲三氏（高群逸枝雑誌編集責任者）二十三日午後零時五十分高血圧性心不全の

ため水俣市幸町六―の自宅で死去。七十九歳。球磨郡球磨村一勝地出身。

大正八年、「女性史学」の高群逸枝と結婚。彼女の死後（昭和三十九年）に高群逸枝全集（全十巻）を編さんし、昭和四十三年から「高群逸枝雑誌」（季刊）を発行し続けてきた。同雑誌は 31 号（四月一日発行）で廃刊される。

葬儀、告別式は本人の遺言で行われない。

続く『熊日』の第二報は、「『高群逸枝雑誌』が終刊 31 号 夫・橋本憲三さん死去で」の見出しで、五月二五日四面に現われました。

同誌は橋本さんが高群女史の死後、四十三年十月から発行している小冊子。……高群女史に一生をささげた橋本さんにとって、雑誌の編集は死後の妻に対する思慕でもあった。そのため発行形式も「有料広告不載、カンパ辞退、不足分は高群著作印税で補う」という純粹さだった。

わずか三十ページ前後の小冊子だが高群逸枝伝「最後の人」（石牟礼道子）のほか柳田国男と高群女史の比較研究などが掲載され高群研究者にとっては欠かせない雑誌となっていた。発行部数は当初五百部、その後一千部に増やされた。限定版のため、東京などでは同誌の“海賊版”も出ていた。……

橋本さんの実妹、橋本静子さん（六四）は「兄の死で終刊になるのはやむを得ません。雑誌は夫婦の愛から生まれたもので、兄の死で終わるのが自然だと思います」と話している。また作家石牟礼道子さんも「ほかの人がやっても意味がありません。終刊するのが遺志に沿ったものだと思います」と言っている。

さらなる続報として、「故高群逸枝さん夫妻の遺稿 水俣市立図書館『洪水文庫』に寄贈」という記事が六月一日の四面を飾ります。

贈られたのは高群さんのデビュー作「日月の上に」（大正九年、新小説発表）の元原稿をはじめ「女性の歴史」（一―四巻）、『招婿婚の研究』（一―六巻）などの原稿。それに「たつぷりとあまいいのちに身をやつし花と一枝 酒を一壺なり」という高群さんの直筆の書三点やアルバム五冊の計二十六点。……

橋本さんがさる五月二十五日^{マモ}死亡して以来、遺族は残された遺品の処置を検討していた。橋本さん自身の遺言もあって大部分の蔵書は高群さんを研究している早大文学部の鹿野政直教授などの研究者に渡される。

一九六四（昭和三九）年六月七日に亡くなった高群逸枝の一三回忌を前にして、六月五日の『熊日』は、「“高群時代” にひとつの帰結 逸枝・憲三夫妻を追悼、足跡をたどる」（一〇面）と題して特集を組みました。そのなかに、佐藤千里が寄稿した「激痛のなかでの雄々しく闘病 橋本憲三氏の最期」を見ることができます。

「……貧しさや世間の悪意の前にはくじけずがんばったつもりですが人生の終わりになって肉体の痛みという思わぬ伏兵に襲われてしまって……。僕にもどうか人間の威

厳というものを保たせて下さい」

こう語りかける憲三氏の優しいながらも射るような視線の前で、あの時の私はまったく無能でぶざまな姿をさらしていたように思われるのです。……

「あなたは僕たち夫婦のことを森の小動物の一目惚（ぼ）れとからかったが、まったく今になってみると、僕は単に運がよかっただけかもしれない」

この憎らしいほど幸福な男の科白（せりふ）が、結局、憲三氏と私の最後のやりとりになってしまいました。

かくして、「貧しさや世間の悪意の前にはくじけず」、「威厳」を保ちながら、「森の小動物」の残されていた一匹も、先の一体のもとへと隠れたのでした。

亡くなる二日前、憲三は、道子に、こういいました。

コップがふたつありましてね、ひとつの方には生命がはいっているんですけれどね。

もうひとつの方に真理をいれようとするんですけど、そいつがね（微笑して）なかなか、うまくはいらないんですよ²⁶。

ひとつのコップに「生命がはいっている」とは、自分の死を受け入れたことを意味し、もうひとつのコップに真理が「うまくはいらない」とは、「世間の悪意の前には」どうしても自分の真実が伝わらない、その苦しみを言い表わしているのかもしれませんが。

憲三が死去すると、新聞や雑誌に、その死を悼む文が多数寄せられました。ここでは、鹿野政直と石牟礼道子の事例を紹介します。

鹿野の追悼文は「女性史学を支えた人 橋本憲三氏の生涯」と題するもので、六月七日の『朝日新聞』夕刊五面に掲載されました。そのなかで鹿野は、憲三をこのように評しました。

わたくしは橋本氏に会って、氏がじつに編集者的な感覚に富んでいるのを発見したが、有能であったにちがいないその仕事をすてて、妻の仕事のささえ手にまわった。家事を一切ひきうけたばかりでなく、資料さがしにでかけ、生活設計をし、研究の方向に助言をあたえ、妻のかいたものの最初の読者となり批判者となった。さらに、おしよせる世間のまえに、一人でたちはだかった。彼女の作品には、今日ふつうに思われているよりはるかにふかく、その夫がかかわりあっている。橋本氏の編集者的な才能はその妻に向かって集中し、彼女のプロデューサーになった、というのがわたくしの観測である。

そして末尾を、以下の文で締めくくるのでした。

こういう生涯があったということに、やはりわたくしは、大正期のデモクラシーの機運の一端をみとめずにはいられない。そうして氏は、日本女性史に少なからず貢献をなしたげたのだった。と同時に、もし日本男性史というものが書かれるとしたら、橋本氏は、既成の男性像を身をもって否定した人間として（否定のかたちは、必ずしもそれが唯一ではないにせよ）、いわば「新しい女」にたいする「新しい男」として、位置づけられるのが至当ではなかろうかと、わたくしは、氏をいたむ念とともに夢想する。

この文が『朝日新聞』に載ったのは、奇しくも逸枝の一三回忌に当たる、その日のことでした。二週間前に逸枝のもとに逝った憲三、そして逸枝は、これをどう読んだのでしょうか、「氏をいたむ念とともに夢想する」ほかありません。

道子の追悼文は、この年の『婦人公論』一〇月号に現われました。「橋本憲三先生の死」と題されたこの文は、表題のとおり、憲三の臨終の様子を再現する描写によって成り立っています。

じっさいこの先生を見ていれば、ご臨終までの経過には上代的ロマンとでもいうべきものが漂っていた。実妹の静子さんは、

「たのしかったですね、兄の死につきあったことは」

と美しいまなざしをされる。わたしきたら、ご生前から『最後の人』と題をつけてノートを書きはじめ、見てもらっていた。死に近づいてゆく先生の心理描写がそこにはいついて、読んでもらったあと、「どんなご感想をお持ちですか」とおききすると、先生は父性的なお顔になられて、

「たいへんにおもしろいなあ」とおっしゃるのであった²⁷。

この間道子は、「最後の人」を『高群逸枝雑誌』に、「椿の海の記」を『文芸展望』に、並行して連載していました。憲三が亡くなったことにより、『高群逸枝雑誌』は第三一号をもって終刊となりました。『高群逸枝雑誌』第三一号と「椿の海の記」の最終回が掲載された『文芸展望』第一三号とは、ちょうど同じ、一九七六（昭和五一）年四月一日に発行されます。それは、憲三が死去するおよそ一箇月前のことでした。そのようなわけで憲三は、『高群逸枝雑誌』の第三一号に掲載された「最後の人 第十八回 第四章 川霧1」も、『文芸展望』第一三号に掲載された「椿の海の記（最終回）」も、襲ってくる激痛のなかにあって、何とかともに、目を通すことができたものと思われます。

しかし道子は、「最後の人」をすぐにも単行本にして、世に送り出すことはありませんでした。最後まで大事な「最後の人」を秘して自身の胸にしまい込もうとしたのかもしれませんが、つまり、一八回にわたり連載されたこの文は、思うに、道子から「最後の人」への密かなる恋文だったようです。「最後の人」が一冊の本になるのは最晩年のことで、このなかで道子は、自身の「最後の人」が橋本憲三であったことを告白するのでした。

注

（1）村上信彦「私のなかの高群逸枝8」『高群逸枝雑誌』第25号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1974年10月1日、18頁。

（2）同「私のなかの高群逸枝8」『高群逸枝雑誌』第25号、18-19頁。

（3）橋本憲三「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、22頁。

（4）同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、同頁。

（5）同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、21頁。

(6) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、38-39頁。

(7) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、22頁。

(8) 佐藤千里「寄田校の頃〈坂崎カオル聞き書き〉」『高群逸枝雑誌』第24号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1974年7月1日、11-12頁。

(9) 佐藤千里「墓参り」『高群逸枝雑誌』第29号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1975年10月1日、15頁。

(10) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会(編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第15号、1977年春季号、56頁。

(11) 橋本憲三「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』第31号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1976年4月1日、26頁。

(12) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、56-57頁。

(13) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、59頁。

(14) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、同頁。

(15) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、57頁。

(16) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、61-62頁。

(17) 石牟礼道子「橋本憲三先生の死」『婦人公論』第61巻第10号(第725号)、1976年10月、67頁。

(18) 鹿野政直・堀場清子『高群逸枝』(朝日評伝選一五)朝日新聞社、1977年、327頁。

(19) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、62頁。

(20) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、63-64頁。

(21) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、64頁。

(22) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、同頁。

(23) 佐藤千里「優しきめぐり会い 逸枝と憲三と私」『西日本新聞』1976年8月5日、11面。

(24) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、53頁。

(25) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、8頁。

著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——石牟礼道子の「最後の人」との契りから道行きまで
第五部 橋本静子とともに最期の憲三に寄り添う
第一二章 憲三の臨終を看取る

- (26) 前掲「橋本憲三先生の死」『婦人公論』第61巻第10号(第725号)、67頁。
(27) 同「橋本憲三先生の死」『婦人公論』第61巻第10号(第725号)、同頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第六部

遺された静子と道子の苦界浄土

第一章 生前の逸枝の「恋愛事件」を暴露する私家版本の登場

逸枝を中心とする無産婦人芸術連盟が結成されたのは、一九三〇（昭和五）年の一月でした。構成員は、伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ子、高群逸枝、野副ますぐり、野村考子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鑑田貞子の一四名。そして、続く三月に、この結社の機関誌となる『婦人戦線』が創刊され、それは、翌年（一九三一年）六月刊行の第二巻第六号まで続きます。

創設同人のひとりである松本正枝もこの雑誌に論考を寄稿します。しかし、憲三は、「松本さんの『婦人戦線』論文はほとんど（あるいは全部）延島さんの代筆。たぶん住井すゑさんはご存知でしょう」¹と書いていますので、松本はこの雑誌の活動にほとんど加わっておらず、実質的には、夫の延島英一が関与していたことになります。これが、『婦人戦線』を巡るおおかたの環境でした。

それから四〇年以上の時が経過しました。ところが、事もあるうに松本は、逸枝と自分の夫の延島がその当時恋人関係にあったことを、小説家の瀬戸内晴美に暴露したのです。

それを聞いた瀬戸内は、自身の『談談談』で、政治家の小沢遼子と中山千夏を相手に、こう書いていますので、以下に引用します。

瀬戸内 ……だから私は男性で、内助の夫の系列というのを書こうと思って、岡本かな子と一平、高群逸枝と橋本憲三がいいと思って水俣へ行ってみたの。ところがだんだんいろんなことがことがわかってきてね。仲がいいかと思っていたら、その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって。

中山 普通との反対みたいね²。

瀬戸内が水俣の憲三宅を訪ねたとき、本当に憲三は、このようなことを瀬戸内に話したのでしょうか。「共用日記」によれば、憲三が瀬戸内に会ったのは、一九七三（昭和四八）年の二月一日のことで、このときがはじめてです。しかも、面談したのは、午後の八時三〇分から一〇時五〇分までの二時間と二〇分です。「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」といった内容のことを、憲三が初対面の瀬戸内に二時間余の短い会話のなかであって語ったとは、にわかに信じることはできません。

続けて瀬戸内は、小沢と中山に対して、こんなことも話題にします。

瀬戸内 ……きのう私が訪ねて行ったおばあちゃまのところできいてみたの。「婦人戦線が潰れたところがよくわからないんですけど、逸枝さんはよく聞いてみると、男を作って、しょっちゅう逃げ出していたそうですが、ほんとうですか？」「ええ、ほんとうですとも。われわれの時代のアナキストは恋愛に対してもアナーキーで、逸枝さんはそれを実行なさいました。人の亭主でもなんでもおかまいございませんの」「だれか逸枝さんの相手で覚えている方ございませんか？」「はあ、ございませとも」そのおばあさ

んはそれからちょっと出ていってお茶を入れて、「うちの人です」（笑い）。
小沢・中山　へえー（笑い）³。

瀬戸内は、「きのう私が訪ねて行ったおばあちゃまのところできいてみたの」といっていますが、この「おばあちゃま」というのは、たぶん松本正枝のことでしょう。そして、瀬戸内は、小沢遼子と中山千夏を相手にしたこの対談について、「本書のための語り下ろし 昭和四十八年五月十日赤坂にて」⁴と書いています。それであれば、「おばあちゃま」を訪ねたのは、前日の五月九日で、水俣訪問から約三箇月後のことになります。そこから類推しますと、「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」と語ったのは、憲三本人ではなく、松本その人だったものと思われます。

瀬戸内の『談談談』が世に出たのは、一九七四（昭和四九）年二月です。憲三がこの本を手にしたのは、それから半年後のことでした。といいますのも、八月七日と翌八日の憲三の「共用日記」に、次のような文字が書き込まれているからです。

八月七日「石牟礼氏に電話。夕方みえる。みやげものもらう。お茶も。10時に辞去。
辺境五と瀬戸内氏の談談談をもらう。睡眠薬服しすぐ就寝」。
八月八日「けさ、談談談を散見したら、一項目、さんたんたる事実無根の記事あり。…
…」⁵。

こうして憲三は、瀬戸内の『談談談』に事実無根の記述を見出すのでした。昨日人から聞いた醜聞を、真偽を確かめることもなく、さもおもしろそうに他人にいいふらし、さらにそのうえに、それを自慢げに文字に書く、瀬戸内晴美という作家に対して、憲三は、強い不信感を抱いたにちがいありません。

『談談談』における「事実無根の記事」を読むおよそ五箇月前の、一九七四（昭和四九）年三月二六日に憲三は、同じく瀬戸内が書いた「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載された『文芸展望』（筑摩書房）の五月号を手にしました。そしてその二日後に、記述内容を疑問視する憲三は、はじめて瀬戸内に手紙を書くことになります。

それでは、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」には、どのようなことが書かれてあったのでしょうか。憲三の瀬戸内宛ての反駁の手紙は、手紙としては実に長大なもので、そのなかで、「……というのはちがいます」「……混同ではないでしょうか」「……といったおぼえはありません」「……のことは私はしりません」「……全く考えられないことです」などといった表現を使って、幾つもの誤謬を指摘するのですが、そのうちの最大の核心部分は、『婦人戦線』のころの同人であった松本正枝（本名は延島治）が、逸枝の恋人が自分の夫の延島英一であったことを、聞き手の瀬戸内晴美に語る、次の場面でした。

逸枝の印象を訊くと、
「そうですねえ」
と、ちょっと遠い所を見る目つきをして、

「とにかく変わった人でしたから」
といい、口辺に微笑とも苦笑ともとれる笑いを浮かべながら、
「あの人はアナーキストでしたからね……恋愛もアナーキーに実践なさいましたよ」
という。
「ということは、橋本さんの他に恋人がいたということでしょうか」
「ええ、アナーキーな恋ですから」
「その頃の恋の相手の方を御存じでいらっしゃいますか」
正枝さんは、小さな肩をちょっと落とすようにして、ふっと座を立つと部屋を出て
いった。玄関のつきあたりにあった炊事場でお湯をわかしてきた薬かんをさげてほど
なく部屋にもどってきた人は、白い柔和な表情で、またふっと軽く微笑して坐りなが
らさりりといつてのけた。
「存じておりますとも」
さっきの話のつづきのつもりらしい。
「うちの主人でしたから」⁶

さてそれでは、本当のところ、逸枝と英一の関係はどのようなものだったのでしょうか。
それを解き明かす証拠となる一次資料、たとえば、双方の当時の日記や書簡類が残されてい
ないようですので、断定することはできません。それにしてもなぜ、どのような事情があっ
て松本正枝という女性は、真偽は別として、かくも簡単に自分の夫の過去の品行を他人に打
ち明けたのでしょうか。他方、それにしてもなぜ、どのような判断があつて瀬戸内晴美とい
う作家は、必ずしも真実とは限らない正枝の発話をそのまま信じて、自分の文にやすやすと
取り入れたのでしょうか。疑問が残ります。

しかしながら、瀬戸内自身は、正枝をこう評価していますので、以下に引用します。

正枝さんの話し方は決して逸枝さんと夫との情事を非難しているふうではなく、過
去の事実として語っているという感じを受けたし、高群逸枝という天才女人の多面的
な性格の説明にはなっても、逸枝の人格の瑕瑾として感じるような話し方ではなかつ
た。

ユーモラスで皮肉なことを、全く飄々とした顔でいつてのけるのは、この人の天性の
ものか、晩年身につけたものかわからなかったが、私には好感が持てた⁷。

瀬戸内は、はっきりと、ここで「情事」という言葉を使って、逸枝と延島を関係を断定し
ています。明らかに瀬戸内は、事前に憲三に確かめることも、何か別の資料に当たることも
なく、ひたすら正枝の語りに好感を寄せているのです。つまり、伝記執筆に必要とされる、
事象にかかわるクロス・チェックがなされていないのです。一方、憲三にとって、「日月ふ
たり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」は、自分の認識とは程遠い記述が至る所で散
見される内容となっており、憲三はこの文を、ペンが剣に変貌した一種の凶器として、心身
が震える思いで受け止めたのではないかと推量されます。

「この写しはあなたに参考にしていただこうと、氣息えんえんながら起きて書いたもの
です。雑誌にいつかのせる気になるかも知れないとの潜在意識もあつたらしくて」⁸と書き

添えて、憲三は、この手紙のコピーを道子に託します。事実その手紙は、「瀬戸内晴美氏への手紙」という題で、憲三の死後四年が立った一九八〇年一二月に刊行された『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）において、実際そのとおりに、公開されることになります。疑うことなくこれは、憲三から道子に手渡された遺言書に近いものでした。憲三の無念は、彼を慕う、静子の無念でもあり、道子の無念でもあったのです。

こうして憲三は、一九七六（昭和五一）年の五月、静子と道子の必死の看取りのなかにおいて息を引き取ります。それから四箇月後の九月、今度は、『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』と題された私家版本が、世に出るのです。そのなかに、松本正枝の「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」という一文が掲載されていました。そこには、次のように、「高群逸枝のある恋愛事件」が活写されていました。

ラブレターを先に女性から手渡されてどうして男性がそれを受けないでいられましょう。「据膳食わぬは男の恥」という言葉を英一が教えられたのはその時だったでしょう。思想的に大いに共鳴しあいしかも肉体的に喜びを分かちあえる友はそうざらにいないでしょう。彼女は橋本氏にないものを彼に見出したのでしょう⁹。

こうして、自分の夫の英一と逸枝のあいだに、肉体関係があったことを、誰にはばかることもなく、明言するのです。そして、瀬戸内の「日月ふたり」については、次のように言及します。

一つの事件を三人三様にいい立てるのですから、「日月ふたり」を文芸展望に発表されて橋本氏を高群氏という素材を名器に仕上げた人と評する瀬戸内さんの多大な研究・取材は実に大きいと思います¹⁰。

最後にこの文を、松本はこのような言葉で結ぶのです。

故人となった高群氏の「婦人戦線」時代を高く評価する人々、反面「実り少ない時期であった」と過小評価する、むしろ否定する橋本氏。しかし、高群氏をあの当時私が尊敬していた事、また今でも尊敬している事はわかりありません¹¹。

松本の「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」が所収された『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』が私家版本として公開されたのは、一九七六（昭和五一）年九月でしたので、逸枝の死去（一九六四年六月）からすでに一二年が立っていました。他方、憲三の死去（一九七六年五月）からは、まだ四箇月しか立っていません。なぜこの時期の出版になったのでしょうか、そして、その出版目的は一体何だったのでしょうか。

私家版本ですので、店頭での販売はなされなかったものと思われます。しかし、海賊版も出るほど『高群逸枝雑誌』は好評でしたので、かつての購読者から静子か道子にこの本が送られてきたかもしれません。もっとも、ふたりがこれを目にしたことを示す資料は残されて

いません。それでも、もし読んでいたとするならば、ふたりの胸中はいかななものだったでしょう。死者といえども、守られるべき尊厳も人権もあるはず。憲三を亡くし服喪のさなかにある兩人には、耐えがたいものが残ったものと推量されます。

のちに女性史研究者の堀場清子は、『婦人戦線』の同人であった住井すゑに、『婦人戦線』における松本正枝名の論考は、自伝特集号の際の文以外はすべて延島英一の代作であったことを確認したうえで、自著の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』のなかで、次のように自身の見解を述べていますので、ここに紹介します。

〔『解放戦線』は〕延島英一の主宰で、解放社から5冊まで出た。逸枝は毎号力作の論文を寄せ、その高揚感から、英一との間に稀有の思想的共鳴があったと感じさせる。彼の妻松本正枝（本名延島治）は、1970年代になって瀬戸内晴美氏に、『解放戦線』は「二人の恋の記念碑」と語り、故事を白日の下に曳き出した。二人が「恋愛関係」だったか否かを、私は審かにしない。……英一の側に恋愛感情のあったのは事実であろう。

『婦人戦線』最後の2冊（2巻5号・6号）の「松本正枝」書名の論文は、あげて高群攻撃である。振られた男の恨み節とでもいうべきか。それにしても、代作によって『婦人戦線』同人になっていた（晩年に至るも同様の姿勢だった）、延島治という人の心理が、私には解りにくい¹²。

しかし、『高群逸枝の生涯 年譜と著作』が出版されるのは二〇〇九（平成二一）年の六月のことで、すでに前年の四月に静子は亡くなっていました。

私は、第九章において瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」を取り上げ、この小説が、いかに存命中の憲三を苦しめたか、その様子について書き記しました。それでは、それにかかわって、憲三が亡くなったのちの瀬戸内の行動は、どのようなものだったのでしょうか。瀬戸内の交友録である『人なつかしき』（筑摩書房、一九八三年）のなかの「『日月ふたり』のひとり 橋本憲三」における記述内容に、それを求めたいと思います。瀬戸内の水俣訪問の年月は特定できませんが、憲三が没して、数箇月から一、二年ほどが経過した時期ではないかと推量されます。したがって瀬戸内は、松本正枝の「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」を読んでいたにちがいません。

憲三氏があんなに早く亡くなるとは思っていなかったもので、その訃報に接した時はショックであった。何より、あれほど気に病んでいた憲三氏の疑いを、きっぱりと晴らす努力をしないまま憲三氏に逝かれたことが辛かったし、悔やんでもたりない後悔に臍を噛まされる思いであった。

私はやはり「日月ふたり」を最後まで書きあげるべきだと思った。そうすることで、憲三氏のこの世で最も気にいられた事柄の答えが出るだろうと考えた¹³。

瀬戸内がここで、「あれほど気に病んでいた憲三氏の疑い」といっているのは、逸枝と延島とのあいだにあったとされる、瀬戸内が書くところの「情事」のことでしょう。瀬戸内は、連載五回目の「日月ふたり（最終回）——高群逸枝・橋本憲三」の末尾にすでに「（了）」の文字を付していたのですが、どうやらここへ来て、それを再開する気持ちになったようで

す。瀬戸内の文は続きます。

私はおくれればせながら水俣へ出かけ、憲三氏のお悔やみを静子さんに申しあげた。静子さんはとても喜んでくれて、全くおもしろくないことを私に申しつけられた。憲三氏の戒名をつけてくれといわれるのであった¹⁴。

瀬戸内は何を目的に、水俣まで足を運んだのでしょうか。「『日月ふたり』を最後まで書きあげる」意思があることを、わざわざ伝えるためだったのでしょうか。静子は、「日月ふたり」の連載に、憲三がいかに苦しんでいたのかをみぢかに知っていたにちがいありません。したがって、もし、そうした意向を示すために来水したのであれば、静子は決して「喜んで」瀬戸内を迎え入れることはなかったろうと思われます。あるいは、そのとき本当に静子が「とても喜んで」応対したのであれば、瀬戸内は、自分が書いた「日月ふたり」が憲三を苦しめたことに対しての弁明ないしは謝罪のために来たのかもしれませんが。瀬戸内は、静子が「憲三氏の戒名をつけてくれ」と要請したように書いていますが、しかし、もし自分の罪滅ぼしのために弔問に訪れたのであれば、瀬戸内自らが戒名を申し出た可能性が残ります。静子の書く文のなかにも、戒名のことに触れた箇所があります。「兄の遺言書の第一條に、『葬式ごとは一切しないこと』とあり……そういうことでしたので、兄には法名がなく、のちにおまいりをいただいた瀬戸内寂聴様をお願いして、贈っていただいております」¹⁵。しかしながら、兄の遺言を忠実に守ろうとしていた静子本人が、瀬戸内に戒名を願い出るとは、とても考えられません。そこで推測するのは、戒名がないことを静子から聞かされた瀬戸内の方から、憲三に与えた不快感を償うために、戒名を申し出たのではないかということです。そのとき静子は、遺言を理由に、おそらく固辞したにちがいありません。それでも、遠路わざわざ弔問に来た客の申し出をむげに断わることもできず、つい受け入れてしまったというのが真相で、「瀬戸内寂聴様をお願いして」の「お願いして」というのは、瀬戸内の厚意に配慮して、あえて自分が「お願いして」いるようにみせかけた、一種の擬態的な謙譲表現ではないかというのが私の考えるところです。

瀬戸内の文は、さらにこう続きます。

私は母屋の仏間に通されて、心から読経し、世にも不思議な稀有な愛に結ばれた夫妻のために回向した。

私は静子さんに「日月ふたり」を必ず完成すると誓った¹⁶。

しかしながら、「日月ふたり」の執筆が再開され、完成した形跡はありません。これも、極めて不可解なことです。「必ず完成すると誓った」意思の弱さ、あるいは言葉の軽さだけが残ります。水俣訪問の様子は、次のような語句で終わります。

最も感動したのは、憲三氏の生家で憲三氏の御祖先の仏壇の前に坐った時であった。橋本家の人々の大らかさとあたたかさは、静子さんではほぼ想像できたが、橋本家の方々にお逢いして、いっそうそれが橋本家の家風から生まれるものだということを納得したことであった。この家族だから、逸枝のような人物が受け入れられたのだとうなずけた。

神経質な憲三氏だけが、ひとり際立っているように感じられた¹⁷。

やはり瀬戸内にとって憲三は、理解を超えた異質な人間だったのでしょう。あるいは、そうした憲三像を意図的につくり上げることによって、「日月ふたり」を「(了)」とした原因に仕立て上げようとしたのかもしれませんが。瀬戸内は、「神経質な憲三氏だけが、ひとり際立っているように感じられた」と書きます。しかし、憲三と藤野の主治医として橋本家の人たちと日常的に接していた佐藤千里は、以下のように、藤野に愛された憲三の姿を描写します。

〔藤野は〕ここ十年余り、腎性高血圧で床に臥っていたが、床の中から家族や従業員の一人一人にまで気を配る様は、憲三がよく口にしていた「家刀自」の呼称がぴったりだった。

ふじのは、殊の他この弟を愛していたらしく、危篤の憲三を、家人の背に負われて見舞った時、「憲さーん、憲さーん、がん張らんばなあ」としぼるような声で呼びかけていた様が、私には昨日のように思い出される¹⁸。

藤野も、静子も、道子も、みな周りの女性たちは、憲三を愛していました。「神経質な憲三氏だけが、ひとり際立っているように感じられた」といった瀬戸内の観察を立証するにふさわしい資料（エヴィデンス）は、調べる限り、残されていません。

瀬戸内は、「橋本家の方々にお逢いして」と書きますが、訪問の年月については、何も述べていません。もし、藤野の存命中であれば、「橋本家の方々」は、静子と藤野を指すでしょう。しかし、藤野は、「腎性高血圧で床に臥っていた」にちがいがなく、瀬戸内と会話ができたかどうかは不明です。もし会話ができていたとしても、藤野が、「神経質な憲三氏だけが、ひとり際立っているように感じられた」という印象を瀬戸内に与えるようなことは、まづなかったのではないかと思います。他方、すでに藤野が他界していれば、応対したのは、「橋本家の方々」ではなく、静子ただひとりということになります。そのようなわけで、「ひとり際立っている」神経質な男として憲三を見る瀬戸内のまなざしは、極めて異質、あるいは異常としかいいようがありませんし、そうしたまなざしは、このとき、間違いなく静子にも伝わったものと思われます。

おそらくこの間、「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」のみならず、瀬戸内の『談談』における憲三についての描写それ自体についても、静子は、兄の怒りを自分のものとして受け止め、大いなる不満を抱き続けていたものと想像されます。といいますのも、道子が預かっていた瀬戸内宛ての憲三の手紙が、『高群逸枝雑誌』の終刊号において、いよいよ公開されることになるからです。それについては、次の第一四章「もろさわようこの『高群逸枝』とそれへの静子と道子の反論」において、触れてみたいと思います。

注

(1) 橋本憲三「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、59頁。

- (2) 瀬戸内晴美『談談談』大和書房、1974 年、②⑥頁。
- (3) 同『談談談』、同頁。
- (4) 同『談談談』、②④頁。
- (5) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009 年、186 頁。
- (6) 瀬戸内晴美「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」『文芸展望』第 5 号、1974 年 4 月号、424 頁。
- (7) 瀬戸内晴美『人なつかしき』筑摩書房、1983 年、69-70 頁。
- (8) 前掲「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、52 頁。
- (9) 松本正枝「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』私家版（国立国会図書館デジタルコレクション）、1976 年 9 月、31-32 頁。
- (10) 同「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』私家版（国立国会図書館デジタルコレクション）、33-34 頁。
- (11) 同「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』私家版（国立国会図書館デジタルコレクション）、34 頁。
- (12) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、58-59 頁。
- (13) 瀬戸内晴美『人なつかしき』筑摩書房、1983 年、70-71 頁。
- (14) 同『人なつかしき』、71 頁。
- (15) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、8 頁。
- (16) 前掲『人なつかしき』、71 頁。
- (17) 同『人なつかしき』、同頁。
- (18) 佐藤千里「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と真実』通巻第 350 号 8 月号、1978 年 7 月、46 頁。

第一章 もろさわようこの「高群逸枝」とそれへの静子と道子の反論

橋本静子は、一九七〇（昭和四五）年二月に夫の英雄を、続く一九七六（昭和五一）年五月に兄の憲三を、そして、一九七八（昭和五三）年六月に姉の藤野を、この三人の肉親を立て続けに亡くし、この時期、傷心の日々が続いていたものと思われます。そうしたなか、一九八〇（昭和五五）年の秋のある日、一冊の本が集英社から送られてきました。見るとそれは、集英社刊の円地文子監修『文芸復興の才女たち』（近代日本の女性史 第二巻）でした。これは、女性史に関する論集で、そのなかにもろさわようこが執筆した「高群逸枝」がありました。読み通した静子に、体の震えが止まらない、大きな憤りが吹き出してきたにちがいありません。何ゆえに、こうまで兄が罵倒されなければならないのか——。さっそく静子はペンを取り、もろさわに宛てて手紙をしたためました。これが、すでに廃刊となっていたはずの『高群逸枝雑誌』が息を吹き返し、「終刊号（第三二号）」として発刊されなければならない動機となる部分でした。この誌面に、その手紙は掲載されます。

それでは、一九八〇（昭和五五）年一二月二五日に刊行された『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）の「編集室メモ」に目を向けてみましょう。ここに、橋本静子と石牟礼道子のそれぞれの名で、ふたつの文が所収されています。静子の文の前半部分に、この号を出すに至った背景が書かれてあります。長くなりますが、これこそが静子のころではないかと思われるので、そのまま引用します。

『高群逸枝雑誌』は兄がひとりの手作りをたのしんだもので、私は終始を門外に居ました。家の孫三人に続いて同居の従業員夫婦の三人の子守りをしなければならず、姉が倒れて寝たままとなったりの事情などもありました。兄の没後も四箇年を過ぎました今、集英社の本に触発されました形で不本意にも終刊号を借ります仕儀となりましたことをなにとぞお許しく下さいませ。また、兄生前をお支えいただきましたことを遅ればせながら深く御礼申し上げます。まことにありがとうございました。

『高群逸枝雑誌』を身近かにお支えくださいました石牟礼道子様お一人だけに事情を申し上げて終刊号を諒承していただきました。志垣寛様の御遺族の志垣美多子様、村上信彦様、鹿野政直様には、それぞれの玉稿の転載を御許可いただきましたことを厚く御礼申し上げます。編集は、水俣在住中の数少ない兄の知友であられた渡辺京二様にお願ひしました。渡辺様は雑誌『暗河』の高群逸枝小特集の件で私宅をお訪ね下さったこともあり、その御縁を頼らせていただいた訳でございます。兄の主治医であられた佐藤千里様には、精神安定剤や栄養剤をおねだりしましたばかりでなく、おはげましや有益なご助言をいただきました。ただありがたく、御礼を申し上げる言葉もございません。失礼をいたしましたことはなにとぞ、御あわれみで御寛恕くださいますよう、臥してお願ひ申し上げます。

あたたかい陽ざしの此の頃を、兄夫婦の墓家と下段の私どもの墓家を毎日訪ねています。レリーフによりかかりますと、途端に私は八歳の少女になり「イツエねえちゃん。どうしよう？」とたずねます。「静子さん、もういいのよ。あなたもここにいらっしやい」と声が返って来たように思いました。人は皆、死ぬことに決まっているのに。「お

手紙」を書いたことにころがいたみます¹。

一方、「編集室メモ」になかの道子の文には、こうした文字が並びます。後半部分の一節です。

思えば逸枝が古事記伝一冊を机上に置いて、研究生活への第一歩とした三十七歳と同じ歳に、そこへゆくことを許された私は、小学校国語読本によって初めて文字と出逢ったものの、女学校にもゆけなかった。逸枝に比べれば文盲に等しく、帰郷した後も勉強し表現することがはばかりられる身であった。そのようであったゆえに、誰にも気兼ねせず、あまつさえ夫に助けられて学問をした女性がいた、そのことを知っただけで、わたしの内部に核融合反応のような事が起きた。

役に立たない同人を先生はお叱りにならず、水俣病のことで書くビラにお目を通され、失明寸前を発見して頂き、医者につれて行って下さった。

お言葉の数々をテープに採らせて頂けばよかったが、不器用で思いもつかなかった。後世の為に如何ばかり意味を持ったかと悔まれるが、堀場清子氏による「おたずね通信」が残されたことは私どもの喜びである。

折にふれて洩らされる御言葉を私は、卓越した思想家、批評家の言として拝聴した。真の意味のラジカルさを身をもって行った人の言葉はじつに透明であった。御臨終には主治医の佐藤千里氏が立ち合われた。その間のことは『草のことづて』（筑摩書房刊）に記したのでここでは割愛した²。

この『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）は、次の論考で構成されていました。

もろさわよう子様へ 橋本静子
高群逸枝の入院臨終前後の一記録 橋本憲三
終焉記 橋本憲三
高群さんと橋本君 志垣寛
瀬戸内晴美氏への手紙 橋本憲三
橋本憲三氏の生涯 鹿野政直
高群逸枝の女性史学 村上信彦
朱をつける人 石牟礼道子

このなかの「瀬戸内晴美氏への手紙」は、第九章「瀬戸内晴美の『日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——』」ですでに言及していますように、「この写しはあなたに参考にしていただこうと、氣息えんえんながら起きて書いたものです。雑誌にいつかのせる気になるかも知れないとの潜在意識もあつたらしくて」³と書き添えて、生前憲三が道子に託していたものでした。「日月ふたり」の第三回を読んだ憲三が、このとき瀬戸内に宛てて出した手紙のコピーで、疑問と抗議を示す内容となっています。その意味で、まさしくこれは、憲三から道子に手渡された遺言書に近いものでした。こうしてここに、ついに日の目を見ることになるのです。

最初の「もろさわよう子様へ」と最後の「朱をつける人」に挟まれた論考は、いずれも旧稿からの転載であり、そのほとんどについて、本稿の他章において言及していますので、本章では、静子の「もろさわよう子様へ」と道子の「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」に限定して、触れることにします。

静子の文である「もろさわよう子様へ」は、次の言葉ではじまります。

集英社から『近代日本の女性史』第二巻が贈られました。この本のもろさわ様の御担当になる『高群逸枝』を拝見しましたので、初めてお手紙を差上げます。

兄憲三をいわれもなく侮辱されていますし、二人の四十五年の共生が憲三の卑しい志のゆえんであったと、意図してお書きになっているように思います。憲三には、いずれも「婦選会館」のかかわりで二度の面識と言われながら、二回の瞥見で他人の七十九歳の生を斬られたことは無謀だと思いました。

昭和三十九年（一九六四）六月十日、逸枝の代々幡葬祭場における葬儀で、「憲三の妹静子」（二〇七頁）としてお見知りいただいているようでございますが、逸枝国立東京第二病院入院前後の時には私はもろさわ様を存じあげていません。……

文章とは無縁で一行の活字ありません。性格は父母からの血が流れており、理不尽に対しては正直に腹を立てますから、おとなしい方だとは申されないかも知れません。生来、お茶目だと言われています。地位、名声、職業、風采などでは人を見ず、品性や志、それと人柄のあたたかさ、詩情などの情感にひかれます……

姉逸枝の国立東京第二病院前後にかかわりました遺族のうち、ひとりの生き残りでもありますので、兄憲三のことと合わせて、私の見たこと、感得したことをお伝えしたいと思います⁴。

こうした前書きのあと本論に入り、もろさわの文のもつ誤謬や偏見の数々を、その頁を明記しながら、指摘してゆくのでした。それでは、そのなかから幾つかを引いてみます。

まず、憲三の容姿にかかわってのもろさわの描写箇所についてです。もろさわは、こう書いていました。

やや小柄で口数のすくない憲三は、同じ部屋うちのはすむかいの机に、ときおり姿をみせたが、外交的で気配たくましい陽気な女たちの出入り多い場所柄のせいもあってか、来たのも帰ったのもまわりがあまり気づかぬ目立たぬ人だった。憲三は少年のおり傷つけた左眼が失明しているため、首をいささか左にかたむけ、肩をいからせ勝ちにしていた。物資のない戦中に使われた粗末ななわ編みの古びた買い物袋をいつも下げて持ち、膝のつきでた古ズボンをはき、ちびた下駄をせかせか飛び石に鳴らして、婦選会館へ入ってくる彼は、その気配に都会人のダンディズムはみじんもなく、野の少年のひねこびたなれの果てといったおもむきの人でもあった。それから絶えて会うことがなく、十年余の歳月があったのだが、彼は当時と同じく、大人の男の気配を相変わらずその身に宿してはいなかった⁵。

これは、明らかに外見的差別（ルッキズム）や障害者差別に近い表現です。しかし、この

文について静子は、こう書いて受け流します。

このような御評価を読んで、私にはかえって兄の人柄がこの上もなくこのましくなつかしく思われました。「外交的で気配たくましい陽気な女たちの出入りの多い場所柄」(二〇四頁)とお書きになっている婦選会館で、慥然としている兄の様子が偲ばれました⁶。

「それから絶えて会うことがなく、十年余の歳月があった」のち、市川房枝の紹介で逸枝は国立東京第二病院に入院します。市川房枝、鏑田貞子、浜田糸衛、高良真木といった面々のあとについて、もろさわも、逸枝を見舞いに病院へ向かいます。これが、婦選会館で遠目に見知って以来、もろさわが憲三を見る二回目の機会でした。もろさわは、ひとりずつ順番に病室に入り、最後に自分も病室に入ると、長話になり、逸枝の容体が悪化することを心配した憲三から注意を受ける場面を描いています。これについて、一方の静子は、こう書きます。

病妻の全責任者は夫でありまして、責任者の申し入れを無視されてまでも、病者の不治性を知りながら何故に押し入ろうとされたのでしょうか。……ここはもう夫婦の領域。よろわないで、身つくろいしないで居れるのは夫婦か親子まで。他人はみだりに介入してはいけないし、病人の保護者からもとめられた時に、お手をさしのべられるのが、親切でありご友情とおもいます⁷。

病室での面会のあと、控え室に入った市川らが、逸枝の病状を憲三に告げることになりますが、その場面についてもろさわは、こう書いていました。

控え室へもどると、市川たちが、事実を憲三に告げること決めていた。誰かが呼びに行き、やがて煩わしげに現れた憲三に対し、市川が主になって、逸枝の病状はそれなりの覚悟をしなければならない事態であることを言い聞かせた。はじめから体を硬直させ聞いていた憲三は「そういうことは、ぼくには耐えがたい」と、両掌で顔を覆い、椅子からくずれ落ちた。失神したのである。弱気であるというより、妻の存在を生き甲斐にしてきた憲三にとっては、世界のくずれる衝撃だったのだ。……

注射のせいだろうか、十数分たつと、憲三は安らかな眠りから覚めるみたいに、おだやかな身じろぎと共に眼をあけた。ご気分はいかがですかと問うと、彼はそれに答えず、あんた誰？ と言った。苦笑とともに私が名のると、彼は、鼻の先でかすかにうなずき、そのままそそくさと起き上がり、私にひと言の挨拶もなしに、妻の病室へあわただしく行ってしまった。彼には妻へのおもいだけがあって、他をかえりみるゆとりがないのだと、あたたかくつつんでおもしろいやらなければ、いささか腹立たしくなる態度だった⁸。

他方、この文について静子は、こう書きます。

妻は死ぬのではなかろうか。死なせてはならぬと、さぞかしうろたえたことでしょう。

夫婦で四十五年もの長い間を暮らしていれば、椅子からくずれ落ち、失神もし、欠礼して、足も地につかないで病室へよろめき入ったのであろうと、兄の苦境が新しく思い遣られてかわいそうでなりません。

兄憲三とは物どころついてから、姉逸枝とは八歳からのつき合いですが、もっとも良い夫婦振りと見ていますので、お記述の状況を拝見いたしまして、二人のいたみは私のいたみとなり、ひとを愛することの哀しみをかなしみ、一時は行を読み進めませんでした。狂乱、狂死とまでいかなかったことを、ありがたいことと思っております⁹。

続いて静子は、逸枝の遺体を前にした霊安室での市川と憲三とのやり取りのなかで、市川が葬式のクラスを差配しようとしたことについても、市川が逸枝の死亡広告に名前を出すのを断わったことについても、また、市川が憲三の貯えが数百万円であったことに驚き、先日憲三に渡した「見舞金」の返却を求めたことについても、もろさわの文のその箇所を引用しながら、それに対する自分の意見を述べるのでした。総じて、霊安室での市川と憲三のあいだに生じた反目にかかわる静子の考えは、このようなものでした。長くなりますので、全文紹介はできませんが、要所要所をつなぎあわせてみます。

ご記述をみますと、市川房枝様は他人のプライバシーの中に入られています。他家の葬式に、祭式のクラスをご自分の勝手に当惑なされることはございません。逸枝の入院にさきだって、一切の金銭のご相談もいたして居らず、物乞いはいたしていません。…

兄の言った数百万は一から九までのどの数百万かは分りませんが、人生五十年といわれた頃の七十才の妻と、六十七歳の老夫婦では、子もなく年金もなくてこれ位（一から九のどの数百万か知れませんが）のたくわえは、ある方が健全な生活体制ではないのでしょうか。少し位の余裕はもたないと、経済がひっばくしてしまっていてはしごとに根性がすわりません。

四十五年も連れ添い、昨日まで手も取り合い言葉も交わした妻を、もう灰にせねばならぬのに、遺体に寄り添うのもくちづけをするのも人目をはばかり余裕などないことなども、すべてにご批判の目でご覧になっていますが……「人の死」にのぞまれたかたがたの非人間性を思います。

らいてう様は私どもへご会葬くださり、過分の御香料をお恵みいただき、引き続き御愛情を賜りました。「このときを境にして、市川、鑓田、竹内茂代らは憲三と絶縁」（二〇七頁）とありますが、このことは、その後らいてう様から変らぬ御厚誼をたまわりましたことと思い合わせますと、政治家と文学者の違いを思わずにはおれません¹⁰。

そして静子は、憲三と逸枝の夫婦について、かくも明確に語るのです。これも長くなりますので、断片断片をつなぎあわせます。

逸枝は死の床で、「自分もお兄様を神様とおもっている」と、私にこたえています。
[全集が] 自分の手に成っていれば、巻末には、二人で歩いた越しかたの感慨をかたり、深い愛をかたり、感謝の言葉で結んだことを私は確信いたします。……

二人が意中としたものは、「男は女を支配しない女は男を支配しない共同の社会」であり、そして「愛は創造するもの」とのぞんだのです。私はそう受け取っています。憲三は憲三の得手をふるい、逸枝は逸枝の得手で志に向かったもので、逸枝は先生、憲三は生徒、先生と生徒の落差を家事などで埋めた同志、同学、そして夫婦です。学問に志せば憲三は普通水準、逸枝は天才でした。……

学問は日に発展し停滞があつてはならず、後学は批判、検討、修正して次なる後学へ引き継がねばならないと思います。逸枝はその著書で後学へ後をたのむと訴えています。二人は女性史学への門戸の前に辿りついただけのものです。

憲三は他の多くの男性と同じく……男性上位の体質でした。……或る日、女性の位置まで降りて来たのです。そして、男女が同等のところに住んで見れば、居心地よくてたのしくて、有頂天になって暮らしたのです。二人には、男の仕事、女の仕事という区別はありませんでした。こういう楽しい生き方に導いてくれてありがとうと、それからずっと思っていて、「神様」と呼んだのは、『小僧の神様』のあの神様と同義語です¹¹。

『小僧の神様』は志賀直哉の短編小説です。神田の秤屋で丁稚奉公する小僧が、金持ちのお偉いさんに鮎をご馳走になり、その人を神様と崇めるようになるというのが、この小説の粗筋です。

こうして最後に静子は、「もろさわよう子様へ」を次の言葉で結びました。

何ヶ月か前に、郷土紙上の市川房枝様のお名前が出ている記事で、憲三のことがあしざまに書かれていてはらが立ったと、近親者からも聞いています。今回のことといい、何度もむしかえし活字になさねばならないお心が理解できません。

私は文筆とは無縁で、一行も活字にした経験はございませんが、亡兄の縁にせがみ、『高群逸枝雑誌』終刊号の誌面を借りて、当面した一人だけの生存者として、真意をお届けいたしました。

昭和五十五年十月二十五日記¹²

それでは次に、道子の「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」を見てみたいと思います。

静子が、もろさわの「高群逸枝」について、その誤謬を正そうとして正面から論じたのに対して、道子は、背後に回り、そのなかで侮蔑的に描写されていた逸枝と憲三を救い出そうとして、論理的にというよりは、むしろ詩的に、ふたりに備わる幾多の美質を説こうとします。道子は、まず、こういいます。

……本稿は、『高群逸枝雑誌』の発刊と終刊に立ち会いながら、ただただ無力でしかなかったひとりの同人として、森の家と橋本憲三氏の晩年について、いまだ続いている服喪の中から報告し、読者の方々への義務を果たしたい¹³。

憲三の死から四年が過ぎてなおも服喪に身を置く姿を見ると、単なる「ひとりの同人」の域を超えた道子の、「森の家」で静子を立会人として「高群夫妻とそして自分とに、後半生

を誓った」¹⁴決意の強さが蘇ります。道子は何としてでも、敬愛する逸枝と憲三を、落とされた闇のなかから救済し、その名誉を回復せねばならないのです。それが、道子が自覚する、まさしく「義務」だったのです。

また、「わたしたちの逸枝はしかし、詩人としての出発に当ってまことよい理解者にめぐまれたといわねばならない」¹⁵という一文のなかの、「わたしたちの逸枝」という表現にも、注目する必要があります。といいますのは、逸枝は、単に「憲三の逸枝」ではなく、もはや「憲三と道子にとっての逸枝」という位置づけがなされているからです。これもまた、「森の家」で静子を立会人として「高群夫妻とそして自分とに、後半生を誓った」ことに、由来しているものと思われます。

それでは、道子は、逸枝と憲三の夫婦をどう見ているのでしょうか。その視点を表わしたものが、以下の文です。

私どもが夫婦の生き方に心をゆすぶられてやまないのはなぜなのか、愛の形はいろいろあろうけれども、この二人においては徹底的に相手に対して真摯にむきあい、慢性的な弛緩やなれあいが、みじんも感ぜられないからであろう¹⁶。

また道子は、自身の出自と重ねて、逸枝の作品を語ります。

筆者も血縁の中に父なし子やいわゆる精神異常者らが一人ならず二人ならず居て育ったが、逸枝もまた、生命がこの世の煉獄からも出生し、血の河を流れて野に出る姿を眺め、その意味を考え抜いたに違いない。『放浪者の詩』を読めば文章上の修辞ではなく、地獄の焔に遭う人であったことが読み取れる¹⁷。

道子は精神を病んだ文盲の祖母のもとで育ちました。道子の父が酒乱であれば、逸枝の父もそうでした。道子は、若い弟を鉄道自殺で失いました。憲三は、幼い妹を不慮の事故で亡くしています。加えていえば、憲三は、幼い日の事故で左眼を失明。同じく道子の左眼も、すでにこのとき、その視力のほとんどが失われていました。

さらに道子は、これまでの「恋愛事件」を念頭に、憲三の言葉を交えて、こうも語ります。

「擬恋もあったのです。彼女はなんというか、恋の上手な人だったものですから。誰だって彼女を見れば、恋せずにはいられなかったのでしょう。」（憲三氏の言葉）ということであれば彼女の持っていた蜜の香りがどのようなものであったか、悩殺されたものたちがいてもしかたがない。それにしても、憲三に向けてのみ終生積極的に愛を訴え、それを確認したが、共に「完成へ」と歩んだのは、よくよくその夫を好きであったと思われる¹⁸。

さらに加えて、入院中の逸枝の気持ちを、こう察します。

死の数日前水俣から上京して、病院を見舞った義妹の静子さんに、「森の家に行ったら、ぜひ『留守日記』を読んで下さい」とわざわざ彼女がいったのは……森の家に帰りたい

のを訴えていたのではあるまいかと思えてならない¹⁹。

それでは『留守日記』から、一節を引いておきます。一九四三（昭和一八）年二月一七日から二四日まで、憲三は、父親の三回忌のため水俣に帰省しますが、この間逸枝は、「留守日記」を書きます。留守中逸枝は、以下のように、陰膳をして憲三の無事を祈ったのでした。

ご飯をたべてきた。はじめて新しく炊いた。のりとざぜん豆のおかず。夫にもよそい、お茶も二人ぶん。上にあがると、きのうとおなじ夕焼けである。窓からみていると、あの樺の下から夫がやってくるような錯覚がおこる。こたつに火をいれる。むこう側の夫の影にあいさつして机にむかう。影はふかく頭をたれてねむっている。ああまた日没時だ。風がさびしい。かきおとしたが、のこりのぼた餅をたべた。ちょうどお母さんが夫からもらってたべてくださったであろう時刻に。つめたくはあるが、うまかった。いまごろ水俣ではどんなだろう²⁰。

おそらく、このときの憲三の水俣帰省は、ふたりが離れて時を過ごす、最初の日だったものと思われます。母親の姿を見失った幼子のような逸枝の姿が目には浮かびます。静子は、逸枝のこの日記を読み、憲三に向けた逸枝の愛の深さを改めて知ったものと思われます。そして同時に、強い思いをもって逸枝が、一日も早く退院して「森の家」に帰り、再び憲三と一緒に暮らしたがつていることに気づかされたにちがいありません。なぜ憲三は、自宅で逸枝を看取れなかったのか、その悲しみを、静子も道子も共有していたものと思えます。

ここで、結婚を前にした逸枝が、憲三に宛てて書いた若き日の手紙の一節を想起したいと思います。

若い、氣高い、血氣が、妾をおそひます。ああ、妾どもの高潮した青春よ。妾はそれを決して萎らせないであります。……妾を愛して下さい。愛して下さい。愛して下さい。強く強く愛して下さい。

妾はあなたに抱かれて死にませう²¹。

ここから、自分が死ぬときは憲三の腕のなかで、という逸枝の思いが伝わってきます。しかし、病院は完全看護。神と崇めて止まない妻に、そうしてあげられなかった夫の無念は、いかほどだったのでしょうか。さらにいえば、憲三が死亡広告と葬儀の費用としてそれなりの資金を用意していたことに対して憤慨し、死亡広告に友人代表に名を連ねることを拒んだことは、それぞれにそれぞれの考えがあるとしても、逸枝の遺体の前にあって、その死に打ちひしがれている本人を前にして、これまでに分け与えたものを返してほしいという言葉在市川から浴びせられたときの憲三の、その思いは、いかほどだったのでしょうか。

憲三は、入院に際して受け取っていた「お見舞い」のお金を、葬儀後市川に返金しました。しかし、もろさわは、「市川は主宰する婦人問題研究所を通じ、昭和二十四年（一九四九）から昭和三十六年（一九六一）末まで逸枝の研究に対する物心両面で援助をつづけていた」とも、「それだけの貯えがあるなら、人からの寄金はもらうべきではなかった」と、憲三に対して市川が言い放ったとも、書いていますので、市川が逸枝の霊前で返還を求めたのは、

単に数日前に渡していた「見舞金」のみならず、この間の一二年にわたる「物心両面」での援助と「人からの寄金」のすべてだったのかもしれませんが。しかしながら、これが、人が人に対して行なう「援助や寄付」の真のあるべき姿であるかどうかは、人によって、その見解は異なるにちがいません。

一方、憲三については、こう書きます。道子は「森の家」で、自身の出発作となる『苦海浄土』の初稿となる「海と空のあいだに」を書いていました。

その後の著書はすべて『椿の海の記』に至るまで、師が最初の読者、批評者であった。いかに透徹し卓越した批評家であられたことか。水俣のせんすべない事情はえんえんにひき続き、今に至るも恩師から託された御志を果たせないでいる。御死去に逢い、はなはだしい気落ちからいまだに立ち直れないのである²²。

ここで朱線を引いて、ここに留めておかねばならない箇所は、憲三の「御死去に逢い、はなはだしい気落ちからいまだに立ち直れないのである」という文言でしょう。

道子の文の特徴は、至る所で話題が切り替わり、ストーリーが四方に発展していくことにあります。この「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」においても、文の途中で、道子が、市川房枝ともろさわようこに触れる箇所がひとつだけありますので、以下に、引用して紹介します。もっともこれは、本題の「弱法師」を語るうえでの単なる枕詞として使われているにすぎません。場面は、すぐにも切り替わります。

この稿を書く途中に、もろさわ・ようこ様の御労作（『文芸復興期の才女たち』集英社）を拝読する機会にめぐまれた。深く考えさせられる事であった。市川房枝女史にも、もろさわ・ようこ様にも水俣のことで御高恩をこうむっており、長く忘れがたいこととして、ここに深謝をのべておかねばならない。さて、もろさわ様による、逸枝死去の夜の場面、憲三が、「妻の遺体に寄りそって接吻をくり返し『約束どおりあなたの自伝は、かならずばくが完成させますからね』とそのたびごとに云っていた」という箇所まで読み至ったとき、紙面が消去されてその下から幻聴というべきか謡曲のあの「弱法師」がろうろうと聴こえ始め、それよりというものの幻覚の能舞台が浮上してやまない²³。

こう書いた道子は、ここから、「幻覚の能舞台」におけるシテとワキの独自の詞章を導入しますが、流れは、文旨のシテの弱法師による憲三と逸枝を扱った謡へと進みます。おそらくこれが道子に聞こえる「幻聴」なのでしょう。

ワキ 「おうこれなる籬^{まがき}の梅の花が、弱法師が袖に散りかかるぞとよ。

シテ 「そうてやな。ゝ憲三が妻の逸枝は芹摘みに、憲三は窓に、窓には梅の花²⁴。

このシテの謡曲は、逸枝の『妾薄命』のなかの次の歌に由来しているものと思われます。

憲三が妻の逸枝は芹摘みに
憲三は窓に

窓には梅の花²⁵

この歌は、極めて示唆に富みます。といいますのも、「逸枝が芹を摘み、憲三が窓辺にいてそれを待つ」情景を、「逸枝が原稿を書き、台所にいながら憲三がそれを待って編集する」情景へと置き換えるならば、どうでしょうか。逸枝と憲三とのあいだの、前代にはほとんど見ることのなかった革新的な夫婦の役割分担の形式がほのかに見えてくるからです。それは、すでに紹介しています、静子が「もろさわよう子様へ」で書いていた以下の文と完全に合致します。

憲三は他の多くの男性と同じく……男性上位の体質でした。……或る日、女性の位置まで降りて来たのです。そして、男女が同等のところで住んで見れば、居心地よくてたのしくて、有頂天になって暮らしたのです。二人には、男の仕事、女の仕事という区別はありませんでした。

ここに、道子も静子も、憲三の人間性の本質を見出したのでした。

他方で、私自身に聞こえてくる、この場面での「幻聴」はといえば、道子が最晩年に書く新作能「沖宮」のもともとの種子は、このときのシテの「そうてやな。ゝ憲三が妻の逸枝は芹摘みに、憲三は窓に、窓には梅の花」の台詞にあったのではないかという、独自の推量です。

さて、道子の文はさらにここで一転し、「弱法師」から「朱をつける人」へと分け入ります。いよいよこの文のクライマックスです。

一九七八（昭和五三）年の暮れ、道子は、沖縄の久高島に行き、その地に残るイザイホーの名で知られる祭儀を見学しました。道子はこう書きます。「一二月一四日（昭和五十三年）初日の『夕神遊び』から始まった神事の第三日目、『花さし遊び』の日が、とりわけわたしには感銘深く思われた」²⁶。「『夕神遊び』から始まった祭儀は三日目に入り、『花さし遊び』の中の『朱つき』『朱つき遊び』へと展開してゆく」²⁷。

イザイホーは、三〇歳を超えた島の既婚女性が神女となるために行なわれる、一二年に一度開催される一種の通過儀礼で、そのなかのひとつの儀式が、根人と呼ばれる男性主人が、ナンチュと呼ばれる巫女の額と両頬に朱印をつける神事です。道子の論考の題に用いられた「朱をつける人」は、そこに由来します。

道子が「久高島で十二年に一回、^{うまどし}午年に行なわれるイザイホーの神事をまのあたりにした時、胸に去来してやまないことがあった」²⁸。それは道子にとって、「今は亡き森の家のふたりに、生命の奥の妙音を聴くような、あるいは生命の内なる宇宙の、光源の島にたどりついたような秘祭」²⁹だったのでした。道子は、「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」を、次の言葉で結びます。

深い感動の中において、「花さし遊び」の中の朱つけの儀式、素朴な木の臼に腰かけているナンチュと、その額にいまし朱をつけるようとしている根人の姿に、著者には高群逸枝とその夫憲三の姿が重なって見え、涙ぐまれてならなかった。

逸枝がいう憲三のエゴイズムは、男性本来の理知のもとの姿をそのように云ってみ

たまでのことであつたろう。その理知とは究極なんであろうか。久高島の祭儀に見るように、上古の男たちは、懐胎し、産むものにむきあつたとき、自己とはことなる性の神秘さ奥深さに畏怖をもち、神だと把握した。そのような把握力のつよさに対して女たちもまた、男を神にして崇めずにはおれなかった。そのような互いの直感と認識力が現代という理知あるいは叡智ではあるまいか。

憲三はその妻を、神と呼んではばからなかった³⁰。

こうして、もろさわから憲三に浴びせられた罵声への反論として書かれた、道子の「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」は終わります。

注

(1) 橋本静子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、100頁。

(2) 石牟礼道子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、101頁。

(3) 橋本憲三「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、52頁。

(4) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、3-4頁。

(5) もろさわようこ「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』(近代日本の女性史 第二巻)集英社、1980年、204-205頁。

(6) 前掲「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、5頁。

(7) 同「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、7頁。

(8) 前掲「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』、203-205頁。

(9) 前掲「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、6頁。

(10) 同「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、9-11頁。

(11) 同「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、13頁。

(12) 同「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、19頁。

(13) 石牟礼道子「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、78頁。

(14) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、247頁。

(15) 前掲「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、84頁。

(16) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、93頁。

(17) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、87頁。

(18) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、91頁。

- (19) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、92-93頁。
- (20) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年(第4刷)、310-311頁。
- (21) 橋本憲三『恋するものゝ道』耕文堂、1923年、193-194頁。
- (22) 前掲「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、94頁。
- (23) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、94-95頁。
- (24) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、95頁。
- (25) 高群逸枝『妾薄命』金尾文淵堂、1922年、136頁。
- (26) 前掲「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、96頁。
- (27) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、97頁。
- (28) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、96頁。
- (29) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、同頁。
- (30) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、99頁。

第一章 道子の瀬戸内小説への反論文「本能としての詩・そのエロス」

静子の「もろさわよう子様へ」と道子の「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」が掲載された『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）は、千六百部印刷され、定期購読者のほかに「全国国公立大学の文学部法学部図書館、全国国公立図書館、全国主要新聞社本支社、主要雑誌社・図書出版社、女性史関係機関」¹等に寄贈されました。

年が明け、一九八一（昭和五六）年を迎えました。終刊号発行に関する『朝日新聞』の取材に、道子は、次のように応じました。

同人は憲三先生と弟子の私のふたり。実際にはお手伝いもできぬままであった。終刊号をいつにするかと思っているうちに、妹さんがもろさわさんに長い手紙を書かれた。また憲三先生が書き残されたものもあった。この雑誌は逸枝ファンのための雑誌。それらを読者にお渡しするのが、遺族と、同人の義務と考え、ここに集録し、終刊号としました²。

このインタビューは、一月一四日の「点描」欄において、「32号を発行して終刊『高群逸枝雑誌』」という見出し記事のなかで紹介されました。それに対抗するかのよう、今度はもろさわようこが、『毎日新聞』に寄稿します。以下は、二月二六日の「視点」欄に掲載された、もろさわの「市川房枝さん」の一部です。

市川さんとはまったく無関係に、私が執筆した文章が原因になり、昨年末、市川さんに対する誤解をもとに編集された小雑誌が出た。このことについて市川さんは、誤解にもとづく悪口は言われ馴れている、事実はかならずあきらかになることを信じているので、気にしていませんと、潤達に笑っていた³。

もし、静子の「もろさわよう子様へ」と道子の「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」が、「誤解にもとづく悪口」であるとするならば、「事実はかならずあきらかになることを信じている」という他者依存の姿勢ではなく、自ら進んでその「誤解」と「事実」の内実について開陳することをもって道義とみなしたい私は、市川房枝本人と、その養女の市川ミサオの書いた書籍に当たってみました。しかし少なくとも、市川房枝の随想集『だいこんの花』（新宿書房、一九七九年）と、市川ミサオの回想記『市川房枝おもいで話』（NHK出版、一九九二年）とを見る限りにおいては、そのことについてはいっさい触れられていませんでした。

さて、続く三月、今度は『朝日ジャーナル』が、この『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）を取り上げました。まず、このような導入の文からはじまります。

キラと光りつつ、はじらう風情で南九州の片すみから出されていた『高群逸枝雑誌』の終刊号が昨年末に出た。この雑誌は、女性史学の創始者・高群逸枝（一八九四—一九六四）と一体の存在であった夫の橋本憲三が、亡妻の魂を抱きつつ編集していたもので

あり、七六年五月、憲三の死後、妹の橋本静子がいちはやく終刊を宣言していたから、あらためての終刊号に、おや？ と思った人も多かろう。

静子による「編集室メモ」によると、この刊行は「集英社の本に触発され」てのことだという。「集英社の本」とは『近代日本の女性史2 文芸復興の才女たち』で、静子を「触発」したのは終章の「高群逸枝」（もろさわようこ）の憲三認識のありようなのだが、いまはそれに触れる暇はない⁴。

この記事の執筆者は、もろさわの「高群逸枝」に触れることはありませんでした。しかし、この間のこの雑誌を、以下のように、高く評価しました。

雑誌は消えたが、そのなかからいくつかのすぐれた研究書が生まれた。『高群逸枝と柳田國男』（村上信彦、大和書房）、『火の国の女・高群逸枝』（河野信子、新評論）、『両の乳房を目にして』（石川純子、青磁社）は雑誌連載をもとにしてできたものであり、初の本格的評伝『高群逸枝』（鹿野政直・堀場清子、朝日新聞社）も、この雑誌なくしては生まれなかった⁵。

ここに言及されている、村上信彦の『高群逸枝と柳田國男——婚制の問題を中心に——』、河野信子の『火の国の女 高群逸枝』、そして石川純子の『両の乳房を目にして』につきましては、私の力をもってしては、どうしても十全に読み解くことができず、誤読が生じることを恐れ、本稿におきましてはいっさい触れていませんので、あえてここに書き添えます。ところで執筆者は、最後にこの記事をおよそこのような言葉で締めくくります。

そしてこの五月、橋本憲三・堀場清子による三千枚に及ぶ『わが高群逸枝』が朝日新聞社から出版される。石牟礼道子のライフワーク『最後の人』が一日も早く完成されることを祈る⁶。

『朝日ジャーナル』に『高群逸枝雑誌』終刊号についてのこの書評が出たとき、静子は、七〇歳になっていました。あえて終刊号として『高群逸枝雑誌』を発行し、憲三が書き残していた「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」「終焉記」「瀬戸内晴美氏への手紙」の三つの文と、それに加えて自身の「もろさわよう子様へ」の手紙とを、広く世に公開したいと、静子には、これまでに受けた度重なる兄への攻撃に対して、少しは撥ね返すことができ、なすべきことはすべて成し得たという安堵の気持ちがあつたにちがいません。またその一方でこのとき、「編集室メモ」に書かれてあるように、「イツエねえちゃん。どうしよう？」「静子さん、もういいのよ。あなたもここにいらっしやい」というふたりが交わした会話を、深く胸にしまい込んだかもしれません。これ以降、逸枝や憲三にとって不名誉となる、他者が浴びせる言動に、もはや静子は口を開くことはありませんでした。

一方道子は、このとき五四歳になっていました。『朝日ジャーナル』のこの記事は、道子のことを、「憲三が亡妻の幻影をそこにみてたよりにした同人・石牟礼道子」⁷と形容しました。「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」を書いた道子の方は、憲三のことを、逸枝に対してだけでなく、自分にも朱をつけてくれた人として受け止めていたにちがいません。

ません。道子にとって憲三は、「最後の人」であると同時に、「朱をつける人」だったもの
と思量します。

橋本憲三と堀場清子の共著『わが高群逸枝』（上下二巻）が、朝日新聞社から上梓される
のは、『朝日ジャーナル』にあるようにこの年（一九八一年）の五月ではなく、実際には、
九月まで待たなければなりません。この『わが高群逸枝』は、神奈川県逗子に住む
堀場が尋ね、熊本県の水俣に住む憲三が答えるという、距離を隔てた郵送による一問一答の
形式で、憲三が死去する直前までの約一年半続けられた「おたずね通信」と呼ばれるものを
集成したものでした。

すでに書いていますように、堀場清子と夫の鹿野政直が、はじめて水俣の憲三宅を訪問し
たのは、一九七四（昭和四九）年の九月のことでした。目的は、朝日評伝の一冊として『高
群逸枝』を執筆するに当たっての基礎調査にありました。しかしそのとき、すでに憲三の体
調は優れず、加えて、瀬戸内が『文芸展望』に連載していた「日月ふたり」の内容に苦しみ
られ、精神的に傷を負った状態にありました。そのため、十全に質問ができなかった堀場は、
その後、質問状を書いていいかを憲三に問い合わせました。以下は、それへの返信内容です。

こんごいろいろご質問いただけますこと、大よろこびです。／ご質問は、ききづらい
こと、常識的？には意地悪いと考えられそうなことがらでも、いっさいごしんしゃくなく
お願いいたします。ありのままを（私自身が知っていることなら）正直にお答えでき
ると思っています。真実に近づくためには⁸。

このとき、病床に臥す憲三には、死期が近まっているという意識があったでしょうし、一
方で、瀬戸内の文にみられるような事実と異なる内容が今後次々と書き継がれてゆくこと
を恐れる気持ちもあったでしょう、そこで憲三は、堀場を信じ、自分の知る真実のすべてを
伝え、いつの日か公開されることを望んだものと思われます。そうした憲三の思いは、瀬戸
内へ宛てた手紙を道子に預けたことに、すでに現われていました。『高群逸枝雑誌』終刊号
（第三二号）に掲載された「瀬戸内晴美氏への手紙」の冒頭の注に、それを見ることができ
ます。

*本稿は橋本憲三の瀬戸内晴美氏への私信の写しである。故人は石牟礼道子に「この写
しはあなたに参考にしていただこうと、氣息えんえんながら起きて書いたものです。雑
誌にいつかのせる気になるかも知れないとの潜在意識もあったらしくて」と書き添え
て本稿を託した⁹。

今度は、憲三は、「おたずね通信」を堀場に託すことを決意しました。こうして憲三と堀
場の「おたずね通信」ははじまったのです。その間の事情を堀場は、『わが高群逸枝』（上）
の「解説」のなかで、このように記しています。

昭和四十九年十二月のはじめ、四十一問の「おたずね第一信」を発送した。……こう
してはじまった一問一答を『おたずね通信』と名づけて、通し番号をふり、第一次目標
を千問、第三次目標の三千問までは達したいとしたが、昭和五十一年五月二十三日の橋

本氏の逝去によって、七百五問で中断した。亡くなる前日、別れの言葉とともに、氏は『おたずね通信』の束を私に托された¹⁰。

一方、『わが高群逸枝』（下）の「あとがき」において堀場は、まずその冒頭で、あるひとりの女性に対して謝辞を書きます。

『おたずね通信』が交わされていたころ、橋本憲三氏のお手紙の中に、毎回のよう記されてくるお名前があった。「嫌な顔もせずにコピーしてくださるので、ほんとうに助かります。」「これからコピーをお願いに行くところです。」といったように。水俣市役所にお勤めの、新田とし子氏がその人である。当時水俣の町には、鮮明に写るコピー機が少なく、昼休みの一時間だけ、市役所のそれが市民の使用に開放されていた。新田さんは高群逸枝への共鳴者で、以前から橋本氏の編集事務のために、昼休み返上でコピー奉仕をしていられ、『おたずね通信』に関するいっさいのコピーもまた、新田さんのご好意に依存することとなった¹¹。

「あとがき」の最初に無名の女性の献身に謝意を示すところに、著者の人柄の一端を知るような気がします。続いて、堀場の謝辞は、静子へと向かいます。

橋本憲三氏の令妹、橋本静子氏からいただいたご協力に対しては、どんな言葉をもってきても、私の謝意をあらわすに足りない。高群・橋本夫妻への、氏の愛と傾倒のおお^{ママ}いさを想い、黙して、ただふかく敬礼する¹²。

その静子は、この、兄の遺作でもある『わが高群逸枝』をどのように読んだのでしょうか。最も知りたかったことは、兄が「瀬戸内晴美氏への手紙」のなかで、かくも苦しみを訴えていた、逸枝と延島の関係の真実だったのではないかと思います。堀場は、こう書いていました。

この「事件」について、断定的な発言をするだけの材料を、私はもたない。だから、私なりの疑問点と、高群逸枝という人間に対する私なりの解釈とを記すに止めたい¹³。

このように前置きして、堀場は、疑問点を指摘します。それを短くまとめると、次のようになります。

（１）農民自治会婦人部に加わる過程を見ても、『婦人戦線』に書いた主要論文が夫の延島英一による代作であったことからしても、松本正枝が語る、夫と逸枝の「恋愛事件」だけが、無作為のものであるとは、考えにくい。

（２）「事件」が破局を迎える昭和六年の春までの半年間、連日延島は逸枝のもとに足を運び、性的関係があったように松本正枝は語っているが、住井すゑの証言によると、延島が毎日通っていたのは住井家であり、ましてや、憲三が在宅している家を、延島が頻繁に訪問することは、事実上不可能だったのではないかと思います。

(3) 一部のあいだで「憲三不能説」が根強く流布しており、これが原因で逸枝が延島に走ったという発想が導き出されている向きもあるが、夫との「一体化」を誓った妻が、それほど欲求不満を抱いていたとは考えにくい。

(4) 「恋愛事件」があったとされる半年間、同人の誰ひとりとしてそのことに気づかなかったのは、不思議に思える。他方、瀬戸内の「日月ふたり」でその「恋愛事件」が明るみに出ると、同人みな、一様に、それを事実として受け入れたらしい点が、印象深い。

(5) 昭和五年の年賀状に、逸枝は、これから研究生活に入ることを明言しており、この後の『婦人戦線』の刊行は、逸枝にとってはあくまでも「寄り道」であり、「恋愛事件」の破局が廃刊の原因であるとする意見には疑問が残る。

そして堀場は、「私の逸枝解釈としては、どうしても『事件』の否定へと傾かざるをえない」¹⁴という言葉をもって、この問題の結論としました。

これを読んだとき、静子と道子は、胸のつかえが下りたような、晴れ晴れしい思いに駆られたにちがいありません。といいますのも、すでに紹介していますように、『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）の巻末の「編集室メモ」において、道子の手により、次のようなことが書き記されていたからです。

お言葉の数々をテープに採らせて頂けばよかったが、不器用で思いもつかなかった。後世の為に如何ばかり意味を持ったかと悔まれるが、堀場清子氏による「おたずね通信」が残されたことは私どもの喜びである。

静子は、さっそくこの本を瀬戸内に送りました。「瀬戸内晴美氏への手紙」が所収された『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）も同梱したかもしれません。瀬戸内は、こう書いています。

最近、水俣の橋本静子さんから『わが高群逸枝』という本の上下を贈っていただいた。著者は橋本憲三と堀場清子共著の体裁である。……

この本は、堀場さんが昭和四十九年九月から、水俣に隠棲されていた橋本憲三氏と接触を持ち、氏の全面的な協力を得て、研究途上の数々の質問を発し、それに憲三氏が答えるというユニークな方法を取り、その往復書簡や、口答らしいものを中心に据え、未発表の原稿、日記、書簡等々の貴重な資料を投入した文字通りの労作である。高群逸枝研究としては、空前絶後といつてはばからない、貴重で完璧に近い研究の見事な成果である¹⁵。

堀場と憲三の共著になる『わが高群逸枝』（上下二巻）におそらく力を得たのでしょう、「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」に続いて、道子も、満を持して一文を草しました。それは、『わが高群逸枝』の刊行から三箇月後の一九八二（昭和五七）年一月に公になった『思想の科学』掲載の「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」でした。この号は、「なぜ恋愛か？」を主題とするものでした。道子は、逸枝の愛について、こう理解を

示します。

高群逸枝における愛の渇きとは、人類的羈絆への熱愛ゆえに片想いであり、従って男性への愛もさらに率直で豊饒きわまる本能のために、やはり片想いたらざるをえない。彼女はそれへの一体化を詩でなし遂げたとわたしには思える。詩は彼女の人生の実質だったから。彼女自身の自然とその本質がもっとも本来的に燃焼するのは詩の刻だった。それが彼女のエロスの実質だった。彼女は詩の本能そのものであった故に、その破綻も充溢も共にあわせて普遍的な地上の恋愛者なのだった。橋本憲三が逸枝を供護したのは男の本能と叡知からであって、それはしかし右のような質のエロスを点ぜられた男の至福をも表している¹⁶。

これが、道子が示す、逸枝と憲三の愛についての抽象的な解釈になります。そして、いよいよ具体的事象を語ることになります。道子が着目したのは、瀬戸内の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝と橋本憲三——」のなかの、逸枝を描写した次の箇所でした。松本正枝の視線から描かれています。この箇所は、すでに第一章「憲三の苦悩を共有する」において取り上げ、引用している部分でもあります。

駅からわが家の方への一本道を歩いていくと、向うから逸枝が歩いてくる。今日もきれいに化粧して、袂の長い派手な着物を着た逸枝は、少女がするように、長い袂を両手で持ってひらひら蝶々のように両脇で躍らせながら、浮きたつような足どりでステップをふんでくるのだった。人の目も全く眼中にないように、その姿は何か抑えきれぬ喜びをそういうそぶりであらわしているとしか見えなかった。

よほど嬉しいことがあるにちがいない、まるで子供のような人だ。ずっとそんな逸枝の姿を見つめながら正枝が近づいて声をかけると、逸枝は雷に遭ったように硬直して路上に突っ立ってしまった。大きな目をうつろに見開き、息もとまったように正枝をみつめてあえいでいる。

「どうなさったの、うちへいらっしゃったんじゃないの、延島はいませんでしたかしら」

その道はわが家への一本道なので、正枝はこう問いかえした。逸枝はようやく夢からさめたように、

「あなた、まだ会社じゃなかったの、どうなさったの」

と訊いた。詰問するような調子に、正枝はふたたび驚かされた。逸枝はそんな正枝の横をすりぬけると、挨拶もせず駅の方へ走り去っていった。

家に帰ると英一が同じように愕いた表情で迎えた¹⁷。

道子は、上の文を引用すると、それに続けてこう書きました。

逸枝亡きあとに書かれたこの作品を読まれて憲三氏の苦悩は深刻だった。長い袖を両手に抱え、蝶のようにひらひらゆくような逸枝をかつて見た覚えがないといわれるのである。……正枝氏はそのような逸枝を、ご自分の夫君と愛を交わした姿と受け取ら

れ、瀬戸内氏も、憲三との一体的夫婦の伝説がやぶれ逸枝に恋人がいたとされているのだが、わたしはそこに立ち入る気はない。逸枝は憲三氏の眼に触れるように延島氏からの求愛の手紙を常にそれとなく机辺に置いており、その間の事情と処理については、憲三氏自身の手記が残されている。（『高群逸枝雑誌』終刊号）¹⁸

そして道子は、逸枝のその姿に、表題のとおり「本能としての詩・そのエロス」を見ているのであって、最後にこの文をこのように結ぶのでした。

蝶のように浮き立つ足どりの逸枝はじつは詩の刻の人なので、健全な日常にいきなり出逢ってたちすくむ姿の背後には、彼女の詩篇のすべてが放電するように広がってゆくのをわたしは見る¹⁹。

つまり、あえて換言すれば、この道子の結語は、詩人の情感は、文字や文のうえだけでなく、舞や踊りにみられるように、身体のもつたおやかさにも現われるものであり、そうした非日常な身体表現を見誤って、「愛を交わした姿」であるとか「恋人がいた」といった世俗用語に置き換えてしまうことに内在する虚しさのようなものを暗に示しているのではなかろうかと、私は思料します。それはまた、瀬戸内の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝と橋本憲三——」における逸枝についての好奇的描写から、詩の本能とそこに内在するエロスという観点に立って、逸枝のかかる振る舞いを救い出そうとする試みであり、瀬戸内の表現を間接的に批判しているように読むことができるのではないか——これが、私の思考するところです。

瀬戸内の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝と橋本憲三——」への、道子による暗示的な反論で、すべてが解決したのかといえば、決してそうではありませんでした。といいますのも、道子の「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」から二箇月が経過した一九八二（昭和五七）年の三月、西川祐子によって『森の家の巫女 高群逸枝』が新潮社から刊行され、そのなかで、再び松本正枝の言説が取り上げられることになったからです。

そのなかで、それに関連して西川は、次のように描写していました。

以前わたしが「高群逸枝と『婦人戦線』」（「思想」、岩波書店、一九七五年三月号）と題してこの雑誌の歴史をたどった小論を発表したとき、現在もそれぞれの分野で活躍しているかつての同人の方々から、「婦人戦線」の廃刊の直接の原因は資金難でも内部論争でもなく、高群逸枝の恋愛であったという注意を受けた。恋の相手は松本正枝の夫、延島英一。「婦人戦線」と同じく解放社から出され、高群も毎号のように執筆していた延島英一編集の「解放戦線」はふたりの恋の記念碑であったという指摘もあった。当時すでに瀬戸内晴美の小説「日月二人」（「文芸展望」一九七三年夏号——一九七五年冬号）がこの恋をとりあげていた²⁰。

そして、この記述は、次のように続きます。

「婦人戦線」の同人たちは四十五年後に回想文（『埋もれた女性アナキスト、高群逸枝

と『婦人戦線』の人々』、一九七六)を作ったが、そのなかで最も生き生きと当時を語っているのは松本正枝であって、「婦人戦線」という空間を造ることにうちこみ、燃焼して生きた時間があつたことを感じさせる。彼女は高群逸枝が恋人すなわち松本自身の夫に、手紙をわたそうとして心も軽く両手で長いたもとを蝶のようにヒラヒラさせながら歩いていくところに偶然行きあつた衝撃の印象を、まるで昨今のように鮮やかに描いている²¹。

西川は、「『婦人戦線』という空間を造ることにうちこみ、燃焼して生きた時間があつたことを感じさせる」と書きますが、憲三や住井すゑの証言によれば、「松本正枝」を筆者名とする『婦人戦線』誌上の論考は、どれも夫の延島英一による代筆であり、それが事実であれば、延島英一の妻「松本正枝」(本名は延島治)は、名義を貸しただけで、実質的には『婦人戦線』の活動にほとんどかかわっていなかったものと思われます。また、西川は、「彼女は高群逸枝が恋人すなわち松本自身の夫に、手紙をわたそうとして心も軽く両手で長いたもとを蝶のようにヒラヒラさせながら歩いていくところに偶然行きあつた衝撃の印象を、まるで昨今のように鮮やかに描いている」と書き、あたかも恋文でも渡すために逸枝は延島宅を訪ねたような印象を与えています。しかし、『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』に所収されている、松本正枝の「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」では、路上で正枝に出会った逸枝は、「どちらへ？」という正枝の問いに、「これから延島さんにお問い合わせがあつてお宅へ伺うところ」と、答えています。ふたりは家に入り、正枝が台所でお茶の用意をしていると、「これを」という逸枝の声が聞こえてきたものの、座敷にお茶をもってゆくと、もう逸枝の姿はありませんでした。「お願い」は、英一が妻に語ったところによれば、翻訳のことだったようです。明らかに西川の言説は、正枝の描くところを越えたものになっているのです。

それでは、西川のこの『森の家の巫女 高群逸枝』を、静子と道子は、どう読んだのでしょうか。それを例証する資料(エヴィデンス)は残されていないようですので、明確にすることはできません。しかしながら、熊本県立図書館に所蔵されている『森の家の巫女 高群逸枝』は、静子の名義によって寄贈されています。そこから判断しますと、間違いなく静子はこの本を読んでいます。おそらく道子も。しかし、堀場とも道子とも解釈を異にするこの本に、いい感じをもつことはなかったものと思われます。たとえば、次の箇所です。西川は、こうしたことを書いています。

橋本憲三が高群逸枝の死後、早い時期に森の家をひきはらった一つの原因は高群逸枝の最後の病い、入院、葬儀をめぐる橋本憲三と市川房枝をはじめとする後援の人びととの間に生活感情、経済観念、彼女の仕事の成果の所属についての考え方の違いが明らかになったためであつた²²。

市川房枝を頭とするそのグループとの反目が原因となって、敬愛する兄が、あたかも負け犬のごとくに、東京での居場所を失い、そそくさと田舎に逃げ帰ったかのように読み取れるこの一節に、静子は「これは違う」と、憤慨の声を上げたにちがいません。

憲三は、急逝した逸枝の亡骸を、東京での残務整理が終わり次第、一刻も早く熊本に持ち

帰りがかったのは明らかでしょう。そのことは、憲三の次の文が例証します。

『火の国の女の日記』の整理がついたら、骨をいだいて、最後の二人の眠りの場所へいそごう。彼女がいつも恋しがっていた、あたたかい南のふるさとの丘の日だまりに、人しれずいとなまれる妻夫墓に、まず妻をねむらせよう²³。

憲三は、はっきりと「骨をいだいて、最後の二人の眠りの場所へいそごう」と書いています。ところが西川は、何ひとつ証拠を示すこともなく独断的に、上で引用したように、「早い時期に森の家をひきはらった一つの原因は……橋本憲三と市川房枝をはじめとする後援の人びととの間に……考え方の違いが明らかになったためであった」と書くのです。調べてもそれを裏づける資料は存在せず、私には、これは明らかに西川の作り話のように思われますし、なぜそのようなことをするのか、私の目には極めて不可解に映ります。

同じく西川は、「彼女の仕事の成果の所属」にかかわって憲三と市川とのあいだに対立があったごとくに書いていますが、憲三の遺言によって著作権の継承者となっていた静子は、これを読んで、「逸枝の著述物はあくまでも著者たる逸枝に属するものであり、後援者である市川らに帰属するものではない」との思いにかられたものと思料します。西川は、いかなる根拠（エヴィデンス）に基づいて、公然とこうした文を書いたのでしょうか。いっさい証拠となるものが示されていません。したがって、この文言の追検証は、いまや不可能な状態にあるのです。しかしながら、「彼女の仕事の成果の所属」という表現でもって西川は、市川の逸枝支援はあくまでも先行投資であり、没後著作権が市川の手に移り、印税によって回収することが意図されていたことを示唆しているのかもしれない。

西川は、さらにその文のあとに言葉を継いで、「入院のために森の家を出て白昼の光に照らされたたん、森の隠者は人びととの心をつなぐ力を失ったかのようなものである」²⁴とも、書いています。しかし、これにもまた信憑性はありません。といいますのも、市川房枝との関係は、霊安室において今後の葬儀のあり方を巡っての考えの違いが露呈して以降、確かに断絶したものの、他方で、同じくその場にいた平塚らいてうとの憲三の友好は、生涯にわたり続いてゆくからです。「森の家」の跡地につくられた公園に、その後逸枝の記念碑が建立されるのも、らいてうをはじめとする、逸枝の人柄と業績とを真に偲ぶ人たちの尽力によるものだったことに疑いを挟む余地はありません。こうした事例をみちかに見ていた静子が、自分の実の兄を、あたかも世間知らずの陰險な自己中心主義者であるかのごとくに、「人びととの心をつなぐ力を失ったかのようなものである」と書く西川の言説に、少なからぬ不快感をもったであろうことは、容易に想像できます。しかし、もろさわの「高群逸枝」を目にしたときに「もろさわよう子様へ」を書いて以降、もはや静子は、逸枝や憲三を扱った書籍や雑誌文に対して反論することはありませんでした。年齢も傾き、世間の悪意に対抗するだけの力がすでに失われていたのかもしれない。

注

(1) 橋本静子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、100頁。

- (2) 点描「32号を発行して終刊 『高群逸枝雑誌』」『朝日新聞』（夕刊）1981年1月14日、5面。
- (3) 視点「市川房枝さん」『毎日新聞』（夕刊）1981年2月26日、5面。
- (4) 談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、1981年3月6日、78頁。
- (5) 同、談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、79頁。
- (6) 同、談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、同頁。
- (7) 同、談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、同頁。
- (8) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝』（上）朝日新聞社、1981年、vii頁。
- (9) 橋本憲三「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、52頁。
- (10) 前掲『わが高群逸枝』（上）、viii頁。
- (11) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝』（下）朝日新聞社、1981年、363頁。
- (12) 同『わが高群逸枝』（下）、364頁。
- (13) 同『わが高群逸枝』（下）、183頁。
- (14) 同『わが高群逸枝』（下）、186頁。
- (15) 瀬戸内晴美『人なつかしき』筑摩書房、1983年、66頁。
- (16) 石牟礼道子「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』思想の科学社発行、1982年1月号（通巻349号）、42頁。
- (17) 瀬戸内晴美「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」『文芸展望』第5号、1974年4月号、427頁。
- (18) 前掲「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』、44頁。
- (19) 同「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』、同頁。
- (20) 西川祐子『森の家の巫女 高群逸枝』新潮社、1982年、124頁。
- (21) 同『森の家の巫女 高群逸枝』、同頁。
- (22) 同『森の中の巫女 高群逸枝』、225頁。
- (23) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年（第4刷）、482頁。
- (24) 前掲『森の中の巫女 高群逸枝』、225頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第七部

道子の「癒し難い心の病」と魂の蘇生

第一十六章 「癒し難い心の病」で山科の病院に臥す

『高群逸枝雑誌』に連載した「最後の人」は、すぐに単行本になることはありませんでしたが、「椿の海の記」は、連載が終了し、書き直しが進むと、朝日新聞社によって書籍化されます。このときこの本は、次のようなコピーでもって紹介されました。「時は流れ、自然はくるい、人は死んだ。『苦海浄土・水俣』の、椿咲く海辺にその昔どんな世界があったのか……〈不知火の語り部〉と呼ばれる女流がはじめてそのラディカリズムの原点を幽玄の文体で詩情豊かにつづる自伝の詩」¹。述べていますように、臨終の際に憲三は、道子に「寒椿が」といい、それに対して道子は、「はい……」と答えました。これが最後の言葉となりました。しかしながら、実際に出版されたのは、この年（一九七六年）の十一月のことで、残念ながら、憲三の存命中には、間に合いませんでした。道子は、『椿の海の記』の「あとがき」で、こう綴ります。

さらに脱稿間近には、高群逸枝さんの夫君橋本憲三先生のご死去をお見送りせねばなりませんでした。出発作の「苦海浄土」のある部分は、この御夫婦の「森の家」で書かせていただいたものでした。御臨終前の幾週間、毎日、「椿の海は、どれくらい進みましたか、見せて下さい」と朱書だらけのものを仰臥されたままご覧になり、微笑されていました。いま少し生きていて下さったらよかったのと思います。いろいろな方々に助けられて生きている不思議を思います²。

この「あとがき」には、この文の前に、こうした一行が、唐突にも挿入されています。

連載中、瀬戸内晴美氏の出家のことがあり、私の生涯にとって、意味の深い出来事となりました³。

読者は、これをどう読んだでしょうか。字義どおりに読み、おそらくそれ以外の読みには、つながらなかったものと思われます。しかし、一九七三（昭和四八）年四月の『文芸展望』の創刊号に道子の「椿の海の記」が掲載されると、次の第二号から瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」の連載が始まるも、わずか五回の連載で終了します。その間、瀬戸内は出家し仏門へ入り、他方で憲三は、「日月ふたり」の記載内容に苦しみます。いまや、その憲三は黄泉の客となり、連載を終えた「椿の海の記」が、こうして三年の歳月を経て世に出ようとしているのです。そうした背景に思いを巡らせながら、いま一度この一行に目を向けるならば、どうでしょう、道子の複雑な心情が浮かび上がってきます。瀬戸内の出家の情報は、道子にとって、自身の「森の家」への駆け込みと重なり、生き直しの苦しみへのただならぬ共感として、重くその胸にのしかかってきたものと推量されます。しかしその一方でこのとき、「日月ふたり」の文が、自らが尊師として仰ぐ憲三をいかに悲しませたかをまづかで見ていた道子は、自分の書く文は決してそうであってはならぬという強い思いを胸に深く刻んだものと思量します。生涯、道子は、自分のことや歴史上の人物を主題として書くも、決して存命中の実在人物をモデルにして書くことはありませんでした。しか

も、自分が他者を語るのではなく、他者に語らせるところに道子の文の特徴はありました。最晩年に道子は、自伝『葎の渚』を書きますが、それさえも、「森の家」の生活を終えて水俣に帰ってきたところで途切れます。なぜでしょうか。もちろん、執筆を続けるうえでの体力や気力の問題もあったでしょうが、それだけではなく、それ以降のことを書こうとすれば、どうしても生きた他者のことに触れざるを得ず、その過程で、思いもよらぬかたちをとって傷つけ苦しませる事態へと避けがたく発展しかねないことを身に染みて知っていたからではないでしょうか。つまりまとめれば、家を出ることにかかわっては瀬戸内の行為を共有しつつも、書く文については瀬戸内を「反面教師」とすることを内に秘め、道子は、「連載中、瀬戸内晴美氏の出家のことがあり、私の生涯にとって、意味の深い出来事となりました」の一行を、前後の脈略を断って、あえてここに突如吐露したのではないか、これが、私の愚考するところです。

この「あとがき」の最後の語句が、さらに意味深長です。「ことばにうつし替えられないものは心にたまるばかり、わが胸に湧いて動かぬ黒い湖の底から、この一冊を送り出してしまふことになりました」⁴。これをどう読めばよいのでしょうか。本文にある自身の生まれ育ちにかかわる黒い内容そのものについて語っているのかもしれませんが。その場合、この語句は、まだまだ書き足りないといった意味になるでしょう。しかし他方で、瀬戸内に対する背後に隠された自身の黒い思いを念頭に、語っているようにも読めます。それというのも、生前憲三が無念の思いで書いた、瀬戸内宛ての手紙を、道子は、発表する機会をいまかと待ちながら、このとき手もとに保持していたからです。これが公開されるのは、もう少し先になります。

年が改まり一九七七（昭和五二）年を迎えました。一月、新評論から河野信子の『火の国の女 高群逸枝』が、続く四月、大和書房から村上信彦の『高群逸枝と柳田国男——婚制の問題を中心に——』が、公刊されました。ふたりはともに、『高群逸枝雑誌』の常連執筆者で、両書とも、この雑誌への寄稿論文をもとにして、おおかた成り立っています。『高群逸枝雑誌』における河野の連載は、最初が「現代の喪失 『女性の歴史』覚書」、続いて「始原の時 『恋愛論』『恋愛創生』覚書」、最後が「女性史の方法覚書」といった連続する三つの主題に分けて、構成されていました。一方の村上は、前半の「高群逸枝と柳田国男」と後半の「私のなかの高群逸枝」というふたつの主題のもとに連載していました。

さらに七月になると、今度は、鹿野政直と堀場清子の共著になる『高群逸枝』が朝日新聞社から上梓されます。これは、「朝日評伝」シリーズのなかの一冊を占めるもので、逸枝に関する最初の評伝となりました。内容的には、「一．出発哲学」と「二．女性史学に立つ」の二部構成をとり、第一部を堀場が、第二部を鹿野が担当しました。「一九七七年六月七日逸枝の命日に」この本の「あとがき」は書かれています。以下の引用は、そこからの一部抜粋です。

この仕事の完成は、それを誰よりも楽しんで待っていて下さった橋本氏の終焉に、間にあわなかった。一周忌の御命日に、二日がかりのツメの仕事を終えたのは、何かの因縁でもあろうか。それにしても、氏から恵まれた信頼と御好意に、はたして私達は応ええたか。できあがってくる本の最初の一冊を、氏の墓前に捧げる瞬間を思う時、心のうちに、たじろぐ⁵。

おそらく「最初の一冊を、氏の墓前に捧げる瞬間」があったものと思われます。逸枝や憲三に代わって、静子も道子も、深い謝意を表明したにちがいありません。しかしこのとき、静子は、憲三から受け取った遺言書に沿って書籍の整理をはじめていたものと推察されます。熊本県立図書館に所蔵されているこの『高群逸枝』には、寄贈印が押され、そこには、「寄贈 昭和五二年八月一九日 水俣市幸町六一四一 橋本静子殿」とあり、欄外に「憲三氏実妹」と記されています。出版されて、早くも一箇月後に寄贈されたことを意味します。蔵書印には「53. 3. 10」の算用数字が印字されています。この間館内の審議を経て、この日正式に蔵書されたものと思われます。一方、熊本市立図書館の逸枝関係の蔵書を調べてみますと、『東京は熱病にかゝつてゐる』（萬生閣、一九二五年）の蔵書印が「53. 1. 14」となっていることがわかりました。寄贈印はありませんが、蔵書印の日付がほぼ同じですので、『高群逸枝』が寄贈されたほぼ同じ日に、おそらく静子の手によって寄贈されたのではないかと考えられます。熊本市立図書館には、ほかに『黒い女』（解放社、一九三〇年）が所蔵されています。この本は、逸枝から静子に宛てた献呈本です。表紙裏の見返しに、次のような献呈の辞が自筆されています。

風がわりな小説です。散文詩的または寓話的小説とでもいえば、わかりがよいかもしれません。心理的には自叙伝ともいえましょう。私の愛の哲学が語られていると思います。ほんの芽生えにすぎませんが。

日付は、亡くなる二年前の「一九六二年五月」で、文中の「わかりがよい」という語句は、「わかりが早い」と読めなくもありません。

以上のことを勘案しますと、おそらく一九七七（昭和五二）年の八月一九日に静子は水俣から熊本市内に行き、県立図書館に、鹿野政直と堀場清子の共著の『高群逸枝』を、市立図書館に、逸枝の『東京は熱病にかゝつてゐる』と『黒い女』を寄贈したものと思われます。ただ、両図書館とも、このときの寄贈リストが残されていませんので、この日ほかにどのような本が寄贈されたのか、あるいは、実際に図書館を訪れ手続きをとったのが、正確に静子本人だったのか、道子か誰かが代行したのか、そこまでは、現在のところ特定することはできません。

すでに上で示しましたように、憲三が亡くなると道子は、『婦人公論』（一九七六年一〇月）に「橋本憲三先生の死」を書いて追悼し、一方、上梓した『椿の海の記』（一九七六年十一月）の「あとがき」のなかで、心からの謝意を表わしました。しかし、ただそれだけに止まらず、憲三に寄せる道子の追慕の情は、さらにその後も続くのでした。

一九七七（昭和五二）年一月に刊行された季刊雑誌『暗河』第一四号は、「小特集・高群逸枝」を組みました。そのなかに、道子の「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」が現われます。これは、『高群逸枝雑誌』の廃刊で余儀なく中断に追い込まれた「最後の人」の続編、ないしは補遺といった性格のもので、副題のとおり、「橋本憲三氏の死」に臨み、胸に去来する数々の思いが綴られていました。なかでも、憲三が道子に語った言葉として興味を引くのは、次の一節です。といいますのも、逸枝と自身の関係を、ある視点から見事に告白しているからです。

彼女にしてみれば、知的レベルにおいて、資質そのものにおいて、あらゆる意味において、僕はよほど幼稚にうつって見えるでしょうからね。ただ僕の云うことすることが、どんなことがあっても彼女を裏切ることがない。いうなれば僕への信用ひとつで、彼女はうごいたようなものです。

それをあえてしたのは、それがどうしても必要だったからです。必要だったからです。そうするとやはり、そこに一個の生き物が出来た形になって、彼女はその生きものを自分流に、なんと云ったって自分流に仕上げてゆくんです⁶。

明らかに憲三は、「森の家」での逸枝と自分の関係が、「一個の生き物が出来た形になって」いることを自覚しています。想像するにこれは、二匹の蛇が互いに相手の尾を口にくわえた円形状の双頭の蛇（ウロボロス）のような状態に自分たちがあったことを告白するものではないかと思われます。その話を聞いたとき道子は、その後、逸枝の死によってできた抜け殻に、脱皮した自身が入り込み、三つの巴となって、三者の生命が蘇生し復活していったこの間の過程を、改めて認識したにちがいありません。一方、憲三について道子は、こうも描写します。

……その夫憲三もまた、馴れない人であったように思われる。この異質性については、同じ男性の側の理解者を待ってはじめて解明されるだろうけれど、橋本憲三の生き方は近代進歩主義が生み出したきわめて先駆的で特異な一ケースであったと思われる⁷。

このように書いた道子には、すでに紹介しています、鹿野政直が憲三を追悼するために『朝日新聞』に寄稿した文のなかにある次の一節が、念頭にあったのかもしれませんが。「もし日本男性史というものが書かれるとしたら、橋本氏は、既成の男性像を身をもって否定した人間として……、いわば『新しい女』にたいする『新しい男』として、位置づけられるのが至当ではなかろうか」。

続く道子の「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」が掲載されたのは、同年（一九七七年）の六月に発刊された『暗河』の第一五号においてでした。そのなかで道子は、憲三をこう讃えます。

一人の妻に「有頂天になって暮らした」橋本憲三は、死の直前まで、はためにも匂うように若々しく典雅で、その謙虚さと深い人柄はせつしたものの心を打たずにはいなかった⁸。

この号が世に出るとき、すでに道子の身は、山梨県塩山市の病院にありました。渡辺京二は、このように書いています。憲三の一周忌を迎える一九七七（昭和五二）年の五月のことです。

この頃、道子は体調不良に悩んでいたが、五月上京し、山の上ホテルで雑誌「潮」のための原稿を執筆中ついに病臥、二十六日に山梨県塩山市の中村病院へ入院した⁹。

他方、道子は、こう書いています。

なぜ山梨に出かけたかと言えば、いよいよ癒し難くなって来た心の病いを哀れんで、橋川文三先生が大菩薩峠の近くの病院に入るようすすめて下さったのである。精神科の病院かと思い込んで往ったところ、産婦人科の先生だったので驚いたが、じつはこの中村克郎先生こそが、『きけわだつみの声』の編集者であった。とどこおっている書き物を仕上げるよう、先生自ら机を抱えて来て辞書を引いて下さったり、奥さまも看護婦さんたちもお仕事の進み具合は如何ですかとおっしゃる。合間にかの地の名刹を片端から案内して下さい、その間雨乞いの観音さまに出逢うことになった。この世には深い導きの糸というものがあると思うことである¹⁰。

道子はここに、「いよいよ癒し難くなって来た心の病い」という言葉で、自身の体調の不良を表現しています。すでに、第一章「石牟礼道子の『魂が吐血した状態』の前半生」において紹介していますように、おそらくこのときまでに道子には、「こういう家庭の中で育った私にも、狂気の血が伝わっているに違いない」、あるいは、「自分の中に狂気の持続があることを、むしろ救いにも感じていた」という自覚がありました。そこから類推しますと、「いよいよ癒し難くなって来た心の病い」とは、自身の内なる「狂気」の発症を意味するのかもしれませんが。その要因は、資料がなく、正確に明らかにすることはできませんが、ほぼ間違いなく、憲三の死に由来するものであったと思われます。といいますのも、静子を立会人として憲三と後半生を誓っていた道子ですので、その喪失感は大きく、少なからぬ精神的な痛手を被っていたのではないかと想像されるからです。しかし、勧められた入院先は精神科ではなく、『きけわだつみの声』のかつての編集者であった中村克郎が運営する産婦人科の病院でした。

入院中、道子は、中村をはじめとする、周りの人たちからの厚遇を受けます。「かの地の名刹を片端から案内して下さい」、そのおかげもあって道子は、あたかも運命の糸に操られるかのように、雨乞いの観音様に出会うのでした。それは、道子にとって、新たに知る幻想世界への誘いでした。それをきっかけに、道子の関心は、沖縄の久高島に残るイザイホーの秘儀へと向かいます。道子は、その事情を、こう書きます。

沖縄・久高島のイザイホウをなんとか垣間見たいと思い始めた直接のきっかけは、山梨県塩山市の放光寺にある雨乞いの観音さまに出逢い、その無残な姿に激しくとらわれてしまったからだだった¹¹。

こうして、その翌年（一九七八年）の暮れに、実際に希望がかない、道子は、イザイホーの祭儀を見学することになるのでした。

明らかに、「山梨県塩山市の放光寺にある雨乞いの観音さまに出逢い、その無残な姿に激しくとらわれてしまった」ことは、道子にとって大きな収穫となるものでした。そういえるのは、その後道子は、『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）に、イザイホーを題材にした「朱をつける人」を書きますが、この文のなかにあって道子は、「朱をつける人」を憲三に憑依

させて、憲三を神格化しようとしているようにも読むことができます。さらにはまた、最晩年に書く新作能「沖宮」にあつては、主人公として登場する、おそらく道子であろうと思われる童女が、雨乞いのための犠牲となって彼方の沖に流されてゆく場面がありますが、これは、このときに出会った雨乞いの観音様の故事に倣ったものではなからうかと思量されるからです。道子は、「この世には深い導きの糸というものがあると思う」という文言で言い表わしています。憲三の一周忌を迎える道子のこのときの心情を察すれば、この文言は「憲三による深い導きの糸」を含意するものであった可能性さえ残ります。

観音様との出会いに力を得て、次第に道子の心身は、回復に向かったものと思われます。それから一年が過ぎた翌年（一九七八年）の六月五日、道子の「忘れられない本」に関する文が『朝日新聞』（一〇面）に掲載されます。「忘れられない本」として道子が高群逸枝が取り上げたのは、逸枝の『日月の上に』でした。その本にたどりつくまでの経緯が、前段において詳細に語られていますので、流れに沿って部分的に拾い上げ、つなぎ合わせてみたいと思います。

書物などというものと無縁なままに人生の半ばを過ぎて、気がついたら水俣病の渦中にいた。ほとんど同時にわたしは、高群逸枝の著書と、その生き方に出遭った。

それまでのわたしは新聞を読むことはおろか、読書というものを生活の中に持たない、あるいはそれを許されない南国の海浜の一主婦だった。……

庶民、といわれているその他大ぜい組の暮らし。一地域のそれを知るには、まず郷土史資料を勉強せねばと思い始めて、雨の降りなどの、村もおおやけに休む日に、図書館通いを始めた。……徳富蘇峰の寄贈になるその「淇水文庫」には、中野普という館長がおられた。篤実なこの館長に導かれて、入れてもらった資料室の一隅（いちぐう）に、高群逸枝著『女性の歴史』上巻の、ふるびた一冊が置いてあった。

背表紙を見ただけで、全身を痺（しび）れるようなものがつき抜けたのは、異常なことだったが、あまりの無学さと深い飢えのために、幻覚がおきたのだったろう。その時、三十六歳だった。……学問の書として書かれてあるのに、わたしにはむしろ、旧約聖書のように読めたのである。そして彼女の著作には、もっと予言の部分、つまり詩篇（しへん）のようなものがあるのではないかと思った。

こうして道子は、偶然にも、三六歳になる一九六三（昭和三八）年の夏に「淇水文庫」の片隅において逸枝の書物に遭遇しました。しかし翌年に逸枝は亡くなり、実際に会うことはありませんでした。それから月日が流れ、一九六六（昭和四一）年、ついに道子は、逸枝と憲三が長年住んでいた「森の家」に、自身の生き返りを図るために駆け込むのでした。道子の文は、後段へと続きます。

思いもかけず、惨憺（さんたん）たる家に御夫橋本憲三氏とお妹静子さんの訪問を受け、東京世田谷の〈森の家〉に行くことになった。

「心静かにここでお書きなさい。これがあなたのおっしゃる詩篇ですよ」と、憲三氏はおっしゃり、差し出されたのが、理論社から後に『高群逸枝全集』の第八巻として出されることになる、全詩集『日月の上に』の詩稿だった。それはまことに圧巻だった。文字の要る世界も、要らない世界も、いっしょくたの奔流となって、生命界の源をなし

ている。詩句の技巧などは、彼女の唄（うた）う力に破られて、可憐（かれん）な現代への予言者がそこにいた。

このとき道子が『朝日新聞』に書いたのは、「逸枝とのめぐりあい」についてでした。次の年（一九七九年）、今度は道子は、夢のなかでの「憲三とのめぐりあい」について『毎日新聞』に書きます。書き出しは、こうです。「今年の五月二十三日の朝方に夢を見た。その日は高群逸枝さんの夫君橋本憲三先生のご命日の前日に当たっていた」¹²。夢に出現した憲三は、古い表紙の大学ノート出道子に差し出しました。

「あなたにお渡ししようと思ひましてね、持ッて来たのですよ」。ご生前私は、彼女に関する資料をいただきたいとお願いしたことは一度もなかった。橋本先生ご死去の直前からそのあとにかけて、彼女の女性史研究の資料をめざして、多くの人たちが意思表示をはばからないのを知って、私はある困惑に包まれた。憲三先生が死の直前まで「彼女のゴミ類」を焼却しようとされ、妹の静子さんに実行させられたのは周知のことである。そのノートの一冊をあげようといわれて、夢の中ではあり、私は嬉しくもあり、かの困惑にも包まれて、手を出しかねていた。

「彼女を読み解けますよ」と、先生はほほえまれ、インクの消えかかったノートを開いて手渡された。

そこで私は目がさめた。ご命日のことを気にかけていたから、先生が夢の中でノートをくださったのだろう。早く『最後の人』（評伝高群逸枝）を完成するようにとの、ご催促かもしれない¹³。

憲三が死して、このとき、もう丸三年が経過していました。「ご命日のことを気にかけていた」道子の胸中は、このように、夢に出るまでの追慕の情でもっていまだ満たされていたのでした。

注

- (1) 『暗河』第一五号に掲載されている『椿の海の記』の広告文の一部。
- (2) 石牟礼道子『椿の海の記』（朝日新聞社、1976年）の「あとがき」、ノンブルなし。
- (3) 同『椿の海の記』の「あとがき」、ノンブルなし。
- (4) 同『椿の海の記』の「あとがき」、ノンブルなし。
- (5) 鹿野政直・堀場清子『高群逸枝』（朝日評伝選一五）朝日新聞社、1977年、328頁。
- (6) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第14号、1977年冬季号、21頁。
- (7) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』第14号、1977年冬季号、10頁。
- (8) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第15号、1977年春季号、53頁。
- (9) 渡辺京二「Ⅱ詳伝年譜（1969-2013）」『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、

著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで
第七部 道子の「癒し難い心の病」と魂の蘇生
第一六章 「癒し難い心の病」で山科の病院に臥す

藤原書店、2014 年、329 頁。

(10) 石牟礼道子「悶え神とイザイホウの神」『西日本新聞』1979 年 2 月 20 日、11 面。

(11) 同「悶え神とイザイホウの神」『西日本新聞』、11 面。

(12) 石牟礼道子「夢の中のノート」『毎日新聞』（夕刊）1979 年 10 月 17 日、3 面。

(13) 同「夢の中のノート」『毎日新聞』（夕刊）、3 面。

第一十七章 蘇生のために川の源流を求めて山を歩く

道子が山梨の病院に入院し、その後、イザイホーの祭儀を見学しては、自身の魂を慰めていたころの、一方の静子の胸中は、どうであったのでしょうか。加えて藤野は、どう生きていたのでしょうか。それではここで、まずそれを見てゆきたいと思います。

静子は、一九七〇年二月二三日に夫の橋本英雄を亡くしていました。そのときの様子を、生前憲三は、こう書き残しています。

朝食後市立病院に出かけた。妹の静子もあとからやってきた。静子は二月二十三日に夫英雄63歳を失った。英雄はゴルフが唯一の娯楽で一月一日も出水のゴルフ場に出かけてそれをたのしんだのだが翌日発病、たちまち骨髄腫に変じて急逝した。静子はちょうど私が妻を癌性腹膜炎で失った直後とほとんどひとしい状態となり、精密検査しても異常なく、ただ著しく心身の違和感を訴えての病院通いだ。私にも覚えがあることであわれだ¹。

憲三の静子をいたわる心情が、逸枝のことと絡み合いながら、次の文へと続きます。

東京第二病院にあなたを見舞いに航空機で飛んできてくれた夫妻、とりわけあなたが愛した静子。あなたの没後、医者通いをしながら自伝「火の国の女の日記」を整理したり、書き継いだりしているひとりぼっちの私をみかねて、二た月のうちの二週間ずつ十回ぐらいやってきて何彼と援助してくれた静子。むろんまだ老齢というのでもないのだからそのうちたちなおるだろう²。

それから六年が立ち、今度は兄の憲三の死を看取ることになりました。すでに引用により紹介していますように、そのときの静子の様子は、道子が記述するところによれば、こうでした。「静子さんこの十日間ほとんどお睡りにならない。……静子さんも佐藤さんも髪ふりみだしている、たぶん私も。徹夜」。いよいよ、病床の身にあった姉の藤野が、母屋を出て憲三の部屋に姿を現わします。「若主人におんぶされておいでになる。そしておんぶされたまま肩越しに、よく透る声で、『憲さあん、憲さあん！姉さんが面会に来たばあい。もう、もの言わんとなあ』とおっしゃる。そのお声の愛情、哀切かぎりなく、先生の寝息と交互に、『おお、思うたより、やせちゃおらんなあ。憲さあん、うつくしゅうしとるな』」。

道子は、この藤野について、こう書き記しています。

「憲三夫婦はお国のために勉強しているのだから、わたしたちが養うてやらんばならん」とおっしゃって、水俣の店の収入を存分に森の家に送金しておられた由である。……

姉君は逸枝さんの本は読まれなかったそうだが、「憲三夫婦はお国のために勉強している」というお言葉には、はっとするものがある。人間は何のために勉強するの

か、という問題に対して、文字をほとんど読まれなかった方が、「お国のために勉強する」と考えられたとは、深い問いかけをわたしたちに与えずにはいられない。私自身はお国のために勉強するという言葉は思い浮かばなかったけれども、そういう考え方があったのか、と反省させられる。解釈はいろいろあるだろうけれども、深い説得力がある³。

藤野が生まれたのは、一八九四（明治二七）年でした。一九二七（昭和二）年生まれのだ道子とは、三三歳の開きがありますが、そうしたひとつの世代の生活者たちについて、道子は、こう語ります。

当然ながら、わたしの属している世界の生活者の意識は、活字でものを考える人々のそれとは、ちがう。ここには、生きることを文字で考える作業を、一生しないですます種類の、言語世界が成り立っている。……

自分の育った世界を今おもえば、『遠野物語』や『今昔物語』に象徴されるような世界だった。それが、文字を通して思考せねば生きられぬ人たちと、別世界をなしているのはなぜだろう。そのことへの不思議が、わたしにとりついていた。無文字世界でもある水俣の意識は、ひょっとして、近代化したといわれているこの列島の意識の、大勢を占めているのではあるまいか⁴。

「文字をほとんど読まれなかった」藤野が発する、「憲三夫婦はお国のために勉強している」という言葉に、道子は覚醒させられます。「生きることを文字で考える作業を、一生しないですます種類の、言語世界」がここにあるのです。つまり、読まなくても、そこに何が書いてあり、それが何を意味するのかがわかる、藤野が属する言語世界に、道子は驚いているのです。これが「無文字世界でもある水俣の意識」であるとするならば、「近代」という文字世界の波によって、次第にそれは、消し去られる運命を避けがたく宿すこととなります。作家としての石牟礼道子が生涯にわたって書いた文の原理は、本人の意思とは無関係に時代によって消し去られてゆく「無文字世界でもある水俣の意識」の蘇生、広く換言すれば、自分自身も含め、時の凶器によって苦しみと悲しみのなかに身を沈める民たちの存在の再生、まさしくその点にあるように思料されますが、その観点に立てば、藤野は、実に石牟礼文学の楚であり、妣としての役割を担ったのでした。藤野同様に、道子自身もまた、逸枝の著作が読めていませんでした。こう、道子は書いています。

彼女へのわたしの関心は、その業績にふれるには、あまりに無学、晩学で、これから勉強しなければならないけれど、水俣病にかかわっているうちに、最初の予定にはなかった左眼の失明や、残りの視力もおぼつかないので、それには触れられそうもない⁵。

つまり道子は、藤野に遺る「無文字世界でもある水俣の意識」をいまに継承することにあずかって、実質的な「文盲」の立場から、弱き者たちの消えゆく生の実相を文字の内に代弁し続けた人だったように思われます。

藤野は、文字を読まなかっただけでなく、書くことにも困難を覚えていたものと推察され

ます。以下は、逸枝が死期迫るなか入院するときの見舞いの手紙の一部です。片仮名で書かれています。しかし、その心根は美しく、人を感動へと導きます。

マイニチカミホトケニ、ネンジテイマス。／ヒヨウノシンパイワ、イリマセン。イクラ
イツテモ、ミナマタカラオクリマス。／ビヨウキニ、マケズ、シツカリキバリナサイ、
クンゾ〔憲三〕モアナタモ、ミナマタデオセワシマスカラ、アンシンシテ、ヨウジヨウ
ヲシテクダサイ／イツエサマ／フジノ／テガフルエテカゝレマセン⁶。

憲三の死から二年後、藤野も世を去ります。憲三のときと同じく、立ち会ったのは、女医
の佐藤千里でした。

「憲さーん、逸枝さーん、もうすぐあたしも往くばーい」

「先生、もう何にも見えませんと。そろそろ帰ろうごとある」

こう言いながら昏睡状態に入った橋本ふじのは、昭和五十三年六月十一日、八十四歳
でその生涯を閉じた。……裸一貫から大八車を引いて、水俣市の食料品問屋橋本商店の
基礎を築いた人でもある。ここ十年余り、腎性高血圧で床に臥っていたが、床の中から
家族や従業員の一人一人にまで気を配る様は、憲三がよく口にしていた「家刀自」の呼
称がぴったりだった。

ふじのは、殊の他この弟を愛していたらしく、危篤の憲三を、家人の背に負われて見
舞った時、「憲さーん、憲さーん、がん張らんばなあ」としぼるような声で呼びかけて
いた様が、私には昨日のように思い出される⁷。

二三年前のことでした。一九五五（昭和三〇）年の四月、「森の家」に憲三の兄弟が集ま
り、兄弟会が開かれました。橋本家には、男四人、女ふたりの六人の兄弟姉妹がいました。
そのとき、出席がかなわなかった水俣に住む藤野に感謝状を書くことになり、逸枝が毛筆し
ました。

感謝状

橋本ふじの様

あなたは、終始父母のために計
りその老後を楽しませること
につとめられました。

また私ども兄弟にも絶えず

愛情を頒たれました

ここに兄弟会東京開催

にあたり記念品を贈り感謝します。

昭和三十年四月十一日 兄弟会

球磨村 橋本秀吉

東京都 橋本憲三

福岡市 橋本武雄

人吉市 橋本袈義

水俣市 橋本静子⁸

このとき作成された感謝状を、藤野は、亡くなるまでとても大事に部屋に飾っていました。続けて佐藤は、このように書きます。

眠っているようなふじのの胸に、妹の静子は壁の感謝状を下ろしてそっと抱かせてやった。野辺の送りをすませた後もその感謝状は、勳何等とやらの勲章よりもっとさん然たる光を放って私の目に灼きついている⁹。

こうして藤野は、深い姉妹愛に抱かれて、一九七八（昭和五三）年六月一日、逸枝と憲三の待つ世界へと旅立ったのでした。

見てきましたように、静子は、一九七〇（昭和四五）年二月に夫の英雄を、続く一九七六（昭和五一）年五月に兄の憲三を、そして、一九七八（昭和五三）年六月に姉の藤野を亡くします。三人の肉親を立て続けに失った静子。そして、静子を立会人として自身の後半生を逸枝と憲三に誓った道子。このふたりの女性のきずなは決して弱まることはなく、終生続きます。

一方の道子は、憲三を亡くす以前から、水俣病だけではなく、阿蘇近辺の山々へ出かけては、自然とも向き合っていました。一九七七（昭和五二）年発刊の『草のことづて』のなかに、それに関する逸話が登場します。

このところ、阿蘇外輪山とむきあっている形の、九重連山のふところの村々へよく足をのばす。熊本県に生まれながら、阿蘇にのぼったのは、生まれて四〇年すぎてからだだったので、以来、このけたはずれに神格のおおきい山を敬愛することつきず、人生の微々たることに吐息をついている¹⁰。

「吐息」という用語から判断すると、このころの道子の阿蘇散策は、水俣病闘争の緊張から解放される一瞬の息抜きだったのかもしれませんが。水俣の海で起こっていることと、「上古からの大自然の神秘」とを、否が応でも、道子是对比していたものと思われます。道子の文は、こう続きます。

上古からの大自然の神秘が、まだこの奥深い山壁の村々に住む人心を清浄ならしめていて、そういう人びとの心意気が、観光資本を^{しりぞ}斥けているのかもしれぬ。

そういう思いをめぐらしながら、帰路にはときどき菊池溪谷というところを通ってくる。この溪谷は阿蘇火山帯のいかなる地層を経めぐって湧出するのか、磨き抜かれた鏡のような透明度の高い水を年中たたえている¹¹。

しかし、このころの山歩きが、道子にとってはじめての、「人生の微々たることに吐息をついている」行為ではありませんでした。それは、幼い時期から道子に染みついていた、苦界から別世界へと逃れるための、ひとつの蘇生復活^{すべ}の術でもあったようです。道子は、こう

書いています。憲三との二度目の同居生活が終わり、水俣に帰る車窓の右手に、有明海が見えてきた時のことです。

玉名のあたりの山の紅葉の美しさ。三池あたりの海岸線の好もしさ。いつかこんな田舎の海岸線をひとりで歩いた気がする。たびたびこんな小さな美しい山や丘にわけ入ったことだった。それはわたしがまだ少女のころである。少女の魂に魅入った山川の霊はまだ私をはなれない。童話のような桑畑の丘¹²。

さて、「九重連山のふところの村々へよく足をのばす」、そして「帰路にはときどき菊池溪谷というところを通ってくる」、そのころの山歩きから数年後のことではないかと思われまゝ。道子は、熊本市内にある寺社の一室に仕事場を設けます。次の引用は、そこでのある日の様子です。

水俣から出て来て熊本の仕事場に入った。某寺の一隅だが、一夜明けたら境内は落ち葉で埋まっている。……滞在中の食糧を買い出しに、スーパーマーケットにゆく。

出てきた日、銀杏の街路樹はまだ青々としていたのだが、二日経ったばかりというのに……一時にはっとひらいたほど黄ばみはじめ、夕闇近い大地に浮き立っていた。厚みのある曇天だった。……ゆく手に昏れてゆく風景と、心の奥に閉じていた風景がふいに広がり重なって、あの時間の中にまた這入ってしまったとわたしは思う¹³。

この仕事場で、道子は「心の奥に閉じていた風景」に包まれて、次々に文を生み出してゆきます。あるときは、山梨の病院に入院していたおりに見た、観音像を思い浮かべて、こう書きました。

わたしはなにが言いたくて書くのであろうか。このような情景を壺のようなものにいれて抱き、わたしは大菩薩峠の麓で、目も鼻も口も、耳も手足も、もげ落ちすり切れている観音さま出逢った。火に焙られ、縄をつけられて、川床や池の底をそびき廻されて来た木像の、雨乞いの観音さまだった。火に焙り、そびき廻したのは民衆である。そのような姿にされた観音さまもまた、とおくたどれば、民衆そのものであったろう。観音さまは水俣をも現わしていた。それはうつつに視える形であり、わたしを産んだものたちの系譜と姿でもあった。わたしの言霊が、ふかいところで、身悶えしつづけていた¹⁴。

また、あるときは、イザイホーの神事が胸をよぎります。

陽の光が、神女たちの髪に挿したイザイ花の神苑の樹々の上に耀よい、そして翳った。アコウの巨樹が、そのような円舞をおおって枝をさしかけ、天と浜辺をつなぐ柱のように立っていた。

わたしの心の遠い沖に、流竄の神々を乗せた小さな舟の影が、浮かんで消えなかった¹⁵。

そしてまた、あるときは、いまは亡き逸枝の幻影が登場します。

水俣病をめぐる、患者さんと加害者であるチッソとの間で、対決を含んだいろいろなやりとりがあったわけですが、それをそばで見ていて、わたしは高群逸枝さんがこのような問題が起こることを予言していたのではないかと考えるようになりました。彼女自身が求めていた、母性祭祀的な霊能が道徳とされた世界、あるいは庶民が言う「人の道」という世界と、文字というものがどうしても必要な、チッソ側の言うような契約世界とがどうも結び合わない、というようなことが、水俣の問題の中にはっきりと出てきたような気がします¹⁶。

この時期道子は、文筆に精を出しながらも、死と向き合う日々を送っていました。といいましても、一九八四（昭和五九）年の七月、道子は「いのちの切なさ 美しさ」と題して、北海道で講演をしていますが、そこで、このようなことを述べているからです。「自分一人で頑張ってみたり、絶望してみたりで、やっとやっと生きているんですけども、どうかした時に、ああ、今夜はもう死んでしまおうかしら、と思うこともあるんですよ」¹⁷。そう述べたあと、道子は、このようなことを話題に取り上げるのです。

今晚は死んでしまおうかしら、と思ったりする時に、私はちょっと山へ出かけるんです。ここへ来るまでに見たような、景色の所へ車をたのんで連れていってもらいます。

九州の屋根のようなどころがありまして、その屋根の所に行きますとね、いろんな雑草がはえているのです。

そこで、葉っぱが美しいので机の上にでも置こうかしらと思って、なんでもない、そこらへんのその葉っぱを持って帰りました。

最近、あーんなに嬉しかったことがないんですが、見たことのない草だったものから、山の上から持って帰って来て鉢に植えておきました¹⁸。

すると驚いたことに、一週間で過ぎたころ、つぼみが現われ、小さな青紫色の花が咲き出したではありませんか。植物図鑑で調べてみると、その植物はどうやらハナシノブというらしい。続けて道子は、そのときの気持ちをこう語ります。「蕾がだんだんになっていて、どんどん花が咲いていくんですよ。はじめて見たものですから、もう嬉しくて嬉しくて。私が非常に落ち込んでいた時でしたから、今度は『はなしのぶ』という山の花に助けられました。私の場合は、おちこんでいる時に誰か助けてくれる神様『助け神様』が来て下さる——。それは、ある時には、誰か人が見えたり、ある時は草であったりしまして」¹⁹。

「助け神様」を求めての山野歩きは、このころの道子の日常でした。次は、一九八六（昭和六一）年一二月刊行の『陽のかなしみ』の「あとがき」のなかの一節です。

そういう友人たちにここ数年機会を作ってもらっては、あちこちの山あいに入れて行ってもらっている。各自の時間や予算のこともあって、今のところは、鹿児島県や宮崎県近くや、多少の越境をして大分県九重高原に入りこんだりしているが、主に熊本県

境を巡っているのである。

そのような山々は、たいてい川の源流でもある。川の源流へゆきたくて、山にゆくというのが本当かもしれない。……

色の調べをあらわすことばがむかしあった。かろうじて、まだその調べの残されている山野をゆく。自分の蘇生のため²⁰。

この引用文からもわかりますように、「自分の蘇生のため」に、この時期道子は、山歩きをしているのです。憲三を亡くした悲しみからの蘇生が、道子をして山歩きに向かわせているのでしょうか。あるいは、『陽のかなしみ』という書題から連想しますと、作家としては太陽の日差しのなかにあれども、こころはいつも闇で閉ざされている、そのような道子の姿が浮かび上がってきます。『陽のかなしみ』が年末に刊行されると、翌年（一九八七年）の三月、道子は六〇歳の還暦を迎えます。

このころのことではないかと思われませんが、道子は、のちに自身の主治医となる山本淑子と知り合います。といいますのも、九〇歳で亡くなった道子への追悼文「旅は道連れ」のなかで、山本は、「そんな道子さんと三十年程の間、日常の暮らしの中で、人生の旅路の道すがらの時々を御一緒させて頂いたことは、なによりの幸せであった」²¹と書いているからです。それでは、「人生の旅路の道すがらの時々」山本が見た道子の素顔の一端を、ここに紹介します。

山本淑子の夫の山本哲郎が、渡辺京二とともに、人間学についての勉強会を自宅で開くようになったときのことです。一、二回が過ぎたころから誘われて山本淑子もそこに加わり、そして一年が立ったころから、道子も時々参加するようになりました。そのときの様子を、山本は、こう描写します

石牟礼さんは前もって本を読んでおられる風では全然なかった。会の終り頃に御意見を求めると、本をただパラパラとめくって閉じて、少し沈黙の後、本の内容に沿った的確なお話が始まるのであった。一を聞いて十を語る人であった²²。

この逸話は、すでに引用によって示しています、次の一節を例証します。道子は、こう書いていました。

当然ながら、わたしの属している世界の生活者の意識は、活字でものを考える人々のそれとは、ちがう。ここには、生きることを文字で考える作業を、一生しないですます種類の、言語世界が成り立っている。……

自分の育った世界を今おもえば、『遠野物語』や『今昔物語』に象徴されるような世界だった。それが、文字を通して思考せねば生きられぬ人たちと、別世界をなしているのはなぜだろう。そのことへの不思議が、わたしにとりついていた。

道子は、「左眼の失明や、残りの視力もおぼつかない」状態にあったとしても、明らかに、「生きることを文字で考える作業を、一生しないですます種類の、言語世界」に生きているのです。道子の書く作品の多くが、過去の文字文献を頼りに引き書きしたものではなく、人

からの聞き取りや心象風景の細密描写で成り立っているのも、そこに主たる要因があったのではないのでしょうか。

山本は、このような逸話も紹介しています。

勉強会では修学旅行も行なった。山好きのメンバーの案内で矢部や国見岳、島原、倉岳、阿蘇、九重など、川辺川上流のダムに沈んだ村も見に行った。車の中で、「九州山地のどこかに深い湖があって、そこと不知火沖はつながっておるちゅう話で、不知火沖にはきれいな真水がコンコンと湧いとる場所があるそうですよ」「ふーむ、そうですか」私はなま返事をしてばかりだったが、その時、すでに石牟礼さんは、『十六夜橋』や『天湖』のストーリーを発想しながら景色を眺められていたのである²³。

すでに道子の文から引用していますように、「そのような山々は、たいてい川の源流でもある。川の源流へゆきたくて、山にゆくというのが本当かもしれない」と書いています。ここに、まず山があって、そこを源流として川が流れ出し、最後に大海に至るという筋書きが見えてきます。道子の目には、東の大阿蘇と西の不知火海をつなぐ、普通の人であれば気に留めることのない地下の水路、あるいは、埋もれた別世界が、見えるのかもしれませんが。

事物には、「はじめ」があれば「おわり」があり、原因があつてはじめて結果が生まれます。そのあいだには、容易に人が見ることができない埋蔵された「過程」が存在します。おそらくこれが、道子を書こうとする物語の全宇宙であり、道子の目に見える、森羅万象の成り立ちの構造だったにちがいありません。

しかし、その一方で、人との出会いにも、「はじめ」と「おわり」があります。道子にとっての「はじめ」は、淇水文庫での逸枝の『女性の歴史』（上巻）との出会いであり、「森の家」での憲三との同居生活にありました。しかし、恩師と仰ぐ憲三もすでに世を去り、服喪の情感のなかにあつて「癒し難い心の病」を困って、道子は、この時期を生きていました。

「今晚は死んでしまおうかしら」と書くように、死と向き合う人生が、その人にとっての、「はじめ」と「おわり」に挟まれた「過程」だったのです。しかしながら、「今晚は死んでしまおうかしら」と思えども、もはや分別もなく、いまさら自らのいのちを自らの力で断つことはできません。道子は、「山野をゆく。自分の蘇生のため」と書きます。であるならば、山歩きも、そして執筆活動さえも、死霊のささやきが日々聞こえる道子にしてみれば、「はじめ」と「おわり」をつなぐ、息苦しい「過程」のなかにあつての、つかのまの「吐息」であり、「おわり」を待つあいだの、瞬時瞬間の「蘇生」のための自己療法だったにちがいありません。そうした営為が、憲三没後の道子の生の実際だったのではないかと思われるのです。

それでは、ここで、道子の次の言辞を想起したいと思います。第三章「一度目の滞在で逸枝と憲三に後半生を誓う」に続く、再度の引用になります。

世俗的なさまざまな意味で私の一生は、逸枝先生に御会いする（全集の前の『女性の歴史』）直前にすべて終わりました。そして、逸枝先生との出遭いによって私はのっぴきならぬ後半生へと復活させられたといえましょう²⁴。

人には、いつか肉体的な「おわり」が訪れます。そしてそのとき、個人的で内面的な世界も「おわり」を迎えます。道子は、自身の内面世界に息づく魂の「はじめ」と「おわり」を、肉体の「おわり」に先立って描くことを、一方で文を書き、また一方で山を歩きながら、時期は正確に特定できませんが、おそらくこのころ、構想していたのではないかと思料します。

肉体の「おわり」の直前に書かれた、絶筆ともいえる最晩年の作品が、新作能「沖宮」でした。しかしながら、そこに至るまでの道子に、わが魂をさらに傷つけて止まない、幾つもの過酷な災いが降りかかってくるのです。それを、次の第八部「再び苦界に落とされる静子と道子」を構成する三つの章で書き表わしたいと思います。

注

(1) 橋本憲三「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、24-25頁。

(2) 同「題未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、25頁。

(3) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、275頁。

(4) 石牟礼道子「忘れられない本 高群逸枝全集『日月の上に』 奔流をなす現代の予言」『朝日新聞』1978年6月5日、10面。

(5) 『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、藤原書店、2006年、498頁。

(6) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝』（下）朝日新聞社、1981年、350頁。

(7) 佐藤千里「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、1978年7月、46頁。

(8) 同「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、47頁。

(9) 同「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、48頁。

(10) 石牟礼道子「水を呑む樹」『草のことづて』筑摩書房、1977年、96頁。

(11) 同「水を呑む樹」『草のことづて』、96-97頁。

(12) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、328頁。

(13) 石牟礼道子「昏れてゆく風」『陽のかなしみ』朝日新聞社、1986年、269頁。（巻末に付されている「初出紙誌一覧」によると、初出は、『エコノミスト』、1981年12月8日号で、原題は「わたしの中のある風景」。）

(14) 同「陽のかなしみ」『陽のかなしみ』、377頁。（巻末に付されている「初出紙誌一覧」によると、初出は、『新沖縄文学』第42号、1979年8月、および、同誌第43号、1979年11月。）

(15) 同「海のおもろ」『陽のかなしみ』、428頁。（巻末に付されている「初出紙誌一覧」によると、本稿は、未発表原稿。）

(16) 同「女性の中のある宗教——高群逸枝さんのこと」『陽のかなしみ』、229頁。（初出は、『日本人の宗教心』講談社、1983年10月。）

(17) 『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、藤原書店、2013

著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで
第七部 道子の「癒し難い心の病」と魂の蘇生
第一七章 蘇生のために川の源流を求めて山を歩く

年、433 頁。

(18) 同『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、433-434 頁。

(19) 同『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、434 頁。

(20) 前掲『陽のかなしみ』、429-430 頁。

(21) 山本淑子「旅は道連れ」『道標』第 61 号、発行所・人間学研究会、2018 年、118 頁。

(22) 同「旅は道連れ」『道標』第 61 号、117 頁。

(23) 同「旅は道連れ」『道標』第 61 号、118 頁。

(24) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、248 頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第八部

再び苦界に落とされる静子と道子

第一八章 二冊の逸枝の校訂本の発刊と著作権者としての静子の立場

逸枝の死後、東京から水俣へ居を移した憲三の晩年の様子を、道子は、こう描写しています。

水俣に移られてから、全集の売行と比例して訪問者たちがこの部屋に「防ぎようもなく侵入し」はじめていた。森の家の原則はくずれかけていた。卒論を控えた学生たちとか、新聞の人たちとか、いわゆる逸枝ファンの人たちだったが、なぜ氏が逸枝の蔭の人として終始されたか、その秘密を知りたい、隠されているそれを直接氏の口からききたい、というのはその人たちのやみがたい希求のようであった。氏はたいてい寡黙に微笑して、例のように額の汗を拭きながら悪戦苦闘して答えられる¹。

「防ぎようもなく侵入し」てきた訪問者のなかに、栗原弘と栗原葉子も含まれていたものと思われます。

憲三の一九七三（昭和四八）年七月一〇日の「共用日記」に、栗原弘と栗原葉子夫妻の来水の様子について、こう記されています。

栗原弘・葉子さん、河野さんの紹介名刺をもってみえる。同志〔社〕大学院生（3年）、高群研究（婚姻）をしているとのこと。6時ごろ水天荘へ。葉子さんは同大学美術科出身。また院生になって勉強したいとのこと²。

続く七月二三日の「共用日記」には、「同志社大学院生（3年）栗原弘さんみえる。1月ぐらい下宿して、高群婚姻史についていろいろ質問したいとのこと。下宿について西条美代子さんを紹介する」³、さらに七月三十一日の「共用日記」には、「栗原さん、『平安鎌倉室町家族の研究』コピーはじめ、市役所で（ゼロックス）」⁴との記載があります。

憲三が亡くなるのが、栗原弘と栗原葉子夫妻の水俣訪問から三年が立った一九七六（昭和五一）年五月です。それからさらに九年の歳月が流れます。栗原弘の校訂による『平安鎌倉室町家族の研究』が、一九八五（昭和六〇）年二月に国書刊行会から上梓されると、続いて六年遅れて、栗原葉子と栗原弘のふたりの校訂になる『日本古代婚姻例集』が、一九九一（平成三）年五月に高科書店から刊行されるに至ります。しかしながら、「平安鎌倉室町家族の研究」も「日本古代婚姻例集」も、憲三が述べるところによれば、「強いて採録するにもおよぶまいとして」、『高群逸枝全集』から除外されていた稿本だったのでした。

それでは、『招婿婚の研究』の基礎調査を集成した稿本である、この「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」は、執筆当時どう出現していたのか、その様相を、ここで確認しておきます。

まず、『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」に、この稿本について、こう記されていますので、以下に紹介します。

昭和二十四年の年始状において、逸枝はつぎの近況報告をする一

女性史第二巻『招婿婚の研究』は明年成稿の予定になっていまして、今年こそは私の生涯における最大の苦闘の年であろうと、自ら覚悟を新たにしています。

と。

こうして、二月十九日には冬嗣流篇家族表……約五〇〇枚を……五月二十三日には五摂家篇家族表約六〇〇枚を仕上げた。……

五摂家篇のつぎには一般公家篇に入り、その約九〇〇枚を十月十三日に終わった。計約二千枚、これは後に『平安鎌倉室町家族の研究』と題された。カードのままの未整理分を加えて約五〇〇家族の調査だった。

それからただちに婚姻表の執筆に入った。これは古代から織豊期におよぶ文献—諸家日記はもちろん—から婚姻の事実例を年代順にあつめたものだった。……この筆写や清書には K も協力した（この転写は翌年五月までかかってようやく綴り込みになった）。約八〇〇枚。後に『日本古代婚姻例集』と命名された。未整理分を加えて約一〇〇〇例の調査だった⁵。

続く三年後の一九五二（昭和二七）年の逸枝の年賀状は長文で、このような内容で綴られていました。

私は『招婿婚の研究』を旧臘二十五日脱稿しました。平均十時間の日課で十三年九ヵ月かかりました。……

主題の招婿婚（婿取式）は、周知のように記紀以下の史籍、諸家の日記、宇津保・源氏・栄花・今昔・盛衰記・増鏡等一連の国文学の上に顕著に現われている、室町期娶嫁婚（嫁取婚）にかわるまでの支配的婚姻形態でまた現に全国各地に遺存してあります。……

研究は……方法としては、先ず十一年余を費やして数万枚のカード、約一千の採集婚礼例（八百枚）、五百の家族調査（成文二千枚）を用意し、これらにより、実証的帰納的に考察したものであり、読者は容易に原拠について論断の是非を批判し得るでしょう。

研究にのみ没頭して出版の便宜をも一切失ってしまい、本になりうるか否かわかりませんが（切にその便宜を与えられたいと思います）、ここに成稿の報告ができますことを心からうれしく思います。

当分の間推敲に従いながら、新年から通史研究に入り、第三巻『古代女性史』（4 封建 5 現代）にかかり、かたわら前記家族調査を再整して『平安鎌倉室町家族の研究』をまとめます。

つつしんで長い間のご援助を感謝申しあげなお最後まで御みまもりくださいますようお願い申し上げます⁶。

この年賀状から一年が立った一九五三（昭和二八）年の一月、逸枝の大著『招婿婚の研究』は大日本雄辯會講談社を版元として上梓されます。「奥付」の右隣の頁に「著作目録（女

性史研究)」があり、以下のとおり記されていました。

著作目録（女性史研究）

招婿婚の研究	A5判	一、二五〇ページ	新刊
母系制の研究	A5判	六五〇ページ	三版
古代女性史	着手中		
封建女性史	予定		
現代女性史	予定		
平安鎌倉室町家族の研究	四〇〇字詰	二、〇〇〇枚稿本	
日本古代婚姻例集	四〇〇字詰	八〇〇枚稿本	
日本女性社会史	B6判	三一〇ページ	二版
恋愛論（歴史的考察）	B6判	三一〇ページ	二版
大日本女性人名辞書	A5判	七五〇ページ	三版
（詩）			
日月の上に（叙事詩）			
東京は熱病にかゝつてゐる（叙事詩）			
放浪者の詩			
美想曲			
胸をいためて			

見てもわかりますように、「平安鎌倉室町家族の研究」および「日本古代婚姻例集」と同時に、いままさに執筆に入ったところの「女性の歴史」の通史もまた、書目として挙げられています。しかしながら、逸枝が亡くなるのは、逸枝にとっての最後の研究書となる『日本婚姻史』が世に出た翌年の一九六四（昭和三九）年六月です。結果として、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」は出版に至らず、逸枝の死後、憲三の手に遺されたものでした。

存命中、逸枝は折に触れて憲三に、こんな話をしていました。

「日記」一卷（『火の国の女の日記』）と追加研究一卷とができ上がったら、『過去の紙くず』は一切焼いてしまって、また新しい出発をしましょう。あたたかいところへ行って、そこで私は『女性の歴史』で書けなかった未来像を叙事詩のかたちで描くでしょう。たぶん私の最後の詩篇となるでしょう⁷。

「追加研究一卷」は、亡くなる前年に刊行された『日本婚姻史』を指すものと思われます。道子は、『高群逸枝全集』の編者である憲三からおそらく聞き取ったにちがいない上の引用文に言葉を足して、さらに、こう述べています。

過去の紙くずというのは、著書以外の、いくらか机辺にのこっている既発表ものの切り抜きをはじめ、未発表もののすべてを指していることはいうまでもありません。むろん私（編者）も同調しようこんで、「そうしましょう」とこたえたものだった⁸。

「未発表もののすべて」のなかには、当然ながら、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」が含まれます。もはやこれは、逸枝にとってみれば、「過去の紙くず」でしかありませんでした。

憲三は、こうした生前の逸枝の意向に従い、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」のこのふたつの稿本については全集に収録しませんでした。採録しなかった理由について、憲三は、最終回の配本となった第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」のなかで、次のように語っています。

全集には、はじめ、もう一卷、「平安鎌倉室町家族の研究」を予定していたが、編纂の最終段階で検討の結果、この原稿には書き込みが非常に多くて接合不明の箇所なども少なくなく、ことに表類にいつそうその難があり、その他にも書き入れ指定が果たされていない等、そのまま活字製版に付することは可能でないため、やむをえず、これは除外されるにいたった。別に、「日本古代婚姻例集」の採録も一応考えられたのであったが、その成果の精髓は「平安鎌倉室町家族の研究」とともに「招婿婚の研究」に吸収されていることではあり、強いて採録するにもおよぶまいとして、同じく除外されることになった⁹。

逸枝にとっては「過去の紙くず」同然のものであり、憲三してみれば、「強いて採録するにもおよぶまいとして」『高群逸枝全集』から除外した、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」が、それではなぜ、栗原弘と栗原葉子の校訂によって世に出ることになったのでしょうか。

以上のような背景を考えますと、『平安鎌倉室町家族の研究』（栗原弘校訂、国書刊行会、一九八五年）と『日本古代婚姻例集』（栗原葉子・栗原弘校訂、高科書店、一九九一年）のふたつの校訂本を手にしたとき、静子にも道子にも、強い驚きの情感が襲ってきたにちがいありません。しかし、静子も道子も、それについて何も語っていません。そこで、静子と道子を感じたであろうと思われる疑問や憤懣を、ここで整理し、ふたりに成り代わって、私が論じることにしてみたいと思います。問題点は、次の四点になろうかと考えられます。

（１）いかなる経緯をたどって、憲三が全集に入れなかった「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」の遺稿が、憲三の死後、「遺言による高群逸枝著作権継承者」¹⁰となっていた橋本静子から離れ、栗原弘と栗原葉子夫妻の手に渡ったのか。

（２）いかなる理由があって栗原夫妻は、未整理の下書きの段階にある原稿（「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」）を、つまりは、いまだ逸枝本人によって最終的な確定がなされていない原稿を「校訂」して世に出したのか。

（３）栗原弘と栗原葉子夫妻は、なぜ、高群逸枝の著作である「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」のふたつの稿本を校訂出版するに際して、「高群逸枝著作権継承者」である橋本静子に出版の内諾を得なかったのか。

（４）いかなる経緯をたどって、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」のふたつの稿本は、栗原夫妻の手を離れ、熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）に所蔵され

るに至ったのか。

それではこれより、これら四つの論点につきまして、順次考察を加えます。

まず、最初の論点についてです。

栗原弘は、自身が校訂した『平安鎌倉室町家族の研究』の「あとがき」において、その遺稿に接したときのことを、こう文字にしています。

私が高群に傾倒したのは大学院に入学した頃であった。当時、私は女性史と民俗学に興味を持っていた。……村上〔信彦〕氏の力強い躍動的な筆致に感激し、高群の著作を次々に読み進み、『招婿婚の研究』を読み終えた。……ただその中で未完の『家族の研究』の存在を初めて知った。それから河野信子氏の御紹介を得て、橋本憲三氏を水俣に訪問することができた。昭和四十八年の初夏であった。高群逸枝雑誌編集室と称する倉庫の二階の一室で、橋本氏より白い厚紙で綴じられた分厚い四冊の稿本を見せていただいた。これが『家族の研究』であった。……私は橋本氏にお願いして『家族の研究』をコピーさせていただいた。私は、出版まで持って行きたい旨を橋本氏に伝えたが、もちろんその節に私が本気でやるとは橋本氏は思っていなかったであろう。この本について最も精通していた氏でさえ、出版をあきらめていたからである¹¹。

この「あとがき」によれば、栗原弘が校訂した『平安鎌倉室町家族の研究』は、「白い厚紙で綴じられた分厚い四冊の稿本」のコピーが底本となっています。ところが、それから六年後に出版された、栗原葉子と栗原弘のふたりの校訂になる『日本古代婚姻例集』の、栗原葉子の筆になる「あとがき」には、こうした文言が並べられているのです。

私達は水俣の図書館で道を尋ねて高群のお墓を詣でたあと、憲三氏を訪ねたのだった。そのとき何を語ったのかほとんど記憶がない。ただ氏は、「革命はおきませんかネ」とつぶやかれた。倉庫の二階のその部屋にはベッドのうえに高群の大きな写真が飾られていて、氏の部屋の窓から逸枝の眠る山の中腹を望みながら「自殺しようとは思いませんが生き永らえようとも思いません」とおっしゃるような生活を送っておられた。憲三氏はその三年後の昭和五十一年死去された。七九歳であった。……

氏の葬儀の後、憲三氏の令妹橋本静子さんから高群の未完の遺稿「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」、高群の使っていた書物十冊ほど遺品分けのように譲り受けた。他の遺品のほとんどを静子さんは水俣市の図書館に寄贈された¹²。

ここで栗原葉子が明言しているのは、憲三の葬儀のあとに、逸枝の未完の遺稿「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」を妹の静子から遺品分けによって譲渡されたということです。果たしてこれは、真実でしょうか。

憲三が亡くなるのは、一九七六（昭和五一）年五月二三日です。翌日二四日の『熊本日日新聞』は、一五面で憲三の死去を報じ、「葬儀、告別式は本人の遺言で行なわない」と書きました。続いて、「故高群逸枝さん夫妻の遺稿 水俣市立図書館『洪水文庫』に寄贈」という記事が六月一日の四面を飾ります。そのなかで、洪水文庫に寄贈された遺稿の内容について

て詳報し、関連書物に関しては、「橋本さん自身の遺言もあって大部分の蔵書は高群さんを研究している早大文学部の鹿野政直教授などの研究者に渡される」と記されています。

先に書きましたように、栗原弘が校訂した一九八五（昭和六〇）年二月発刊の『平安鎌倉室町家族の研究』の「あとがき」には、手稿や図書の類の遺品を遺族から譲渡されたといった記載はいっさいなされていません。ところが他方で、その六年後の一九九一（平成三）年五月に発刊された、栗原葉子と栗原弘による校訂本である、『日本古代婚姻例集』の「あとがき」には、「氏の葬儀の後、憲三氏の令妹橋本静子さんから高群の未完の遺稿『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』、高群の使っていた書物十冊ほど遺品分けのように譲り受けた」と、書かれてあります。しかし、『熊日』の報じるところを参考にすれば、憲三の「葬儀」は行なわれなかったものと思われましますし、したがって、葬儀後の、遺族や親近者が一堂に会しての「遺品分け」のような行事もなされなかったのではないかと思います。それでは、栗原弘と栗原葉子の夫妻は、いつ、どこで、誰から、いかなる経緯のなかであって「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」の遺稿を入手したのでしょうか。

それについて考えられる一例である、栗原弘校訂の『平安鎌倉室町家族の研究』（国書刊行会、一九八五年）においては、最初の水俣訪問のときにコピーしていた「白い厚紙で綴じられた分厚い四冊の稿本」が底本として使われ、一方、栗原葉子・栗原弘校訂の『日本古代婚姻例集』（高科書店、一九九一年）においては、『平安鎌倉室町家族の研究』の発刊以降、あるとき何らかのきっかけにより、第三者が所有していた「日本古代婚姻例集」の遺稿をもらい受け、それを底本として校訂作業が行なわれたとする、かすかな推論も、完全に否定することはできないかもしれません。もしそれが真実であれば、栗原葉子が『日本古代婚姻例集』の「あとがき」に書いている遺稿入手にかかわる文言は、真実を語っていないことになります。

そのような疑問が避けがたく生じるのは、さらに、こうした道子の言説が残されているからです。死期が近づくと、憲三は道子に、こう伝えました。

遺言を静子にしたのですよ、元気なうちにしておいた方がよいのでね。もしや重態になっても誰にも知らせてはならない。旧友たちにも、身内にも。ましてジャーナリズムなどには。葬式などはいっさいしないこと、あなたも香典などもって来てはいけません。これは守って下さい。遺物などどこかに寄贈することも考えられるが、押しつけになるから一切を土に返すこと。それらいっさいを静子に託しました。あれは実行力がありますからね。……¹³。

ここから判断しますと、遺言により、憲三の「葬儀」も、「遺品分け」のような儀式も、やはり行なわれなかったのではないかということです。もうひとつ道子の重要な証言が残されていますので、以下に引用します。

〔橋本憲三先生〕ご生前私は、彼女〔高群逸枝〕に関する資料をいただきたいとお願いしたことは一度もなかった。橋本先生ご死去の直前からそのあとにかけて、彼女の女性史研究の資料をめざして、多くの人たちが意思表示をはばからないのを知って、私はあ

る困惑に包まれた。憲三先生が死の直前まで「彼女のゴミ類」を焼却しようとされ、妹の静子さんに実行させられたのは周知のことである¹⁴。

道子の言説に従うならば、「橋本先生ご死去の直前からそのあとにかけて、彼女の女性史研究の資料をめざして、多くの人たちが意思表示をはばからない」、そうした状況のなかにあつての熱烈な希望者が、栗原弘と栗原葉子の夫婦だったのかもしれませんが、あるいは、別の第三者だったのかもしれませんが。いずれにしてもそれは、道子を困惑させるものでした。そして道子は、「憲三先生が死の直前まで『彼女のゴミ類』を焼却しようとされ、妹の静子さんに実行させられたのは周知のことである」とも書きます。であるならば、おそらく憲三にとって、全集から外した「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」は、逸枝の「ゴミ類」にすぎず、遺言によりはっきりと憲三は、その焼却を静子に指示していたものと思われま

す。一方、静子が、憲三の遺言に忠実な、しかも実行力のある「著作権継承者」であつたことは、次の事例が証明します。

私は、本稿『余滴を集めて——石牟礼道子研究』の巻末に、「付録 三巻共通写真集——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」を付しています。そのなかに、「【図60】復刻版『女人藝術』における高群逸枝の『戀愛行進曲』の割愛案内文」があります。ここから、一九八六（昭和六一）年に龍溪書舎から刊行された『女人藝術』の復刻版においては、「著作権継承者の了解が得られませんでした」という理由により、逸枝が『女人藝術』に寄稿した文のすべてが削除されていることがわかります。すでに指摘していますように、静子自らが、自分のことを「遺言による高群逸枝著作権継承者」と書いていますので、『女人藝術』の復刻版が世に出るに当たって逸枝の文の掲載を見送る判断をしたのは、静子本人だったものと考えられます。

憲三の遺言書は現存していないようですが、おそらくそのなかに、『高群逸枝全集』以外の著作物は、今後いっさい人の目に晒してはならぬといったような指示がなされていたのではないかと想像されます。それであれば、どのような理由から、あるいは、どのようないきさつがあつて、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」の稿本は、栗原弘と栗原葉子の手に渡ったのでしょうか。不可解な謎としかいいようがありません。

このことに関連してあえて付け加えるならば、憲三の死去から五年後の一九八一（昭和五六）年に朝日新聞社から橋本憲三と堀場清子の共著になる『わが高群逸枝』（上下二巻）が出版されます。両巻の奥付には、コピーライト表示があり、そこには「©S. HASHIMOTO K. HORIBA 1981」と表記されています。ここから、橋本憲三の著作に関する版権の継承者もまた橋本静子であることがわかりますし、同時に、静子が、いかに著作物にかかわる権利関係を大事にしていた人物であつたのかも、自然と浮かび上がってきます。

次に、二番目の論点である、本人にとって未確定の原稿である「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」が、なぜ、第三者によって出版に供されなければならなかったのか、この点につきまして、見てみたいと思います。

すでに指摘していますように、『招婿婚の研究』の巻末に設けられた「著作目録」において、逸枝は、既刊図書とあわせて、次のように、この二冊の稿本をリストに挙げていました。

平安鎌倉室町家族の研究	四〇〇字詰	二、〇〇〇枚稿本
日本古代婚姻例集	四〇〇字詰	八〇〇枚稿本

ここから判断しますと、逸枝はこの二冊を、将来的には印刷に付し世に出したかったのではないかと推察することができます。しかし、これも、すでに引用によって示していますように、『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」には、『招婿婚の研究』が出版される当時であって、『招婿婚の研究』執筆のための基礎調査であった、一方の「平安鎌倉室町家族の研究」については、「計約二千枚、これは後に『平安鎌倉室町家族の研究』と題された。カードのままの未整理分を加えて約五〇〇家族の調査だった」と、他方の「日本古代婚姻例集」については、「約八〇〇枚。後に『日本古代婚姻例集』と命名された。未整理分を加えて約一〇〇〇例の調査だった」と書かれています。ここから判断できることは、どちらの稿本も、「未整理」の状態にあったということです。その後、逸枝本人によって手が加えられ、最終の確定原稿になったことを示す記録はいっさい残されていません。憲三自身も、第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」のなかで、実際にこのように語っています。あえて再度引用します。

全集には、はじめ、もう一巻、「平安鎌倉室町家族の研究」を予定していたが、編纂の最終段階で検討の結果、この原稿には書き込みが非常に多くて接合不明の箇所なども少なくなく、ことに表類にいつそうその難があり、その他にも書き入れ指定が果たされていない等、そのまま活字製版に付することは可能でないため、やむをえず、これは除外されるにいたった。別に、「日本古代婚姻例集」の採録も一応考えられたのであったが、その成果の精髓は「平安鎌倉室町家族の研究」とともに「招婿婚の研究」に吸収されていることではあり、強いて採録するにもおよぶまいとして、同じく除外されることになった。

そしてまた憲三は、『高群逸枝雑誌』（第三号）に「平安鎌倉室町家族の研究」のなかのひとつの頁を、図版にして紹介しています。それは、本稿の巻末に付しています「付録 三巻共通写真集——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」において、「【図 7 5】高群逸枝の原稿 4／『平安鎌倉室町家族の研究』」として再掲しています。四百字詰め原稿用紙の余白いっぱいには書き込みや指示の矢印が入っています。見る限り、明らかに未完成の草稿段階にある原稿ですので、正確な判読は、書いた本人しかできないのではないかと思いますし、また未整理の原稿でもありますので、逸枝の存命中であれば、おそらく整理の段階で幾多の加除がなされていたにちがいないとも思われます。にもかかわらず、何ゆえに栗原は、「校訂」という手法にまかせて、躊躇することなく世に送り出したのでしょうか。著者である逸枝が生きてそれに立ち会っていれば、天地動乱の蛮行として、その目に映ったのではないかと愚考します。その思いは、憲三も同じだったものと思います。

次に、第三の論点についてです。なぜ、栗原弘と栗原葉子夫妻は、高群逸枝の著作である「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」のふたつの稿本を校訂出版するに際して、「高群逸枝著作権継承者」である橋本静子に出版の内諾を得なかったのでしょうか。

栗原弘が校訂した『平安鎌倉室町家族の研究』の「あとがき」にも、それから六年後に

版された、栗原葉子と栗原弘が校訂した『日本古代婚姻例集』の「あとがき」にも、出版に当たって橋本静子に了承を得たことを示す文言はありません。前者の「あとがき」に、「末筆ながら、水俣では橋本静子、田島美江子両氏に大変お世話になった」とありますが、これは、裏を返せば、水俣から帰ったのちの校訂の作業中、静子との交流が全く途絶えていたことを示唆します。また、後者の「あとがき」には、「昭和五十八年に死去された村上信彦さんにも感謝の意を述べたい。幾度か下さった親身溢れるお手紙は私達にとって大きな精神的支柱となった。またこの書の出版は橋本静子さんの全面的なご好意によって可能となった。改めて感謝したい」という文言はありますが、村上信彦からの「親身溢れるお手紙」の内容につきましても、いかなる言及もなされていませんし、静子が示した「全面的なご好意」の具体的内容につきましても、いっさい何も触れられていません。したがって、それが何を意味するのかわかりません。謝意を伝える順番から判断しても、栗原夫妻にとっての静子の位置づけは、「親身溢れるお手紙」の送り主である知人の村上信彦よりも低かったことがわかります。もし仮に、出版の許可を「高群逸枝著作権継承者」である橋本静子に事前に願い出ていたとすれば、おそらく静子は、『女人藝術』復刻版刊行のときと同じように、それを拒否したであろうと、私は思料します。

いまだ、著者である逸枝の死亡から『平安鎌倉室町家族の研究』の出版まで二一年、同じく『日本古代婚姻例集』の出版まで二七年しか経過していませんので、おそらく著作権は切れていなかったものと思われます。しかし、両校訂書の刊行に際しては、著作権が切れていると一方的に思い込み、そのため著作権所有者の承諾は不要との判断があったかもしれません。たとえ仮にそうであったとしても、この遺稿が、「遺品分けのように譲り受けた」ものであってみれば、法的問題のみならず、道義上の問題としても、事前に遺族に出版の了解を得、そのことを「あとがき」において明記してもよかったのではないかととも思料します。因みに、『平安鎌倉室町家族の研究』の奥付には、コピーライトの表示はありません。一方、『日本古代婚姻例集』の奥付には、「©校訂者 栗原葉子 栗原弘」と記載されています。この表示は、明らかに校訂者の両名が著作権を所有していることを示します。すでに紹介していますように、憲三の死後、憲三と堀場清子の共著である『わが高群逸枝』（上下二巻）が出版されるに当たっては、奥付に、「©S. HASHIMOTO K. HORIBA 1981」とのコピーライトにかかわる表示がありますので、それと比べれば大きな違いが存在していることがわかります。したがって、これもまた、私には大きな不明点として残ります。

少し想像してみます。遺族で「著作権継承者」である静子が、『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』の出版に接したとき、どのような思いに駆られたのでしょうか。誰も望んでいないことを人知れず実行に移すおぞましさに驚愕したにちがいありません。いやむしろ、いまだ「ゴミ類」として焼却していなかった自分を責めたかもしれません。

「森の家」で生前憲三は道子に、「彼女にいわせれば紙クズ。彼女によって否定されたものを全集にとりあげることは、彼女をはずかしめ、僕もはずかしめを受ける」¹⁵と語っていました。憲三が全集に取り上げなかった「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」が世に出たことによって、遺族で「著作権継承者」である静子もまた、「はずかしめを受ける」事態へと陥ったのではないかと愚考します。

参考までに、逸枝作品の校訂本が、いまひとつありますので、ここで、コピーライトの表示の仕方、および、「あとがき」における静子への敬意の表わし方につきまして、見てみた

と思います。この本は、一九一八（大正七）年に、二四歳の逸枝がおよそ半年をかけて四国巡礼の旅に出かけたときに、旅先から『九州日日新聞』に寄稿した連載物を再整理したもので、堀場清子を校訂者として一九七九（昭和五四）年一月に朝日新聞社から刊行された『娘巡礼記』です。この校訂本の奥付を見ますと、「©1979 S.Hashimoto」と明記されており、版權所有者が「橋本静子」であることがわかります。また、校訂者の堀場清子は、この本の「あとがき」に、次のように書いて、静子への敬意を表わしました。

最初の旅から六十年をへだてて、ふたたび逸枝の旅立ちの朝がきた。専念寺の和尚さんや桶屋の夫婦のうしろに立って、私も見送りの仲間に入る。高群夫妻にとって無二の理解者であり応援者であられた橋本静子氏の、よろこびに満ちた顔も、もとよりそこにある。

笠の紅緒の紐をしめ、馴れない草鞋を踏みしめながら、いま逸枝は専念寺のかわいい山門をくぐる。あらたな読者の魂をたずねて、八十八ヵ所をめぐる巡礼娘の旅よ、さきくあれ¹⁶。

ここに、校訂者である堀場の、静子に対する、そして逸枝に対する、溢れんばかりの愛情を感じ取ることができます。栗原弘の校訂本である『平安鎌倉室町家族の研究』の「あとがき」における、もうひとつの栗原葉子と栗原弘による校訂本である『日本古代婚姻例集』の「あとがき」における、静子への言及は、すでに上で紹介していますので、読み比べればわかりますように、堀場のそれとは明白な差があります。これは、栗原弘と栗原葉子の、静子との距離感が、いかに希薄なものであったかを例証します。しかし、それは校訂者としての個人の資質なり感性なりの問題であり、ここでそれについて何かを述べるつもりはありません。しかし、コピーライトの表示の問題は、版權が誰の手にあったのかを示す、法律的にも極めて重要な意味をもちますので、あえてここで問題にしたいと思います。

繰り返しになりますが、問題点を整理します。憲三が亡くなるのは、一九七六（昭和五一）年五月です。そのとき、憲三の遺言により、妹の橋本静子が「高群逸枝著作権継承者」になります。それから三年の歳月が流れ、堀場清子校訂の『娘巡礼記』（朝日新聞社、一九七九年）が、その六年後に、栗原弘校訂の『平安鎌倉室町家族の研究』（国書刊行会、一九八五年）が、さらにそれから六年が過ぎて、栗原葉子・栗原弘校訂の『日本古代婚姻例集』（高科書店、一九九一年）が刊行されます。静子が亡くなるのは、二〇〇八（平成二〇）年四月です。したがって、これら三冊の校訂本は、静子存命中の刊行となります。

同様に、これもすでに言及していますように、『娘巡礼記』におけるコピーライトの表示は、「©1979 S.Hashimoto」です。『平安鎌倉室町家族の研究』にはコピーライトの表示は何もありません。『日本古代婚姻例集』におけるコピーライトの表示は、「©校訂者 栗原葉子 栗原弘」です。私は、『娘巡礼記』におけるコピーライトの表示が、最も適切な表記の仕方であると考えます。続く『平安鎌倉室町家族の研究』になぜコピーライトの表示がないのか、私には理解できません。他方、『日本古代婚姻例集』におけるコピーライトの表示が「©校訂者 栗原葉子 栗原弘」となっていることから推察しますと、このときまでに著作権が、「橋本静子」から「栗原葉子と栗原弘」に移ったように解釈できます。しかしながら私は、兄から譲り受けた、高群逸枝の著作に関する権利を、全くの赤の他人に静子が譲渡

したとは、どうしても考えることができません。そのことを示す資料も、探す限りにあつて、見当たりません。なぜ、著作権を巡ってこのような現象が起こったのでしょうか。私には、どうしても不可思議に思えてなりません。

それでは、このふたつの稿本は、その後、どのような運命をたどることになるのでしょうか。現在、この稿本はともに、熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）に所蔵されています。最後になりますが、これが、四番目の論点になります。

現在、熊本県立図書館のホームページにアクセスし、「くまもとデジタルギャラリー」の検索画面に「高群逸枝」の文字列を入力しますと、「くまもと文学・歴史資料館セクション」三点が表示されます。そのうちのひとつが、「平安鎌倉室町家族の研究」で、閲覧できる一点の画像は、藤原冬嗣にかかわるおそらく最初の頁であろうと思われます。そこで、熊本県立図書館に問い合わせのメールをしました。このときの交信内容は公的利益にかなうものであるため、今後の公開にかかわって事前に相手先に通知をしていますので、それに従いその一部を、ここに書き記します。

（一）中山修一からくまもと文学・歴史館への質問第一信（二〇二四年一月六日）

現在私は、ウェブサイトで公開しています「中山修一著作集」の第一八巻「三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」を書いています。つきましては、「くまもとデジタルギャラリー」にあります、くまもと文学・歴史館資料コレクション「高群逸枝原稿 平安鎌倉室町家族の研究」（四綴）につきまして、以下にお尋ねいたします。

（１）この資料の入手経緯（入手時期や寄贈者名等）につきまして、そちらの記録に残っている範囲で結構ですので、ご教示ください。

（２）この資料は、栗原弘校訂『平安鎌倉室町家族の研究』と完全に一致しているかどうか、わかる範囲で結構ですので、ご教示ください。

（３）この資料は、いつでも自由に閲覧できるものなのか、もしそれが可能な場合、閲覧場所はどこなのかあわせて、ご教示ください。

以上、三点をお尋ねいたします。お手数をおかけいたしますが、お返事をちょうだいできれば、うれしく存じます。ご高配にあずかりますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

（二）くまもと文学・歴史館から中山修一への返信第一信（二〇二四年一月七日）

この度は、当館の HP をご覧いただき有難うございます。当館所蔵資料「高群逸枝原稿 平安鎌倉室町家族の研究」に関する、ご質問につきましては、以下のとおりです。

（１）入手経緯についてですが、この資料は平成七年（一九九五年）に当館に御寄贈頂きました。御寄贈者様につきましては、御容赦ください。

（２）原稿全てについての校訂を確認してはおりませんが、一致しているものと考えております。

（３）恐れ入りますが、自由閲覧とはなっておりません。研究目的に限りご利用可能で、まず「申請書」（別紙参照）をご送付いただく必要がございます。（申請いただいた後、お時間を頂戴いたします。）また、閲覧に関しましては、紙質等の研究などの現物でなければならぬ理由がない限り、画像での御提供（閲覧）となります。

色々と制約がございますが、資料保護等の観点から、ご理解いただきますようお願いいたします。閲覧のご希望等ございましたら、再度ご連絡頂きますようお願いいたします。

(三) 中山修一からくまもと文学・歴史館への質問第二信（二〇二四年一月八日）

さっそくのご回答、ありがとうございます。これに関連しまして、さらに以下に四点、ご質問させていただきます。

(1) 貴館に所蔵されています当該資料「平安鎌倉室町家族の研究」は、真正の実物でしょうか、それとも、複写物を製本したものでしょうか。

(2) ご承知かと存じますが、当該資料のほかに、高群逸枝の遺稿をのちに校訂して出版されたものに、『日本古代婚姻例集』があります。こちらの手稿本も、当該資料「平安鎌倉室町家族の研究」とあわせて、貴館に所蔵されていますでしょうか。

(3) 「御寄贈者様につきましては、御容赦ください」とのご回答ですが、そちらの公的記録には、寄贈年月日とともに、寄贈者名が明記され残されていますでしょうか、それとも、寄贈年月日のみで、寄贈者名は残されておらず、現在まで「寄贈者不明」として取り扱われているのでしょうか。

(4) 当該資料は特別な理由がない限り、「画像での御提供（閲覧）」のご回答ですが、「画像」とは、いまそちらの HP で公開されています一枚の画像を指しますか、それとも、全頁を画像として閲覧ができるような状態になっているのでしょうか。もし後者の場合でしたら、国立国会図書館が提供していますデジタルコレクションに準じて、個人送信によって個々人の PC において閲覧が可能となるシステムになっているとありがたいのですが、そのようになっていますでしょうか。

以上、四点につきまして、ご質問させていただきました。お忙しいなか、誠に恐縮に存じますが、ご高配にあずかり、お返事をいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

(四) くまもと文学・歴史館から中山修一への返信第二信（二〇二四年一月一三日）

当館へお問い合わせいただき有難うございます。お尋ねのことにつきましては、以下の通りです。

(1) 「平安鎌倉室町家族の研究」は実物を所蔵しております。

(2) 「日本古代婚姻例集」につきましても当館で所蔵しております。

(3) 寄贈者様につきましては、個人情報の観点から公表しておりません。御了承下さい。

(4) 「画像での御提供（閲覧）」についてですが、資料全ての画像について閲覧が可能です。当館での閲覧サービスにつきましては以下の二点での御提供となります。

ア、当館にお越しいただき、画像をご覧いただく。

イ、当館に DVD と返信用封筒（DVD の枚数や、送料は利用者様ご負担）をお送りいただければ、データをこちらで入力しご返送いたします。

但し、どちらの場合も、申請書（アとイでは申請書様式が違います。）が必要です。また、申請書到着後二週間程度のお時間を頂戴することがあります。ご了承いただきますよう、よろしく願いいたします。

資料の閲覧等ございましたら、再度ご連絡いただければ幸いです。

以上が、「平安鎌倉室町家族の研究」に関する、熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）との交信内容の一部です。ここからわかることは、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」の双方の真物を熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）が所蔵しているも、その入手経路は公開できないということです。栗原夫妻から熊本県立図書館へ渡った経緯を想像すれば、おおかたその可能性は、次の三つになるのではないかと思います。ひとつは、両人が直接当該図書館に寄贈した、もうひとつは、両人が第三者に譲渡し、その後その人物が当該図書館に持ち込んだ、さらにもうひとつは、両人が古書店か古物商に売却し、それを当該図書館が購入した、以上の三つです。

さて、『平安鎌倉室町家族の研究』の「あとがき」において、校訂者の栗原弘は、こう書いています。

校訂内容は時間をかけておれば優れているということにはならない。けれども、私としては高群の著作の信用を落さないように出来る限りの努力はしたつもりである。それでもどこかに校訂ミスがあるのではないかと恐れる。その場合は後日訂正しなければならないので読者の御教示をお願いしたい¹⁷。

もし、校訂ミスが見つかり、その場合には訂正しなければならないという自覚が本当にあるのであれば、研究者たる校訂者が校訂に使った原本である手稿本をやすやすと手放すことはないのではないかと思います。熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）からの回答にあるように、寄贈されたのが間違いなく一九九五（平成七）年であったとするならば、県立図書館への帰属替えは、『平安鎌倉室町家族の研究』が世に出て一〇年後、『日本古代婚姻例集』が世に出て四年後に行なわれたことになります。なぜ栗原は早々に原本を手放し、将来発生する可能性のある「訂正」という重要な責務を放棄してしまったのでしょうか。これにつきましても、私の目には大きな疑問として映ります。

さらにそれに加えて、私は、こうした疑問ももっています。すでに引用によって示していますように、『日本古代婚姻例集』の「あとがき」において、校訂者のひとりである栗原葉子は、「氏の葬儀の後、憲三氏の令妹橋本静子さんから高群の未完の遺稿『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』、高群の使っていた書物十冊ほど遺品分けのように譲り受けた」と書いています。人は、「遺品分けのように譲り受けた」、いわば、亡くなった者を偲ぶよすがとなる形見の品を、自身の手もとにあって長く大切に保有することなく、かくもやすやすと他人に手渡すことが本当にできるものなのでしょうか。私の個人的心情からすれば、決して納得のゆくものではありません。

以上、「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」の逸枝の遺稿が、校訂本として世に出た経緯にかかわって、私の個人的視点から考察しました。おそらく、静子も道子も、完全にとはいわないまでも、私とある程度重なる思いを抱いたのではないかと思います。その判断が正しければ、その思いには、栗原夫婦への強い不信なり不満なりが含まれていたものと推量します。

注

- (1) 石牟礼道子『『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——』『暗河』暗河の会(編集兼発行人/石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第15号、1977年春季号、58頁。
- (2) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、180頁。
- (3) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、181頁。
- (4) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (5) 『高群逸枝全集』第一〇巻/火の国の女の日記、理論社、1976年(第8刷)、350-351頁。
- (6) 同『高群逸枝全集』第一〇巻/火の国の女の日記、368-369頁。
- (7) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、39頁。同様の記述を、次の資料に見出すことができます。『高群逸枝全集』第七巻/評論集・恋愛創生、理論社、1967年、372頁。
- (8) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。同様の記述を、次の資料に見出すことができます。『高群逸枝全集』第七巻/評論集・恋愛創生、理論社、1967年、372頁。
- (9) 『高群逸枝全集』第七巻/評論集・恋愛創生、理論社、1967年、372頁。
- (10) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、3頁。
- (11) 高群逸枝著、栗原弘校訂『平安鎌倉室町家族の研究』国書刊行会、1985年、1093-1094頁。
- (12) 高群逸枝編、栗原葉子・栗原弘校訂『日本古代婚姻例集』高科書店、1991年、i頁。
- (13) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、56-57頁。
- (14) 石牟礼道子「夢の中のノート」『毎日新聞』(夕刊)1979年10月17日、3面。
- (15) 石牟礼道子「最後の人 第六回 序章 森の家日記6」『高群逸枝雑誌』第6号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年1月1日、28頁。
- (16) 高群逸枝著・堀場清子校訂『娘巡礼記』朝日新聞社、1979年、270頁。
- (17) 前掲『平安鎌倉室町家族の研究』、1096頁。

第一章 栗原弘の「逸枝著作の改竄説」とそれへの道子の反論

栗原葉子と栗原弘のふたりの校訂になる『日本古代婚姻例集』が高科書店から刊行されてから三年が経過した一九九四（平成六）年の九月、同じ版元から栗原弘の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』が世に出ました。著者の栗原弘は、その「はしがき」において、こう述べています。

高群逸枝は『母系制の研究』『招婿婚の研究』という大著を発表し、日本の原始古代社会に母系制が存在し、女性の地位が高かったことを主張した。今日、この高群学説には批判と賛同が複雑に交錯し、どちらかといえば、批判の方が多いといえるであろう。しかし、婚姻史・女性史の分野では今なおその影響力は少なくないといえる。筆者は大学院生の頃、村上信彦の論文に影響を受け、高群学説に傾倒した。その当時は、同学説が正しいと信じて二、三の論文を執筆した。その後、高群の遺稿『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』の出版にたずさわり二著を世に送り出した。二著は、高群学説の実証部であった。筆者は二著の校訂作業の過程で、高群学説の実証には根本的な誤りがあることに気付いた¹。

「筆者は大学院生の頃、村上信彦の論文に影響を受け、高群学説に傾倒した。その当時は、同学説が正しいと信じて二、三の論文を執筆した」と、栗原は書きます。その論文には、『高群逸枝雑誌』の二九号、三〇号、および三一号に掲載された「柳田国男の婚姻史像」も含まれるものと思われます。自身が書いているとおり、当時栗原は、明らかに、「高群学説に傾倒した」人物だったのです。

憲三の死によって、この雑誌は、三一号で事実上の廃刊となります。しかし、もろさわようこの「高群逸枝」を読んだ静子はその反論の場として、道子の協力を得て、『高群逸枝雑誌』を復刊したのでした。三二号となる終刊号の「編集室メモ」のなかで、ただひとりの同人であった道子は、この雑誌を振り返って、「この間、村上信彦氏を始め、河野信子、石川純子、西川祐子、栗原弘、寺田操諸氏の御高作を頂くことが出来たのは、甲斐ない同人の慰めであった」²と書きます。

ところが栗原は、「その後、高群の遺稿『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』の出版にたずさわり二著を世に送り出した。二著は、高群学説の実証部であった。筆者は二著の校訂作業の過程で、高群学説の実証には根本的な誤りがあることに気付いた」と、書き記したのでした。『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』の遺稿がどのような経緯で静子の手を離れ、出版されるに至ったのか、その経緯の不明瞭さもさることながら、「二著の校訂作業の過程で、高群学説の実証には根本的な誤りがあることに気付いた」という言葉が目飛び込んできたとき、おそらく道子は、仰天したものと想像されます。この変節は、一体何に由来するのか、これも想像するしかありません。純粹に研究遂行上のひとつの到達点だったのかもしれませんが、疑うわけではありませんが、何か別に隠された意図があったのかもしれませんが。

栗原弘の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』の「はしがき」は、さらに次のように続きます

す。

高群学説の誤謬には洞富雄から鷺見等曜まで、実にさまざまな批判が行われてきた。筆者はそれらの多くが正しいことが理解できるようになった。しかしながら、従来の批判は、彼女がひたすら真実を追求した結果が不幸にも誤っていたとする見解に立っていたと思われる。ところが、筆者の追調査によれば、高群学説の誤謬は彼女の極めて意図的な操作改竄の産物であったことを確信するに至った³。

このなかで、先行する高群史学の批判書として栗原が言及しているのは、洞富雄の『日本母権制社会の成立』（淡路書房、一九五七年）と鷺見等曜の『前近代日本の家族の構造——高群逸枝批判——』（弘文堂、一九八三年）であると思われます。このふたつの書物は、専門書であったこともあり、静子と道子の目に留まらなかった可能性があります。栗原の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』は、地元紙である『熊本日日新聞』の書評で取り上げられ、評者が、逸枝の書は「極めて意図的な操作改竄の産物」であるとする著者の知見に言及していたこともあり、大きな驚きのなかであって、おそらく静子も道子も、この書評を読んだものと思われます。

書評の執筆者は、かつての『高群逸枝雑誌』への常連寄稿者であった、女性史研究家の河野信子でした。そのなかで河野は、この『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』を、次のように紹介しました。「高群逸枝の著作たちには魔力がある。読み始めたら、やめられなくなるのである。大著『招婿婚の研究』もまた例外ではない。本書はこの『招婿婚の研究』を〈だまし絵つき一大叙事詩〉とみなして、このだまし絵の図（だまし絵には地＝ぢ＝と図があって、そのいずれをとるかによって、人はそれぞれに異なった見解をもつ）を綿密に累積する手法で解析したものである」⁴。続けて河野は、本書の特徴と、それが歴史学に及ぼしている影響について、以下のような見解を示します。

『日本霊異記』『今昔物語』『蜻蛉日記』をはじめとする数多くの文献史料の検討を経て、高群型抽出法には、ただの〈うっかりミス〉でない「意図された」抽出加工法が使われているといった結論を、栗原氏は提示した。……

本書は、母系反証の書というよりは、史料の密林のなかの抽出法検証としてのまとまりを持ったものである。だが、本書の図もまた反証法のスタイルをとっているために、既に女たちのなかから、栗原氏の反証に対する反証といった、反例探しがはじまっている⁵。

それでは、『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』には、どのようなことが具体的に書かれてあったのでしょうか。その内容の中心となる部分を、幾つか以下に引用します。著者は、次のように、高群史学が「整然とした誤謬」によって成り立っていることを説きます。

このように、高群が、事実に反して、妻方提供型を主流として描いたことによる誤謬・説明不足には、実に明快な法則性がみられる。

婚姻の前半期（詳述） 婚姻の後半期（略述）

外祖父と外孫（詳述）	祖父と内孫（略述）
母子関係（詳述）	父子関係（略述）
両親と娘（詳述）	両親と息子（略述）
夫と妻方（詳述）	妻と夫方（略述）
家の女系伝領（詳述）	家の父系伝領（略述）

右のように、極めて意図的に、一方に偏った叙述構成となっている。このような「整然とした誤謬」こそ、高群自身が、自身の誤謬を認めていた、動かぬ証拠というべきである。意図の内容を一語でいえば、族制上の非父系的（高群によれば母系制）側面を前面に押し出して、父系的側面を無視したわけである⁶。

それでは、こうした「整然とした誤謬」は、いかなることが原因となって生じたのでしょうか。高群史学にあつては、「男性史から女性史を自立させ、女性解放の歴史的根拠を打ち立てることが目標とされていた」⁷とみなす著者は、「整然とした誤謬」の発生要因を、自身が抱く「理想」を優先させ、見出した「史実」を隠蔽したことに求めようとしています。

以上のような前提に立脚する高群の歴史研究は、避けて通ることができない難問を内包していた。一方で極めて実証的な作業を行いつつ、他方では、立証不可能な理想像を追いつめていたからである。ここでは、理想像への憧憬の強さが、客観的事実における整合性の範囲を逸脱し、過去の史実を改変させる危険性が内在していた。すなわち、高群史学とは、女性に関する歴史を、冷静にみようとする存在史ではなく、女性に生きる希望を与えることを使命とした当為史であつたと言えよう。ここに、高群史学の特質（生命）があり、また問題点もあつたのである。高群が、歴史研究の全生活中で、最大のエネルギーを投入したのが、五〇〇家族の調査であつた。ところが、高群は、五〇〇家族の数量的分析結果をどこにも発表していない。五〇〇家族という膨大な事例を婚姻形態に分類し、それを各時代別に数量的に示せば、読者には、各時代の婚姻居住形態が一目瞭然で理解されるはずである。しかし、高群は、それらの正確な調査結果の報告を、明らかに拒否している。理由は、はっきりしている。高群が発見した史実と彼女の理想とが、齟齬していたからである⁸。

こうして著者の栗原弘は、高群女性史学に「意図的な操作改竄」あるいは「整然とした誤謬」という烙印を押したのでした。

一九九四（平成六）年の九月に『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』が刊行されると、学問の世界へとその影響は広がってゆきました。その一例を、翌年（一九九五年）一〇月に福岡市女性センター「アミカス」を会場に比較家族史学会との共催によって開かれたシンポジウム「『国家』と『母性』を超えて——高群女性史をどう受け継ぐか」に求めることができます。発表者は、石牟礼道子、栗原弘、西川祐子の三人で、司会を上野千鶴子が務めました。

道子は、このとき栗原と西川と対峙します。おそらく複雑な思いがあつたものと想像されます。といいますのも、一五年前に刊行された『高群逸枝雑誌』の終刊号（三二号）の「編集室メモ」において道子は、繰り返しの引用になりますが、「この間、村上信彦氏を始め、河野信子、石川純子、西川祐子、栗原弘、寺田操諸氏の御高作を頂くことが出来たのは、甲

斐ない同人の慰めであった」と書いていたからです。

道子の心中には、栗原の豹変にかかわって驚きと怒りが渦巻いていたものと推量します。加えて、前の第一十八章「二冊の逸枝の校訂本の発刊と著作権者としての静子の立場」で言及していますように、栗原夫婦による二冊の校訂本の刊行についても、少なからず不信と不満をもってにちがいありません。また、第一十五章の「道子の瀬戸内小説への反論文『本能としての詩・そのエロス』」において示していますように、自著の『森の家の巫女 高群逸枝』のなかで、松本正枝の言説を評価し、市川房枝の言動を暗に支持していた、もうひとりの発表者である西川祐子についても、道子は、それ相応の不快感を抱いていたにちがいありません。その意味で、このシンポジウムは、道子にとって一種の修羅場だったのです。

各自の当日の発言内容をまとめた、このシンポジウムの報告書は、一九九七（平成九）年三月に、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族8）として、早稲田大学出版部から公刊されました。そのなかに、道子の「表現の呪術——文学の立場から——」を見ることができます。そこに、「当日のレジュメ」も再掲載されており、道子は、その冒頭に、こう書いています。

かの有名な、
われ日月の上に座す
詩人 逸枝

というのを、まだわたしは読めていないと近頃思う。栗原弘氏の提出された、高群逸枝の歴史改竄説以来、結構このあたりでも、藪の賑わいが聞こえてくるからである。逸枝の業績を一瞥もしないで「やっぱりそうか」と鬼の首でもとったような揶揄が聞こえてくるけれども、もとよりそれは栗原氏の望まれることではあるまい。私は、壮大な仮説の古典として高群史学を読みたい⁹。

当日の道子の実際の発言がどうであったのかは再現できませんが、その後に起稿した「表現の呪術——文学の立場から——」のなかから幾つか以下に引用して、「高群女性史をどう受け継ぐか」という主題に対しての道子の考えを探ってみることにします。道子は、どのような観点に立って、栗原の説く「意図的な操作改竄」から逸枝を救済したのでしょうか。まず道子は、「詩人としての逸枝」について言及します。

栗原さんから投げかけられました高群さんの歴史歪曲説は大変ショックでございます。……

栗原説の事件で、わたくし、はっといたしましたのは、かの有名な、

汝洪水の上に座す神エホバ
われ日月の上に座す詩人逸枝

という詩を若年の折に、発表致しまして、大方の輦轡を買いました。……

詩人、芸術家というものは、その現身は世俗の中にあるほどに、巷を歩けば千の矢が飛ん来るといふ事も作品に書き付けております。そういう風にしか生きられないのが詩人ではないでしょうか。……

同時代の詩人たちにくらべて、熊本時代も処女詩集の時代も『婦人戦線』のときも、異

性との家出事件も、「森の家」も、終始一貫、彼女は、一般社会からみれば、異様で、エキセントリックで、トラブルメーカーでさえありました¹⁰。

次に道子は、「詩から学問へ」という文脈で、逸枝の業績を語ります。

詩というものは、その世に対して即効的で有効性のあることをいえるわけではない。表現と言うのはそういう宿命を持っています。ですから、その詩は、一種、呪術的に成らざるを得ない。古代呪術の力をもった詩人が希にいます。学術論文でそれをやろうとして、人跡未踏の女性史というものに取り組んだ時、彼女の内なる詩は点火されて……鳥瞰的な表現を幻視したのではないか。そういう欲求がせめぎ合ったのではないか。……高群さんは、こうあって欲しいという女たちの国を最高に良い形で作り上げてみせる、という詩と学問との刺激的調和を、誰も書いた事のない、一種の飛躍的新世界。神話劇みたいな大叙事詩を書こうとする衝撃が、噴火状態になって出てきたのだと思います。そのとき、彼女にはやはり歴史上の女たちが乗り移って、心象世界の核に成ったのだと思います。

そうすると、今まで調べてきた平安・鎌倉・室町の五百家族、藤原氏の日記の全部を読破するということで蓄積してきた資料の中から、彼女の詩的な欲求に応じて、資料の方が波頭を立てて彼女と呼応したのだと思います¹¹。

このように道子は、まず最初に詩人の幻視があり、次に史料から聞こえてくる歴史上の女たちの声に耳を傾け、最終的にそれを歴史的時間軸に並べ直し全体が俯瞰できるようにしたものが高群史学ではないかと、いうのです。栗原学説が、「意図的な操作改竄」という用語を使って高群史学を否定的にみなしたのに対して、明らかに道子は、それを肯定的にとらえ、詩人のもつ創造的エネルギーの産物として理解したのでした。果たして逸枝は、日本史学上の「ペテン師」ないしは「犯罪者」だったのでしょうか。それとも、女性史という新しい学問の「創造主」ないしは「預言者」だったのでしょうか。道子は、憲三の言葉を紹介して、このようにまとめます。

橋本憲三先生は、常々、「あなたは、高群逸枝を信じなさい」とおっしゃっていました。私が聞こうとすると、早くも察知されて、「信じなさい、マルクスが、初期の頃に、人類の精神の富ということをいいましたが、高群が定説化した女性の為の精神の富は、みんなで、実らせて行く価値があるとぼくはおもいます。だから信じなさい」、といわれたことが、今思い当たります。その後、私は、水俣の事情とか、視力の事情とかがあって物理的に時間がとれなくて、勉強ができていませんが、今までやれずに来たのも幸運だと思います。皆さんの実りのある研究成果を頂戴する事ができて、有難いと思っています¹²。

それでは最後に、再び「当日のレジュメ」から一節を、少し長くなりますが、引用します。といいますのも、これが、このシンポジウムにおいて、道子が最もいいかったことではないかと、推量するからです。

人跡未踏であった女性史の原野にわけ入るのに、地母神たちの力に押されて、伏在する女たちの意識の総体に言葉を与えてきた逸枝を読みたいと思う。誰がこのことをなしえたろうか。壮絶である。お手本はなかった。創りあげてゆく仕事だった。創作というより創造であった。国づくりでさえあった。その体系は自ずから鉅脈の露頭がつながるようにあらわれたのではないだろうか。彼女自身「ボダ」をかぶりながらの仕事である。「一坑夫」の仕事だと謙遜している。

学問的業跡というものは、いつかは乗り越えられる運命にある。そして学問というものは、乗り越えられてこそ意味があるのではないだろうか。しかしながら、あとからあとから出現する学説が流砂のように去ったあと、その流砂に洗われて、古典となって発光しながら横たわる作品もある。

書かれる前から高群逸枝は古典として出現したのだった。それゆえ、稀なる介助者があらわれた。夫妻の業跡の意味を私はそうとらえたい。二人を洗う歳月の砂は、むしろ必要なのである¹³。

道子の「表現の呪術——文学の立場から——」が所収された『ジェンダーと女性』が発刊されたのは、一九九七(平成九)年の三月一〇日でした。逸枝が亡くなって三三年の歳月が、そして憲三が亡くなって二一年の月日が、そろそろ流れようとしていました。発刊の翌日、道子は七〇歳の誕生日を迎え、それからおよそ四箇月が立った七月二五日に、静子は八六歳になりました。この間道子は、決して変わることなく、憲三については「先生」の敬称をつけて「橋本憲三先生」と書き、他方で、道子と憲三の契りの「立会人」となった静子をしっかりと支えました。おそらく道子は、一部この本を静子に献呈したにちがいありません。そのなかに見出した、「書かれる前から高群逸枝は古典として出現したのだった。それゆえ、稀なる介助者があらわれた。夫妻の業跡の意味を私はそうとらえたい。二人を洗う歳月の砂は、むしろ必要なのである」という道子の予言に、静子は、何かこころが洗われる思いをもったのではないかと推量します。

さてそこで、一方に『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』における栗原の「意図的な操作改竄」説を、そしてもう一方に「表現の呪術——文学の立場から——」における道子の「詩と学問との刺激的調和」説を置き、少しここに私見を述べてみたいと思います。

高群史学の革新的なところは何かでしょうか。逸枝の関心は、かつてこの日本という国に、「母系制」は存在していたのか、また、「招婿婚」は存在していたか、その有無を見極めることにありました。といいますのも、その存在が実証できるならば、長い歴史のなかにあつて、ある時期、女性を中心となって生き生きと暮らしていた時代があったことが判明するからです。そのことが明らかになれば、女性中心の時代から、女性を抑圧する男性中心の時代へ移行し、いまや、それに異を唱える女性解放の時代へ入っているという、女性の生活にかかわる全体的通史の記述が可能になります。実際逸枝は、『母系制の研究』において「母系制」の存在を、『招婿婚の研究』において「招婿婚」の存在を、歴史的な文献資料に基づいて発掘し、その発掘された知見を全面に押し出して、その後、全四巻からなる『女性の歴史』を世に問うたのでした。こうした逸枝の一連の著作によって、この国における女性史学の幕が上がり、ここに高群史学の学問上の革新的意義がありました。

それではここで、上で記述した内容にかかわって、それを例証するうえでの、逸枝自身の発話内容を、三点引いておきます。

マグレナン、モルガン等の説では、古代の雑婚時代には、人は母あることを知っても父あることは知らない。これが母系の淵源であるというのである。……

そこで問題は、わが日本に母系制度の時代があったか否かということである。このことはこれまで男性史家の研究の手がまだまわりかねていて、女性史家のために未開拓のまま残されている処女地である¹⁴。

「わが日本に母系制度の時代があったか否か」と書くように、逸枝の関心は、まず「母系制」の存否を確認すべく、その研究にありました。そのあとに、「招婿婚」の存在の有無が問われることになります。

次に、逸枝は、このようなこともいっています。

外国には、たとえばエンゲルスの「家族私有財産および国家の起源」とか、ベーベルの「婦人論」などの、いわば女性解放の聖典ともいっていいものがあったが、わが国にはそれらしい学問の名に値するものといっちは一つもなかった。

(中略)

もっとも、たとえば河田嗣郎の「家族制度の発達」(明治四二)「婦人問題」(同四三)とか、堺利彦の「男女争闘史」(大正九)とかは、主として前記の外国文献等によった尊敬すべき編著であるが、その日本史ないしは日本女性史的観察となると幼稚というほかないものであった¹⁵。

「その日本史ないしは日本女性史的観察となると幼稚というほかない」という認識が、逸枝をして、女性史学の構築へと向かわせます。さらに逸枝は、次のように書きます。

日本では、女性解放の思想や運動は、明治以降顕著になったが、女性自体の被圧迫史ないし生活史については、ほとんどなんらの研究努力もはられていなかった。歴史を無視して現実の把握ないし未来の展望が可能であろうか。私はそうかんがえた。

(中略)

そこで私は、日本女性史をテーマとし、「女性史」という新しい学問の一分野の開拓——つまり、女性史学の樹立というようなことをかんがえた¹⁶。

「歴史を無視して現実の把握ないし未来の展望が可能であろうか」と書く逸枝は、歴史学こそが、現実と把握と未来の展望を提供するものであって、いまの女性はどうのような状態にあるのか、さらには、今後女性はどうのように生きてゆくべきかという問いに答えるためには、女性の生活史の確立が急がれるわけであり、「男性史家の研究の手がまだまわりかねていて、女性史家のために未開拓のまま残されている処女地である」という学問上の認識に到達していたのでした。

ここからわかることは、逸枝の関心は、女性がどう生きてきたかという歴史の全貌にあり、

加えて、ひとつの学問の新しい誕生、つまりは「『女性史』という新しい学問の一分野の開拓——つまり、女性史学の樹立」にかかわる学問的営みにありました。

換言すれば、逸枝の関心は、「女性史学」として確立されたのちのこの学術領域における、たとえば、この国の古代社会にはいかなる種類の婚姻形態が存在し、その構成比率がどうであったのかというような、分節化された個別の学術上の関心が醸成されるうえでの大前提となる、女性の生活にかかわる史的全体像を提供することだったのでした。

その文脈から、栗原の高群史学批判を概観すれば、何が見えてくるのでしょうか。一言でいえばそれは、確立された学術上の世界にあって分節化された個別研究の視点に立つ、そこからの、女性の生活にかかわる史的全体像構築へ向けてかつて展開された原初的な学問的営為に対する批判ということになります。つまり、そこにあるのは、同一土壌のなかにおいての同次元的な批判ではなく、異なる別次元に足を置いた地点からの批判ということになります。たとえていえば、逸枝は、一羽の鳥になって天空から、いまだ誰も見たことのない、「女性の歴史」という「未開拓のまま残されている処女地」を見ているのであって、栗原は、すでに発見された誰もが知る「女性の歴史」の大地に立って、もはや過ぎ去ったその鳥の軌跡を眺めているのです。おそらくそれが理由となって、栗原の視野は、高群史学をもって「意図的な操作改竄」や「整然とした誤謬」といった虚なる像を引き寄せてくるのでしょう。高群に倣って、もし栗原が大空の高い所から、地上で構築されつつある「女性の歴史」の学的全貌の現状を鳥瞰できていたならば、そのような批判には、おおよそたどり着くことはなく、むしろ、「未開拓のまま残されている処女地」をさらに実り多いものへと開拓することにかかわって学術上の果たすべき貢献ができたのではないかと愚考します。本来的に研究者がたどり着かなければならない先は、荒れ野を開拓し、果樹園という新天地を求めての学的努力以外にはないものと、私は承知します。

それではここで、栗原の「意図的な操作改竄」説と道子の「詩と学問との刺激的調和」説を比較考量してみましょう。

一九五三（昭和二八）年の一月、逸枝の大著『招婿婚の研究』が大日本雄辯會講談社を版元として上梓されます。「奥付」の右隣の頁に「著作目録（女性史研究）」があり、そこには、既刊書のみならず、次のように、未確定原稿も挙げられていました。

平安鎌倉室町家族の研究	四〇〇字詰	二、〇〇〇枚稿本
日本古代婚姻例集	四〇〇字詰	八〇〇枚稿本

前章の「二冊の逸枝の校訂本の発刊と著作権者としての静子の立場」において詳述していきますように、このうちの「平安鎌倉室町家族の研究」は栗原弘の校訂によって、また、「日本古代婚姻例集」は栗原葉子と栗原弘の校訂によって、上梓されました。とりわけ、「平安鎌倉室町家族の研究」は、五〇〇の家族調査によって成り立っていました。

栗原は、「五〇〇家族という膨大な事例を婚姻形態に分類し、それを各時代別に数量的に示せば、読者には、各時代の婚姻居住形態が一目瞭然で理解されるはずである」といいます。このことから、栗原が定量的分析の立場に立っていることがわかります。一方道子は、「今まで調べてきた平安・鎌倉・室町の五百家族、藤原氏の日記の全部を読破するということでは蓄積してきた資料の中から、彼女の詩的な欲求に応じて、資料の方が波頭を立てて彼女と呼

応したのだと思います」と書きます。この立場は、まさしく定性的分析と呼ぶにふさわしいものであり、逸枝の学問的立脚点を見事に言い表わしていると思われまゝ。「資料の方が波頭を立てて彼女と呼応した」という語句に朱線を引いて、ここに強調しておきたいと思います。

道子が唱える、「人跡未踏の女性史というものに取り組んだ時、彼女の内なる詩は点火されて……鳥瞰的な表現を幻視したのではないか。そういう欲求がせめぎ合ったのではないか」という主張には、確かに真理が含まれています。といいますのも、道子の「詩と学問との刺激的調和」という言辞にこそ、すべての学問の誕生にかかわる秘儀が隠されているように思料されるからです。つまり着目すべきは、逸枝という人間は、完成したひとつの学問が何代にもわたって継承されてゆくなかで活躍した一学徒ではなく、誰も見たこともない全く新たな学問が産み落とされる、まさにその瞬間に立ち会った詩人＝学者だったのです。したがって、高群史学は、女性史学の原初的成果の高鳴りであり、その意味で、高群史学を「意図的な操作改竄」の産物とみなす後発の栗原の主張の次元とは、大きく異なるものであったと判断されます。

結論的にまとめれば、古代、中世、近世、近現代のそれぞれの時代にあつて女性がどう暮らしていたかを、限定的に、個別かつ詳細に検証することは、極めて重要であると思います。他方、日々蓄積された、そうした個別知見を集成して、定期的に、女性の暮らしが通覧できる通史として書き表わす必要性もまた強く感じます。女性史であれ美術史であれ、あるいはまた政治史であれ、いかなる歴史研究であろうとも、精緻な個別主題にかかわる記述（特殊研究）と、文脈をもった全体史にかかわる記述（通史研究）、性格も目的も違うこれら双方の研究を両輪として、学問は発展するものと私は確信しています。その観点に立てば、逸枝は、ひとりの生涯にあつて、女性史にかかわる「個と全体」の有機的関連性の地平に立ち、果敢にもその記述に取り組んだ、日本で最初の、実に稀に見る才能をもった学者であつたと思います。いみじくも道子が指摘したように、そこには詩が必要でした。詩こそが、新たな学問の創造なり、学問的規範の変更にとってなくてはならない必須の「ヴィジョン」となるものでした。「女性史学」は、詩人である逸枝こそが創り上げることができた学問だったのです。その意味で、道子がいうように、逸枝の著作は、「あとからあとから出現する学説が流砂のように去ったあと、その流砂に洗われて、古典となって発光しながら横たわる作品」であると思料します。その立場に立てば、栗原が唱える「意図的な操作改竄」説は、学問の発展とは直接関係をもたない、道子がいうところの「鬼の首でもとったような」横やりの自己顕示に満ちた発言であつたものと考えます。

その一方で私は、上記の問題以上に、栗原の次の言説に強い危惧を感じます。といいますのも、栗原は、単に『母系制の研究』や『招婿婚の研究』といった学術の範囲を超えて、逸枝の「意図的な操作改竄」を、意図的にすべての著作にまで敷衍化しようとしているからです。その箇所を以下に引用します。

高群の誤謬問題について、参考になるのは、『火の国の女の日記』である。その中で、高群は、酒乱の父に苦悩した家族であつたにもかかわらず、「一体的同志的」結合を遂げた理想的夫婦であるかの如く描写している。これは、明らかに、自己の理想的夫婦像を、父母に投影した、事実と反する虚構である。彼女の場合は、通常一般の人間が、親

族の恥を隠すために、事実を改竄する性質のものと一線を画さなければならない。というのは、自己の理想のために、事実が曲げられるのは、彼女の著作に共通しているからである。高群は、自分の父母の過去の事実を正確に把握しており、また叙述のための方法論上の錯誤があったとは思われない。その上で、高群は、極端な事実の変容をおかしているのである。……ただし、『母系制の研究』『招婿婚の研究』は研究書であり、日記と同等に扱うことはできない。もちろん、それは通常の人ならばそうなのである。高群はそうではない。彼女には、詩も研究書も日記も同等の作品なのである。それ故に、すべてに共通した創作原理が存在している¹⁷。

しかしながら、よく読めばわかるように、実際には逸枝は、『高群逸枝全集』の第一〇巻の「火の国の女の日記」のなかで、父親の酒乱ぶりについて、はっきりとこう書いているのです。

酒のみがはじまると、子供部屋のない家なので……家を追い出されて、しょんぼりと立っていただろう小さかった私のおもかげが、いまでも目に浮かぶようにみえてくるのである。こうして子どもの私は、酒の座のいとわしさや、喧騒や、そこに露出される人間どもの悪鬼めいた姿などにしょっちゅうおびえていたが、いっぽうではまたそうした人間どもに同情もするといった複雑な人生観の芽ばえをも引きだしていたのだった¹⁸。

さらに、父親の酒癖の悪さについては、『婦人戦線』の「自伝」のなかで、逸枝は、このようにも表現しています。一三か一四歳になったころの話です。逸枝に思いを寄せる少年がいました。

酒亂の父が母をぶんなぐろうとして追っかけたりする。近所の子供達は、面白がつて見物する。そんな時、彼は近所の人達とともに子供達を追っばらったり、母を逃がしたり、父を寝かしたりしてくれた。さわぎが静まって、弟達も寝てしまふ頃まで、彼はわたしの家の石段のそばに立って、わたしのことを心配してくれてゐた¹⁹。

また父親の勝太郎は、酩酊すると自制を失い、横溢する性欲を妻にぶつけ、暴力を振るうことも日常的でした。

わたしの次に弟達が生れた。……この頃から、わたしの家には、呑んでくれどもが、毎日のやうにやつてきた。その上、子として浅ましくも、悲しく感じられたことは、父の母に對する限りなき欲望の追求である。おお、そのため美しかった母は瘠せ衰へた。また彼女は、子供に對する氣兼ねからも、われらの「呑んでくれおやじ」の暴力に烈しく抵抗し、そして大ていそれが原因となつて、踏まれたたかれた²⁰。

加えて逸枝は、自分の自伝的小説である『黒い女』に、このようにも、書いているのです。

私は父を恐れてゐた。が愛してもゐた。父は飲んだくれではあつたけれど、それが悪人だらうか²¹。

逸枝が父親の酒癖について書いているこれだけの事例を挙げれば、栗原が書くところの、「高群は、酒乱の父に苦悩した家族であつたにもかかわらず、『一体的同志的』結合を遂げた理想的夫婦であるかの如く描写している。これは、明らかに、自己の理想的夫婦像を、父母に投影した、事実と反する虚構である」という一文が、いかに事実に基づかない虚妄の言であるかは、すぐにも明らかになるでしょう。したがって、これにより、「彼女には、詩も研究書も日記も同等の作品なのである。それ故に、すべてに共通した創作原理が存在している」と決めつける、その前提が崩れたことになります。前提が崩壊した以上、栗原の結論も、それに従い自然消滅します。それでも、逸枝の「詩も研究書も日記も同等の作品」であり、そこには「すべてに共通した創作原理が存在している」ことを主張しようとするのであれば、「詩も研究書も日記も」一著一著そのすべての逸枝の著述にかかわって、いかに「創作原理」が働いた虚偽の作品となっているのかを、信頼できる一次資料に基づいて余すことなく例証すべきではないでしょうか。それができなければ、もはや学術的な価値をもった有益な指摘どころではなく、単に威圧的で攻撃的なだけの傲慢な言説の領域へととはかなくも帰結するのではないかと思量します。

栗原の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』のなかに、逸枝の「詩も研究書も日記も同等の作品」であり、そこには「すべてに共通した創作原理が存在している」という言説を目にしたとき、静子と道子は、どのような思いに立たされたのでしょうか。詩人としての逸枝の人格の全否定です。そして、学者としての逸枝の人格の全否定です。静子も道子も、何も語っていません。無言のなかに、人の悲しみが隠されているように思います。

注

- (1) 栗原弘『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』高科書店、1994年、i頁。
- (2) 石牟礼道子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、101頁。
- (3) 前掲『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、i頁。
- (4) 河野信子「著作を綿密に解析」『熊本日日新聞』、1994年11月13日、11面。
- (5) 同「著作を綿密に解析」『熊本日日新聞』、同面。
- (6) 前掲『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、359頁。
- (7) 同『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、368頁。
- (8) 同『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、同頁。
- (9) 石牟礼道子「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』(シリーズ比較家族8)、早稲田大学出版部、1997年、213頁。
- (10) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』(シリーズ比較家族8)、206-209頁。
- (11) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』(シリーズ比較家族8)、209-211頁。

(12) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族8）、211 頁。

(13) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族8）、214 頁。

(14) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976 年（第 8 刷）、263 頁。

(15) 高群逸枝『愛と孤独と 学びの細道』理論社、1958 年、9-10 頁。

(16) 同『愛と孤独と 学びの細道』、9-10 頁。

(17) 前掲『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、364 頁。

(18) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、28 頁。

(19) 高群逸枝「高群逸枝——わが戀の記——」『婦人戦線』（特輯自傳）第 1 巻第 10 号、1930 年 12 月、21 頁。

(20) 同「高群逸枝——わが戀の記——」『婦人戦線』、19 頁。

(21) 高群逸枝『黒い女』解放社、1930 年、63 頁。

第二〇章 栗原葉子の『伴侶』における「共犯者」としての憲三描写

前の第十九章「栗原弘の『逸枝著作の改竄説』とそれへの道子の反論」において引用していますように、道子は、「書かれる前から高群逸枝は古典として出現したのだった。それゆえ、稀なる介助者があらわれた。夫妻の業跡の意味を私はそうとらえたい。二人を洗う歳月の砂は、むしろ必要なのである」と予言しました。

予言どおりに、さらに新しい「二人を洗う歳月の砂」が、「表現の呪術——文学の立場から——」の発表から二年後の一九九九（平成一一）年二月に、沖合からの流砂となって静子と道子の立つ渚にたどり着きます。それは、平凡社から刊行された『伴侶 高群逸枝を愛した男』という本でした。著者は、栗原弘の妻の栗原葉子でした。

それでは、栗原葉子という人は、書題にある「高群逸枝を愛した男」、つまり橋本憲三とどのようなかわりをもった女性だったのでしょうか。前々章の第十八章「二冊の逸枝の校訂本の発刊と著作権者としての静子の立場」において詳述していますように、すでに栗原葉子は、夫の栗原弘とともに、逸枝の『日本古代婚姻例集』を校訂し、世に出していました。その校訂本の「あとがき」には、栗原葉子の筆になる、こうした文言が並べられています。

私達は水俣の図書館で道を尋ねて高群のお墓を詣でたあと、憲三氏を訪ねたのだった。そのとき何を語ったのかほとんど記憶がない。ただ氏は、「革命はおきませんかネ」とつぶやかれた。倉庫の二階のその部屋にはベッドのうえに高群の大きな写真が飾られていて、氏の部屋の窓から逸枝の眠る山の中腹を望みながら「自殺しようとは思いませんが生き永らえようとも思いません」とおっしゃるような生活を送っておられた。憲三氏はその三年後の昭和五十一年死去された。七九歳であった。……

氏の葬儀の後、憲三氏の令妹橋本静子さんから高群の未完の遺稿「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」、高群の使っていた書物十冊ほど遺品分けのように譲り受けた。他の遺品のほとんどを静子さんは水俣市の図書館に寄贈された¹。

ここからもわかりますように、著者の栗原葉子は、最初の水俣訪問のときに憲三に会い、少なくとも憲三の葬儀後には、静子とも面識をもっていたのでした。

次に、『伴侶 高群逸枝を愛した男』の「あとがき」において著者の栗原葉子は、このように書いていますので、紹介します。

橋本憲三については、夫との会話の中で度々話題にのぼっていたことだった。だが、私は自分で執筆するつもりはなく、堀場清子氏か石牟礼道子氏がいずれ書かれるであろう決定版憲三論の、ただ、読者でありたいと思っていた。で、待った。待って、待って、待ちくたびれて、とうとう大胆にも自分で筆を執ることを決意した²。

すでに前章において紹介していますように、道子は先のシンポジウムで、こう語りました。「熊本時代も処女詩集の時代も『婦人戦線』のときも、異性との家出事件も、『森の家』も、終始一貫、彼女は、一般社会からみれば、異様で、エキセントリックで、トラブルメーカー

でさえありました」。その逸枝を支え、生涯をともに過ごしたのが、夫の憲三でした。

さて、『伴侶 高群逸枝を愛した男』は、憲三に関するはじめての評伝ですので、静子も道子も、その内容に強い関心を向けたものと思われます。とりわけ、記述内容に関わる憲三からの執拗な迫及によって「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」の連載が中止に至ったと語る著者の瀬戸内晴美の言説について、そして、逸枝の入院と臨終に際しての市川房枝のグループと憲三とのあいだに生じた確執について、さらには、著者の夫の栗原弘が指摘した、逸枝作品の「意図的な操作改竄」について、著者の栗原葉子が、それをどう書くのかが、ふたりにとっての最大の関心事となったにちがいありません。しかしながら、栗原葉子のこの『伴侶 高群逸枝を愛した男』について、静子や道子が言及した形跡は残されていません。そこで、考えられるふたりの視線を想定し、そのまなざしから、この著作を読み解いてみたいと思います。論点を整理すると、五点に集約され、以下に順次論じてゆきます。

一点目——。

とりわけ静子と道子に関心をもったのは、直近の、著者の夫の栗原弘が唱えた、逸枝作品の「意図的な操作改竄」説についてだったのではないかと思います。果たして著者は、それにかかわって、どう書いているのでしょうか。以下がその該当箇所になります。

厩大な文献から練り出された高群史学の心臓部は、日本では平安中期になって夫婦の同居が開始され、その婚姻形態は夫が妻の家に住む妻方居住婚が一般的で、婿取式後の夫婦は絶対に夫の家に帰らないという点にあった。それを根拠にして、日本の婚姻制度は古代より一貫して家父長制であったのではなく、古代母系家族から家父長的家族へ移行したとするのが高群学説の骨格であった。だが、彼女とほぼ同じ一〇年をかけて原資料に当たって逐一検証した栗原弘によれば、高群が自説の根拠とした平安中期の妻方住居婚の事例は、高群が調査した五百家族中、藤原道長家族のたった一例のみ。道長家族は主流どころか例外的一例に過ぎなかった。が、問題点はこの次である。《女性の地位が高かった母系古代から、父系に移行して女性の地位は低下したのだ》という予めの構想のために、逸枝は調査結果そのままを提示するのではなく、史料操作や改竄まで行って婚姻史を体系化してしまったのである³。

それでは、そうした逸枝の行為を、憲三はどう見ていたのでしょうか。その本の筆者は、このように推断します。

ところで、こうした逸枝の「意思的誤謬」を、夫の憲三が知らなかったということがありうるだろうか。逸枝の書く一行一句一字を余さず読み、書き過ぎた指の痛みや背の凝りまで体験を共有していた憲三が、これを知らなかったという方が不自然である。否、それどころか、憲三は隅から隅まで知り尽くしていたのであった。……あるがままの客観的史実の上に構築するのが、実証史学の学問的誠意と真理であるとするならば、憲三は、いわば歴史学の自殺行為にも等しい改竄の共犯者だったのである⁴。

「憲三は、いわば歴史学の自殺行為にも等しい改竄の共犯者だったのである」と断じる、栗原葉子の『伴侶 高群逸枝を愛した男』を読んで静子と道子は、どのような感想をもった

でしょうか。いかなる人であれ、自分の身内の人間が「共犯者だった」と書かれて、無関心で過ごせる人はいないものと思われます。

上の引用にあるように、栗原葉子は、「が、問題点はこの次である。《女性の地位が高かった母系古代から、父系に移行して女性の地位は低下したのだ》という予めの構想のために、逸枝は調査結果そのままを提示するのではなく、史料操作や改竄まで行って婚姻史を体系化してしまったのである」と書きますが、これについては、すでに、前章の「栗原弘の『逸枝著作の改竄説』とそれへの道子の反論」で私の見解を述べていますので、もはや繰り返しません。あえてここで言葉を足すならば、私は、「今まで調べてきた平安・鎌倉・室町の五百家族、藤原氏の日記の全部を読破するということで蓄積してきた資料の中から、彼女の詩的な欲求に応じて、資料の方が波頭を立てて彼女と呼応したのだと思います」という道子の理解に連なりたいと思います。といいますのも、私は、いままでに誰も見たことのない学問が最初に可視化される場合には、まず詩的想像力があり、その力を借りて、新たな研究領域が「創造」され、そののちにあって、個別研究が開花してゆくものと信じているからです。

「女性史学」が現在までにおいてかくも活性化していることから判断しても、高群の学問的貢献は、瞠目に値するものと考えています。

それでは、逸枝の研究目的は、どこにあったのでしょうか。一言に言えば、『母系制の研究』も『招婿婚の研究』も、最終目的である通史執筆のための基礎となる個別研究であり、『女性の歴史』（全四巻）を書くうえでの、それに先立つ特殊研究に相当します。「母系制度」と「招婿婚」がこの国において存在していたかどうか、もしそれを実証できるならば、文献史料に残る最後の一例がいつなのか、これが、女性の全史を書こうとする逸枝にとって重要な関心事でした。したがって、栗原弘やそのほかの研究者にみられるような、古代中期にどのような種類の婚姻形態がいかなるかたちで存在し、これらがどうした比率で構成されていたのかといった数量的な関心事とは、全く次元が異なるのです。そのように理解する私の目には、栗原弘が説く、逸枝著作に向けられた「意図的な操作改竄」説は、異質の文脈からの乱暴な割り込み的な主張にすぎないように映ります。正直に申して、私は、その説の学問的有効性にかかわって同意することはできません。

二点目——。

栗原葉子は、上での引用にあるように、「憲三は、いわば歴史学の自殺行為にも等しい改竄の共犯者だったのである」と書いています。憲三をもって「共犯者」と断じる以上は、「正犯」を逸枝とみなしているのでしょう。上記の「一点目——。」で述べていますように、私は、逸枝の学問的営みは、犯罪行為であるとは思いません。しかし、憲三が「共犯者」とであると断定するのであれば、栗原葉子は、いつ、どこで、どのような動機があつて、憲三は、逸枝と共謀にかかわる相談をしたのか、その犯行にかかわる全容を、動かぬ証拠をもって立証する必要があるものと思料します。それができなければ、逸枝の女性史研究を「犯罪」とみなす言説は、逸枝と憲三の人権を侵害し、名誉を毀損するものとなりかねないだけではなく、冤罪を構成する可能性さえ残ります。私が渉猟した一次資料を閲覧する限りでは、逸枝と憲三を犯罪者に仕立て上げるにふさわしい根拠（エヴィデンス）は存在しません。

他方、栗原弘も、前章で引用していますように、「筆者の追調査によれば、高群学説の誤謬は彼女の極めて意図的な操作改竄の産物であつたことを確信するに至った」と書いていますが、「意図的な操作改竄」を主張する以上は、つまり、逸枝の研究手法を犯罪視する以

上は、いつ、どこで、どのようにして、「意図的な操作改竄」という犯行が行なわれたのか、一次資料（エヴィデンス）に基づいて明らかにすべきではないかと思考します。といいますのも、この点に関する全容解明は、今後の高群研究における不可欠な要素となるものと考えからです。もし仮に立証できなければ、栗原の、「筆者の追調査によれば、高群学説の誤謬は彼女の極めて意図的な操作改竄の産物であったことを確信するに至った」という見立てに学問的普遍性はなく、あくまでも単なる栗原個人の「確信」犯的思い込みにすぎないことになるのです。

学問に向かう自身の姿勢について、逸枝は幾多の言説を残しています。参考までに、関係する言説のなかから五つを選び、以下に引いておきます。

私は学問が偏見を破る大きな武器であることを知った。……固定観念や既成観念への、火の国女性的なたたかいも、このへんからはじまった⁵。

研究は、道のない道をみずから汗して切りひらいて行くのだから、根気が必要で、飛躍はぜったいに許されない。私の上着は光線を一方からうけるので右半身が色あせ、おなじ方の袖は手首とひじのところが、いつもすり切れるのが例だった⁶。

婦人解放およびその運動の推進力となる女性史は、女性被圧迫の歴史を筋みちをたてて科学的に立証するものでなければならない⁷。

私の研究も／ようやく整理の段階に入った
心には種々のものがみちあふれ／なにか読めば／つれて湧くものがある
喜びと不安—／私は私の心という／「科学者であれ」⁸

この道に入ってはや一五年／その間にまわりの畑や森は宅地となり
国も破れ／あらゆるものは移ろい変わった
だが変わらないのは私の^{しごと}労作
ああ無限の学究／はてしない道よ⁹

これらの言説が、果たして、「犯罪者」の発話として読めるでしょうか。私は、学者としての逸枝の生涯が、密かに意図的に犯罪行為が遂行された、後世の人間から指を指されることになる歴史であったとは、にわかに信じがたく、同じく静子も道子も、その思いは、私のそれに近いものであったのではないかと思量します。

三点目——。

栗原葉子は、「あるがままの客観的史実の上に構築するのが、実証史学の学問的誠意と真理である」と書きます。私も、全くそのとおりであると思います。異存はありません。しながら、栗原の『伴侶 高群逸枝を愛した男』には、そのことが十全に投影されていません。といいますのも、自身の文が他者の文の無断使用で成り立っている箇所が散見されるからです。以下に、その事例を三つ挙げ、対照します。いずれの例も、この本の書き出しの部分です。

球磨地方は古くから木材や木炭や楮などの産地であったが、筏で流す木材以外の物資は、みな川船で八代には運ばれた。……戻りの曳船は……一勝地で一泊して……

(栗原葉子『伴侶 高群逸枝を愛した男』平凡社、1999年、24頁)

球磨地方は木材、木炭、楮などの産地ですから、木材は筏で流すのですけれども、……八代で荷さばきをして、戻りの、上りの船が一勝地で一泊するわけです……

(石牟礼道子「最後の人 第十八回 第四章 川霧 1」『高群逸枝雑誌』第31号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1976年4月1日、25頁)

嵐が吹いて、雑木林が向こうまで透けて見えるようになる頃には、落葉をかき分けると、むかごと呼ぶ山芋の実が転げ出てくる。その実を白い細糸に通して輪にし、熱い灰の中に埋めて焼くのが子供たちの楽しみで、プーンと香ばしい焦げた匂いがしてきたら食べ頃だった。

(栗原葉子『伴侶 高群逸枝を愛した男』平凡社、1999年、25頁)

山里では嵐が吹いて、雑木林が疎らに透けて見えるやうになる頃、その下の落葉を漁ると中から鬼灯大の山芋の実が、いくつとなく転げ出た。山里の子供達は争ってそれを拾って、白い細糸に通した……そのひめの輪を熱い灰の中に埋めてみた。……間もなくひめは焦げて快よい匂ひが、ぷんと二人の嗅覚をそそった。

(橋本憲三・高群逸枝『山の郁子と公作』金尾文淵堂、1922年、59-60頁)

夕方になると、うち連れて何十艘となく入ってきていた川船が、全くその姿を見せなくなった。また、往来も火の消えたような寂しさで、すうと威勢よく幾台もの俵が客を乗せて、燕のように入り乱れて飛び交った賑やかな昔の面影もみられなくなった。

(栗原葉子『伴侶 高群逸枝を愛した男』平凡社、1999年、30頁)

夕方になると打連れて何十艘となく這入って来た河船も全くその姿を見せなくなり、往来は恰度火の消えたやう、すうと威勢よく幾臺の俵が燕のやうに入り乱れて飛び交った昔の面影は、再び見られなくなつて了つた。

(橋本憲三・高群逸枝『山の郁子と公作』金尾文淵堂、1922年、9-10頁)

剽窃や盗用という概念は、研究者や研究機関によりその解釈は幾分異なりますので、ここでは使用しません。しかし、「実証史学の学問的誠意と真理」をいうのであれば、きちんと原文を引用し、注番号を付したうえで、巻末にその出典(著者名、書名、出版社名、発行年、該当頁など)を記すべきだったのではないかと思量します。こうした箇所がここだけなのか、全編にわたっているのかは、すべてを調べたわけではありませんので断言できませんが、いっさい本文にあって、一次資料を引用したことを示す注が施されていないのは事実であり、したがって、書かれている内容を出典に当たって追検証をすることはできません。つまりそれは、栗原葉子がいうところの「実証史学の学問的誠意と真理」から程遠く、記述内容の真

実性が担保されていないことを意味するのです。

あえて、参考までに、版權にかかわって以下に書き記しておきます。前々章の第一八章「二冊の逸枝の校訂本の発刊と著作権者としての静子の立場」において示していますように、静子は、「遺言による高群逸枝著作権継承者」と書いています。そしてまた、憲三死去後の一九八一（昭和五六）年に朝日新聞社から橋本憲三と堀場清子の共著になる『わが高群逸枝』（上下二巻）が出版されますが、両巻の奥付には、コピーライト表示があり、そこには「© S. HASHIMOTO K. HORIBA 1981」と表記されています。ここから、橋本憲三の著作に関する版權の継承者もまた橋本静子であることがわかります。このように、静子は、著作物にかかわる権利関係を大事にしていた人物でした。その静子が、上に挙げた、橋本憲三と高群逸枝の『山の郁子と公作』からの「無断流用」に接したとき、いかなる思いに駆られたでしょう。

他方、憲三が責任者となって発行する『高群逸枝雑誌』に掲載された道子の、「最後の人 第十八回 第四章 川霧 1」からも、栗原葉子は借用しています。どこにも、「許可を得た」とは書かれていませんので、これも「無断借用」に該当するものと思われます。これを読んだ道子の、栗原葉子へ向かう視線は、どのようなものだったのでしょうか。

静子も道子も、栗原葉子の、版權についての意識のなさ、それがもたらす、明らかなる著作権の侵害とに、驚きと怒りを禁じ得なかったものと愚考します。

四日目——。

瀬戸内晴美、戸田房子、もろさわようこ、西川祐子といった人たちによる伝記執筆にかかわって推移するこの段階にあつて、栗原葉子の『伴侶 高群逸枝を愛した男』は上梓されました。

そこで静子と道子は、著者の夫の栗原弘が指摘した、逸枝作品の「意図的な操作改竄」について、著者の栗原葉子が、それをどう書いているか、という点だけではなく、記述内容に関わる憲三からの執拗な追及によって「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」の連載が中止に至ったと語る著者の瀬戸内晴美の言説について、さらには、逸枝の入院と臨終に際しての市川房枝のグループと憲三とのあいだに生じた確執について、著者の栗原葉子は、それをどう書いているのかという点にも、関心を寄せたものと思われます。

つまり、このことを私の立場から換言すれば、栗原葉子は、かかる先行研究を、どの視点から、どう考察しているかということになります。そこでここでは、『伴侶 高群逸枝を愛した男』を書くに当たって栗原葉子は、既往研究をどのように分析しているかにかかわって、論じてみたいと思います。

栗原葉子は、瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」には触れますが、その反論である憲三の「瀬戸内晴美氏への手紙」には目を伏せます。また、もろさわようこの「高群逸枝」には言及しますが、その反論である静子の「もろさわよう子様へ」も、道子の「朱をつける人」も、無視します。さらに栗原葉子は、夫の著作である『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』の正当性は主張しますが、その反論である道子の「表現の呪術——文学の立場から——」には、聞く耳をもちません。栗原弘は、高群女性史学に対して「整然とした誤謬」という名辞を与えました。その表現に倣うならば、栗原葉子の『伴侶 高群逸枝を愛した男』には、「誤謬」かどうかは別にして、先行文献の扱いにおいて、際立つ「整然とした偏り」が明らかにみられるわけであり、その点をここで強調してもいいかもしれません。

そうした偏りは何に由来するのでしょうか。本人は何も書いていけませんので想像するしかありませんが、夫が、逸枝を「正犯」に見立てたのを受けて、妻は、憲三を「共犯者」に仕立て上げることに、自身の役割を見出した可能性も排除できないのではないかとも思われます。そうであれば、これが、この本の執筆に際しての裏に隠された真の意図ということになります。

最重要事項として伝記作家に求められるのは、資料を取り扱うに際しての中立性と公平性です。いうまでもなく、そのことが担保されていなければ、対象人物の真実性に肉薄することはできません。逆に、もしそこから逸脱して恣意的に資料の選別を行なうならば、その結果、明らかに書かれる内容は、自ずと偏向へと向かいます。もっとも、そのことが最初から確信的に意図されているのであれば、もはや批評の対象にさえならないものと思えます。しかしそれは、関係者を傷つける結果を招来します。あってはならぬ行為です。

栗原は、当該書の「あとがき」のなかで「小著を橋本憲三と高群逸枝の墓前に一冊……捧げます」¹⁰と書いています。捧げられた憲三と逸枝は、自分たちの言動に「犯罪」という烙印が押されてしまったその書を読み、草葉の陰で何を思ったのでしょうか。もはや、あえて想像することはここでは控えます。

五点目——。

すでに部分的に引用していますが、改めて以下に、『伴侶 高群逸枝を愛した男』の「あとがき」から一節を引いて、それについて考察してみたいと思います。

私は自分で執筆するつもりはなく、堀場清子氏か石牟礼道子氏がいずれ書かれるであろう決定版憲三論の、ただ、読者でありたいと思っていた。で、待った。待って、待って、待ちくたびれて、とうとう大胆にも自分で筆を執ることを決意した。だから、こうして書き上げた今も、大先輩の前に頭を垂れて審判が下されるのを待っている気分である¹¹。

「大先輩の前に頭を垂れて審判が下されるのを待っている気分」というのは、いかなる気分なのでしょう。その心理の背後には何があるのでしょうか。そしてまた、一見挑発とも受け止められかねないこの一節の文を読んだであろう、堀場清子と道子はどうか受け止めたのでしょうか。それを明確にするだけの資料は残されていないようです。

しかし、確かな動きがありました。本人たちが「審判」を下す目的で上梓したのかどうかもわかりませんが、遅れること二〇〇九（平成二一）年に、堀場は『高群逸枝の生涯 年譜と著作』を世に問い、一方の道子は、二〇一二（平成二四）年に『最後の人 詩人高群逸枝』を世に出すのでした。前者の作品は、これよりのちのさらなる実証研究になくはない、精緻を極めた、逸枝の「年譜と著作」が綴られ、後者の作品において道子は、自身にとっての「最後の人」が橋本憲三その人であることを告白するのです。

以上、五つの視点から、栗原葉子の『伴侶 高群逸枝を愛した男』を読み解きました。これは、私にとっては、本稿「石牟礼道子小伝——『最後の人』との契りから道行きまで」を執筆するうえでの先行研究分析の一端を担います。しかし他方では、静子と道子の心中を思い計るうえでの避けて通ることのできないひとつの考察でもありました。

論じていますように、このような一方的観点に立った、著者にとって都合のいい憲三批判

の単なる羅列に、静子も道子も、言葉を失ってしまったのではないかと愚考します。ふたりは、この本について、何も語っていません。これもまた、必要不可欠な、逸枝と憲三の「二人を洗う歳月の砂」であってみれば、多弁を勞せず無言のうちにそれを甘受し、いつかは、逸枝の作品同様に、ふたりの「一体化した近代の夫婦」像も、神話世界の「双頭の蛇」のごとくに、あらゆる歴史の流砂に耐え忍んだ古典像となって発光するにちがいないことを静かに夢想していたのかもしれません。

生前にあつてのみならず、逸枝と憲三の死後にあつても、ふたりに関心をもつ人の波は絶えませんでした。憲三の存命中、瀬戸内晴美は、自身の小説の連載断念に至った原因を憲三の意固地でヒステリックな性格のせいにしてしました。戸田房子は、逸枝と憲三の夫婦仲に土足で割り込んで、自説を展開しました。憲三の死去後も、もろさわようこは、風体貧しく、品行卑しき男として憲三を罵りました。西川祐子は、『婦人戦線』時代にあつて逸枝と自身の夫が性的関係にあつたことを告白した妻の松本正枝の行為を勇気あるものとして賞賛しました。栗原弘は、逸枝が書いたすべての著作が事実を隠蔽した偽造品であると推断しました。栗原葉子は、人前に仁王立ちし、ふたりの恥部を隠す熱演者として憲三を描写しました。こうした幾度となく押し寄せてくる受難のなかで、憲三同様に静子も道子も、自身の晩年を過ごすのでした。静子にとっては、なぜここまで、兄夫婦が誹謗中傷の渦に巻き込まれなければならないのか、自分自身、理解ができなかったかもしれません。それは、憲三をもって自身の「最後の人」とみなす道子も同じであつたでしょう。といいますのも、道子が描く憲三像は、次のようなものだったからです。

一人の妻に「有頂天になって暮らした」橋本憲三は、死の直前まで、はためにも匂うように若々しく典雅で、その謙虚さと深い人柄は接したものの心を打たずにはいなかった¹²。

苦界に落とされた静子と道子の、その後に訪れるそれぞれの最期につきましては、場を替えて、次の第九部「最期の道子の『最後の人』との道行き」を構成する、第二章「桜吹雪のなか静子が世を去る」と第二二章「死者を柱に道子が『沖宮』を書く」のなかで描写することにします。

注

- (1) 高群逸枝編、栗原葉子・栗原弘校訂『日本古代婚姻例集』高科書店、1991年、i頁。
- (2) 栗原葉子『伴侶 高群逸枝を愛した男』平凡社、1999年、250頁。
- (3) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、189頁。
- (4) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、190-191頁。
- (5) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、62頁。
- (6) 高群逸枝『今昔の歌』講談社、1959年、229頁。
- (7) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、246頁。
- (8) 同『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、332頁。
- (9) 同『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、333頁。

著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで
第八部 再び苦界に落とされる静子と道子
第二〇章 栗原葉子の『伴侶』における「共犯者」としての憲三描写

(10) 前掲『伴侶 高群逸枝を愛した男』、253 頁。

(11) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、250 頁。

(12) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会(編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第 15 号、1977 年春季号、53 頁。

中山修一著作集 29

余滴を集めて——石牟礼道子研究

石牟礼道子小伝——「最後の人」との契りから道行きまで

第九部

最期の道子の「最後の人」との道行き

第二章 桜吹雪のなか静子が世を去る

誰しも人は最期を迎えます。静子も例外ではありません。憲三と藤野を看取ったのは、近所で開業する女医の佐藤千里でした。しかし、静子に死期が迫ったときは、すでに佐藤は水俣を離れて、熊本市内に居住していました。佐藤のもとに、静子の孫から電話がありました。「おばあちゃんが、三日前から何も食べんようになって……」¹。翌朝、さっそく佐藤は静子を訪ねます。以下は、佐藤が書く、そのときの静子の様子です。

半年前と何等変った様子もなく、にこやかに私を迎えたシズコに、一瞬私は狐にだまされたような気がして室内を見回した。古い肘掛椅子もベッドも元の位置で、壁にはシズコの両親や兄夫婦の写真が同じ位置に掛けてあり、机の端に重ねてある文庫本の数冊も変りなかった²。

室内の様子に、何も変わりはありませんでした。そして同時に、食べ物を口に含まないという静子の強い意思にも変わりがなかったようです。

「手足の不自由な患者さんには、こうして食べてもらうのよ」と強引に粥の匙を運んだ私をシズコは苦笑しながら拒んだ。しかし遂には口を開いて飲み下し、ついでに押込んだ持参のチョコレートも食べて「ありがとう、おいしかった」と頭を下げた。しかし、二日目からはもう口を開いてくれなかった。そしてその後は飢えたように話を続けた。兄夫婦の質素だが愛に満ちた日常のこと、私が立会うことになった兄憲三の最後のこと、九十二歳まで楽しんだ外国旅行の思い出等である³。

静子の絶食は続いていました。それを聞いた佐藤は、二度目の訪問をします。そのとき、ひとりの女性を誘いました。「『高群逸枝の作品を読む会』を主宰していた女性の来訪がよほど嬉しかったのだろう。百歳近い老女とは思えない位若やいでいた」⁴。

佐藤は、おそらく配慮のうえでのことでしょうが、実名を挙げていません。しかし、この、「『高群逸枝の作品を読む会』を主宰していた女性」が、石牟礼道子であることは、まず間違いないでしょう。そのときまでに道子はすでに水俣を出て、熊本市内に仕事場を設けていました。その女性に静子は、こう言葉をかけました。

枯木が倒れるように自然に朽ち果てたいと思うんだけど、周りの人達になるべく世話をかけたくないの。お金を出し合って飛行機をチャーターし、ゴビ砂漠の真中辺りに置いてきて欲しいなんて、貴女達と話したこともあったわね⁵。

それに対して女性は、不満そうに、こう答えます。「厄介な病気で、何とかして一日でも長く生き延びたいと必死で療養している人も多いのに、ぜいたくだと思うわ」⁶。佐藤とその女性が辞するとき、静子はふたりの手を握って、「私が死んだら抹香くさい事は止めにして、上等の酒でも飲んでお祝いしてね」⁷と、告げました。

佐藤が三度目に水俣に行ったのは、静子の絶食が五十日以上も続いていた三月の中旬のことでした。暖かい陽ざしが新緑に降り注ぎ、ウグイスが鳴いていました。その日静子が、「あとどの位したら母や兄達の所に行けるかしらね。せいぜい二・三週間と計算していたのは、私の大きな誤算だった」⁸とあって苦笑すると、佐藤には返す言葉がすぐに見つかりませんでした。その後佐藤は、持病のリウマチが悪化し、続くお見舞いは断念することになります。

そうしたなか、例の女性から連絡がありました。「ポータブルトイレに自力で移ることが困難になったと悲しそうでした。でも私が行くと嬉しそうに話され、不思議としか言いようがありません」⁹。それから六日目の、二〇〇八（平成二〇）年四月一五日、静子は息を引き取りました。食を断って七五日が立っていました。享年九六歳でした。亡骸は、熊本大学医学部に献体することが事前に取り決められていました。見送った女性は、このように佐藤に報告しました。

大学から迎えに来たシンプルなワゴン車で、名残の桜がひらひら散りかかる中を、シズコさんは自分で望んだように、家族と友人二人に見送られてゆっくり水俣川の土手を上って行かれました¹⁰。

静子が遺していた紙片には、「生き抜いて、そして死んでいくことはこわくない。むしろ勇気リンリン」¹¹と、書き記されていました。

静子の遺体を乗せた車が、桜の散るなか水俣川の堤を過ぎ去るとき、それを見送る道子の胸には何が去来したのでしょうか。かつて北海道での講演の際に演題に使った「いのちの切なさ 美しさ」だったかもしれません。

逸枝亡きあと、道子が、「森の家」の憲三の胸に飛び込んだのは、一九六六（昭和四一）年六月のことでした。ここで道子は、憲三と逸枝のふたりと自身の後半生にかかわって契りを結びます。立会人は、水俣に住む憲三の妹の静子でした。以下に引用するのは、そのとき静子に宛てて出された道子の手紙の冒頭の一節です。

深い感謝の気持でこの手紙を書きます。このたびの上京について、私自身にとっては破天荒なことであり、はためにはずいぶんづかづかとしたお願いを、みなさまによっておききとどけ下さいましたことに、貴女さまの御配慮が全面的に動いて下さいましたことを、その経緯の積み重ねがありましたことを、私は肝にめいじているつもりでございます¹²。

道子は、静子を立会人として、「森の家」で魂の蘇生を成し遂げました。その静子が、いま亡くなり、帰らぬ人になりました。これで、「森の家」を知る、憲三、藤野、静子のみなが黄泉の客となって、道子から旅立っていったのでした。ひとり道子は遺されました。哀愁が忍び寄ります。そのとき道子は八一歳。その後続く道子の最晩年の物語は、次の最終章「死者を柱に道子が『沖宮』を書く」で描くことにします。

注

- (1) 佐藤千里「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、全作家協会、2008 年、11 頁。
- (2) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (3) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (4) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (5) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、12 頁。
- (6) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (7) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (8) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (9) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (10) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (11) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。
- (12) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012 年、247 頁。

第二章 死者を柱に道子が「沖宮」を書く

橋本静子の一周忌が巡ってきました。そして、その二箇月後の二〇〇九（平成二一）年の六月、堀場清子の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』が世に出ます。その「あとがき」に堀場は、こう記しました。

橋本静子氏の死は、単にひとりの女性の死には止まらない。九歳のとき、兄の妻になった高群逸枝に会った最初の日から、逸枝を愛し、生涯変わることがなかった。逸枝・憲三夫妻の貧しい研究生活を、物心両面で支え、夫婦の没後もひたすら顕彰に努めて来られた。その深い愛と、豊かな記憶と、つねに支持を表明してやまない強靱な意思が、活動を終熄したのである。なんと大きな喪失であったことか¹。

そして堀場の記憶は、静子が亡くなる三年前の水俣訪問へと向かいます。

二〇〇五年一月、鹿野政直と私が水俣へ静子氏を訪ねたときの、彼女の言葉が蘇ってくる。

「憲三はね、いうなれば、普通ですよ。しかし、逸枝は天才です」。

高群逸枝に関する仕事では、いつも有りうる限りのご助力をいただいていた。本稿の完成を、終焉に近い日まで気にかけていられたという。静子氏が亡くなるなど、思ってもみなかった私の愚かさ。しかも仕事が遅く、その「旅立ち」に間に合わなかったことは、痛恨の極みというほかない²。

水俣に帰郷した橋本憲三のもとをしばしば訪れ、高群逸枝についての資料の収集に当たってきた堀場清子の手によって、静子没後一年目に、この『高群逸枝の生涯 年譜と著作』は上梓されました。逸枝と憲三に関する詳細かつ精緻な年譜と関連著作の一覧から構成されています。また、本書が対象とするのは、静子が亡くなる二〇〇八（平成二〇）年四月までで、そのなかには、憲三が書き残したそれまでの「共用日記」も随所に配置されていました。そうした意味において本書は、両人の生涯と業績を知るうえでの欠かせない貴重な文献が整理された有益な資料集成となっているのです。このとき堀場は七八歳になっていました。それではなぜ、自身の晩年にあって、堀場はこうした性格をもつ書物を公にしたのでしょうか。この本は、従来一部にみられた、独断的な多弁と能弁によって成り立つ逸枝や憲三についての評論や評伝とは大きく異なり、書き手の言葉は最小限度に抑制されています。そこから判断しますと、踏まえなければならない必須の一次資料（エヴィデンス）の全貌を開陳することによって逆に生まれてくる、事実から乖離した一部の独善的な既往研究への暗黙裡の抗議の表明だったのではないか——もしかしたら、そうした思いが込められていたかもしれません。

一方このころ、堀場より三歳年上の石牟礼道子も、自身の晩年と向き合っていました。憲三を亡くし、藤野と静子を見送ったいま、自分が蘇生した「森の家」を知る人は誰ひとりいなくなりました。道子は、何を頼りに生きていけばいいのか、自問したにちがいありません。

道子は、主治医の山本淑子に、こう語ったことがありました。山本は、次のように、それを紹介しています。

四年前私は長女を亡くしたが、その時、幼少期からの長女をご存じだった石牟礼さんから「これからはふっこさんを山本家の柱となさいます。」と言われた。死者を柱にとはどういう事だろうとその時は解せない気持ちが強かったが、思い返すと石牟礼さんは、早逝した弟さんを始め水俣病患者さん達、屍累々のなかを、その魂を柱として生きてこられた³。

この証言から連想しますと、「早逝した弟さんを始め水俣病患者さん達、屍累々」のみならず、憲三を喪ってこのかた、道子は憲三を柱として生きてきたものと思われます。そしていよいよ、その思いをかたちにするときに巡ってきたのです。

『最後の人 詩人高群逸枝』が藤原書店から上梓されたのは、堀場の『高群逸枝の生涯年譜と著作』から遅れて三年のちの、二〇一二（平成二四）年一〇月でした。本書は、『高群逸枝雑誌』に連載した「最後の人」に加えて、補遺として、「森の家日記」「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死」「朱をつける人——森の家と橋本憲三」を含む旧稿の数編と、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」とによって構成されていました。そのなかの「森の家日記」については、編集部によって、次のような注釈が記されています。

本稿は、「最後の人」執筆のもとになった、石牟礼道子が森の家に滞在した時の覚え書（取材メモ）である。「東京ノート」と題されたこのノートは近年渡辺京二氏によって発見された。重要かつ興味深い記述があるため、ここにそのまま収録する⁴。

ここに述べられている「重要かつ興味深い記述」とは、いかなる記述なのでしょう。次に挙げる箇所が、おそらくそれに該当する記述であることに疑いを入れる余地はないでしょう。「彼女」とは、高群逸枝を指します。

わたしは 彼女を
なんと たたえてよいか
ことばを選びすぐっているが
気に入った言葉が見つからないのに 罪悪感さえ感じる
……
わたしは彼女をみごもり
彼女はわたしをみごもり
つまりわたしは 母系の森の中の 産室にいるようなものだ⁵。

次に、七月三日のノートには、こう書かれてあります。

今晚更に高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った。それは橋本静子氏に対する手紙の形で（つまり、静子氏を立会人として）あらわした。午前三時これを書き上

げる⁶。

そして、神秘に包まれた聖夜が明け、帰郷する七月一日の朝が来ました。以下も、道子の「森の家日記」からの引用です。

六時目覚め。

木立の中の深い霧。

私の感情も霧の中に包まれてしまう。しかしそれは激烈で沈潜の極にあるものだ。

沐浴。

今朝の私は非常に美しい、貴女は聖女だ、鏡を見よと先生おっしゃる。悲母観音の顔になったと見とれる⁷。

「九時半、逸枝先生にお別れつげる。彼女は私の内部に帰る。切ない。玄関を出る」⁸。
こうして道子は「産室」を出たのでした。

この一連の「森の家」での出来事とその意味については、第三章「一度目の滞在で逸枝と憲三に後半生を誓う」のなかにおいて詳しく論述していますので、ここでは繰り返しません。しかし、書かれている内容は、極めて衝撃的なものでした。さらに加えて、衝撃的なことが、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」のなかにも現われます。このインタビューは、二〇一二（平成二四）年八月三日に道子の自宅において行なわれました。聞き手は、藤原書店の藤原良雄です。

——憲三さんから逸枝さんのことをお聞きになって、憲三さんの姿もそばで見ておられて、〔憲三さんのことを〕そう思われたわけですね。

石牟礼 はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

石牟礼 こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

石牟礼 はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした⁹。

ここではっきりと道子は、「最後の人」が橋本憲三であることを、世に告白するのです。それには、多くの人が驚愕したものと思われまゝ。といいますのも、石牟礼研究者たちは、これまでに「最後の人」を、こう解釈していたからです。たとえば、西川祐子は、次のように書いています。

石牟礼道子は『高群逸枝雑誌』に「最後の人」の序章、第一章「残像」、第二章「潮」、第三章「風」を連載した。連載は編集責任者であった橋本憲三の死、雑誌の終刊によって中断されたままである。「最後の人」という題名は、文明の最後をみとどける人にとれる。高群逸枝は、人類はしだいに子どもを生まなくなり、やがて寂滅すると、終末を

予言したのであった。「最後の人」とはまた、チッソの工場がはきだす産業社会の毒に汚染される水俣の海とさまざまな生命の死を見届ける石牟礼道子その人でもある¹⁰。

また河野信子は、「最後の人」を、このように推断していました。

高群逸枝の史料処理をめぐるのは、いくつかの錯誤が指摘され、『母系制の研究』からは、十五年戦争中のヒメの力への期待が導き出され、女たちの原記憶の潜在性を浮上させた。これらの事実をめぐる、石牟礼道子は「鬼の首をとったように」（一九九五年十月福岡市アミカスで開かれた「高群逸枝をめぐるシンポジウム」のレジメ）はしやぐものではなく、その最も内質である場にこそ、視線を集中させることを提言している。やはり、石牟礼道子にとって「最後の人」は高群逸枝であった¹¹。

上の事例からもわかるように、道子にとっての「最後の人」が橋本憲三であることを指摘した研究者はこれまでに存在せず、それだけに、この公言は、石牟礼研究の全面的刷新をも招来しかねない、激震を伴って受け入れられたものと思われます。

「最後の人」が所収された『石牟礼道子全集・不知火』の第一七巻の刊行が、二〇一二（平成二四）年の三月です。それから七箇月後に『最後の人 詩人高群逸枝』は世に出ます。道子は、こう書きます。「この度、『最後の人』を『全集』のなかから取り出して、わざわざ単行本にして下さるという。藤原良雄氏のご厚意にはお礼の申しあげようもない」¹²。それでは、あえて『全集』から取り出し、どうしても「最後の人」を単行本として世に送り出さなければならなかった、その目的とは一体何だったのでしょうか。「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」のなかの藤原良雄と道子のやり取りのなかに、その一端を見出すことができます。「最後の人」の連載は、憲三が亡くなる直前に刊行された『高群逸枝雑誌』第三一号における掲載を最後として、あえなく終了します。それから三六年が経過していました。藤原の「どうしてもずっと単行本にされなかったんですか」という質問に、道子は、こう答えます。

高群逸枝のファンはたくさんいますよね。ですから、慎んでいたという気持ちです。森の家に滞在する特典を与えられて、そこで『苦海浄土』まで書かせていただいて、『西南役伝説』の一部も書いているのです。それも全部、憲三先生の目を通して、とても大切な時間をいただきました¹³。

それに続けて、道子の意味深長な語句が並びます。「奇跡のような時間をいただきました。それをひけらかしたくない、と思っておりました。……そのうち、だれかが見つけて読んでくださるだろうと、そんな気持ちでした」¹⁴。評伝「最後の人」は、「森の家」で憲三と道子が交わした、静子を仲立ちとする「後半生の誓い」と、男女としての「聖なる夜」を含みます。掲載された『高群逸枝雑誌』は、はじめ五百部、のちに千部へ増刷されたとはいえ、少部数の、したがって必ずしも大きな影響力をもっているわけではない、地方発の雑誌でした。このことは、結果として道子にとっては、自身の「最後の人」をいたずらに人目に晒すことなく、実質的に封印することを意味していました。また、逸枝ファンのなかには、逸枝

を玉座に祀り上げるも、その一方で憲三を、つまりは、自分が添い遂げようとしている「最後の人」を、足蹴にしては牢獄につなぎ止めようとする人も多くいました。道子にとってこれは、いわれのない耐えがたい仕打ちでした。それでも、寡黙を守り通しました。しかし、三六年の時は流れ、そろそろ死が迫ろうとするこの時期、道子の心情に大きな変化が生じたようです。思うに、「だれかが見つけて読んでくださるだろう」という、これまでの控えめな姿勢から、単行本にすることによって、自身と憲三の関係を、より多くの人にわかってもらいたいという解き放された思いへと、道子の心情は方向を変えたのではないかと判断されます。このとき道子は、すでに八五歳になっていました。これが、秘して死するよりも、生きて、真の愛の姿を広く世に告げることを、道子は望んだのではないかと考えるゆえんです。

しかし、別の考えも成り立つかもしれません。それは、執筆の当初から道子は、いつか来る最期の日まで待って、自身の「最後の人」を世間に紹介しようと、密かにここに決めていたのではないかという解釈です。そうであるならば、「『最後の人』とはいいい題だ。こちらでも早く読みたい」という憲三の気持ちに、この最期の時期に至り、ついに満を持して、望みどおりに、添い遂げることができたことになります。

いずれにしても、「病気になって、怪我をして、視力も落ちました」¹⁵と語る身体的状況にあって、もはや道子には、そう多くの時間が残されているわけではなかったのです。

憲三は、ある日のことを忘れることなくよく覚えていて、死の前日、混濁する意識のあいまの一瞬に、道子に、こう語りかけました。

「秋晴れのよい日でしたね。あなたの古典的なあの家にお伺いしたのは。かつてないことでしたが。ちょうど一〇年です。彼女〔逸枝〕が出発した頃に、うりふたつでしたよ、本棚もなんにもない、しかし、本が二、三冊あって。うっかりすると世間にいれられない孤独な姿で……。僕にはほんとうによくわかった。『椿の海』はまだですか。

『最後の人』とはいいい題だ。こちらでも早く読みたいという願望は、止みがたいなあ」と割れた笛のような声でおっしゃった。氏がおっしゃった「あなたの古典的な家」とは、実家のとなりにあった、にわとり小屋を、かろうじて人間が住めるように父がしてくれた掘っ立て小屋のことである¹⁶。

一九六六（昭和四一）年の「秋晴れのよい日」、「掘っ立て小屋」に住む道子を訪ねて、「森の家」への同行を促したのは、憲三と静子の兩人でした。この「森の家」で、亡き逸枝の精霊を介して、道子の吐血していた魂が蘇ります。それから一〇年が立ち、道子は、静子とともに、主治医の佐藤千里を交えて憲三の臨終に立ち会うのです。死に際において憲三は、「『最後の人』とはいいい題だ。こちらでも早く読みたいという願望は、止みがたいなあ」と、「割れた笛のような声で」発します。これが、「最後の人」である橋本憲三から石牟礼道子への、ひとつの遺言としての「最後の言葉」でした。この逸話が登場するのは、『最後の人 詩人高群逸枝』の「あとがき」においてです。道子が亡くなる、およそ五年数箇月前に書かれたことを考えると、死期を前にしてまとめられたこの作品は、道子から「最後の人」憲三への「最後の返礼品」だったのかもしれません。

こうしたなか、いよいよ道子の情感は高まっていました。『最後の人 詩人高群逸枝』が

刊行される前年（二〇一一年）ころから、道子の筆は、新作能「沖宮」へと向かいます。ちょうどその時期、染織家の志村ふくみから、一通の手紙が道子のもとに届きました。志村は、富本憲吉と一枝の夫婦に背中を押されるようにしてこの道に入り、その後大成した工芸家です。道子は、平塚らいてうとは面識がありました。一枝もまた、青鞥の女です。その点で、道子にとって、志村との出会いは、間接的ではありますが、青鞥の女との最後の邂逅ということになります。志村ふくみと石牟礼道子の交流の様子は、その後、『遺言——対談と往復書簡』（筑摩書房、二〇一四年）となって公開されるに至ります。それでは、そこから数箇所を引用することによって、『遺言——対談と往復書簡』の出版企画の発端や「沖宮」の執筆過程について、加えて、そこで使われる能衣装の製作依頼にかかわって、再現してみたいと思います。

二〇一一（平成二三）年八月八日に志村から道子に出された手紙に、『遺言——対談と往復書簡』の出版企画の発端が、記されています。

先日、筑摩書房の N さん（長いつきあいです）とお話しておりますとき、思わず、今一ばんお話ししたい方は石牟礼さんです、と申しまして、思いがけずこのような企画を立てられました。石牟礼さんのご体調のこととか、いろいろおいそがしいことを充分存じ上げないまま、ご迷惑もかえりみずおたより申し上げました。ご無理のようでしたら、どうぞおことわりくださいませ¹⁷。

九月八日に志村に宛てて、道子は次のような手紙を書きました。

わたくしは今、最後の作品と思う新作能「天草四郎」を構想中でありまして、シテの四郎の装束をこの「みはなだ色」で表現したいと思うに至りました。……

不躰に急な話を持ち出しまして恐縮でございますが、あいなるべくはお引き受け願いたいと思います。能の台本は三分の二くらいまでできております¹⁸。

しかし、ちょうどこの日に、筑摩書房の N さんから手紙が届いたため投函を見合わせ、九月一日に追伸として一筆を書き加えたうえで、志村に送りました。以下は、追伸に書かれてある一節です。

能装束についてご相談の手紙を書いた日に、筑摩書房の N さんから往復書簡のお話をいただきました。……

往復書簡のお申し入れ、望んでもめったに得られないご縁でございます。ただちにお引き受けすべきでございますけれども、このところ私、長年のパーキンソン病が進行しまして歩くのもままならず、箸とペンがうまく握れないのが一番苦痛でございます。この度の新作能を最後の作品と思うのは、そのせいでございます。何としてもこれを仕上げてから往復書簡にとりかかれればと思いますが、それでよろしゅうございますでしょうか¹⁹。

道子は、この「新作能を最後の作品」と思っています。他方、能衣装の製作依頼を受けた

志村は、一週間後の九月一五日、このような返信を道子へ書き送りました。

思いがけない新作能の能装束のおはなし、胸がとどろく思いで拝見いたしました。石牟礼さんが渾身の力をこめて「天草四郎」という新作能をおかきになっていらっしゃることは何という素晴らしいことでしょう。……能装束を織りたいのは私の終生の念願です。まして天草四郎という霊性の高い美しい男性の衣裳とは、私に果たして織れますかどうか不安な思いもいたしますが、何かあたえられた仕事のように思われ、心からよろこんで織らせていただきます²⁰。

十一月一三日の道子から志村への手紙の一部に、次のような文言があります。「これまで出来上がりかけの作品を人さまにお見せしたことはないのですが、予告してしまったのは生き急いでいるからだと思います」²¹。この一言から、近づいてくる死を道子が意識していることが見て取れます。年が変わると、二〇一二（平成二四）年一月二〇日に、再び道子は志村に宛てて、次のような内容の手紙をしたためました。

天草四郎の能装束を早々とお願ひいたしましたけれども、その後体調を悪化させ、一度書いた台本を破棄して初めから書き直しております。……

その中で頭に閃いて止まらないのは、この世ならぬ恋の相手、四、五歳くらいの「あや」の装束の緋の色（紅の色）でございます。……

書き上がりましたら第一番にお目にかけます。

筑摩からお申し出の対談もこのことが終わってからにさせていただきます²²。

ここで注目されるのは、おそらく十代半ばの四郎の「この世ならぬ恋の相手」が「あや」という名の童女であるということです。つまりここから、この物語は、四郎とあやとの道行きを主題にしていることが連想されます。それから一箇月後の二月二四日の書簡の末尾に、道子は、いよいよこう記しました。「まだまだ不出来でございますが、『沖宮』をお送りいたします。御笑覧くださいませ」²³。

こうして、生前にあつて道子は、絶筆を意識した新作能「天草四郎」改め「沖宮」を書き進めるなか、主人公の天草四郎がまとう「みはなだ色（天青の色）」の装束と、五歳の童女・あやが身に着ける「緋の色（紅花の色）」の衣装とを志村に依頼したのでした。

「沖宮」の台本が一応完成したことにより、足踏み状態になっていた志村と道子の対談が、四月二二日に、実現しました。

志村：お体調、いかがですか？

石牟礼：あまり良くはないですね。ですけど、もうちょっと書き残していることがございますので。もうでも、それも、もういいかという気もするんでございますけど。

志村：例の、いま取り組まれておられる、新作能ですか？

石牟礼：はい。その新作能と高群逸枝論ですけども。新作能は、書くことは書きましたけど、まあ、人さまが、どんなふうにお読みになるか。それで、その新作能について、

志村さんに、衣装をお願いしているんでございます。登場人物の童女「あや」の着る衣装を、紅色の衣装を……²⁴。

ここで道子が言及している「高群逸枝論」とは、もうすぐ出版される予定の『最後の人 詩人高群逸枝』が念頭にあったものと思われます。そしてまたこの手紙から、『最後の人 詩人高群逸枝』のみならず、「生き急いでいる」との自覚のなか「もういいかという」あきらめの気持ちももちながら、「沖宮」と向き合っている様子をうかがい知ることができます。明らかに道子にとって、この二作は切り離すことのできない一対のものであり、この世に遺す最後の作品であるとの強い思いをもって、このとき、是が非でも完成させようとしていたのです。ふたりの対談は続きます。

志村：はい、それで、今日、ちょっとお持ちしました。紅の色をお見せしようと思って、そめ糸を……あんまり、まだ染めていないんですけど、新作能を脱稿されて、いよいよよとなったら、本格的に染めようと思っているんです。

石牟礼：まだ書き上げていないのに、早々と志村さんに発想を漏らしてしまっ、ご迷惑じゃなかったかしらと思って。

志村：とんでもないです。私は本当に喜んで、やらせていただきたいです。

（染めた糸を卓上にひろげる）

石牟礼：まあ……きれいなこと……まあ……。

志村：なんか、今度の新作能、執筆の途中のお原稿を、何度か送っていただいて、読ませていただいて、こんな感じかしらと。

石牟礼：まあ……はあ……。

志村：いろいろ想像して。

石牟礼：まあ……まあ……。

志村：染めてみましたけど。

石牟礼：まあ……。

志村：これが、紅と、これが水縹^{みはなだ}の色²⁵。

こうして、四郎とあやの能装束を織る染め糸の見本が、志村から道子にもたらされました。しかしこれには、道子は不満だったようです。山本淑子が、こう明かします。

文学に限らず芸術全般に鋭い感覚の人だったから色に関しても非常なこだわりを示されていて、もう何年も前、志村ふくみさんから送られてきた糸束を素人の私にみせながら「この糸はきれいですが私のイメージとは少し違うんですよ。どうしたらいいでしょうか」と相談された。相談するというより又糸を手にも思案するという風だった。自分の作品に対しては納得のいくまで推敲に推敲を重ねられる方だったから、色や形に対しても厳しかったのだと思う²⁶。

道子自身は、原作「沖宮」のなかで、「緋の色」を、次のように表現しています。

村の女房ら、寄り集まり、古き家の蔵から緋の色の旗さしものを見つけ出し、その古き布水流少なき川にて洗いあげたれば、古き煤、埃落ちて緋き色、花のごとくに現れ、かかる朱の色見しことなし²⁷。

原作の記述が示すように、村の古家の蔵に長くしまい込まれていた古い布切れを水で洗って縫い直してできたものであれば、この道行きに使われる衣装は、歓喜に満ちた婚礼などにみられる光り輝く新調の晴れ着のようなものではなく、生と死の、まさしく生まれ変わりのための巡礼の旅路にふさわしい、おそらくは歴史のなかで積み重なった血と涙の無念と悲痛とが無言のまま染み込んだ土着色の青紫と紅彩の衣であるにちががなく、おそらくそのことと、志村が持参した糸とのあいだに、道子の違和感があったのではないかと推量されます。

この対談から半年後の二〇一二（平成二四）年の一〇月、『最後の人 詩人高群逸枝』が藤原書店から上梓され、翌月に、「沖宮」が『現代詩手帳』（第五五巻第一号）に掲載されます。その後「沖宮」は、『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻（藤原書店、二〇一三年）と、志村ふくみ・石牟礼道子『遺言——対談と往復書簡』（筑摩書房、二〇一四年）に所収されることになるのでした。

それでは、「沖宮」の概要をまとめてみます。

原作に従うと、あらすじはだいたい次のようになります。場面は、過ぎし昔の彼岸花の咲くころの島原・原の廃城跡。先の島原・天草の乱で散った天草四郎が登場し、次に四郎の乳母のおもかさまとその夫の佐吉が現われ、さらに、その夫婦の娘のあやが続きます。あや以外はすべて霊界の人で、あやは、亡き四郎を慕う、わずか五歳に過ぎない童女です。あやは四郎のことを「兄^{あん}しゃま」と呼ぶ。久しぶりの再会をみなで喜び、昔の思い出に浸る。こうして登場人物たちによる導入の会話が終わると、場面が切り替わり、いよいよ物語が進行します。天草下島の村人たちは、死に絶えんばかりに干ばつに苦しんでいました。そこで、雨を司る竜神への人身御供^{ひとみごくう}として選ばれたのが、乱で両親を失くし、もともと竜神の姫でもあった孤独の身の幼子・あやでした。村の女房たちが涙ながらに縫った緋の衣装に身を包み、彼岸花で飾られた小舟に乗せられたあやは、独り、夕陽が沈む茜色の沖へと波の合い間を進んでゆきます。浜辺では、「神代の姫となって、沖宮^よの美かところ」へ赴く「あやしゃま」を愛おしみ、雨乞いの村の衆が手をあわせる。やがて天空から恵みの雨粒が降り注ぐも、雷鳴がとどろき、稲妻が炸裂するや、ついにそこで舟影とともに緋の色が視界から消えてしまいます。するとそのとき、あやがひたすところを寄せる、霊界の天草四郎が、みはなだ（水縹）色の衣をまとい、その姿を現わすのです。四郎の乳母の娘があやであることからして、ふたりは乳兄^{ちきょうだい}妹の関係にあります。こうして、雨水をこいねがう村の民を救うための人柱^{ひとばしら}となってゆく悲運のあやと、受苦の身にあるあやを決然と迎え入れ、手をとって導いてゆく守護精霊者としての四郎との、切なくも美しいふたつの魂の道行きがはじまるのです。向かう先は、竜神と、いのちたちの大姥^{おおはな}君とが住むという海底^{うなぞこ}の〈沖宮〉。ふたりの道行きの舞いを慰めるように、あるいは祝うかのように、何か読経や讃美歌にも似た音響が高らかに鳴り渡るなか、この物語は終わりを迎えます。

以上が、あらすじです。「沖宮」を書きながら、道子の脳裏には、どのような像（イメージ）が映し出されていたのでしょうか。以下に、思いつくままにそれらを、コラージュ風に

合成してみます。したがってこれが、私の思う「沖宮」の、その象徴世界の分析ということになります。

場面として設定されている天草は、道子の実際の出生の地であり、対岸の島原にある原城は、道子が一九九八（平成一〇）年四月から『熊本日日新聞』に連載した「春の城」の舞台でもあります。天草と島原のあいだには海原が横たわります。そしてそれは、道子が日々日常的に目にしていた不知火海の外海でもあるのです。それではそこで、道子にとっての海、あるいは海底のイメージを探ってみます。道子は、「陽のかなしみ」と題されたエッセイのなかで、このように書いています。

天草島あたりの、磯に露出している古生代の地層に出逢っても胸がとどろいた。地層の年齢にいきよに立ちあうはめになって、わたしはくらくらする感じだった。ああ最初はわたしたちは、海底の岩だったのでは、岩から生まれてきたのだとおもう。海がながい間、養ってくれたにちがいない、そう思われて泪ぐんだりした。……

不知火海はわたしの心の内部だった²⁸。

「海底の岩」こそが、道子が生まれ落ちた原郷であり、そして、最後に帰るべき場所と、道子はいつしか思い定めていたのかもしれませんが。〈沖宮〉が、天草灘沖の「海底の岩」であることは、間違いないでしょう。

島原・天草の乱では、総大将の天草四郎をはじめ、蜂起した数万の下層民たちが倒れ、加えて、親や兄弟を失い孤児となった子どもたちが大勢いました。さらに、日照りや干ばつが人びとを苦しめます。この乱の背後には、行き場を失くした多くのいのちたちが漂っています。そうした苦しみと悲しみのイメージを喚起してやまない体験が道子にありました。それは、水俣病患者たちとの出会いであり、チッソ本社前の路上での座り込みであったろうと思われます。道子が編集した『水俣病闘争 わが死民』の自身の巻頭言に、次のような一節を読むことができます。

死民とは生きていようと死んでようと、わが愛怨のまわりにたちあられる水俣病結縁のものたちである。ゆえにこのものたちとのえにしは、一蓮托生にして断ちがたい。
……

「一生かかっても、二生かかっても、この病は病み切れんばい」

わたくしの口を借りてそのものたちは呟く。

そのようなものたちの影絵の墜ちてくるところにかがまり座っていて、わたくしの生きている世界は極限的にせまい²⁹。

このなかの「わたくしの口を借りてそのものたちは呟く」という文言が、石牟礼文学の神髄であると思料されます。といいますのも、幻想のなかにあつて、他者の、あるいは自分自身の、あえぐような嘆きが道子の耳に聞こえ、それを受け止めて文に書き留めたものが石牟礼文学ではないかと、考えるからです。たとえば、『西南役伝説』が他者の、『椿の海の記』が自分自身の、といった具合です。道子のなかでは、現実の「水俣病闘争」と、歴史上の「島

原・天草の乱」は、ともに「死民」による闘いであるという点で重なり合い、両者を見る道子のイメージは避けがたく通底していたにちがいありません。

彼岸花についても、そして、四郎とあやの装束の色についても、それらの源泉となるイメージを、道子がすでに書き記している文に見出すことができます。道子は、川の源流を求めて、しばしば熊本県境の山々を訪ねました。つまり、道子にとっては、山から川が流れ、海に達する過程が、生から死を経て最後に再生される、いのちの歩みゆく道程を表わしているのです。以下のように道子は、ある日遭遇した山野の情景を描写しています。

道々、今年も彼岸花がうつくしかった。段々田んぼもみのりかけていて、暮れてゆく夕映えを谷の間にやどし、この世ならぬ色調で照り映えていた。……

能衣裳の沈金のような色や、藍の色の、藍から川の水にさらしうつすときの、古代緑とでもいおうか、息をのむような一瞬の緑が、さらに青に変るときの神秘的な艶をみるときに、日本人の色彩感覚にすりこまれていた色調がおもわれる。それはたぶん、稲の色を主とする田園の美からなっていたのではあるまいか。

色の調べをあらわすことばがむかしあった。かろうじて、まだその調べの残されている山野をゆく。自分の蘇生のため³⁰。

彼岸花の美しさも、四郎とあやの衣装に使われる「みはなだ色」と「緋の色」のイメージも、どれもこれもおそらくは、こうした道子の山歩きのなかから感得されたものだったのではないのでしょうか。

それでは、「雨乞い」のイメージは、どこに由来するのでしょうか。体調を崩し、山梨の病院に入院していたとき、その土地の名刹を巡るなかで、道子は「雨乞いの観音さま」に出会っており、そのときの様子を、道子は次のように書き留めています。

さてその観音像は二体で、日での池や川床に縄をつけてそびき廻されて何百年経ったのだらう。目も鼻も口も潰れはて、手も足ももげ落ち、雨乞い祈祷の火にあぶられて酸鼻な姿である。不思議なことに黒焦げの、損なう所はもうどこもないその姿が、えもいわれぬ豊饒と気品を、胸元や腰のあたりに漂わせていたのであった。一樹作りで平安以前のものらしいという。

たちどころにその姿は、見えない縄にそびかれ町中の晒し者となり続け、死狂した自分の祖母や、幼いころ私を膝の上に抱いてくれた女郎たちや、水俣病死者たちの姿と重なった³¹。

雨乞いのための^{ひとみごくう}人身御供となって、独り沖へ流されるのが五歳の幼子のあやです。道子は、この女童に自分自身を投影していると考えてよいのではないのでしょうか。つまり、「雨乞いの観音さま」こそが道子であり、道子こそが、あやなのです。いよいよ岸辺を離れ、あやを乗せた小舟は沖へと向かいます。すると雷鳴がとどろき、閃光が走り、恵みの雨が天空からこぼれ落ちてくる、まさにそのときです、帆影が消えるのでした。それを見ていた、あやのために緋色の衣を縫った村の女房たちの頭が、雨に打たれながらしゃくり上げて泣き、こうつぶやくのでした。

あやしやまは沖宮の美か^よとこにゆかれしや。
むごきこの世に生きるより、いのちたちの大妣君^{おおははぎみ}のおられます沖宮に行くがよい。あなかなしや。
四郎どのは、あやしやまを迎えに参られたまいしや。

(能管の低い音にて道行き始まる) ³²

かつて道子は、「森の家」から静子に宛てて出した手紙のなかで、このようなことを書いています。

うつし世に私を産み落とした母はおりましたが、天来の孤児を自覚しております私には実体であり認識である母、母たち、妣たちに遭うことが絶対に必要でした。……
つまり私は自分の精神の系譜の族母、その天性至高さの故に永遠の無垢へと完成されて進化の原理をみごもって復活する女性を逸枝先生の中に見きわめ……そのなつかしさ、親しさ、慕わしさに明け暮れているのです。そして私は静子様のおもかげに本能的に継承され、雄々しいあらわれ方をしている逸枝先生のおもかげを見ます³³。

この言説から判断するとすれば、〈沖宮〉に住むいのちたちの大妣君は、まさしく逸枝その人であり、周りでそれを支えるいのちたちが、藤野であり静子であるということになります。つまり、〈沖宮〉は、道子にとっての「精神の系譜の族母」の住み家なのです。その家へ手をとって案内する四郎が、道子にとっての「最後の人」である憲三であることは、もはや言を俟たないでしょう。

加えれば、差し詰め竜神は、しばしばこの間原作者の道子を死に追い詰めようとした、現実世界の不条理を体現する死神の化身ということになるのではないのでしょうか。恋い慕う四郎に導かれ、晴れて道行きを成し遂げ、面影に宿す妣たちが待つ海底の美しき〈沖宮〉——。しかし、一方そこには、雨を支配する竜神が住み着いています。もともとは、あやは竜神の姫でもありました。道子は自分の実の父親について、かつてこう記述しています。

父は酒乱な上、泣き上戸でしたが、栗飯と茶碗が飛び散って、母が裸足で外に飛び出たあと、こわれた火鉢に「ちよく」という焼酎瓶^{わねや}を据え、「ミッチン、^{わねや}汝、このお父ちゃんにつきあうか」といって、冷たい盃をぶるぶるこぼしながらつきつける。私は……好かん、と思いながら、フーンと鼻で返事して、その盃を何べんも受けました。夜市で見たこわい「地獄、極楽」の中のやせた「餓鬼」たちが青い舌をたらんと出している、それを思い出し、父に似ていると思ったのです³⁴。

これが、道子が宿す実父のイメージです。したがって、この道行きは、「精神の系譜の族母」のもとへ帰るという意味だけではなく、「餓鬼」のもとに帰ることをも同時に示唆します。つまり、この道行きには、あやにとっては「雨乞いの観音さま」となって再生するしかほかにはない厳然たる宿命としての不条理が、一方で横たわっていたのでした。

かくして道子は、憲三に手を引かれ、逸枝と、藤野と静子が住む、そして「餓鬼」の幻影が居着く〈沖宮〉へと向かうことになります。道子を書いたもののなかに「道行」と題された一文があり、これが、道子にとっての道行きに寄せるイメージではないかと思われますので、ここで以下に引用します。

しょうじ
生死のあわいにあればなつかしく候
みなみなまぼろしのえにしなり

おん身の勤行に殉ずるにあらず ひとえにわたくしのかなしみに殉ずるにあれば道行のえにしはまぼろしふかくして一期の闇のなかなり³⁵

そして道子は、こう加えます。

〈ゆき女じょうらく瑠る〉という章を、苦海浄土第二部でいま想定しています。
わたくしの死者たちは遺言を書けませんか、死者たちにかわって、わたくしはそれを書くはめになるのです。
してみると、すでにわたくしは死者たちの側にいることになる。
いついつ、そのようなことになったのか。
どうもわたくしは心中をとげたい³⁶。

「沖宮」にあつては、あや以外はすべて霊界の人、つまり死者たちです。こうして、生死のあわいにあつて、あやと四郎の道行きがはじまりました。次が、道子を書く「沖宮」のラストシーンです。

われらが縫いし緋の衣
うなでこ
海底にゆれる
林の中を
一輪の華となりて
四郎どのに手をひかれ
おおはぎみ
大姫君と 竜神さまのおらいます
沖宮へ 道行きはじまりしかな。

うなでこ
海底色の幕がたれてくる。
その前を、二人が手を取り合ってゆっくりと舞いながら幕。

(余音 じょうじょう 嫋 嫋たる高音域の能管の音) ³⁷

雑駁な記述になりましたが、以上が、私が解釈する新作能「沖宮」をかたちづくっているイメージの総体です。著作集 12 『研究追記——記憶・回想・補遺』の第二部「わが肥後偉人点描」のなかの第四話「石牟礼道子の死去から一年——ハナシノブ考あるいは『沖宮』考」

においても、これとは別の手法で、「沖宮」の構造と意味を分析しています。こちらをあわせてご参照ください。

さてその一方で、二〇〇八（平成二〇）年十一月から『熊本日日新聞』に連載されていた道子の自伝「葭の渚」が、二〇一三（平成二五）年五月の掲載を最後に中断に至ります。自伝は、道子が「森の家」を辞して水俣に帰り、『高群逸枝雑誌』の創刊号から「最後の人」を連載するも、水俣病闘争に全面的に関わろうとするところで途切れます。次は、自伝のラストシーンです。いつかは姿を消すことになるであろう、守護聖人たる憲三から巣立って、いよいよひとりになることを自覚せねばならなくなった道子の姿が、そこにありました。

しかし、何気なく取り掛かった水俣病問題は、容易ならぬ前途を含んでいた。これは世界史的な事件になるのではないか、社会史的な文明の大転換期に我から進んで飛び込んだのではなかろうか。そのことを橋本憲三氏に断片的にお話した。憲三氏はこのころ、お体の異変が進みつつあった。私の話を聞かれて憲三氏は静かに頷かれ、「単なる地方の一事件ではないですね。僕にもわかりますが、逸っぺが生きていたら、もっとよりよく深くお話をうかがえるのにな」と静かにおっしゃってくださっていた。

憲三氏にお言葉をいただきながら、心の底で私は「一人であることを自覚せよ、これは容易ならざることをおっぴじめたぞ。一人であることを再々自覚せよ」と、自分に言い聞かせていた³⁸。

『熊日』に連載された「葭の渚」が単行本になり、さらに『石牟礼道子全集・不知火』の別巻に所収されるのが、二〇一四（平成二六）年の五月です。そのなかで道子は、「自伝『葭の渚』は『熊本日日新聞』に連載したのだけれど、水俣病第一次訴訟の頃まで書いて息切れしてしまっただけで、病状もよろしくなかったし、訴訟提起後の錯綜した時期を整理して叙べるには、体力・気力ともに尽き果てていた」³⁹と書きました。

連載を中断する半年前の二〇一二（平成二四）年の一〇月に上梓した『最後の人 詩人高群逸枝』において、「最後の人」が橋本憲三であることを口外し、翌一月に雑誌に発表した「沖宮」において、憲三との道行きを成就しました。さらに加えて、自伝「葭の渚」の最終場面にあっても、自分が尊師と仰ぐ憲三について触れることができました。未完ながらも新聞連載に幕を閉じようとするこのとき、何も、引き裂かれた自己のすべてが言葉への置き換えによって完全に救われることはなかったにしても、世に書き残すべきことは全部書き尽くしたという安堵感と充足感が、道子のこころを包み込んでいたものと思量されます。しかしその一方で、道子の身体は、もはや回復の見込みのない、厳しい状態に置かれていたのです。

道子の最期につきましては、渡辺京二が、道子の死後『アルテリ』に寄稿した「石牟礼道子闘病記」に詳しく、そこから断片的に引用するかたちで、以下に構成します。

二〇〇三年六月には、ヘルペスが起って坂本病院に四〇日ほど入院。しかし、退院時には血糖値は正常になっていた。問題は歩行を始め、日常の動作がかなり緩慢になっていることで、状態が進めばひとりで入浴するのもむずかしくなるのではと心配された。山本淑子さん（哲郎夫人、内科医）はずっとパーキンソン病と診断していたらしいが、

私がそれを初めて彼女の口から聞いたのはこの年十一月一五日だった⁴⁰。

このころ渡辺は、道子の食事づくりに励んでいました。

彼女の食事を全面的に私が作るようになったのは湖東時代から、以降「ユートピア」に入居するまで続いた。毎食四、五品は作り、栄養バランスも十分考えたつもりだ。「おいしい」とよろこんでもらったのも際々だが、手をつけようとしないうちはどうにもならなかった⁴¹。

渡辺は、このようにも書いています。「私は二〇〇五年の初頭をもって河合塾福岡校の講師を辞め、その後は彼女の仕事場に日参していたのである」⁴²。

一六年間仕事場に使っていた、真宗寺に隣接する健軍四丁目の借家を離れ、湖東二丁目に道子が転居したのは、一九九四（平成六）年四月でした。その後、二〇〇二（平成一四）年七月に、上水前寺二丁目に新築された知人宅を借り受けて住み、続いて二〇〇八（平成二〇）年五月に、京塚にある山本ビル四階に居を移すのでした。

この山本ビルは山本哲郎氏の父君の経営する病院で、四階は患者の入院室であったのだが、父君引退ののちの何年か経て、哲郎夫人淑子さんが心療内科を開院されたが、四階は使用しないで道子夫人に提供されたのである。ワンルームのひろびろとした使い易い空間であるのみならず、主治医がすぐそばに居てくれるのだから、願ってもないことだった⁴³。

翌年（二〇〇九年）、渡辺は、主治医からこう告げられました。

八月六日には山本淑子医師の話あり。右脚の骨も非常に細くなっているのです、いつ骨折してもおかしくない。咀嚼と嚥下も困難になって来ており、二十四時間の介護が必要で、作家活動も終わりだろうとのことで暗然となった⁴⁴。

二〇一三（平成二五）年の「一二月には幻聴が始まっていた」⁴⁵。翌年（二〇一四年）の五月、道子は、秋津一丁目にある高齢者施設の「ユートピア熊本」に入居しました。「ここは看護師も四人おり、しっかりした介護をしてくれる上、雰囲気がとてもよろしかった。この施設については、真宗寺の佐藤薫人住職が教えてくれたのである。結局ここが終焉に至るまで、彼女の終の棲家となった」⁴⁶。

このころ水俣では、道子の夫の弘の体にも、異変が生じていました。息子の石牟礼道生は、こう書き記しています。

父の命がその時を迎えようとしていると主治医からの連絡を受けて母が熊本から水俣の病室に駆け付けた。

「作家としてこれたのは全てあなたのお蔭でした」

と、母が父の耳元で言った。僅かに父が苦笑いしてうなづいたような表情を見せた瞬間

間に父の生涯は報われたと思った⁴⁷。

二〇一五（平成二七）年八月に、弘が亡くなると、翌年四月、熊本地震が発生し、道子の施設も大きな被害を受けました。それから二年後の二〇一八（平成三〇）年の二月一〇日、道子は帰らぬ人となりました。享年九〇歳でした。渡辺は、そのときの様子を、このように書き表わしています。

逝かれたのは一〇日未明三時すぎ、道生さん、妙子さん、ひとみさん（姪）、大津円さんの四人が看とられた。ずっと昏睡状態だったのが、最後に眼をぱちりと開き、涙が一滴こぼれて、それが臨終だった由。私は最期を看とれずとも後悔はなかった。もう心中何度も別れを告げていた⁴⁸。

一方道生は、このように書いています。

三月二十四日、水俣で「おくりびとの集い」を催して頂いた後、水俣の実家の仏壇に母の遺骨と位牌を父のその横に並べて置いて手を合わせた⁴⁹。

道生はまた、渡辺京二と山本哲郎が創設した人間学研究会の機関誌である『道標』が企画した特集「追悼 石牟礼道子さん」にも寄稿しました。その「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」と題された一文のなかで、道子が「森の家」へ出て行ったときの様子についても触れていますので、以下に引用します。

普段は優しい母が突然、「東京へ行く」と言い出した。私としても進学のことやそれなりに青春の頃の悩みもあった。「大人になれば解かる時が来る」と言いながら「ほんとうの悲しみと言うことが解かるかおまえに」と何もこんな時に言わなくても良いではないかと思ったがそれ以上、何も問えなかった。母のただならぬ気配を私なりにその時感じた。「今、私はしんからおまえに伝えておきたいと思っていることがあるのよ」とも言い出した。父母から劣性の能力と感性しか遺伝しなかった私でもこのような「もの言い」の境地に立ち至った時の母の凄味だけは感じる事が出来ていた。高群逸枝様のご主人、橋本憲三様に導かれての「森の家」訪問は母にとって重要な契機となったと自ら記しているが父にも私にとっても大きな衝撃であったし今後のありようの契機となった⁵⁰。

その後道生は、名古屋で学生生活を送り、その地で職を得て、所帯をもちました。道子が家を出たあとの自身と父親の生活を顧みて、道生はこのように記します。

父は見事に夫の役目を果たしました。父には睦子、母には妙子と言うそれぞれ妹がいます。私の叔母であるこの二人に父と私は「妻」と「母」の役割を何十年ものあいだ務めてもらいました。この二人の叔母に私は一生頭が上がりません⁵¹。

そして、以下に引用するのが、道生に宿る父親像です。

ものを思うと取り憑かれたように書き始める母。何を言おうが通じない。囲碁や釣りや庭いじりを好み知人や親戚の面倒や相談にのり人柄の良い学校の先生だった普通で穏やかな父だった。そんな母に距離は置きながらも資金的援助を怠ってはいなかった⁵²。

石牟礼道子が死去したのは、二〇一八（平成三〇）年二月一〇日のことでした。この日、愛知県にある名都美術館では特別展「志村ふくみ——いのちの色に導かれて——」（平成三〇年一月一二日から三月一八日までの会期）が開催されていました。志村ふくみはこのとき、どのような思いで道子の死亡の知らせを受け止めたのでしょうか。その喪失感は、筆舌に尽くしがたいものがあったものと思われます。

道子の死去から四日が過ぎた二月一四日の『熊本日日新聞』（二八面）は、「沖宮」の公演について、こう報道しました。「一〇日に九〇歳で亡くなった作家の石牟礼道子さん原作の新作能『沖宮』が、初めて舞台化されることが一三日までに決まった。一〇月六日の水前寺成趣園能楽殿（熊本市中央区）を皮切りに京都、東京で上演。衣装は石牟礼さんの長年の友人である、染織家の志村ふくみさん（九三）＝京都市＝が手掛ける」。そして、続く七月一日の同紙五面は、「友人で人間国宝の染織家志村ふくみさんが二九日、京都市右京区の都機工房で監修した衣装を報道陣に披露した」ことを伝えました。

それから三箇月後の一〇月六日、新作能「沖宮」が熊本市の水前寺成趣園能楽殿で上演されました。燃え盛る薪の明かりに照らし出された野外から、観客の目は舞台へと注がれます。第一部は朗読で、常味裕司さんのウッド演奏を背景に、アナウンサーの山根基世さんが「沖宮」を朗読しました。そして、金剛龍謹さんが天草四郎の霊を演じるシテとして、また、豊嶋芳野さんがあやを演じる子方として登場する第二部の新作能「沖宮」へと続き、物語が進んでゆきます。するとどうでしょう、くしくも途中で、小さな雨粒が一瞬降ってくるではありませんか。偶然ではありますが、まさしくこの物語のハイライトである「雨乞い」を強調するにふさわしい、天の配剤によるところの、見事なまでの演出でした。

「沖宮」を観劇した、道子の主治医だった山本淑子は、次のような感想を書きました。

衣が美しすぎると人の心は惑わされる。死や暗闇が見えなくなる。ケチをつけるつもりはもうとうないが、今回の能は美しすぎる衣装が主役になってしまっただけで石牟礼さんの影が薄くなっていた気がする⁵³。

果たして、あやに着せたいと道子が思い描いた「緋の色」とは、どのような色だったのでしょうか。それを知るためには、『潮の日録』の「あとがき」のなかで、若い道子が、この時期「魂が吐血した状態だったにちがいない」⁵⁴と告白していることを想起する必要があります。私は、この「魂が吐血した状態」こそが、道子の生涯を支配した主旋律の色調だったのではないかと思量します。加えて私は、衣装に使われた華美な色彩だけでなく、最後の場面で、道行きのあやと四郎のふたりを迎えに出てきたのが竜神だったことにも、驚きを禁じえません。原作は、〈沖宮〉へ向かうふたりの道行きの場面で幕が降

りることになっているのですが、そこに、原作には描かれていない、何と竜神が登場してきたのです。

当夜私が観覧した「沖宮」の物語は、一九六六（昭和四一）年六月二九日の一五時一分、六九歳の憲三と三九歳の道子が国鉄水俣駅のホームに立ち、入線してきた西鹿児島発東京行きの急行「霧島」の一等車に乗り込み、逸枝の靈魂が宿る「森の家」へ向けての、一昼夜にわたる、生まれ変わりのための厳粛なる道行きと重なります。

道子は、逸枝が亡くなったときに『熊日』に寄稿した追悼文において、すでにこのようなことを書いていました。

高群逸枝氏が、その女性史の中で、まれな密度とリリズムをこめて、ほかに使いようもないことばで「日本の村」と書き、「火の国」と書き、「百姓女」と書き、「女が動くときは山が動く」と書いたとき、彼女みずからが、古代母系社会からよみがえりつづけている妣（ひ）であるにちがいない⁵⁵。

このときの、「魂が吐血した状態」にあった道子が、憲三に導かれて「森の家」へ向かう道行きは、「古代母系社会からよみがえりつづけている妣」である逸枝を求めての旅立ちでした。私は、この道行きが、道子にとっての新作能「沖宮」の原像であると確信しています。もしこの理解が正しければ、〈沖宮〉が「森の家」であり、天草四郎が憲三であり、そして、もしふたりを迎えるのであれば、家父長制の化身でもあるような竜神などでは決してなく、「大妣君」たる逸枝その人ということになります。

種々の解釈はともあれ、いずれにいたしましても、道子の死去から八箇月を経た、二〇一八（平成三〇）年一〇月六日の夜、水前寺成趣園能楽殿におきまして、あやと四郎の道行きは、多くの観客が見守るなか、無事に成し遂げられたのでした。そのとき降ってきた雨粒は、ひょっとすると、満願成就を果たした道子の喜びの涙だったかもしれません。

ああ、幕が降りたというのに、残響とでもいうのでしょうか、私の耳には、妣^{ははぎみ}君たちによる麗しき歌声が、天草灘の海底から聞こえてきます。それは、以下に紹介する高群逸枝の「天草灘の歌」です。

天草灘の歌

昼はひねもす夜はよもすがら
天草灘のさざれ波
棹^{しずく}の雫^{きん}を黄金と見る
一人の少女悲しげに
父の亡靈^{みたま}にあわばやと
尋ねて迷う海の上
おりしも天の香ぐわしき
星の光を積みし船の
船なる父は手を挙げて
こち来よ沈めといいたもう⁵⁶。

逸枝の母の兄のひとりに、天草の最南端の小島に住む僧侶がいました。母があるとき、その僧が住む寺を訪ねました。僧は母に、次のような、その島に昔から伝わる悲話を話して聞かせます。

両親と娘との漁家があったが、母が亡くなると父が海へあこがれ出て帰ってこなかった。それで娘が小舟に乗じて父をたずねてまわるのだったがそのまま娘も帰ってこなかった。風の晩には娘が父を呼ぶ声が海のほうから聞こえてくるというのだった⁵⁷。

この神秘的で美しい民話を母から聞いた逸枝は感動し、亡魂たちの冥福を祈って、齢傾く最晩年につくった詩が、この「天草灘の歌」なのです。

私はこれが、石牟礼道子の遺作ともいえる新作能「沖宮」の原型であると確信しています。逸枝の歌に見事呼応するかのような道子の能——この詩情に満ちた幽玄のきずなは、切っても切り離せないものとして、その馨しい「天草灘のさざれ波」のその下に、永遠に眠り続けるにちがいありません。その意味で、妣君たちが歌う聖なる詩歌は、不滅の響きとなって、いまま天草灘の海底にとどろき渡っているのです。

一方道子は、憲三に導かれて駆け込んだ「森の家」で書き始めた日記の冒頭に、かつてここで暮らしていた「大妣君」である逸枝を脳裏に浮かべながら、次のような詩歌を献じました。

わたしは 彼女を
なんと たたえてよいか
ことばを選びすぐっているが
気に入った言葉が見つからないのに 罪悪感さえ感じる
わたしがどれほど深い愛を彼女に捧げているか
そのためわたしはいま病気である

わたしは彼女をみごもり
彼女はわたしをみごもり
つまりわたしは 母系の森の中の 産室にいるようなものだ
わたしが生もうとして まだ産みえないでいるものは 人間世界である
調和と分離を人間存在の
そもそもの原理だと この頃思うようになった⁵⁸。

「気に入った言葉が見つからない」なか「深い愛を彼女に捧げている」、「森の家」の滞在者たる詩人石牟礼道子は、「母系の森の中の産室」において「わたしは彼女をみごもり」、そして「彼女はわたしをみごもり」、かくして「大妣君」高群逸枝の〈子宮〉を媒介として復活するや、その夫である橋本憲三を自らの「最後の人」として仰ぎ、「最後の人」の死去ののちは、服喪のなかにあってその人を柱として蘇生を繰り返し、いよいよ最期の時を迎えると、「最後の人」に手をとられ、天草灘の海底に眠る墓所でも神殿でもあるような、「大妣君」

が待つ〈沖宮〉へと向かうのでした。まさしく「わたしが生もうとして まだ産みえないでいる」「調和と分離」の「人間存在」が、いみじくもここに完結するのでした。

注

- (1) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、249頁。
- (2) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (3) 山本淑子「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ」『道標』第63号、発行所・人間学研究会、2018年、22頁。
- (4) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、244頁。
- (5) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、244-245頁。
- (6) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、247頁。
- (7) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、265頁。
- (8) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、266頁。
- (9) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、453-454頁。
- (10) 西川祐子「一つの系譜——平塚らいてう、高群逸枝、石牟礼道子」、脇田晴子編『母性を問う(下)——歴性的変遷』人文書店、1985年、188頁。
- (11) 河野信子「『火の国』から『近代』を問い直す——高群逸枝と石牟礼道子」、加納実紀代編『リブという〈革命〉——近代の闇をひらく 文学史を読みかえる⑦』インパクト出版会、2003年、246頁。
- (12) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、464頁。
- (13) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、452頁。
- (14) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (15) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (16) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、464頁。
- (17) 志村ふくみ・石牟礼道子『遺言——対談と往復書簡』筑摩書房、2014年、12頁。
- (18) 同『遺言——対談と往復書簡』、14頁。
- (19) 同『遺言——対談と往復書簡』、15頁。
- (20) 同『遺言——対談と往復書簡』、17-18頁。
- (21) 同『遺言——対談と往復書簡』、23頁。
- (22) 同『遺言——対談と往復書簡』、26-27頁。
- (23) 同『遺言——対談と往復書簡』、31頁。
- (24) 同『遺言——対談と往復書簡』、32頁。
- (25) 同『遺言——対談と往復書簡』、33-34頁。
- (26) 前掲「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ」『道標』第63号、22頁。
- (27) 『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、藤原書店、2013年、155-156頁。
- (28) 石牟礼道子『陽のかなしみ』朝日新聞社、1986年、377-378頁。
- (29) 石牟礼道子編『水俣病闘争 わが死民』現代評論社、1972年、9頁。
- (30) 前掲『陽のかなしみ』、430頁。

- (31) 石牟礼道子「悶え神とイザイホウの神」『西日本新聞』1979年2月20日、11面。
- (32) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、158頁。
- (33) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、248-249頁。
- (34) 石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』葦書房、1974年、71頁。
- (35) 『石牟礼道子全集・不知火』第四巻／椿の海の記ほか、藤原書店、2004年、523頁。
- (36) 同『石牟礼道子全集・不知火』第四巻／椿の海の記ほか、524頁。
- (37) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、158-159頁。
- (38) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、299-300頁。
- (39) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、410頁。
- (40) 渡辺京二「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、編集責任・田尻久子、発行・アルテリ編集室、2018年、16-17頁。
- (41) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、17-18頁。
- (42) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、19頁。
- (43) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、同頁。
- (44) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、20頁。
- (45) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、22頁。
- (46) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、24頁。
- (47) 石牟礼道生「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第73号、2018年5月、36頁。
- (48) 前掲「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、33頁。
- (49) 前掲「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第73号、36頁。
- (50) 石牟礼道生「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」『道標』第61号、発行所・人間学研究会、2018年6月、7頁。
- (51) 同「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」『道標』第61号、8頁。
- (52) 前掲「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第73号、36頁。
- (53) 前掲「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ」『道標』第63号、22頁。
- (54) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、255頁。
- (55) 石牟礼道子「高群逸枝さんを追慕する」『熊本日日新聞』1964年7月3日、6面。
- (56) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966年（第1刷）、196頁。
- (57) 同『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、同頁。
- (58) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、244-245頁。

あとがき

二〇〇八（平成二〇）年一月から『熊本日日新聞』に連載されていた道子の自伝「葎の渚」が、二〇一三（平成二五）年五月の掲載を最後に中断に至ります。自伝は、道子が「森の家」を辞して水俣に帰り、『高群逸枝雑誌』の創刊号から「最後の人」を連載するも、水俣病闘争に全面的に関わろうとするとところで途切れます。

地元紙『熊日』に連載された「葎の渚」が単行本になり、さらに『石牟礼道子全集・不知火』の別巻に所収されるのが、二〇一四（平成二六）年の五月です。そのなかで道子は、「自伝『葎の渚』は『熊本日日新聞』に連載したのだけれど、水俣病第一次訴訟の頃まで書いて息切れしてしまった。病状もよろしくなかったし、訴訟提起後の錯綜した時期を整理して叙べるには、体力・気力ともに尽き果てていた」¹と書きました。

本稿執筆中、私の脳裏には、自伝「葎の渚」が中断されることなく、最後まで書かれていたら、そこには何が語られていたろうかという思いが常にありました。といいますのも、すでに「まえがき」のなかで引用していますように、道子は、自伝「葎の渚」のなかで、こう書いていたからです。

水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事であった。二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る。人間いかに生きるべきかというテーマを、二つのできごとと呼びかけていた²。

道子は、一九六四（昭和三九）年に逸枝が亡くなると、追悼文「高群逸枝さんを追慕する」を『熊日』に寄稿し、その後、憲三が住む東京の「森の家」に滞在したときに、『熊本風土記』に連載していた「海と空のあいだに」の最終稿を仕上げ、そして、憲三その人である「最後の人」を書き始めるのです。「海と空のあいだに」が、一九六九（昭和四四）年に『苦海浄土 わが水俣病』として単行本になり、一方の「最後の人」は、『高群逸枝雑誌』に連載後、二〇一二（平成二四）年に『最後の人 詩人高群逸枝』となって上梓されます。『苦海浄土 わが水俣病』が、道子四二歳の、『最後の人 詩人高群逸枝』が、道子八五歳の作品でした。おそらく、道子が自伝「葎の渚」を完結していたならば、この『苦海浄土 わが水俣病』から『最後の人 詩人高群逸枝』までを扱ったものと思われます。そして、その内容は、「水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事」の再現となる、そして、「二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る」作業に似た、そうした記述になっていたことが想像されます。そしてそれが、道子にとっての「人間いかに生きるべきかというテーマ」であれば、ぜひともそれを読みたいというのが、この間の変わらぬ私の願望でした。

もちろん私は、道子に代わって自伝を書くことはできません。また、ひとつの出来事である「水俣のこと」については、すでに道子を対象とした作家論も作品論も多数世に出ています。そこで、もうひとつの出来事である「高群ご夫妻のこと」については、どうだろうかと考えてみました。道子とその周囲の人たちが書き残した一次資料を丁寧に渉猟し、それを援用することによって、「大妣君」である逸枝、「最後の人」である憲三、そのふたりと織り

なす道子の真実の生涯をそれらの資料に語らせることは可能ではないかという思いが立ち上がってきました。そうした目的のもと、でき上った作品が、この「石牟礼道子小伝——『最後の人』との契りから道行きまで」です。

いうまでもなく、道子にとっての生まれ変わりの場が「森の家」でした。その意味で、再生された道子の人生の出発点をこの「森の家」に見ることになります。他方、道子は、この家で見えた逸枝の膨大な蔵書にこころを動かされて、自分もこれから勉強しなければならないことを肝に銘じます。そしてまた、この家で、憲三が編集する「高群逸枝全集」を道子が読み、道子を書く「海と空のあいだに」を憲三が読みます。これらのことから判断しますと、石牟礼文学の原点もまた、同じく、「森の家」にあるといっても過言ではないでしょう。「森の家」での憲三との生活がなかったならば、私たちがいまや知る後半生の道子の人生も文学も存在することはなかったのではないかというのが、私の思うところです。

さて、それはそれとして、擱筆したいま、いずれにせよ本稿が、執筆目的にあった適切な内容になっているかどうか、その判断を私は、読者のみなさまの手にゆだねなければなりません。そしてまた同時に、今後、若き有能な石牟礼研究者のあいだにあって、道子がここから願っていた、「水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事」の実際が鮮明に現像されることにより、その結果、「二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る」大業の実態が見事に描出されてゆくことを祈りたいと思います。もし本稿がその一助になれば、それは、私にとって喜び以外の何ものでもなく、研究者としての存在の実感をそこに見出すことになるでしょう。

それでは、本稿を締めくくるに当たりまして、改めて、逸枝、憲三、道子の三者にみられる相互の視線を書き記しておきます。

まずは、逸枝が憲三に向けるまなざしです。

K は私の見てきたところではきわめて透徹した孤独の持主だった。この孤独は自他の偏見を超越した普遍的な性格のものだった。俗な言葉でまた彼のきらう言葉でいえばそれは神に通ずるものだった。私が尊敬したのは彼の孤独だった。彼は男性なので社会が男性に与える世俗的な条件のために心身をさいなまれていた。そこに彼のやむをえない矛盾や錯誤もおこり不当に誤解されることもまた多かった。私は会わない前から電光の一閃でそれらのことをほとんど全面的に直感していた³。

いうまでもなく「K」は、憲三のことです。妻が夫に「神に通ずるもの」を見るとき、それは、全面的な夫への「帰依」を意味するのではないのでしょうか。他方でまた、逸枝は、「彼は男性なので社会が男性に与える世俗的な条件のために心身をさいなまれていた。……不当に誤解されることもまた多かった」と書きます。このことへの闘いこそが、「フェミニスト男子」としての憲三の、見まごうことのない本領であったものと思われます。わかりやすく、この逸枝の言説を反転して、多くの「フェミニスト女子」にあてはめるならば、「彼女は女性なので社会が女性に与える世俗的な条件のために心身をさいなまれていた。……不当に誤解されることもまた多かった」ということになります。

一方、憲三は逸枝をどう見ていたのでしょうか。

あのひとは、あのひとの心は、人類とともにいつもあって、僕はそれをおもう……彼女はやはり天才者だった……。彼女は三十七歳で研究にはいったが、僕はもっと早く準備をしてやれたらなおよかったと思う。もっと早く気づくべきだった……。⁴。

このように憲三は、妻の逸枝が「天才者」であることを自覚していました。そしてまた、執筆環境の整備が遅れたことを悔やんでもいました。
次は、道子が憲三に向けるまなざしです。

彼女は神だ、とおっしゃる橋本憲三という人の生涯。（憲三氏を）いまだ書かれざる男性論としてみる場合、この人の懺悔僧あるいは布教者、いや彼女への帰依ぶりは徹底している。逸枝の下僕しもべという言葉がいちばんぴったりする。いまだ描かれざる宗教画が私の中に組立てられる。彼女は神だ、といい、まさに神を仰ぎみている男性の顔は苦悶の極でもあり、神に近い⁵。

憲三は逸枝を「神」とみなしていました。そして、道子が観察するところによれば、そのときの憲三の「顔は苦悶の極でもあり、神に近い」ものでした。
それでは最後に、憲三は道子をどう見ていたのでしょうか。

秋晴れのよい日でしたね。あなたの古典的なあのお家にお伺いしたのは。かつてないことでしたが。ちょうど一〇年です。あれから。彼女が出発した頃にうりふたつでしたよ、本棚もなんにもない、しかし、本が二、三冊あって。うっかりすると世間にいれられない孤独な姿で……。⁶。

死期が迫るなか、憲三の脳裏には、一〇年前の一九六六（昭和四一）年の美しい秋晴れの日の出来事が映し出されています。これが、静子を同伴させての二度目の石牟礼邸訪問でした。この日憲三は、東京の「森の家」をこれから解体するので、その様子を見ておいでほしい旨のことを申し出たのでした。しかしこれは、居場所を失っていた道子を救い出すための方便でもありました。

以上、逸枝、憲三、道子の三者にみられる相互の視線を引用しました。ここから何が見えてくるのでしょうか。この国における「女性史学」の構築に向かう逸枝を、陰で献身的に支える「フェミニスト男子」として憲三。「うっかりすると世間にいれられない孤独な姿」の道子にさがなく手を差し伸べる憲三。そうした憲三の受苦的で孤高なる振る舞いのなかに「神」を見る逸枝と道子。憲三という黒子がいなければ、おそらく逸枝のあの膨大な仕事はなかったでしょう。憲三についての幾多の道子の著述が存在しなければ、憲三は、いまなお歴史の闇に隠れたままになっていたにちがいありません。では、果たして道子の、「最後の人」たる憲三へ向けられた「慎んでいたい」という控え目ながらも切なる思いは、いかなる方法によって救済されるのでしょうか。

「最後の人」は「どうしてずっと単行本にされなかったんですか」⁷という、最晩年の質問に対して、道子さんは、「慎んでいたいと思った。そのうち、だれかが見つけて読んでく

ださるだろうと、そんな気持ちでした」⁸と、答えています。僭越も不遜も顧みず、そしてまた、浅学に非才を重ねるなかにあってここに書いた、「石牟礼道子小伝——『最後の人』との契りから道行きまで」は、「だれかが見つけて読んでくださるだろう」という道子さんの気持ちに対する、私なりの返歌です。「人の思いは、こんな単純なものじゃありませんよ」といわれることは十分承知しています。いかなる人間であれ、他者の魂の隅々までを十全に描き出すことはできません。それでも、ぜひとも道子さんのご霊前にこの駄文をお届けしたいというのが、いまの私の偽らざる気持ちです。道子さんと私の母とは同年の生まれです。道子さんのご子息と私も同年齢です。おふたりに面識はないものの、同じ熊本の下にあって同時代を生きた朋友という思いが、この間ずっとしていました。いかに稚拙であろうと、この一文を書き上げることができたことを私は誇りにいたします。

最後に一言。本稿の末尾にあります、「再録追記 石牟礼道子の『沖宮』における四郎とあやのモデルについて」は、参考までに、著作集 23『残思余考——わがデザイン史論(下)』、第三部「高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子論」の第二話「石牟礼道子の『沖宮』における四郎とあやのモデルについて」を再録したもので、それをもって本稿の本文を補う追記とさせていただきます。

さらにまた、この著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』の巻末に、著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』と著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』をあわせた、三巻に共通する「写真集」を置きましたのでご活用ください。あるいは、著作集 23『残思余考——デザイン史論(下)』、第三部「高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子論」の「第一話『三つの巴』画像集」をご参照いただければ幸いです。なお、ここに使われています「三つの巴」とは、著作集 18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』において詳述しているとおり、高群逸枝、橋本憲三、石牟礼道子の三者の関係を同定した、私の独自の用語法です。

ところで、一七世紀の島原・天草の乱を主題とした石牟礼道子の「春の城」と、一四世紀のワット・タイラーの乱に題材を求めたウィリアム・モリスの「ジョン・ボールの夢」とを比較分析した文を、いつかは書いてみたいと思っています。それが可能となった暁には、著作集 26『残思余考——すべては夢のなかから』に所収することになるにちがいありません。しかしそれは、最後の最後の楽しみとして残すとして、一応、本稿「石牟礼道子小伝——『最後の人』との契りから道行きまで」の攔筆をもって、ここに、「三つの巴」たる高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子にかかわる実質的研究を閉じることにします。

これより、いまだ手つかずの空白部分を残している、著作集 17『ふたつの性——富本一枝伝』へ復帰し、それを書き終えたら、これまでの、私の学問上の寄り道も回り道も、すべてが終了します。それよりのち、老兵いまだ去りがたく、本来の私の研究領域でありますデザイン史・デザイン論とウィリアム・モリス論の世界に帰着し、いよいよそこを主戦場に、再び自己との戦いに入るつもりでいます。

もっとも、それもこれもすべて、病苦および老弱を前にした避けがたい相克という現実の時空にあつての立ち振る舞いということになります。この身を置いた森羅万象のうつし世に、別れを告げるその日まで、諦めず、そしてまた、くじけず、「全巻完結」というかすか

な灯を頼りとし、強く強く、しっかりと、ここ「火の国」阿蘇の森のなかに生きて、これからも筆を握り続けたいと思います。

注

- (1) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、410頁。
- (2) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、287頁。
- (3) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年（第4刷）、217頁。
- (4) 石牟礼道子「最後の人 4 序章 森の家日記（四）」『高群逸枝雑誌』第4号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年7月1日、23頁。
- (5) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、317頁。
- (6) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第15号、1977年春季号、62頁。
- (7) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、452頁。
- (8) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。

再録追記 石牟礼道子の「沖宮」における四郎とあやのモデルについて

はじめに

私は、著作集14『南郷谷春雷秋月』と著作集18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』を書き進めるなかにあつて、一次資料（エヴィデンス）に基づく論証の結果として、石牟礼道子の新作能「沖宮」におけるあやと四郎の道行きを、道子と憲三のそれであるとみなして叙述しました。たぶんそうした解釈に立つのは、現時点では私ひとりではないかと思われます。しかし、四郎を渡辺京二とみなす意見もありますので、ここでそれを紹介し、検討したいと思います。

一. シンポジウム「新作能『沖宮』を語る～石牟礼道子と志村ふくみの世界～」

私がそもそも石牟礼道子の「沖宮」に興味をもったのは、その能装束の製作に携わったのが、染織家の志村ふくみであったという点にありました。これまで私は陶工の富本憲吉を主な研究の対象にしていました。その一連の研究から、私は、志村ふくみがある文のなかで、自分は富本憲吉の弟子であると語っていたことを知っていました。また、憲吉の妻の一枝（旧姓尾竹）の妹が福美といい、志村ふくみの母の小野豊と尾竹福美は、大阪の夕陽丘女学校で同級でした。一枝を含むこの三人は仲のよい友だち同士で、志村ふくみの「ふくみ」の名が一枝の妹の尾竹福美の「福美」から取られていることも、よく知られていました。その後一枝は、青鞥の社員に加わる一方、日本画家としても活躍しました。そこで、この能衣装に憲吉なり一枝なりの面影を見出すことができるかできないか、それを確かめてみたかったのです。

そうした関心のなかにあつて私は、「新作能『沖宮』を語る～石牟礼道子と志村ふくみの世界～」というシンポジウムがあることを知り、さっそく申し込み、聴衆のひとりに加わりました。そのシンポジウムは、道子の死去から五箇月が立った、二〇一八（平成三〇）年七月一四日、熊本日新聞社本館二階ホールで開催されました。それまで私は、道子の文はひとつも読んでおらず、何とかその日までに、『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻に収められている「沖宮」と、志村ふくみと石牟礼道子の共著である『遺言——対談と往復書簡』に目を通すのが精一杯のあり様でした。広告のチラシによると、出演者は、司会として伊藤比呂美（詩人）、パネラーとして渡辺京二（思想史家）、跡上史郎（熊本大学准教授）、そして坂口恭平（作家）の計四氏でしたが、私は、長いあいだ熊本を離れていたこともあつて、どの方もはじめてお聞きするお名前でした。坂口恭平氏は、病気により当日欠席でした。

開演すると、いきなり跡上氏から、「四郎は渡辺さんのことではないですか」という質問が飛び出しました。それを受けて渡辺氏は、「それを俺にいわせるのかい」と応じました。肯定でも否定でもありませんでしたが、それを聞いた、私を含む多くの人は、「おそらくそうなんだろう」という印象をもったにちがいません。この日のシンポジウムは、「沖宮」の構造なり意味なりをそれぞれがそれぞれの専門的な立場から語り、それを踏まえて相互に論議するという、シンポジウムに求められる本来の形式から程遠いものでした。たとえば、渡辺氏が「俺は、能はウーウーうなるだけでようわからん」と言い出すと、隣りに座ってい

た伊藤氏が、「それをいってはおしまいですよ」といって、いさめる一幕もあったくらいです。結局、石牟礼道子の人柄や作品にまつわる思い出話に終始し、本題である「沖宮」についても、染織家としての志村ふくみの芸術的世界についても、論議を欠く結果となりました。ただ、シンポジウムの最後に、前列に待機していた志村ふくみの娘の志村洋子氏が紹介され、持参していた能装束に使用する染め糸が紹介されたときには、私もつい身を乗り出して見入りました。同じくシンポジウムの最後に、『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』（新潮社、二〇一七年）の著者として、米本浩二氏が紹介されました。のちに私は、この本を図書館で借りて読んでみました。加えて、その続編である『魂の邂逅 石牟礼道子と渡辺京二』（新潮社、二〇二〇年）も。そこには、このような一節がありました。

生類との道行きがからだに染み込んでいる石牟礼道子が、『曾根崎心中』的な道行きをするとしたら、その相手は、魂の邂逅を果たした渡辺京二以外にありえない。……

道子と京二の関係は、いろいろな言葉で言い表されてきた。一番ポピュラーな言い方が「作家と編集者」であろう。「思想・文学的同志」もなかなか座りがいい。しかし、「心中の道行き」以上にふたりの関係を適切に言い表す言葉があるだろうか¹。

この本を読んだ、おそらくそのほとんどの人が、「沖宮」は石牟礼道子と渡辺京二の「心中の道行き」であると受け止めたにちがいありません。すでに私は、著作集の14と18の両巻において、道子と憲三の関係につきましては詳述していますので、ここでは、石牟礼道子と渡辺京二の関係について触れてみたいと思います。

二. 「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」

まず、道子本人は、渡辺をどう思っていたのでしょうか。

石牟礼道子の『最後の人 詩人高群逸枝』（藤原書店、二〇一二年）が上梓されるに当たり、道子へのインタビューがなされました。そのインタビューは、二〇一二（平成二四）年八月三日に道子の自宅において行なわれ、聞き手役を、藤原書店の藤原良雄が務めました。このとき道子は、八五歳でした。そしてその内容は、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」と題して、『最後の人 詩人高群逸枝』に所収されます。以下は、そのなかで道子が語っている、高群逸枝と橋本憲三です。

——「『最後の人』覚え書——橋本憲三先生の死」の執筆から」この三十年のあいだ、そして現在、高群さんをどういうふうに感じておられますか。

石牟礼 いよいよますます尊敬しています。あの時代に、よくまあ、こういう鋭い、純粹さで押し切っていくようなことができたものだ。そして、彼女の感じているこの世への感受性の熱いこと。純度も高いけれども、世間にたいする、人間にたいする思いの深さは、私のお手本で、大切にしたいと思っています。そして男女のあり方が、羨ましいですね。羨ましいけれども、羨望というのと違う。男と女は斯くあらねばならないと思っています。最敬礼です、お二人にたいしては。

日本の古代にあったような、純粹な。

今はみんな、世間の垢にまみれずには生きていけない、どこかでまみれてしまいます。だけど、汚れない存在と生き方。存在の原郷をつくっている二人だと思う。これは何かの形で書いておかねばと、いつも意識していました。何を書くにも原郷というのがあります。こういうところにいたい、と夢見ています。言葉にすると、ちょっと気恥ずかしい。

——憲三さんから逸枝さんのことをお聞きになって、憲三さんの姿もそばで見ておられて、そう思われたわけですね。

石牟礼 はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

石牟礼 こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

石牟礼 はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした²。

インタビューの最後に、こうしてはっきりと、八五歳になる道子は、自分にとっての「最後の人」が橋本憲三であることを、世に告知するのです。それに先立って道子は、藤原良雄の質問に対して、渡辺京二については、こう反応しています。

——石牟礼さんからすると渡辺京二の存在はすごく大きいですね。

石牟礼 とてもすごく大きいです³。

実に短くそっけない返事です。そこでいま一度、質問がなされます。

——高群逸枝にたいする橋本憲三のように、石牟礼道子にたいする渡辺京二というすぐれた編集者がいて、今日の石牟礼道子があるという感じがしますね。二人三脚でね。渡辺さんが石牟礼さんを支えようという、これは橋本憲三と相通じるものがあるんじゃないかと思います。

石牟礼 そうですね。私はあんまり年月が頭の中にないものですから、何を尋ねられても、はてなと思って。そうすると渡辺さんはピタッと憶えておられる。どういう頭だろうかと思います。私はそういう方面は、まるで憶えていない⁴。

おそらくこの発話も、藤原が事前に期待していた思いを満たすものではなかったのではないかと推量されます。しかしこれが、紛れもない道子が示した返答でした。明らかにこのやり取りから、道子の目からすれば渡辺は、「すぐれた編集者」以上でも以下でもないことがわかります。

それでは次に、渡辺京二は、道子をどう見ていたのでしょうか。

道子亡きあと、渡辺は、道子に関する幾つかのエッセイを書いていますので、そこから抜き書きしてみます。まず、『現代思想』に寄稿した「誤解を解く」の最後の一節からの引用です。

以上をかんがみるに、私は一編集者ないしヘルパーとして彼女と関わったにすぎぬのであって、彼女の遺した表現のすべては完全に彼女自身のものであり、私の助力など必要としなかったのである。私はただこの偉大な才能が発揮されるのに必要な環境作りにいささか役立ったかと思うが、それは私生涯のしあわせであって、得るものは私の方がはるかに大きかった。渡辺がいなければ今日の彼女はなかった、などと言う人がいるとすれば、その人は真相を知らずに完全に間違っているのだ。彼女は私など存在しなくても、必ずやあれだけの仕事を残したに違いない。それだけのすさまじい創造力の持ち主だったのだ。このことは暮々誤解されてはならぬ。だからこの一文を草した⁵。

次に、『藍生』に寄稿した「カワイソウニ」の一節から引用します。

じゃ何でおまえは五十年間も原稿清書やら雑務処理やら、掃除片づけから食事の面倒までみたのかとお尋ねですか。好きでやっただけで、オレの勝手だよ。と答えればよいのですが、もちろん私は故人の仕事が単に大変な才能というにとどまらず、近代的な書くという行為を超える根源性を持つと信じたからこそ、いろいろお手伝いしました。

その手伝いなんて誰でもやる気があればやれること。特筆に値しません。

私はその間ちゃんと家族も養い、自分の本も書きました。故人に捧げし一生という訳ではなかったのです。

しかし、そういう大変な使命感を担った詩人だからこそ、お手伝いに意義を感じたのだと言えば、もうひとつ本当ではありません。

私は故人のうちに、この世に生まれてイヤだ、さびしいとグズリ泣きしている女の子、あまりに強烈な自我に恵まれたゆえに、常にまわりと葛藤せざるをえない女の子を認め、カワイソウニとずっと思っておりまして。カワイソウニと思えばこそ、庇ってあげたかったのです⁶。

この言説からしてみると、道子に対して「カワイソウニ」という感情が渡辺にあったことは事実のようです。しかしながら、それが特別な愛のかたちへと発展し、それを道子と生涯共有していたかという点、それを立証するにふさわしい資料（エヴィデンス）は残されていません。もし何か存在していたとすれば、それはあくまでも、単に渡辺から道子への、一方的で内に秘められた憐憫の情感だったのではないかと思います。

三．果たして四郎役は渡辺京二だったのか

したがって、「沖宮」において道子は、道行きの相手として渡辺を選んだのではないかと、踏み込んで推断するには、あまりにも証拠（エヴィデンス）が不足していて、どうしてもその実証に困難性が伴うのです。他方、そもそも論になりますが、「沖宮」にあっては、あや以外はすべて霊界の人であり、渡辺はそれに該当しません。さらにまた、もし道行きの相手が渡辺であったとするならば、〈沖宮〉でふたりを迎える「大妣君」は誰なのか、具体的に想定できる人物が見当たらず、ここでも、自ずと物語としての「沖宮」の構造は崩れ落

ちてしまうのです。そうしたことに思いを巡らしますと、著作集 14 『南郷谷春雷秋月』と著作集 18 『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』のなかで、複数の具体的な根拠（エヴィデンス）を列挙して詳細に論証しているとおりに、あやが原作者の石牟礼道子、天草四郎が橋本憲三、そして大妣君が高群逸枝であると想定することの方が、より合理的で妥当性があるのではないかと思量されます。

いわずもがなの蛇足になるかもしれませんが、先ほど渡辺の「誤解を解く」の最後の一節を引用しましたので、あわせて以下に、その最初の一節を引用してみます。

『現代思想』誌が石牟礼道子特集をなさるといふ。ありがたいことである。私も一文を求められたが、いまは彼女について書くような気もちにはとてもなれない。ところが、一応辞退したあとで、愕然とするようなことに会った。ある方が『苦海浄土』は渡辺との共作だと信じると、悔み状に書いて来られたのである。

共作とまではいかなくとも、『苦海浄土』の成立には渡辺の深い関与があったかのような風説は以前からあり、その度に私は打ち消して来た。私もあと長くは生きていないのだから、この際、このような推測を完全に一掃しておかねば、とんでもない悔いを残すことになる⁷。

周知のとおり、道子の出発作が『苦海浄土』です。上の言辞を、最終作の新作能「沖宮」に置き換えてみますと、およそ次のようになります。「『沖宮』の道行きの相手は渡辺ではないかとの風説があるが、この際、このような推測を完全に一掃しておかなければ、とんでもない悔いを残すことになるにちがいない」。思うにこれが、「一編集者ないしヘルパー」としての渡辺の矜持であり美学ではなかったでしょうか。他方、主人たる者は、介助人の従順に感謝はすれども、死へと向かう愛慕の道行きに、決して従者たるその者を選ぶことなど、おそらくありえないでしょう。かくあればこそ、道子を献身的に支えた渡辺の無償の行為は歴史に足跡を残すものと、私は信じるのです。渡辺京二が九二歳で世を去ったのは、道子の死からそろそろ五年が近づこうとする二〇二二（令和四）年の一二月のことでした。家族も仕事もあり、必ずしも道子に「捧げし一生という訳ではなかった」にしても、「カワイソウニと思えばこそ」庇護の志が芽生え、躊躇することなくそれを、誠実に全うした人生だったのではないかと推察いたします。

おわりに

この拙文の冒頭におきまして、私は、「新作能『沖宮』を語る～石牟礼道子と志村ふくみの世界～」と題されたシンポジウムについて触れました。このシンポジウムでの発言内容をテープ起こしたものと思われる、渡辺京二の一文があります。「沖宮の謎」という題で『預言の悲しみ——石牟礼道子の宇宙Ⅱ』に所収されています。以下に、その文の最後の箇所を引用します。

もう少し正確にいうと、原城で死んだ人びと、その象徴としての四郎は、「沖宮」へ赴くあやの同行者、つまりあやを救済する案内者なんだね。お兄さんたちはもう美しい

世界へ行ってるんだよ、そこへ連れて行ってあげようね、もともとあやはその世界の人だったんだものねというわけなの。「沖宮」は大妣君や竜神のいるところだけれど、そこにはもうちゃんと原城の死者二万数千人が先に行って待っているの。だから、あやを舟が送り出して、ありがたやありがたやとおがんでいる浜辺の村人は、原城の死者、つまり自分の仲間を吊っていることになるの。『沖宮』はそういう含意をもつ作品なんです。石牟礼さんは全文業をもって、この国の古きよき民と心中なさろうとした作家です。自分は今はもう亡きこの古い民たちと、妣神の待つ美しい世界へ道行きなさるつもりだった。だから『沖宮』という作品は、彼女の深いところにあるコンプレックスとか衝動とか、オブセッションとか、深いところにある思いが出ている作品なんですよ。自分なりにかなり強引にこじつけたところもありますが、そんなふうにとちょっと読み解いてみたんですが、ほかにいろいろ読み解き方はあると思います。そういう意味で面白い、読みがいのある、解釈のしがいがある作品だと思います⁸。

渡辺は、自分が主宰する雑誌『熊本風土記』の編集者として、橋本憲三と同居中の「森の家」から送られてきた道子の「海と空とのあいだに」を読んでいました。この文は、憲三の目を通して書き終えたもので、『苦海浄土』の最後の一部となる原稿です。また、石牟礼道子、松浦豊俊、渡辺京二の三者の共同編集になる雑誌『暗河』に、道子は「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」を二回に分けて連載します。憲三の死を悼む道子の悲しみを見事に伝えるものです。さらに憲三亡きあとに、『高群逸枝雑誌』（最終号）が発刊されるとき、その編集業務に携わったのも渡辺です。その雑誌に道子は「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」を寄稿します。この文にも、憲三に向ける道子の恭順の思いが色濃く投影されています。

さらにまた、全集に収められていた「最後の人」が、そこから取り出されて『最後の人 詩人高群逸枝』として単行本化される際、渡辺は、道子が「森の家」に滞在していたおりに執筆していた覚え書き、つまり取材ノートを発見すると、編集者に渡します。これが、『最後の人 詩人高群逸枝』に収録されている「森の家日記」です。このなかには、「昨夜、というより今晚（一時）憲三氏（以後 K 氏と書く）よりノートの御許し出る。今夜更に高群夫妻とそして自分とに、後半生を誓った」⁹と書かれてあります。このノートを基にして、憲三が主宰する『高群逸枝雑誌』に道子は「最後の人」を連載し、それを、齢が傾いた後半生最後のこのときに道子は、『最後の人 詩人高群逸枝』として世に送り出し、あわせて一方で、あやと四郎の心中物語である「沖宮」を書き上げます。現世にあって、こころを満たすまで添い遂げることができなかった女の魂の移ろう姿を象徴する作品です。

したがって、こうした道子の文のすべてを読んでいただろうと思われる渡辺は、「後半生を誓った」道子と憲三の関係について誰にいわれるまでもなく自身が十分に理解しており、あやとの道行きを果たす四郎のモデルが誰であるのかもまた、おそらくは間違いなく感知していたにちがいないというのが、私の推量するところです。

しかしながら、渡辺の「沖宮の謎」の文からは、そのことは伝わってきません。たといみづかで見守っていた「一編集者ないしヘルパー」であろうとも、渡辺にとって「沖宮の謎」は、解き明かすことのできない、永遠のものであったのでしょうか。いやむしろ、「一編集者ないしヘルパー」としてではなく、「男」としての清純な誇りのなかにあって、その謎の実

際を口にすることを避けようとする力がどこかで無意識のうちに働いていたのかもしれない。

とはいえ、いずれにいたしましても、そうした推量を越えて、道子にとっての最後の作品の裏に隠された「沖宮の謎」が解明できない限り、石牟礼道子というひとりの人間の生涯は正しく理解できないのではないかと、いま私は確信するに至っているのです。そこで、参考のために、道子の主治医であった山本淑子の『『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ』から一節を引用して以下に示します。

四年前私は長女を亡くしたが、その時、幼少期からの長女をご存じだった石牟礼さんから「これからはふっこさんを山本家の柱となさいませ。」と言われた。死者を柱にとはどういう事だろうとその時は解せない気持ちが強かったが、思い返すと石牟礼さんは、早逝した弟さんを始め水俣病患者さん達、屍累々のなかを、その魂を柱として生きてこられた¹⁰。

山本が指摘するように、道子は、「早逝した弟さんを始め水俣病患者さん達、屍累々のなかを、その魂を柱として」生きてきたにちがいありません。しかし他方で、私には、道子の柱となった魂は、それだけではなかったような気がしています。といいますのも、道子自身、次のように書いているからです。

道子は、憲三について、こう吐露します。

ほとんど宿命的にかかえこんでしまった故郷水俣の出来事についても、同郷のよしみで直感的に把握していられた。その上突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動をも、たぶん理解されていたのだっただろう。静と動との極点を、わたしはゆきつもどりつせねばならなかった¹¹。

水俣病との対峙、そして逸枝と憲三への恭順、このふたつが、道子の内面を駆け巡っていました。まさしくこの時期に形成された両要素が動力となって、こののちの道子の生涯を先導することになるのです。道子は、それについて、以下のように分析しています。

水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事であった。二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る。人間いかに生きるべきかというテーマを、二つのできごとと呼びかけていた¹²。

ここに引用した文は、そののちの道子の生涯を規定する極めて重要な言説であるように思われます。といいますのも、人間のいのちと暮らしについての無自覚な生後体験から、民衆へ寄せる私的かつ詩的な独自のまなざしへの昇華、——そしてその、まさしく着床された土着的魂に導かれて描かれる普遍的な人類族母の史的再生。これが、その後の石牟礼文学を通底する「人間いかに生きるべきかというテーマ」の原像ではないかと考えるからです。

憲三を喪った道子は、憲三を自身のいのちの柱として、何とかその後の生涯を生き延びたのではないかと、私は思っています。そして、そのたどり着いた先が、疑いもなく「沖宮」

だったのです。

当夜私が観覧した「沖宮」の物語は、一九六六（昭和四一）年六月二九日の一五時一分、六九歳の憲三と三九歳の道子が国鉄水俣駅のホームに立ち、入線してきた西鹿児島発東京行きの急行「霧島」の一等車に乗り込み、逸枝の霊魂が宿る「森の家」へ向けての、一昼夜にわたる、生まれ変わりのための厳粛なる道行きと重なります。

道子は、逸枝が亡くなったときに『熊日』に寄稿した追悼文において、すでにこのようなことを書いていました。

高群逸枝氏が、その女性史の中で、まれな密度とリリズムをこめて、ほかに使えないことばで「日本の村」と書き、「火の国」と書き、「百姓女」と書き、「女が動くときは山が動く」と書いたとき、彼女みずからが、古代母系社会からよみがえりつづけている妣（ひ）であるにちがいない¹³。

このときの、「魂が吐血した状態」にあった道子が、憲三に導かれて「森の家」へ向かう道行きは、「古代母系社会からよみがえりつづけている妣」である逸枝を求めての旅立ちでした。私は、この道行きが、道子にとっての新作能「沖宮」の原像であると確信しています。もしこの理解が正しければ、〈沖宮〉が「森の家」であり、天草四郎が憲三であり、そして、もしふたりを迎えるのであれば、家父長制の化身でもあるような竜神などでは決してなく、「大妣君」たる逸枝その人ということになります。

種々の解釈はともあれ、いずれにいたしましても、道子の死去から八箇月を経た、二〇一八（平成三〇）年一〇月六日の夜、水前寺成趣園能楽殿におきまして、あやと四郎の道行きは、多くの観客が見守るなか、無事に成し遂げられたのでした。そのとき降ってきた雨粒は、人身御供となって雨乞いをするあやの、換言すれば、満願成就を果たした道子の、喜びの涙だったかもしれません。

以上に述べた思いを反映させた作物が、いま擲筆した著作集 18 『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』であることは、いうまでもありません。読者のみなさまには、適切な論述になっているか、お時間が許せばぜひ一度、ウェブサイト「中山修一著作集」をご訪問いただき、ご批評をちょうだいできれば、幸甚に思う次第です。

（二〇二五年八月）

注

（1）米本浩二『魂の邂逅 石牟礼道子と渡辺京二』新潮社、2020年、199頁。

しかしながら、著者の米本は、それに先立つ別の箇所では、「四郎は石牟礼道子の分身であるあやのもとに雷神となって降り立つ。そして四郎とあやは沖宮へと道行をする。『四郎』を『一』や『おもかさま』と言い換えても、さしつかえあるまい」（米本浩二「緋の衣 よみがえる魂——石牟礼道子の『沖宮』」『道標』人間学研究会、第61号、2018年、136頁。）と書き、ここでは、天草四郎を、「渡辺京二」ではなく、道子の弟の「一^{はじめ}」ないしは祖母の「おもかさま」に見立てています。なぜそうした異なるふたつの解釈が可能なのかは、米本は何も書いていません。

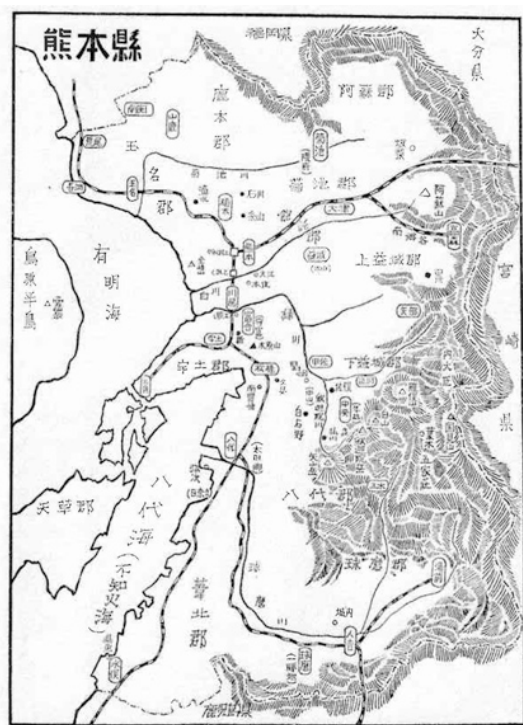
- (2) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012 年、453-454 頁。
- (3) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、442 頁。
- (4) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、447 頁。
- (5) 渡辺京二「誤解を解く」『現代思想』第 46 巻第 7 号（5 月臨時増刊号）、2018 年、29 頁。
- (6) 渡辺京二「カワイソウニ」『藍生』第 29 巻第 6 号（第 333 号）、2018 年、10-11 頁。
- (7) 前掲「誤解を解く」、26 頁。
- (8) 渡辺京二「沖宮の謎」『預言の悲しみ——石牟礼道子の宇宙Ⅱ』弦書房、2018 年、113-114 頁。
- (9) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、247 頁。
- (10) 山本淑子「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ」『道標』人間学研究会、第 63 号、2018 年、22 頁。
- (11) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第 14 号、1977 年冬季号、12 頁。
- (12) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014 年、287 頁。
- (13) 石牟礼道子「高群逸枝さんを追慕する」『熊本日日新聞』1964 年 7 月 3 日、6 面。

中山修一著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
中山修一著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
中山修一著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』

付録 三卷共通「写真集」

——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図01】ふるさと「火の国」1／高群逸枝と橋本憲三が出生したころの熊本県



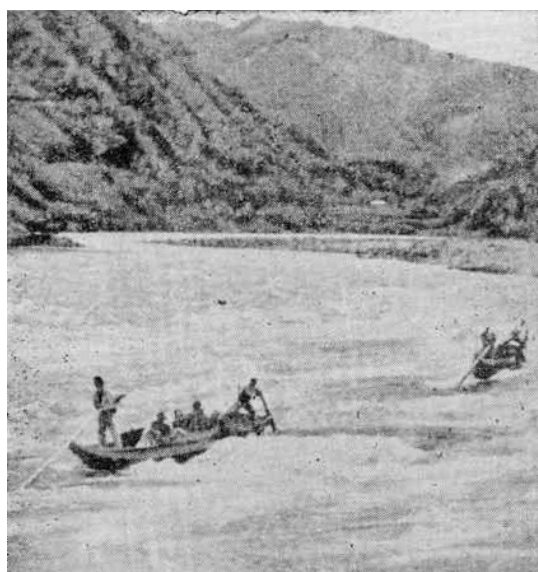
【図02】ふるさと「火の国」2／「火の国」を象徴する阿蘇の火山



【図03】ふるさと「火の国」3／高群逸枝が生まれ育った松橋町の全景

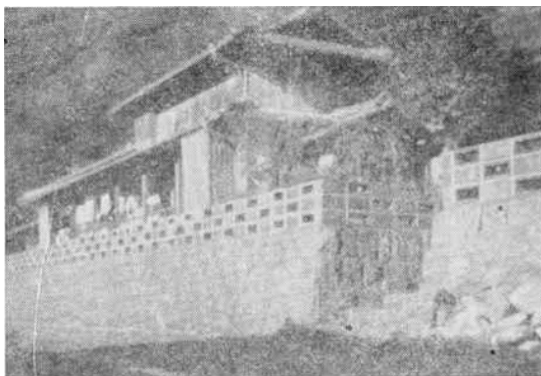


【図04】ふるさと「火の国」4／高群逸枝が出家前に住んでいた弘川集落

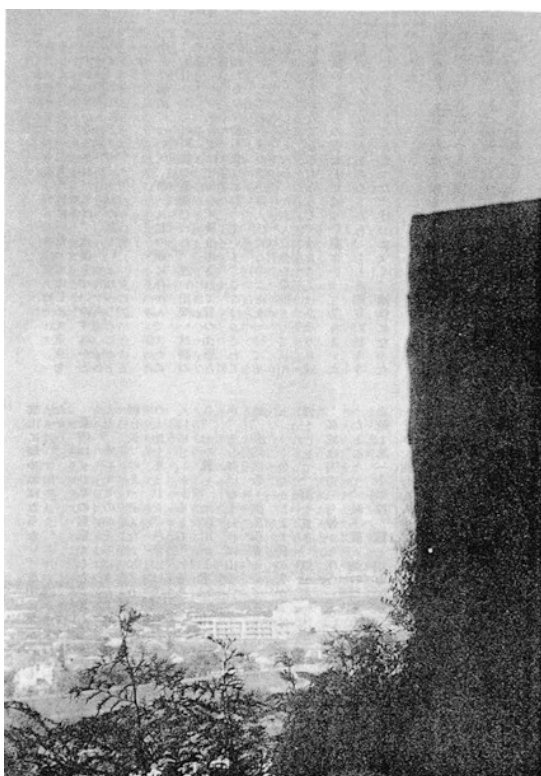


【図05】ふるさと「火の国」5／橋本憲三が少年時代に遊泳した球磨川二俣の瀬

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図06】ふるさと「火の国」6／橋本憲三の球磨の実家



【図07】ふるさと「火の国」7／石牟礼道子が育った水俣の町と不知火海



【図08】高群逸枝の父の高群勝太郎

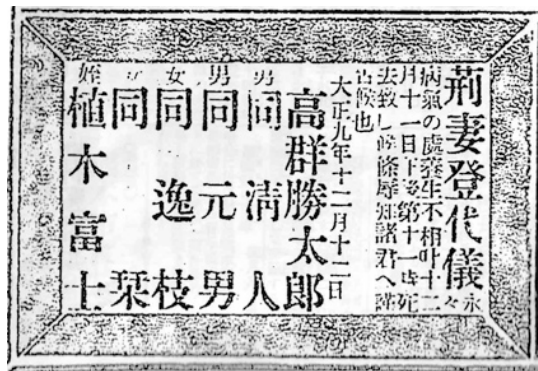


【図09】高群勝太郎（崑泉）1／日記

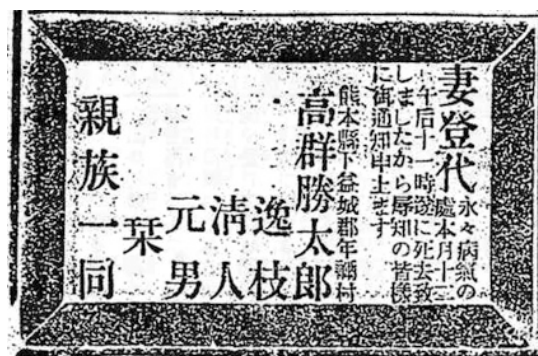
著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図10】高群勝太郎（嵯泉）2／墓



【図12】高群登代子1／『九州日日新聞』の死亡広告



【図13】高群登代子2／『九州新聞』の死亡広告



【図11】高群逸枝の母の高群登代子



【図14】橋本憲三の父の橋本辰次

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 1 5】橋本憲三の母の橋本ミキ



【図 1 7】橋本憲三の妹の橋本静子



【図 1 6】橋本憲三の姉の橋本藤野



【図 1 8】高群逸枝の両親が女兒誕生の願をかけた南阿蘇の清水寺 1 / 全景

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 1 9】高群逸枝の両親が女兒誕生の願をかけた南阿蘇の清水寺 2 / 本堂内部



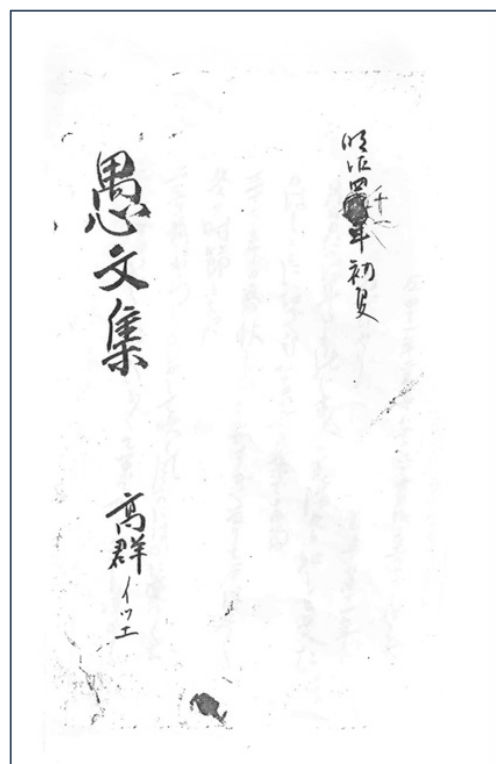
【図 2 0】高群逸枝の守富時代の遊び場であった木原山の不動尊 1 / 全景



【図 2 1】高群逸枝の守富時代の遊び場であった木原山の不動尊 2 / 本堂内部



【図 2 2】高群逸枝初期文集表紙 1 / 『十三才集』

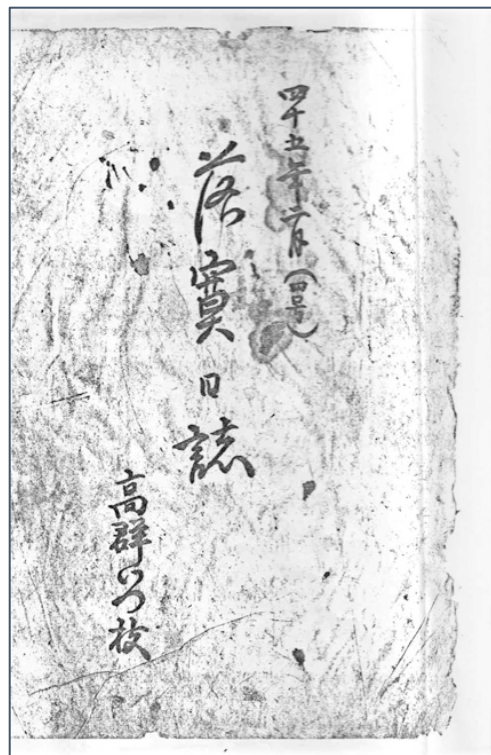


【図 2 3】高群逸枝初期文集表紙 2 / 『愚文集』

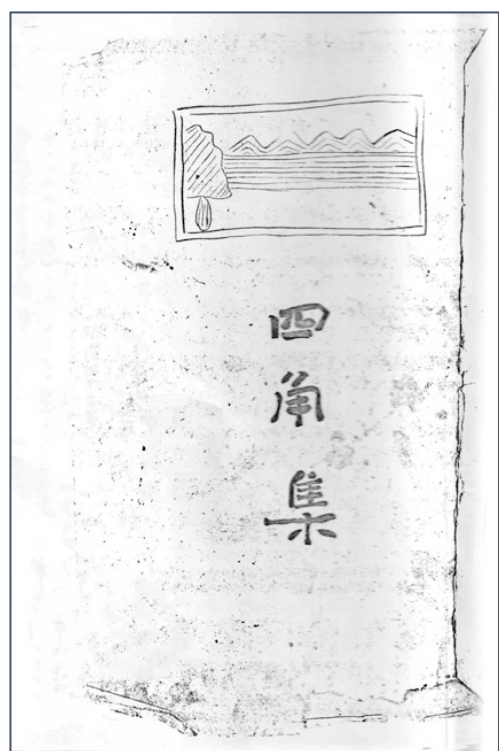
著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 2 4】高群逸枝初期文集表紙 3 / 『少女集』



【図 2 6】高群逸枝初期文集表紙 5 / 『落寞日誌』



【図 2 5】高群逸枝初期文集表紙 4 / 『四角集』

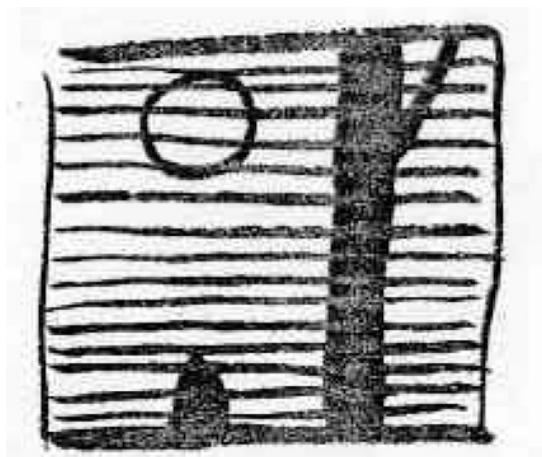


【図 2 7】『十三才集』のなかのイラストレイション 1

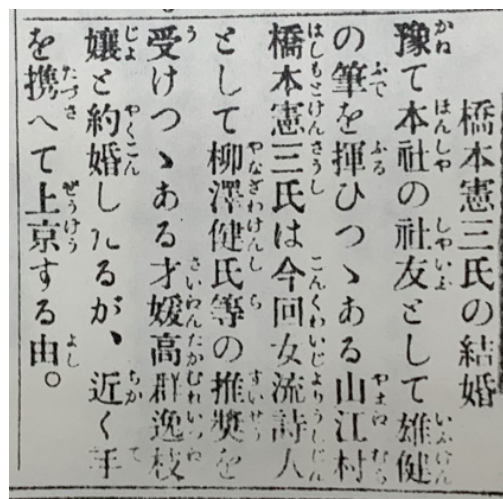


【図 2 8】『十三才集』のなかのイラストレイション 2

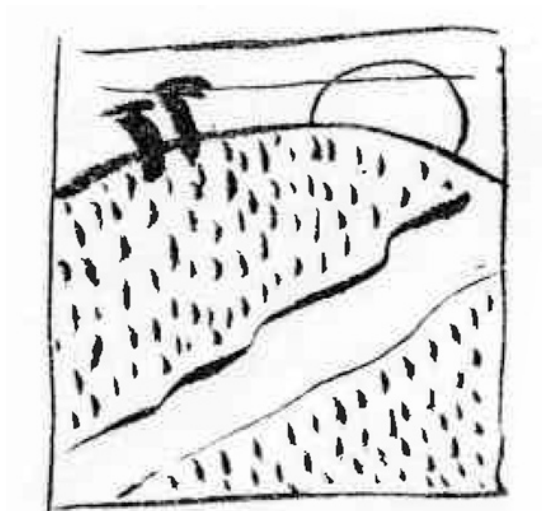
著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



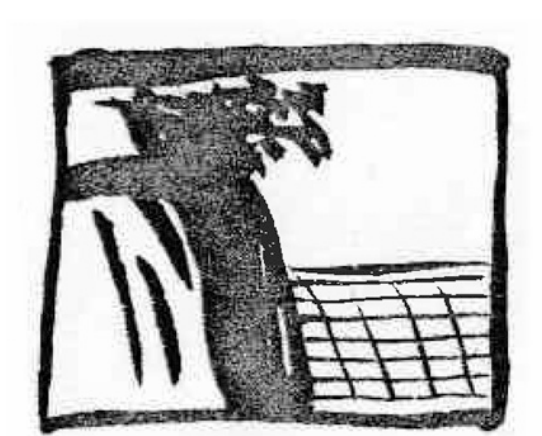
【図29】『十三才集』のなかのイラストレーション3



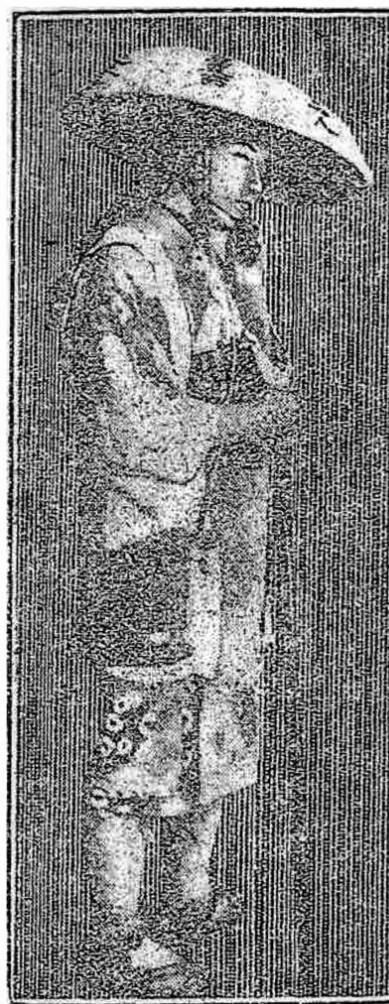
【図32】『人吉時報』に掲載された橋本憲三と高群逸枝の結婚記事



【図30】『十三才集』のなかのイラストレーション4



【図31】『十三才集』のなかのイラストレーション5



【図33】高群逸枝1／四国巡礼の旅姿

著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三卷共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 3 4】高群逸枝 2 / 正装に身を包み



【図 3 6】高群逸枝 4 / 書齋にて 2



【図 3 5】高群逸枝 3 / 書齋にて 1

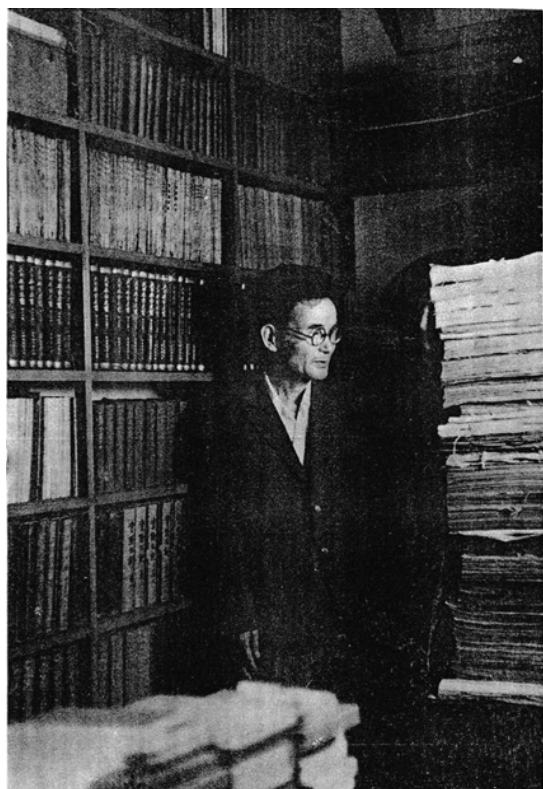


【図 3 7】高群逸枝 5 / 書齋にて 3

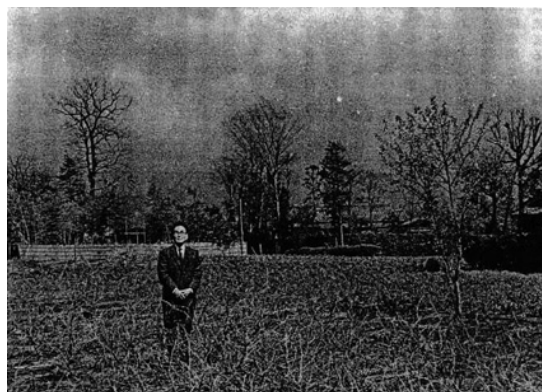
著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図38】橋本憲三1／若き日の肖像



【図39】橋本憲三2／妻の原稿に囲まれて



【図40】橋本憲三3／畑のなかから「森の家」を眺める早春の日



【図41】高群逸枝と橋本憲三1／東京で生活をはじめたころ

著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図4 2】高群逸枝と橋本憲三 2 / 「森の家」の前庭にて



【図4 4】「森の家」屋外1 / 正門

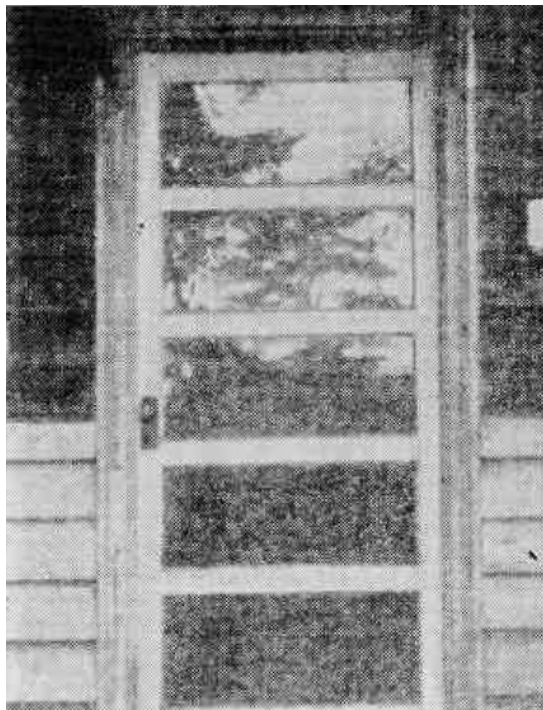


【図4 3】高群逸枝と橋本憲三 3 / 「森の家」の書斎にて



【図4 5】「森の家」屋外2 / 正門から玄関へ続く庭道

著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図46】「森の家」屋外3／玄関



【図48】「森の家」屋外5／庭から見た外観1



【図47】「森の家」屋外4／玄関右手の壁に掲げられた「面会お断り」の標札



【図49】「森の家」屋外6／庭から見た外観2

著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図50】「森の家」屋外7／愛鶏のタロコ



【図51】「森の家」室内1／書斎机



【図52】「森の家」室内2／書棚



【図53】「森の家」室内3／寝室

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図54】「森の家」室内4／化粧室



【図57】高群逸枝の著作類3



【図58】高群逸枝の著作類4



【図55】高群逸枝の著作類1

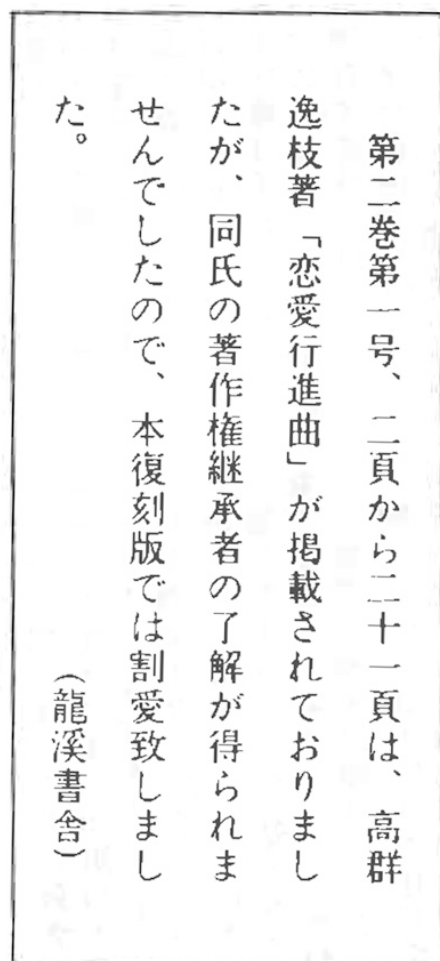


【図56】高群逸枝の著作類2



【図59】『女人藝術』における高群逸枝の「戀愛行進曲」

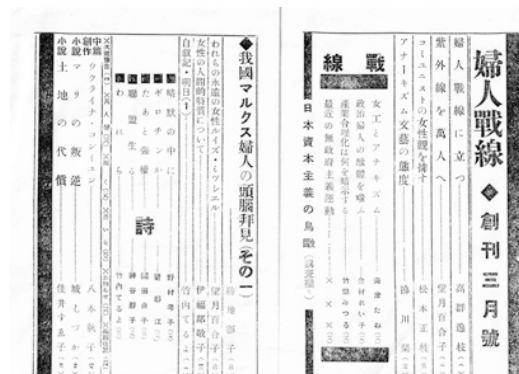
著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



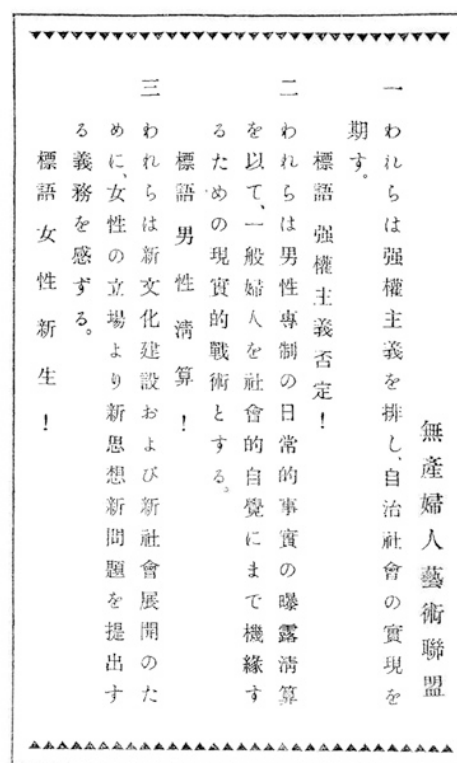
【図60】復刻版『女人藝術』における高群逸枝の「恋愛行進曲」の割愛案内文



【図61】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連盟1／機関誌『婦人戦線』の各号



【図62】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連盟2／機関誌『婦人戦線』創刊号の目次



【図63】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連盟3／「創刊宣言」あるいは「綱領」

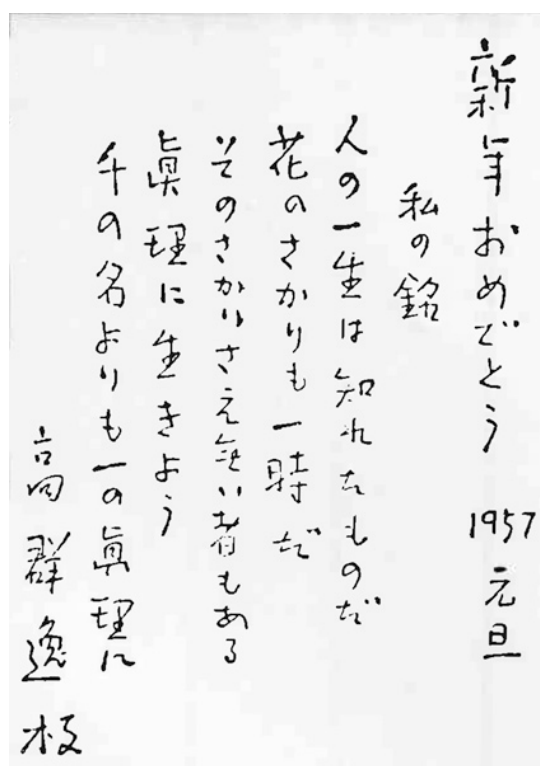
著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 6 4】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連盟 4 / 高群逸枝『黒い女』の広告



【図 6 6】高群逸枝の文と書 1 / 「共用日記」

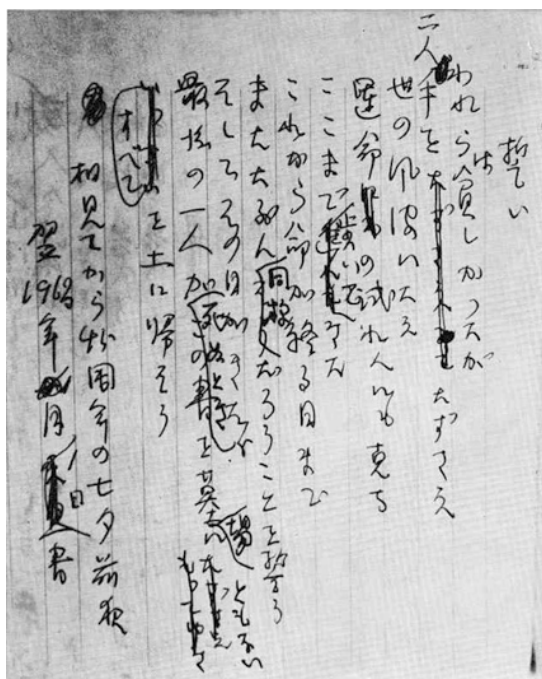


【図 6 7】高群逸枝の文と書 2 / 「私の銘」

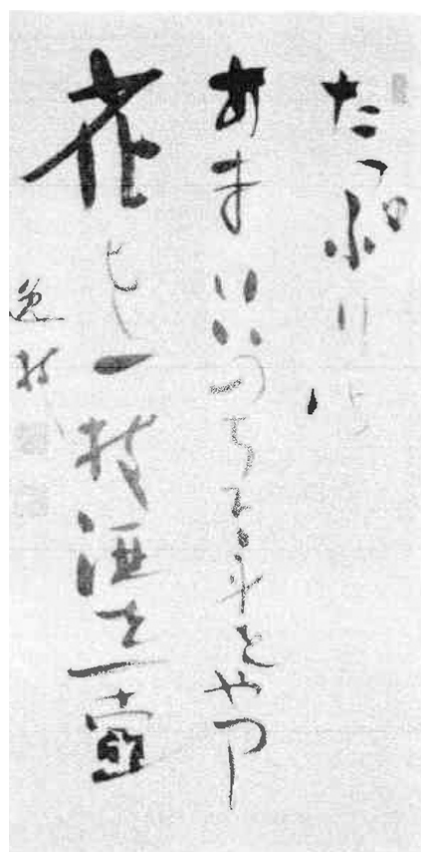


【図 6 5】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連盟 5 / 高群逸枝『強権に抗す』の出版予告

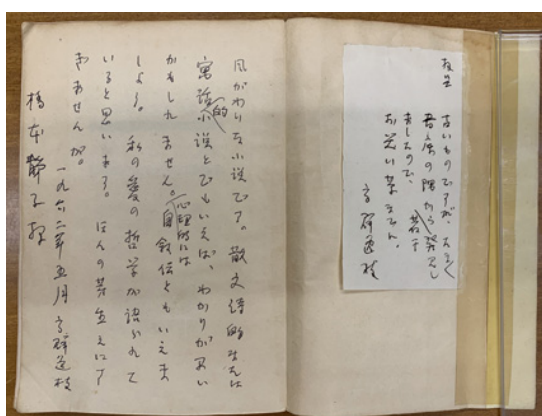
著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



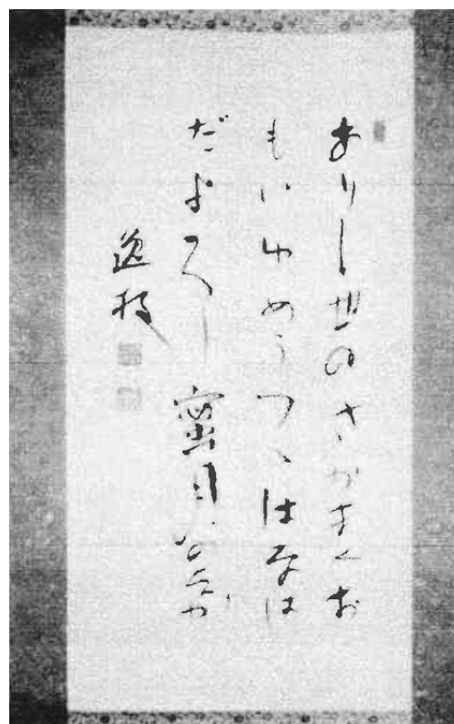
【図68】高群逸枝の文と書3／「誓い」



【図70】高群逸枝の文と書5／揮毫1

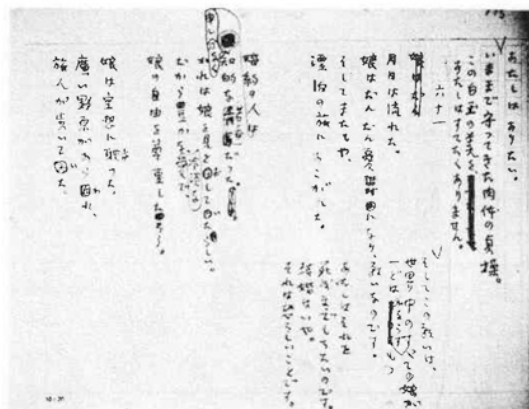


【図69】高群逸枝の文と書4／高群逸枝が橋本静子に贈った『黒い女』の見返しの献辞

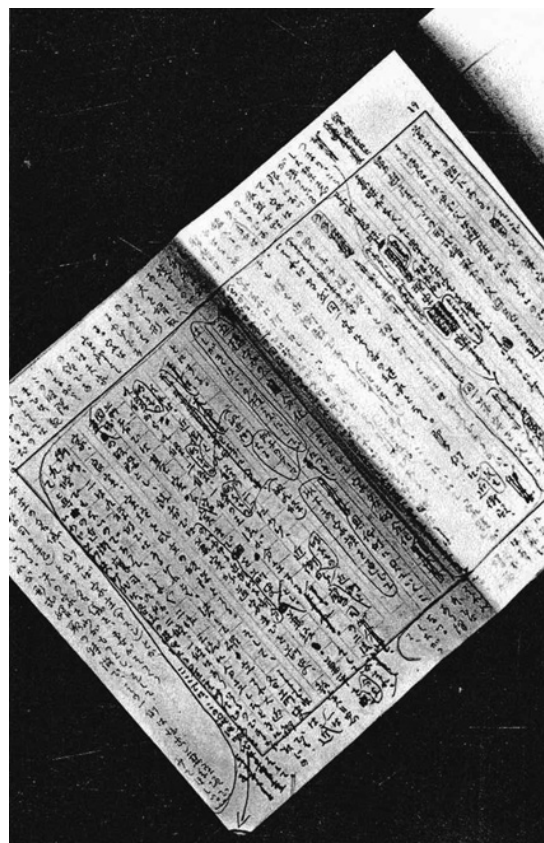


【図71】高群逸枝の文と書6／揮毫2

著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



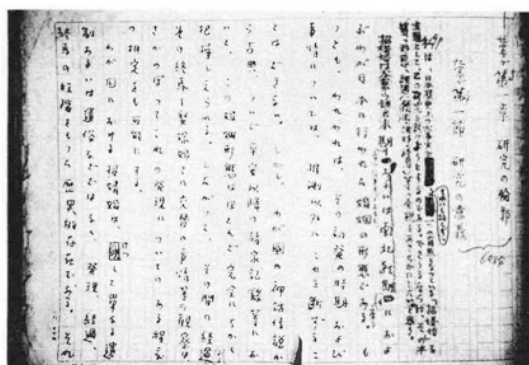
【図 7 2】高群逸枝の原稿 1 / 『日月の上に』



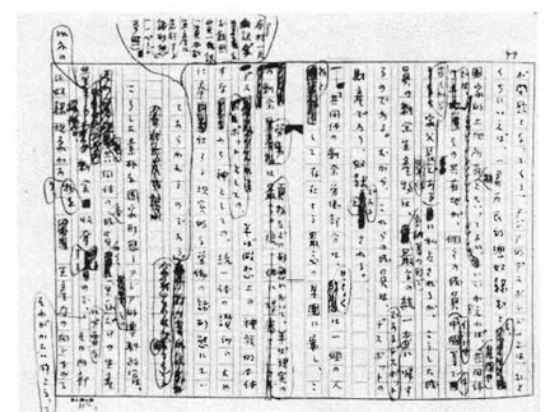
【図 7 5】高群逸枝の原稿 4 / 『平安鎌倉室町家族の研究』



【図 7 3】高群逸枝の原稿 2 / 『母系制の研究』

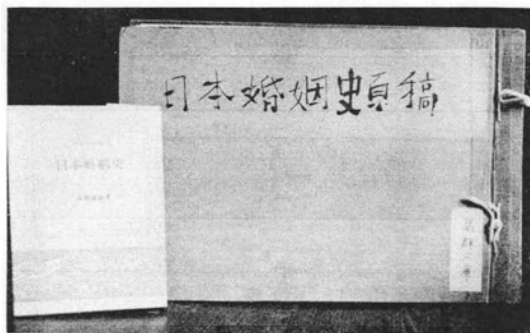


【図 7 4】高群逸枝の原稿 3 / 『招婿婚の研究』



【図 7 6】高群逸枝の原稿 5 / 『女性の歴史』

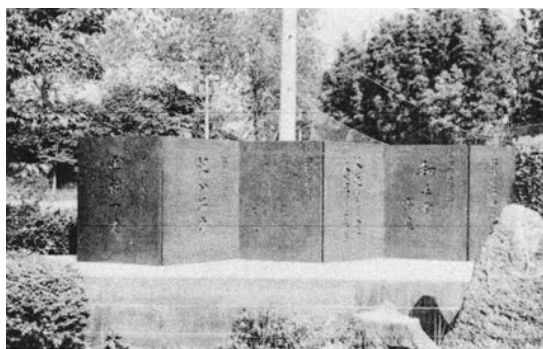
著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



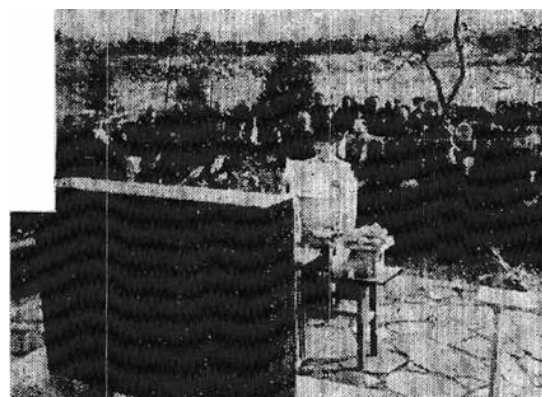
【図 7 7】高群逸枝の原稿 6／『日本婚姻史』



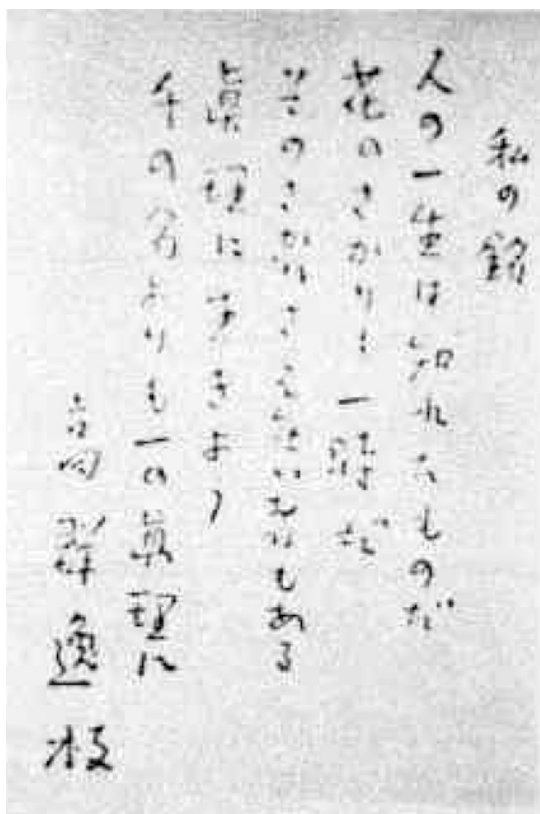
【図 8 0】望郷子守唄の碑 1／歌碑



【図 7 8】松橋名誉町民の碑 1／全景



【図 8 1】望郷子守唄の碑 2／歌碑の除幕式



【図 7 9】松橋名誉町民の碑 2／碑の表に書かれた「私の銘」



【図 8 2】望郷子守唄の碑 3／除幕式当日の「森の家」の高群逸枝と橋本憲三

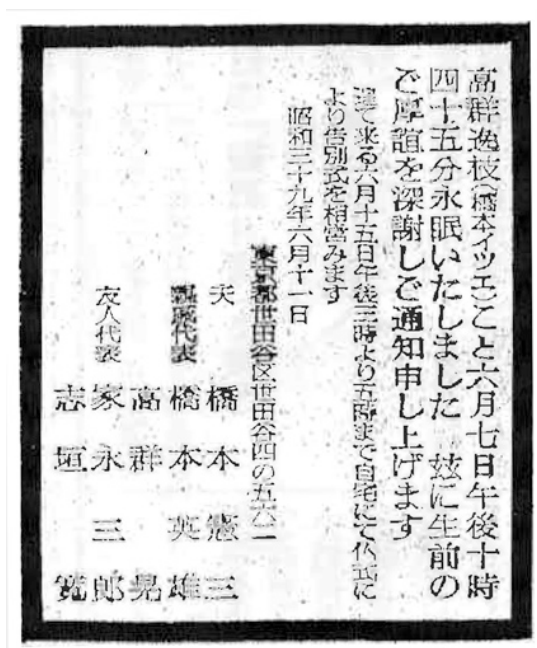
著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 8 3】高群逸枝の死 1／入院先から「森の家」に帰る棺



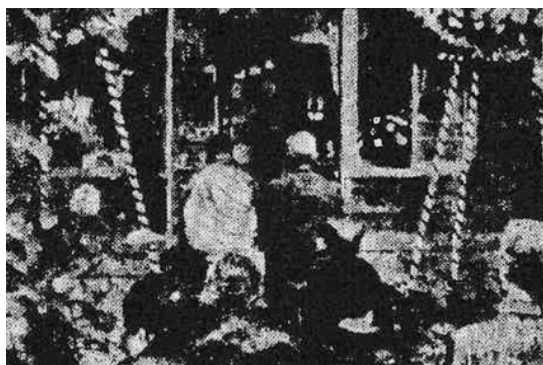
【図 8 6】墓碑 1／全景



【図 8 4】高群逸枝の死 2／死亡広告



【図 8 7】墓碑 2／朝倉響子作のブロンズ・レリーフ「高群逸枝像」



【図 8 5】高群逸枝の死 3／告別式

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



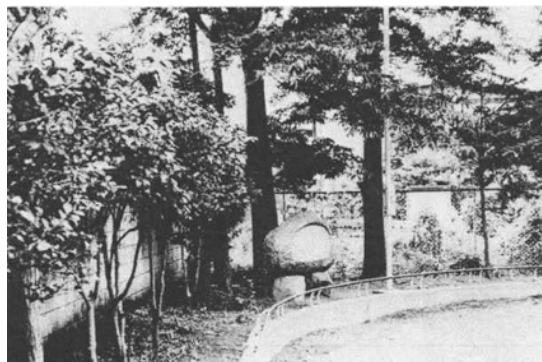
【図88】墓碑3／「高群逸枝像」の細部



【図90】墓碑5／墓の裏側に刻まれた「誓い」の文



【図89】墓碑4／墓の右手前に建つ「約婚」の歌碑

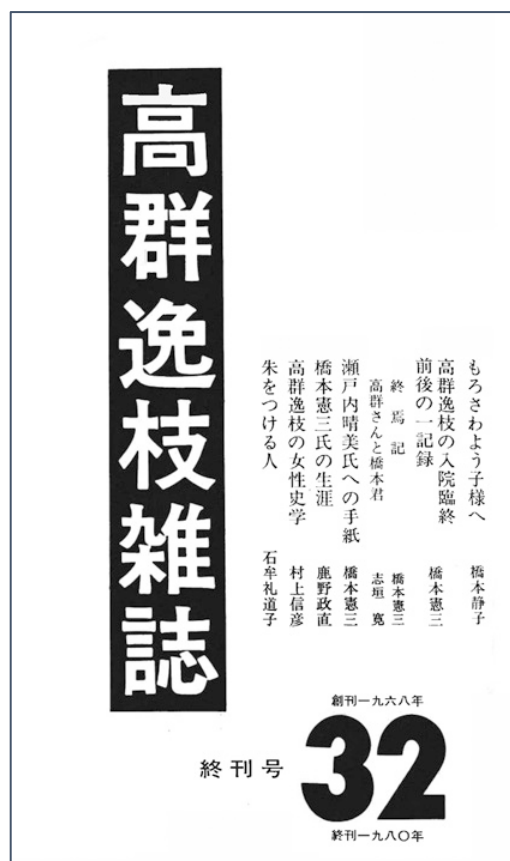


【図91】高群逸枝記念碑1／全景

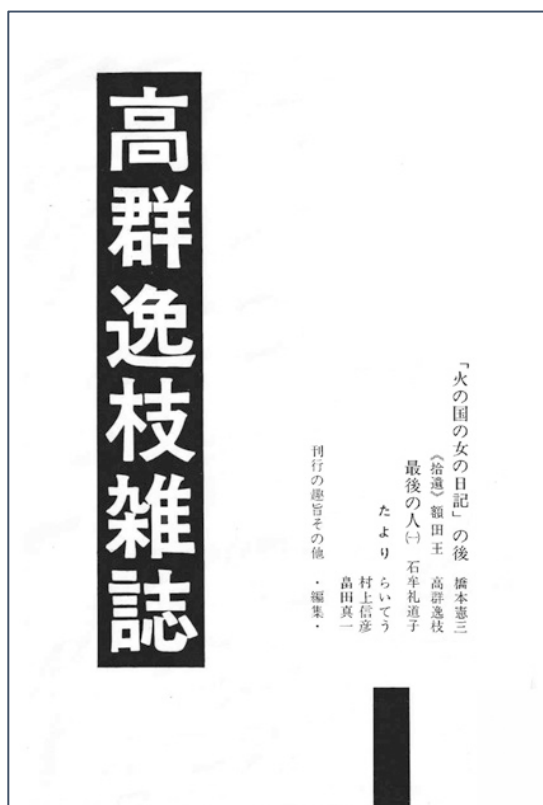
著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
 著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
 著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
 付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図 9 2】高群逸枝記念碑 2 / 歌碑



【図 9 4】『高群逸枝雑誌』2 / 終刊号 (第 32 号) の表紙



【図 9 3】『高群逸枝雑誌』1 / 創刊号 (第 1 号) の表紙



【図 9 5】石牟礼道子 1 / 熊日文学賞辞退のころ

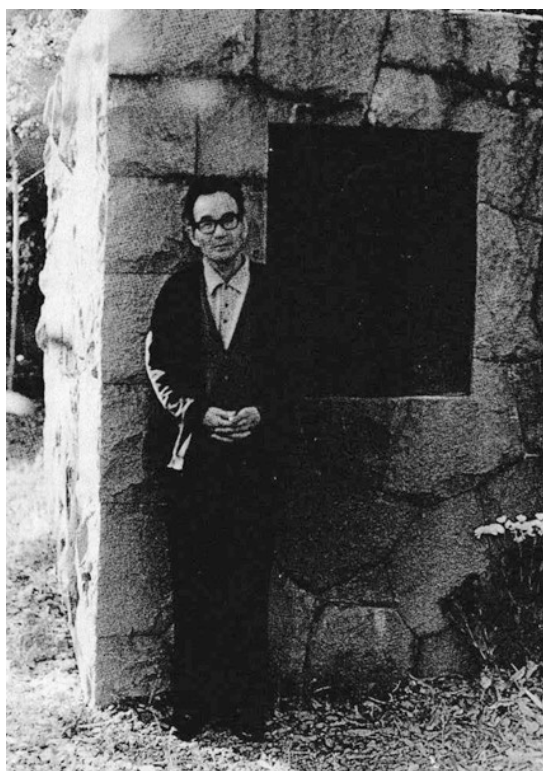
著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子



【図96】石牟礼道子2／水俣病裁判結審のころ



【図98】水俣の橋本憲三2／自宅の庭に立って



【図97】水俣の橋本憲三1／墓碑の前に立って



【図99】水俣の橋本憲三3／自宅の書斎（編集室）にて

A black and white photograph showing a building with a staircase. A large, leafless tree is on the left. The building has a balcony or platform area. A small sign with the number '8081' is visible at the bottom center.

朝日新聞社

苦海浄土の詩人がうたう不知火のころ

椿の海の記

石牟礼道子

時はながれ、自然はくるい、人は死んだ。
「苦海浄土」永保の、椿咲く海辺にその昔
どんな世界があったのか。
詩人の魂を育んだ山、川、草、花
そして焼酎に酔いしれる父
狂った祖母の、おもしろさま。

（不知火の語り部と呼ばれる女流が
はじめてそのラディカリズムの原点を
幽玄の文体で詩情豊かにつづる自伝の詩。

定価八八〇円 四六判 三〇八ページ

海と空のあいだに

■ 海底の神々 その二

石牟禮 道子

第八回

少年とわたくしの心は充分通ひあつてゐた。

彼は「四尺」のうにかはそき背白、膝をうすい胸の上にあわぜ、いづれもあじきまがてゐる前輩の云ふ方々に、業に、膝さまでのたいた西郷の顔に傾けになつてゐるのだ。臨しの奮切れ目でもないのに、くんと頰をたねてゐた。たする膝さまでの胸へ、廻んだ膝の間から、少年は自分の体がおこほれないように、背中をわずかに曲げたりすしにりしいるよだつた。というより彼こそそうやうに膝さまであやしむにいらつてゐたがよい。

本太郎少年と私は、そんなないまじ目と目だけ、いつも会話をとりかわすのであつた。膝さまで静い静いで少し、風を、雨を、

ゆくかゝあゝさん、はうろほいてもらへ、などとの体を袖子をつけたりうけようとするとき、この少年とわたくしはちかるとまなざしをあはせ、本依てゐる、という合意であつた。そんなやうに、胸の中に場所を替へて、という合意であつた。そんなやうに、胸の中に

絵巻を眺めつけてゐるこの家族たちには、なかでも少年の幼なじみと弟

は口を開けて笑ひこころづけた。三人兄弟と父親、兩人しんもほうへ、驚き天んやうと立ちあがり、腰をのほして、打きりしか

ない壁の上の探査用のパイプをひねる、探査の音が、膝さまでは食卓の上に豆腐を切て出す。それから大山盛にタコ、茹

でたのを切つて出す。それから黄色い色ついた大根の漬物を出す。二人の後には膝を立ててカタカタと、小皿をためいめの前になら

わ、それから、弟の方が食卓の下の席の間にをの腰をうって細飯をとり

わけ、それかに、さうさうと、タコ、タコ、タコと、をのほして、

膝さまではそれをなぐ、カタカタと、をのほして、

頭をばんと打ち、それからいみきせをする。はれはれ、いこ、こ、自分の飯を、こしこもろて食ささばもよか、人のおせんの上に

-46-

24

著作集 27『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子

一. 本「付録 三巻共通写真集——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」について

この「付録 三巻共通写真集——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」は、著作集 27『高群逸枝研究』、著作集 28『橋本憲三研究』、および著作集 29『石牟礼道子研究』の三巻に対応するものです。著作集 23『残思余考——わがデザイン史論（下）』第三部「高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子論」の第一話「『三つの巴』画像集」からの再録となります。

古い資料からの複製となりますので、必ずしも画質は鮮明ではありません。しかし、当時を偲ぶうえでは、それなりの意味があるかもしれません。画像は、文字で書かれた文以上に、雄弁に物語ってくれます。この写真集がそうになっていることを願っています。

またもうひとつ、私には願うところがあります。橋本憲三は、『高群逸枝全集』（全一〇巻）を編集すると、次に機会があれば、別巻として「写真集」をつくることを考えていました。残念ながらそれは公刊されるに至りませんでした。実現していたら、どのようなものになっていたでしょうか。この「付録 三巻共通写真集——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」が、それに少しでも近いものになることを私は願いたいと思います。

二. 図版の複製について

複製のために利用した資料は、以下のとおりです。

○図書

高群逸枝『愛と孤独と 学びの細道』理論社
高群逸枝『今昔の歌』講談社
高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論

社

女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）私家版

○雑誌

『女人藝術』
『婦人戦線』
『熊本風土記』
『暗河』
『高群逸枝雑誌』

○新聞

『九州新聞』
『九州日日新聞』
『人吉時報』
『熊本日新聞』

○図書館および個人のコレクション

熊本市立図書館所蔵資料
著者（中山修一）所蔵資料

私が最近撮影した写真以外は、どの図版も、ほぼ五〇年以上前に出版された資料からの複製になります。厳密には、完全に著作権が切れていないものも含まれているかもしれません。しかし、著作権の所有者を特定することができなかつたりするために、利益を伴う商業目的ではなく、あくまでも非営利的な学術目的による使用であるという理由から、私の判断と責任において、その出典を明記したうえで、ここに複製利用をさせていただきます。あらかじめご理解をいただければ幸いです。

三. 図版のキャプションと出典について

本「付録 三巻共通写真集——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」における図版のキャプションと出典は、以下のとおりです。

【図 0 1】ふるさと「火の国」1／高群逸枝と橋本憲三が出生したころの熊本県
出典：高群逸枝『今昔の歌』講談社、1959

年 7 月 20 日、口絵。

【図 0 2】ふるさと「火の国」2 / 「火の国」を象徴する阿蘇の火山

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、口絵。

【図 0 3】ふるさと「火の国」3 / 高群逸枝が生まれ育った松橋町の全景

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、口絵。

【図 0 4】ふるさと「火の国」4 / 高群逸枝が出京前に住んでいた弘川集落

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、口絵。

【図 0 5】ふるさと「火の国」5 / 橋本憲三が少年時代に遊泳した球磨川二俣の瀬

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、129 頁。

【図 0 6】ふるさと「火の国」6 / 橋本憲三の球磨の実家

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、294 頁。

【図 0 7】ふるさと「火の国」7 / 石牟礼道子が育った水俣の町と不知火海

出典：『高群逸枝雑誌』創刊号（第 1 号）、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968 年 10 月 1 日、6 頁。

【図 0 8】高群逸枝の父の高群勝太郎

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、18 頁。

【図 0 9】高群勝太郎（嵯泉）1 / 日記

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、229 頁。

【図 1 0】高群勝太郎（嵯泉）2 / 墓

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978 年 12 月 1 日、32 頁。

【図 1 1】高群逸枝の母の高群登代子

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、18 頁。

【図 1 2】高群登代子 1 / 『九州日日新聞』の死亡広告

出典：『九州日日新聞』、1920 年 12 月 16 日、5 面。

【図 1 3】高群登代子 2 / 『九州新聞』の死亡広告

出典：『九州新聞』、1920 年 12 月 17 日、5 面。

【図 1 4】橋本憲三の父の橋本辰次

出典：『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、19 頁。

【図 1 5】橋本憲三の母の橋本ミキ

出典：『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、19 頁。

【図 1 6】橋本憲三の姉の橋本藤野

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、442 頁。

【図 1 7】橋本憲三の妹の橋本静子

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、382 頁。

【図 1 8】高群逸枝の両親が女兒誕生の願をかけた南阿蘇の清水寺 1 / 全景

出典：著者（中山修一）所蔵資料。

【図 1 9】高群逸枝の両親が女兒誕生の願をかけた南阿蘇の清水寺 2 / 本堂内部

出典：著者（中山修一）所蔵資料。

【図 2 0】高群逸枝の守富時代の遊び場であった木原山の不動尊 1 / 全景

出典：著者（中山修一）所蔵資料。

【図 2 1】高群逸枝の守富時代の遊び場であつた木原山の不動尊 2 / 本堂内部
出典：著者（中山修一）所蔵資料。

【図 2 2】高群逸枝初期文集表紙 1 / 『十三才集』
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 3】高群逸枝初期文集表紙 2 / 『愚文集』
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 4】高群逸枝初期文集表紙 3 / 『少女集』
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 5】高群逸枝初期文集表紙 4 / 『四角集』
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 6】高群逸枝初期文集表紙 5 / 『落寞日誌』
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 7】『十三才集』のなかのイラストレーション 1
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 8】『十三才集』のなかのイラストレーション 2
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 2 9】『十三才集』のなかのイラストレーション 3
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 3 0】『十三才集』のなかのイラストレーション 4
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 3 1】『十三才集』のなかのイラストレーション 5
出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図 3 2】『人吉時報』に掲載された橋本憲三と高群逸枝の結婚記事
出典：『人吉時報』、1919 年 8 月 15 日、3 面。

【図 3 3】高群逸枝 1 / 四国巡礼の旅姿
出典：『九州日日新聞』、1918 年 11 月 23 日、3 面。

【図 3 4】高群逸枝 2 / 正装に身を包み
出典：『女人藝術』第 1 巻第 5 号、1928 年 11 月、口絵。

【図 3 5】高群逸枝 3 / 書斎にて 1
出典：『高群逸枝雑誌』第 3 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969 年 4 月 1 日、2 頁。

【図 3 6】高群逸枝 4 / 書斎にて 2
出典：高群逸枝『愛と孤独と 学びの細道』理論社、1958 年 9 月、口絵。

【図 3 7】高群逸枝 5 / 書斎にて 3
出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、口絵。

【図 3 8】橋本憲三 1 / 若き日の肖像
出典：『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、59 頁。

【図 3 9】橋本憲三 2 / 妻の原稿に囲まれて
出典：『高群逸枝雑誌』第 2 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969 年 1 月 1 日、27 頁。

【図 4 0】橋本憲三 3 / 畑のなかから「森の家」を眺める早春の日
出典：『高群逸枝雑誌』第 6 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970 年 1 月 1 日、27 頁。

【図 4 1】高群逸枝と橋本憲三 1 / 東京で生活をはじめたころ
出典：『九州新聞』、1922 年 9 月 23 日、5 面。

【図 4 2】高群逸枝と橋本憲三 2 / 「森の家」の前庭にて
出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965 年 6 月、口絵。

【図 4 3】高群逸枝と橋本憲三 3 / 「森の家」の書斎にて
出典：『高群逸枝雑誌』第 11 号、責任者・

橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1971年4月1日、37頁。

【図44】「森の家」屋外1／正門

出典：『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、
責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編
集室、1980年12月25日、39頁。

【図45】「森の家」屋外2／正門から玄関
へ続く庭道

出典：『高群逸枝雑誌』創刊号（第1号）、
責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編
集室、1968年10月1日、18-19頁。

【図46】「森の家」屋外3／玄関

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、283頁。

【図47】「森の家」屋外4／玄関右手の壁
に掲げられた「面会お断り」の標札

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、283頁。

【図48】「森の家」屋外5／庭から見た外
観1

出典：『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・
橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1970年7月1日、表紙。

【図49】「森の家」屋外6／庭から見た外
観2

出典：『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・
橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1969年1月1日、6頁。

【図50】「森の家」屋外7／愛鶏のタロコ

出典：『高群逸枝雑誌』第4号、責任者・
橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1969年7月1日、27頁。

【図51】「森の家」室内1／書斎机

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図52】「森の家」室内2／書棚

出典：『高群逸枝雑誌』第4号、責任者・

橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1969年7月1日、31頁。

【図53】「森の家」室内3／寝室

出典：『高群逸枝雑誌』第4号、責任者・
橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1969年7月1日、20頁。

【図54】「森の家」室内4／化粧室

出典：『高群逸枝雑誌』第4号、責任者・
橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1969年7月1日、2頁。

【図55】高群逸枝の著作類1

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図56】高群逸枝の著作類2

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図57】高群逸枝の著作類3

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、409頁。

【図58】高群逸枝の著作類4

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
38頁。

【図59】『女人藝術』における高群逸枝の
「戀愛行進曲」

出典：『女人藝術』第2巻第1号、1929年
1月、2頁。

【図60】復刻版『女人藝術』における高群
逸枝の「戀愛行進曲」の割愛案内文

出典：『女人藝術』復刻版、龍溪書舎、1986
年。

【図61】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連
盟1／機関誌『婦人戦線』の各号

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図62】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連

盟2／機関誌『婦人戦線』創刊号の目次
出典：『婦人戦線』創刊号（第1巻第1号）、
1930年3月1日、目次。

【図63】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連
盟3／「創刊宣言」あるいは「綱領」

出典：『婦人戦線』創刊号（第1巻第1号）、
1930年3月1日、4頁。

【図64】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連
盟4／高群逸枝『黒い女』の広告

出典：『婦人戦線』創刊号（第1巻第1号）、
1930年3月1日、広告。

【図65】高群逸枝主宰の無産婦人芸術連
盟5／高群逸枝『強權に抗す』の出版予告

出典：『婦人戦線』八月号（第1巻第6号）、
1930年8月1日、広告。

【図66】高群逸枝の文と書1／「共用日記」
出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図67】高群逸枝の文と書2／「私の銘」
出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図68】高群逸枝の文と書3／「誓い」
出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全
集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、
1965年6月、口絵。

【図69】高群逸枝の文と書4／高群逸枝
が橋本静子に贈った『黒い女』の見返しの献
辞

出典：熊本市立図書館所蔵資料。

【図70】高群逸枝の文と書5／揮毫1
出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
42頁。

【図71】高群逸枝の文と書6／揮毫2
出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
42頁。

【図72】高群逸枝の原稿1／『日月の上に』

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
39頁。

【図73】高群逸枝の原稿2／『母系制の研
究』

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
39頁。

【図74】高群逸枝の原稿3／『招婿婚の研
究』

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
40頁。

【図75】高群逸枝の原稿4／『平安鎌倉室
町家族の研究』

出典：『高群逸枝雑誌』第3号、責任者・
橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、
1969年4月1日、31頁。

【図76】高群逸枝の原稿5／『女性の歴史』
出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
40頁。

【図77】高群逸枝の原稿6／『日本婚姻史』
出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
41頁。

【図78】松橋名誉町民の碑1／全景
出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
50頁。

【図79】松橋名誉町民の碑2／碑の表に
書かれた「私の銘」

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
50頁。

【図80】望郷子守唄の碑1／歌碑
出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七
集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、
52頁。

【図81】望郷子守唄の碑2／歌碑の除幕

式

出典：『熊本日日新聞』、1962年1月19日、7面。

【図82】望郷子守唄の碑3／除幕式当日の「森の家」の高群逸枝と橋本憲三

出典：『熊本日日新聞』、1962年1月19日、7面。

【図83】高群逸枝の死1／入院先から「森の家」に帰る棺

出典：高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』（第一〇巻／火の国の女の日記）理論社、1965年6月、480頁。

【図84】高群逸枝の死2／死亡広告

出典：『熊本日日新聞』、1964年6月11日、4面。

【図85】高群逸枝の死3／告別式

出典：『熊本日日新聞』、1964年6月16日、7面。

【図86】墓碑1／全景

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、48頁。

【図87】墓碑2／朝倉響子作のブロンズ・レリーフ「高群逸枝像」

出典：『高群逸枝雑誌』創刊号（第1号）、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、2頁。

【図88】墓碑3／「高群逸枝像」の細部

出典：『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、2頁。

【図89】墓碑4／墓の右手前に建つ「約婚」の歌碑

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、49頁。

【図90】墓碑5／墓の裏側に刻まれた「誓い」の文

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、

49頁。

【図91】高群逸枝記念碑1／全景

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、36頁。

【図92】高群逸枝記念碑2／歌碑

出典：『高群逸枝雑誌』第5号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年10月1日、21頁。

【図93】『高群逸枝雑誌』1／創刊号（第1号）の表紙

出典：『高群逸枝雑誌』創刊号（第1号）、1968年10月1日、表紙。

【図94】『高群逸枝雑誌』2／終刊号（第32号）の表紙

出典：『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、1980年12月25日、表紙。

【図95】石牟礼道子1／熊日文学賞辞退のころ

出典：『熊本日日新聞』、1969年12月14日、15面。

【図96】石牟礼道子2／水俣病裁判結審のころ

出典：『熊本日日新聞』、1972年10月15日、9面。

【図97】水俣の橋本憲三1／墓碑の前に立って

出典：『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、2頁。

【図98】水俣の橋本憲三2／自宅の庭に立って

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、46頁。

【図99】水俣の橋本憲三3／自宅の書斎（編集室）にて

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978年12月1日、46頁。

著作集 27 『余滴を集めて——高群逸枝研究』
著作集 28 『余滴を集めて——橋本憲三研究』
著作集 29 『余滴を集めて——石牟礼道子研究』
付録 三巻共通「写真集」——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子

【図 100】水俣の橋本憲三 4 / この建物の二階が憲三の住居兼書斎（編集室）

出典：女性史研究会編『女性史研究』（第七集／高群逸枝写真集）、1978 年 12 月 1 日、46 頁。

【図 101】石牟礼道子の作品関連 1 / 「海と空のあいだに 第八回」

出典：『熊本風土記』通巻第 11 号、1966 年 11 月 1 日、46 頁。

【図 102】石牟礼道子の作品関連 2 / 『樫の海の記』の広告

出典：石牟礼道子「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第 15 号、1977 年春季号、広告。

【図 103】石牟礼道子の作品関連 3 / 2018 年 10 月 6 日の「沖宮」初演の水前寺能楽堂

出典：著者（中山修一）所蔵資料。

（二〇二五年四月）